泡鳴全集

第四巻

目次

女中の戀

『丹波云ふたかて、栗ばかりあるとこやおまへん――この頃ではちよツとでも、をなご衆をして來たものは、皆京言葉や大阪言葉を使ひますさかい、ね』と、お末は『ね』だけをこの家の人々から覺えて、『な』の代りに時々話の切りに入れるやうになつてゐた。

今、ここの旦那が奥さまと一緒になつて珍らしく自分に世間ばなしを仕向けたかと思つたら、矢ツ張り、自分がもとゐたところの旦那と同じやうに、栗の話をして、

『お前は栗から生れた女だらう』などと云つた。

誰れも誰れも丹波生れと云へば、直ぐ栗しか無いやうに云ふのを、私かにむかツとしてゐたのだから、かの女は旦那が茶の間を出て行くと直ぐ、奥さまに向つて、今、栗ばかりでは無いと云ふ辯解をしたのであつた。

『さうだらう、ね』と奥さまもいやアに笑つて、こちらの言葉を信じない樣子であつた。そして旦那の跡を追つて二階へあがつて行つた。

お末はこの夫婦の睦まじさうなのを見るに付けても、自分はなぜ世間の馬鹿にする丹波などに生れたのだらうと思はれる。この土地の人などは皆はしかうて、若い時から旦那を拵らへて、立派な衣物や指輪をつけて樂に暮してゐるのに――自分は二十四にも、五にもなつて、まだつらいことには人のうちの女中をしてゐる。

『わたし、心配で、心配で、しよがおまへん』と、きのふ、奥さまに云つたら、

『お前でも心配なことがあるのかい』と聽かれた。

自分だツて、人間だものを――奥さまは顔も美しい上に、よい旦那を持つて、毎日、毎日、樂に暮せるから、人のことなんか心配しても呉れないので――然し自分はいつまでも人に使はれて、『お末、お末』と、呼ばれたり叱られたりしなければならないのか？

『一度かたづいたことがあるのなら、もう、お嫁に行くことなどは詰らないと思へる筈だが、ねえ。』

こんなことを奥さまは云つたことがある。奥さまには人の思ひやりと云ふものがないやうだ。それに比べると、旦那の方が、どんなにこわい顔をしてゐても、まだこちらのことを思つて呉れる。

『好きで嫁に行きたいなら、早く行つた方がいいよ――全體、お前を貰はうと云ふのはどんな男だい？』

『わたし、まだ見たことはおまへんけれど、向はわたしを見たことがある云ふて――何でも、この池

田の近在の人で、一年中に半分はよそへ行て留守やさうだす。』
『ぢやア、そんなことを云つて、別なところに本妻がゐるのぢやアないか？』
『そんなこともおまへんやろ。』
『その間、お前はどうしてゐるつもり？』奧さまは、斯う、その時聽いた。
『わたし、百姓しまッさ――何でも田地が少しあるさうやさかい。』
『多分、どこかで通りすがつて、お前の大根でもさげて來るところの姿のよかつたのに惚れ込んだのだ、ね』と、旦那はまた云つて與れた。『お前も近頃は、來た時よりやア、大分綺麗になつたから、ね。』
『…………』自分は嬉しかつたので、『これも奧さんのお蔭です』と答へた。
同じ新市街に來てゐる家は家だが、勝手が丸で違ふ。自分がもとゐたところでは子供が多くッて、奧さままでがいつも見ッともないなりをしてゐたが、この家へ來ると、子供も無く、奧さまも綺麗好きのせいか、自分にまでも綺麗にせよとのことだ。で、舊市街へ買ひ物に行く度に、姉の家の前を通つたり、そこへ立ち寄つたりすると、いつも、『段々ええ女になる』と、姉の旦那に冷かされるやうになつた。
『そやさかい、あの人がちよッと見ただけで、末ちやんを貰ひたい云ふて來たんや、な。』姉も斯う云つて笑つたが、『目の悪いのんも知らんと、な！』

『阿呆云やはれ!』自分はまたおこらないではゐられなかつた。姉に會ふと、いつも喧嘩だ。

それと云ふのも、親がもとで――姉は母を面白くないと云つてるし、自分は父を恨んでゐる。自分が母のお腹に宿つた時、父は、この上に子供が出來たら、いくら百姓でも、麥の御飯さへ喰へんやうになると云つて、おろし藥を飲ませた。それでも生れて來たのが因果で、兩方の目が人並みで無く、いつもしよぼ〳〵してゐる。母が阿呆だからと姉は云ふけれど、自分は母に罪はないと思ふ。無理に飲ませた方が、その時巡査に知れたら、引ツ張られて行くのであつたと、京にゐた時の主人も云つてゐた。

『お前は少し拔けてるさかい、な』と、姉はよく口を突き出して惡口を云ふけれど、自分にはそんなことは無い筈だ。お腹にゐる時、なんぼ毒な藥を飲まされたからとて、人の魂は生れてから這入るのだと京の旦那も云つてたから、魂までが目の悪い筈は無い。それに、近頃では、この目も大分よくなつたやうだのに――姉は一向に縁談をはか取らせて呉れない。

『なんぼ恨みがあつたかて、親は親やさかい』と云つて、姉は先づ相談の爲めに國の方へ手紙を出した。が、返事も無ければ、父も出て來ない。

汽車を下りてから、また七里も八里も行くやうな、あんな邊鄙なところへは、郵便と云ふ物は届くこともあらう、また届かぬこともあらう。

『わたし、一度歸つて來まほか』と、相談して見たら、

『あんなところまで――』姉もさツぱり思ひやりの無い、薄情な人だ。こちらの心配も知らないで、ここの奥さまと同じやうなことを云つた。『さう迫かんかて、向の人が、欲しけりや、また出て來る。そしたら、うちの人にでも行て見てもろたらええやないか？』

その親切があるなら、直ぐにもさうして吳れたらよからうに！　自分には、どうしても、向ふの人がこちらの返事を待ちかまへてゐるやうで――氣が氣でならぬ。自分はそれを奥さまには

『向の人は迫いてるのだすが、ねえ』と云つて聽かせた。

『ぢやア、お前が誰れかと一緒に行つて、一度早く向ふの家の樣子を調べて來ればいいぢやアないか。ね――姉さんは、もう、田植ゑにもなるから、急がしいのだらう？』

『あの人はあきまへん、薄情やさかい。』

『だから、お前が』と、奥さまはいつもの叱り付けるやうな目つきをしたので、自分は取り付く島もなく、

『わたし、まだどこか知りまへんが、な、――近在だすけれど』と、おづおづ答へた。

『何を云つてるんだか、お前の云ふことはさツぱり――狐につままれてるやうだよ。』奥さまの二階へあがつて行く時の最後の言葉は、さうであつた。

『二階でまた二人が何をしてるのか』――自分のしよぼ／＼する目の前には、月給を澤山取つてるらしい東京下だり、上ひげの銀行員が現はれた。この人は、今しがた、親切にも、
『いツそおれがお前を貰つてやらうか、ね』と云つた。すると、それが電車の車掌に變つて、これはまた黒くあご髯まで延ばして、肩からカバンをさげてゐる。
『島津はん』と云つて、國には奥さんもあるのだが、姉の隣りの娘がこの人の世話になり、結構にも月々三圓も貰つて、贅澤三昧をしてゐる。
『金の指輪もはめてまツせ』と知らせてあげたら、ここの奥さまは、
『鍍金だらうよ』と云つた。めツきとは金でも上金の方であらう。
自分はあんな結構な暮しを羨しく思ふのだけれど、奥さまは奥さまで結構に暮してゐるので、
『詰らないことはお云ひでない』と、きつい奥さまに似合はず、大層遠慮深いこと――
『まだそこに、ぼんやりして！』
いつのまにか奥さまが下りて來てゐた。お末はあわてて、土間に下り、バケツの中をのぞいて見たが、水が無かつたので、それをさげて裏の車井戸へ行つた。
お末は、或日、姉の家の田植ゑの手傳ひを頼まれたので、一日のひまを貰つた。が、もう、國を出

てから、――あれは一度かた付いた家から出たのと同じ時からだが、――京都でも奉公してゐたり、大阪の市中にもゐたり、池田へ來てからもこの新市街で二度も奉公さきが更つたりした間に、三四年も經つてゐた。そして田の仕事などはその間したことが無かつたので、どろ田ん圃へ這入るのが第一に氣味惡かつた。

それでも、姉や姉の亭主と共に馬鹿ばなしをしながら、苗を植ゑ付けてゐたところ、熱い天氣のせいか、それとも泥の氣に當つたのか、目まひがして倒れかけた。

『ひよろ〳〵してるやないか』と、姉の亭主が田の中に突ツ立つて云つた。

『けたいな娘や、なア』と、姉はまた怒りかけたが、自分が泥だらけの手を擧げて、その手の甲で編み笠の中の額をおさへてゐたのを見ると、そばへやつて來て、『氣分でも惡いのやないか？』

『…………』お末は返事も出來ないほど胸が一杯になつてるのをおぼえた。そして自分ではなぜからだがふら〳〵するのか分らなかつた。

兎に角、久し振りで足を泥田につけたところ、田の泥臭いにほひと共に思ひ出されたのは、――もう、ずツと夢の中へ忘れてゐたことであるが、――別れた所天との親しかつた仲だ。村の若い衆は、夜になると、方々の若い娘をほつき歩くのがきまりのやうになつてゐたが、割合ひに年うへになるまで――待つてゐても――來たことが無かつた自分のところへも、とう〳〵やつて來た。自分の寢部屋

ときまつてたところの雨戸をこぢ明けたものがあるので、お父さんは隣りの部屋から、
『誰れぢや』と怒鳴つた。
『村の若い衆ぢや――默つとれ！』……………………、……………………、……
……………………。……………………。何でも四五名であつたが、その翌日から、自分が田に出てゐるそばを通る男は、どの人もどの人もそれであつたらうと思はれて、懷かしくもなつたし、そして又村の若い娘どもに誇つて、
『わたしかて、阿呆や無い』と知らせてやりたかつた。
そのうち、ふとした出會ひから、民さんと云ふ人といよ〳〵夫婦になつたが、その初めの間の面白かつたことと云つたら――いろ事には上下が無いさうだから、今の奧さまでもあのやうなのであらう。

『かかア棄てろか、
お前を取ろか、
やはり、お前の
裾を取ろ。』

などと、ふたりで歌ひ合つて、一緒に田植ゑをしたのであつたが、それがまた男の方から段々と邪見

になつて行つて、

『お前は阿呆ぢや――やツぱり、人の云ふやうに阿呆ぢや』と云ふやうになつた。

自分も亦もツとよいことがあらうと思つて、他國へ奉公に出た。が、どこへ行つても、夫婦と云ふものの間を見せ付けられるばかりで、自分にそんな仕合せはまはつて來なかつた。

姉どもが、二人で、眞ツ晝間、夫婦ごとのやうなことをこの田のおもてで面白さうに語り合つてるを聽くに付けても、自分は獨り泥の中へ引ツ込まれるやうな寂しい氣になつて、――じり〳〵とその話しの主どもを妬ましくなつた。

『うちへ行て、寢てたらどうや』と云はれたのを幸ひ、姉の家へ獨りで歸つて、おもいあたまを疊の上によこにした。そして、

『姉が自分であつたら』と云ふやうな考へに耽つてゐると、ふと自分の手に血が附いてるのに氣が付いた。

驚いて起きあがつた勢ひで、またぽとりと一滴赤いのが疊のへりへ落ちた――自分の鼻から。

『氣分が惡うて』と云ふ申しわけを以つて、その夜、遲く新市街へ歸つて來て、直ぐ寢ることを許して貰つた。

かの女の寢るところはいつも茶の間の四疊半だが、これと隣つてる勝手元で鼠があばれる音や、旦

那や奥さまが、時々、鼠の騷ぐ方とは反對に隣つた便所に行く足おとやが、今夜に限り、殊に氣になつて、苦しい神經が冴えるばかりだ。

旦那が二階の勉强室で時々一時や二時までも書き物をする。今も、ガリ〱とペンとやらを動かす音がしてゐる。銀行のつとめの外に、あれもお金になるのださうだ。

旦那が下りて來るまでは、奥さまも眠られないのかして、下でまた手紙を書いたり、小說本を讀んだりする。今も、多分、まだ目がさめてるのだらう。

とん、とん、とんと二階の段が——

『あ、旦那や——うけ髯のええ男や！ もう、寢るのや！』

思ひがけなく、障子が明いたので、あわてて首をあげて、わざと、

『誰れぢや』と聲をかけた。

『おれだい！』いつもとは違つて太い聲がした。が、電氣を消してあるので、かの女には姿も何も分らなかつた。ただてツきり自分を目あてに來たのだと思つたので、それと無く、眞ツ暗の中で身がまへをしてゐた。

足おとは、然し、よこへ反れて、また障子の明く氣はひだ。勝手の緣をつたつて行つて、戸棚を明けたと思ふと、ぱツとマチを摺つた。冷めしの殘つてるおはちの蓋を明けたやうだ。

『今ごろ、また御膳をたべるのんだろか？』

やがて勝手との間の障子は締まつた。自分の方に來るのかと思ふと、また反れて、廊下へ出る障子も締つた。

二階の段をまた上の方へ音はあがつて行つた。

やツとあたまを再びおろしたかの女には、毎朝おづ〳〵と掃除をしなければならぬ主人の勉強室のありさまが見える、椅子――大きなつくえ――澤山の綺麗な本――西洋の額――明け放した窓から見える山と電車の道――

『そや〳〵！車掌はんの世話になるのもええが、なア、うちの旦那なら、もちツとええやろに。』

もう、直きか知らん、旦那が奥さまのところへ下りて來るのは――かの女は一しほ眠り付けなかつた。

翌朝、目をこすり〳〵、御飯を焚いたが、旦那が出勤してから、奥さまに斯う叱られた――

『お前は生意氣だよ、ゆふべ旦那が御飯つぶを取りに行かれたら、誰れだなどと云つたりして！』

『…………』顔が眞ツ赤になつたやうであつたが、われ知らずよい考へが出たと思つた、『御膳をめし上つたのでは――？』

『馬鹿をお云ひでない。思ひ違ひのないやうに、今一度お前に云つて置くが、ね、ゆふべ旦那がお前

の部屋の障子を明けたのは、のりにする御飯つぶを取りにお行きなすつたのだよ。』
『へい――』返事はしたが、どうも、かの女には、さうとは思へなくなつた。奥さまが躍起となるだけ、一層思へない。
ゆうべ奥さまはせき拂ひをしたではないか、それで旦那はよこへ反れた。――若し奥さまが留守であつたら――こちらも、この頃磨くので顔が綺麗になつたと旦那は云つてもゐた。また、それとなく氣のあるやうなことも云つた。
『そや〱、どうしたかて！』
かの女は、その日、旦那の歸る頃を見計らつて鏡に向つた。そして、姉からいつもおでこだとか、頬骨が高いとか惡口云はれる場所を、いつに無くこツてりと塗り隱す氣になつた。
『いよう――お末』と、旦那は靴をぬいでからこちらの思つた通り讃めて呉れて、『けふは、例の男にでも見合ひをしに行くやうだぜ――見あげたほど美人になつた。』
『………』少し耻かしいやうでもあつたが、お末は、奥さまと一緒に旦那のお歸りを玄關に出で迎へた腰をあげながら、眞正面に顔を見て貰ふやうにした。『奥さんが綺麗にするやうにいつも云ふてお呉れやしたさかい、ねえ。』

『さうだとも――女中だツて、いつも、おれのうちでは身だしなみをしてゐる方がいいのだから、ね。』から云つて、旦那は廊下を二階の段の方に曲つた。

直ぐそれについて行つて、奥さまのするやうに洋服でもぬがしてあげようと足を運ぶと、奥さまは邪見にもこちらを押しのけるやうにして、こちらよりもさきに進んだ。そしてこちらをふり返つて、

『お前はお膳を出してお呉れ。』

『へい――』とは答へたが、お末の胸には奥さまに對する不滿じみた感じが殘つた――自分と旦那との仲を、さういつも〱、奥さまが隔てなくてもよいのに！

『あのやうにべた〱とおめかしする人は、きツと燒き餅深い』と、隣りの年増女中が云つたが、矢ツ張り、それに違ひない。

こちらにばかりお風呂の火を焚かせて、湯に這入る時は、いつも奥さまが旦那の脊中をあらつてあげる。一度や二度は、こちらにも旦那の脊中の世話ぐらゐはさせて呉れてもよからうに。

旦那も旦那で、少しもこちらの思ひ爲しを察して呉れない。奥さまばかりを可愛がつて――

かうなると、お末には自分の緣談の相手がここの旦那であつたやうだ。

ここへ來る前の主人は、その奥さまと喧嘩ばかりしてゐた。そしてここの旦那とは違ひ、毎晩十二時過ぎになつて、而もお酒に醉つて歸つて來た。何でも池田の『新聞社長』とか云ふところがあつて、

『脅喝』たら云ふことで、いつかも、澤山のお金が取れたと出入りの商人が自分に云つて聽かせて呉れた。
それが、或る晩のこと、お酒くさい息を吹いて歸へつて來て、自分が寢てゐる玄關の間に這入つて來た。
『奥さんは知つてやはるか知らん――知つててや無いか知らん?』から自分が氣がねして、耳を澄ましながら枕もとの方に暫らく坐わつてた。
『あなた――あなた――何してゐなさるのです?』
『奥さんなんて、直ぐ皆これやさかい――わたしがあしこを追ひ出されたのんもそれや。けれども、ここの旦那は、こないだ障子をあけて來た外には、別に何もいやらしいことはせん。』
それだけに、なほ奥ゆかしいお方のやうに思はれて來た。『井戸のはたで水を汲んでる時、お尻をたたいたりする旦那は、どこの旦那でも油斷ならん』と、女中どもはよく云ふけれど、自分はそんなことだけをでもして見て貰ひたい。
ところが、丁度、奥さまは珍らしく何かのつき合ひで――絹地の白い蝙蝠傘をさして――大阪へ行つて、夜になつても一向歸つて來ないので、ひよツとすると、自分に手をかける爲め、旦那が奥さまをわざ〱遊びにやつたのだらう。

茶の間に引ツ込んではゐたが、氣がわさ〳〵として、今か〳〵とのぼせて來るばかりで、寢まきのほころびを縫ふと針を持つて見ても、物が手につかない。

『旦那は』と、耳を澄ませた。今夜は二階ではなく、下の六疊の奥さまのお部屋で、蚊帳の中へ這入つたのは、宵からのことだが、本を讀んでゐるかして時々ぱら〳〵と本の紙をめくる音がする。うち輪を使ひながら、いくらこちらが待ちかまへてゐても、音沙汰がありさうでもない――それにぐづ〳〵してゐれば、このよい機を失つてしまふ。

と思ふと、からだ中に何か分らない筋のやうなものが突ツ張つて來た氣持ちがして、あたまは上の方へぽツとのぼつて行く。

溜らなくなつて、立ちあがつて見た。――また坐わつて見た。――また立ちあがつて、今度は、火鉢のそばに行き、この暑いのに獨りでしゆツ〳〵と湯氣を吹いてる鐵瓶から、急須に湯をついで、これを盆にのせて自分の部屋を出た。

『そんなに勉强しやはると、腦病になりまツせ。』眞ン中二枚を明け廣げた障子の敷居と廊下との上に膝をおろして、手を延ばして、お盆を上座の方の蚊帳の裾へ置いた。

『お前としちやア、おほ出來だよ――なか〳〵氣が利いた、ね。』電氣の下の褥の上で、あふ向けになつて、本を見てゐた旦那は、その本を放し、きのふ洗つた白い敷布の上にお腹を伏せ、からだを〻茶

の方へ寄せた。
左りの手が蚊屋のそとへ出た時、右の足が女中と反對の方へ眞ツ直ぐに長くなつたのが見えた。でも、われ知らずからだが固くなつて、兩手をきちんと膝の上に重ね、のぼせたあたまで獨り言のやうに、
『奥さんの遲いこと！』
『ほんとに遲い、ねえ――』旦那は茶をぐツと飮んでしまうと、また本を取つてあふ向けになつた。
かの女は何だか自分の勝手が違ふやうで――暫らくそのままでぼんやり坐わつてゐた。ぶんと蚊が一匹やつて來たのを、ひら手で廣い額の、お白粉の上へぺたりと叩き附けた。それから盆と茶碗とを引き下げることにした。
『旦那は學問はしてても察しが無い――も一度このええ機をおそばへ』と思つて、また自分の部屋を出た。廊下の末につんと立つて、
『旦那はん――お御、お御足――でも、揉ま――揉ませて――戴きまほか――どうせ暇だツさかい。』
『さうだ、ね――それもよからう。』
旦那はさう云つても動かないので、かの女も廊下の端に、肥えたお腹を突き出すやうにして、暫らく突ツ立つてゐた。

やがて旦那は腹這ひになつて、兩足の裏を揃へて延ばした。かの女は下座の方にまわり、ぺたりと坐わつてから、蚊帳の裾をくゞつた。いきなり、旦那の兩方の足を自分の兩手でつかんで、ぐツと下の方へ引き延ばしてから、一二分間揉むでゐると、自分はずツと浮き〳〵した氣になつた。

『あんたの足は、男にしては、やらこおまん、なア。』

『さうか、ねえ――おれだツて然し、百姓や鉢叩きぢやアないよ。』

『そりやそやけど、なア――おほ、ほ！』愛想笑ひをして見せて、また揉み出し、『炬燵の中でさわられたかて、男の足なら直ぐ分る云ひまツせ。』

『は、は、はア――お前達の仲間はよく穿つたことを云ひ合つてるやうだ、な。こないだも、奥さんに、井戸のそばでお尻を叩く旦那は油斷が出來ないと云つたさうぢやアないか？』

『けど、ほんまだツせ』と、命令するやうな氣分になつた。『ちと、旦那もお叩きやす。』

『はツ、はツ、はツ！おれがかい？全體、お前はどこの國でそんなことをおぼえて來たのだ？』

『わたしなんて、あきまへん。旦那や奥さんとは違ひまして、東京のやうな結構なとこも知りまへんさかい、ねえ。』

『東京は別として、さ。』

『東京は別だツか？わたしは京と大阪だけだす――それに、西洋と云ふとこへも一度行て來ましたけ

れど。』
『へえ――誰れとだい？』
『京の御主人につれてて貰ひました。』
『何年ゐたのだ？』
『何年て――そんなにをられますものか？奥さんもあるし、子供もあるし、店がまたいそがしゆおました旦那で――三日ばかり。』
『をかしい、ね――何日かかつて、何に乗つて、さ？』
『汽車に乗つて――半日で。』
『さうだらう。うん、さうだらう。』
『旦那や女中達がここは西洋や云ふて敎へて呉れはりました。』心までが調子づいて來たので、一層丁寧に親指に力を入れて、兩の土踏まずを押してゐたが、また手を固めて、その上を代り番こに叩き初めた。
『多分おもしろかつたらう、ね？』
『ええ、ちよツと』と、氣取つた聲で、『おもしろおました、ねえ。ずうツと――斯う――（廣いと云ふ言葉が出なかつたので、さう云つただけで海とつづけ）海があつて、松がたんとあつて――』

『そりやア、須磨か舞ひ子だツたらうよ。』
『ええ、舞ひ子も一人や二人は來てはりましたけれど――あすこが、それでも、須磨と云ふ西洋だしたのんだツか？』
『はツ、はツ、はツ！』
『そんなに動いたら、揉めまへんが、な！』自分には、旦那がなぜ笑ふのか分らなかつた。子供を叱るやうに斯う云つて、自分は旦那のぐら〳〵させるその足を、兩手でしツかり押さへて、また、ぐツと引ツ張つて揃へた。
電車の響きが囂々と猪名川の鐵橋を渡つて、寶塚の方へ消えて行つたと思ふと、家のそともしんとして、旦那と自分との世界ばかりのやうだ。
『なんとか云ひ出してお呉れんかい、な』と、それぱかりを私かに待ちかまへて、今度は立ちあがつて、自分の足で旦那の足を踏むことにした。
『痛おまツか？』
『…………』
『痛う無い――？』
『…………』

『旦那はん！』

『………』

『ちよツとも返事しやはらへん！』

あんまり察しが無いのを腹立たしくもなつたが、返事をしないのは、自分のあんまの利き目で心よく眠つてゐるのだらう――のぞいて見ようと思つて、口を明いて、うツかり前の方へ顏を出したとたん、自分の足の中心を失つて、二三度空を泳いで、濟まないことには、旦那のどこか知らんを踏んだかと思ふと、とう〳〵旦那の上へ重いからだが倒れた。

『痛い、ね！』矢ツ張り、起きてたのだ。

『ほ、ほ、ほ！御免やす、つい、倒れまして――』

『ひどいことをする女だ。』

『どこぞお怪我は――？』

『なアに――』

『では、安心だすけれど――』急いで亂れた裾を直して坐わつたところは、旦那の右のわき腹のそばであつたが、お末はそこを離れたくなかつた。

ちりりんと、外の小門の鈴が鳴つたので、かの女は然しあわてて立ちあがつた。そして、まさか旦

那も告げ口はしなからうと、自分はそ知らぬ顏で奧さまを迎へに出た。

その翌日のこと――

『お前は、こないだから、料理屋の女中に行きたいと云つてるが、ね』と、奧さまはこちらを叱る時と同じやうな、つんけんとした調子で云つた。『そんならそれで、早くさう決めた方がいゝよ――どツち付かずぢやア、用も碌に出來ず、使ふ方でも使ひにくいから、ね。』

『ほたら、さうしまほか？』斯う云つて、お末は奧さまの顏を相談するやうに見あげた。かの女には結局、その方がよいやうにも思はれた。

ゆふべ旦那と一つ蚊帳の中にゐたにほひでもしてゐたのだらう――奧さまは、けふ、餘ほど機嫌が惡い。

旦那が障子を明けて來た時でも、奧さまさへゐなかつたら、きツと、こちらの思ひを就げたのであつたらう。また、奧さまの留守にお御足を採んだゆふべでも、旦那は奧さまのあとでの權幕を心配して遠慮したのであつたらう。

どうか、旦那ばかりのところで、一晩でも、旦那の世話をして見たいと云ふ考へが勝つてゐたのだ。それには、ゆの姉の隣りの娘のやうに、旦那と云ふものを自分のうちに毎晩とまらせて――で

も、自分には姉のうちしかうちは無い。
『さうぢや、自分がどこかの娼妓になつて旦那をお客に……』
いや、それとも――が、こないだからの、仲居志願であつた。
『旦那、わたし、あんたの行きやはる料理店の女中になりとおまんが、なア、なつたら、來て呉れはりまツか？』
『行つてやるとも』と、旦那は四五日前に約束して呉れた。それからのことだ、池田の面茂がよからうか、箕面の一方亭がよからうかと、人に相談してゐたのは。
『どツちやでも行けまツさ』と、丁度勸めて呉れた人があつた。お客さんからお金も澤山貰へると云ふし、また結構な身なりも出來て――兩方の店から、毎月の末にここへかけを取りに來る女中の人達でも、その度その度に、かけの外に、奥さまから一圓や二圓は祝儀を貰つて歸る。
『では、どうぞ頼んまツせ』と云つたのを引き受けた人が、一方亭へ行けと知らせて來た。
『いよ〳〵料理屋の姉さんになるのか、ね』と、奥さまは暇を出して呉れた。
『まア、やつて見まツさ』と、お末は小い行李の始末をして居た。
『さぞ、氣の利いた姉さんが出來るだらうよ。』旦那は斯う讃めたのだと思つたので、かの女はきツと思ひが叶ふ時があると云ふ嬉しさに溢れた。そして、さう云ふ店から來る人達が云ふ言葉を思ひ出し

て、その調子までも眞似て云つた。

『どうぞ、また、旦那も遊びに來ておくれやす。』

箕面の長い谷合ひに有名なもみぢの、青葉が過ぎて紅葉になり初めた頃になつても、旦那は約束を違へて、ぱツたり一方亭へ來なかつた。

『病氣だツしやろか、あまり勉强するさかい。』かの女は頻りに斯う氣を揉んで、自分の人のやうに思つてゐた。

『實は、なア、お末はん、あのお方があんまり來て呉れやはらんさかい、うちの旦那も心配して、きんの、そのわけを聽きに行たんだツせ――何かお氣を惡うしたことでもあんのや無いかてなア。ほたら、なア、あんたに惚れられてるのんが迷惑や、云やはつたさうや。』

女中がしらのこの言葉が、どうも、かの女には腑に落ちなかつた。

『そんなことは無い筈やが、たア』と、別に自分の辯護をするのでも無く、『向から氣があつたのを――わたし、知りまへんが、な。』

『では、何かその證據があつたの？』

『別に證據ツて――』かの女は、あの旦那も自分の蒲團へ這入りかかつたのだと、今でもまだ信じて

ゐた。そして自分が旦那の上に倒れたのを、ぢかに旦那から抱かれたと同じなつかしさにおぼえてゐた。

『きツと奥さんが邪魔(じやま)しやはるのんだツさ。』

——(大正三年五月)——

藝者あがり

一

『私こと今回上京致し、表書きのところに住しをり候間、ちよツと御知らせ申上げ候。こちらから先以つてお伺ひ致すべきの處、かれこれ多忙の爲めいづれ近々伺ひますが、あなた樣も御暇の節御出で被下度候。下山藤藏』と云ふハガキが到着した。

これを受け取つた信作は、このさし出し人の姓名をちよツと思ひ出せなかつた。

渠は、早稻田文學から注文を受けた長篇の論文を熱心に書いてゐたのだが、そのペンを置いて、暫らく考へて見た。

『誰れだらう――？大阪へ行つてゐた間にでも、尋ねて來た文學志願者の一人で自分がその名を忘れてしまつた人か知らん？――いや、それとも、地方からよく手紙をよこし、指導を仰ぎたいなどと云ふ手合ひで、碌にこちらから返事もしなかつたそんなもの等の一人か知らん――それにしても、また、餘りに無意味な横柄に過ぎてゐるが――』

ふと思ひ出したのは、殆ど十年前の伊東に於ける避暑の時のことだ。文子！　長唄の上手な藝者！　段物を歌はせてしんみりと聽いてやれば喜ぶが、田舍節などばかりで持てる田舍ものの席では、直ぐ都々逸などをもうるさがつて、何でも『拾八番とは聽いてはゐたがと節附けて獨り語のやうに云ひながら立つて男舞ひをやり出したツけ――渠は斯う思ひ浮べては、獨り』で微笑しないではゐられなかつた。そして卷煙草の灰を灰吹きの中へ拂ひ落した。

『さうだ！　下山藤藏とはかの女の亭主だ。そしてこのハガキの手は確かにかの女自身の手だ。

この手で、確かに、藝者時代には『今晩もいらツしやるでしようね』、『待つてゐますよ』などと書いてよこした。また、あの亭主と上京して今度のと同じ方面に家を持つた時も、一二度手紙をよこし、五圓や十圓の融通を賴んで來たこともあつた。伊東へ再び歸つてからは、料理屋を開業して忙がしいと云ふ便りがあつてから、年始狀や暑中見舞の端に拜借の金はいづれ送るから惡からずとあつた。が、その後、長い間、音信不通であつた。

『金のことなどは心配しないで、時々便り位はして來てもいいのに』と、信作は先妻と共に、時々思ひ出さないでもなかつたのだ。が、渠の生活がここ數年前から一變して、妻も新たまり、自分も藝者遊びなどをばツたりと止めたところから、つい、かの女のことも忘れてゐた。

が、――一つの玉子を二人で一緖にすつたこともある。亭主が出來て東京へ出て來てからも、接吻

をし合つたこともある。思ひ出すと、それは二度目の出京の時で、一度目の時には或技師の圍ひ者として出て來て芝に家を持つたが、その家を持つまでに大きな腹をかかへてゐたので、その診察やら出産やらの世話を信作は先妻と共に手傳つてやつた。そして先妻は文子に出來る子を自分の所天の種ではないか知らんと心で疑つてゐた。が、渠自身には、かの女を、藝者をしてゐた間にでも、渠がいくら口説いても聽かれなかつたその理由を、この時によく分つたと思つた。

『藝名に本名を名のつて、文子と云つてゐたのだが――感心にもよくあんな働きの無い亭主とまだ添つてゐられるものだ。』兎に角、直ぐ訪問して見ようと云ふ氣になつたので、渠は早い晩餐を命じて、白がすりの不斷着に絽の羽織りを引ツかけて、家を出た。

二

千住の大橋で電車を乘り棄て、橋を渡り、青物市場の立つ通りを少し行き過ぎた横丁であつた。そこをまた番號に從つて尋ねて行くと、大きな縱看板に『をんな髮結――内ゆひ――うめばち屋』と出してある、その狹いろぢだと聽いたので、またそこを這入ると、つき當りに一軒しかなかつた。

『御免――』と、渠は鈴と共に響鳴するやうな心持ちで格子を明けた。

『へい――』と云つて、障子のがらすをのぞいたのは、かの女であつた。障子を明けて、にこ〳〵

と、

『入らツしやい――ハガキが屆いたでしよう。』

『屆いたから、來たの、さ。』

『相變らずあなたはあなた、ね？』

『然し、屆かなきやア來る筈はない、さ。』

『でも』と、急いで、ほとぼりのありさうな蒲團と枕とをまるめながら、『何から話し出していいか分らないんですもの――こんなむさ苦しい物は、まア、ペケさ。しまつてから。』

かの女が押し入れへ蒲團を押し込んでゐる間にも、信作はその蒲團の敷いてあつたところを越えてよしずのつい立てのわきに腰をおろして見まわすと、自分の前には長火鉢が縱に据わつてゐて、その遠い端に近い柱には、三味線がさらさの風呂敷に包んでかけてある。裏も横も建て詰つた八疊の間で、それに狹い臺どころが別についてるだけだ。

『うめばち屋と云ふのがここですか？』

『ええ、うちの紋から思ひ付いて――まア、二階へいらツしやい、少しやア下よりも涼しいでしようから。』

『僕アどこでもかまひませんよ』と云ひながら、渠は立ちあがつた、『然しまだ暑いことは暑い。』

『さア、どうか――』

かの女が手でさしづした通りに先きに立つて、渠はとん〳〵とはしご段をあがつた。長四疊と六疊との間の仕切りを取り外した奥の方の突き當りに進み、家の入り口から云へば左りの横手に當る高窓を背にして坐わり、自分の左り手に兩室ぶツ通しの低い、明るいうら窓の光を受けた。

『こんな風をして――』左りの肩の方は白地が勝つて、右の肩から腰のあたり、裾までが紺で大きな蓮を染め出したしぼりの湯かた――これで寢てゐたらしい――の袖をひら付かせ、右の手に煙草盆を持ち、左りの手を右の肩に當てて、かの女は附いて來た。『あたしは、相變らず、男のやうにかまはないたちだから。』

『…………』渠は微笑の溢れてゐるかの女の顏を正面に見あげて、『かみいさんになつたの？』

『貧之したから、ね。』渠にもおぼえのあるほがらかな聲だ。ぴたりと渠の前に坐わり、兩手を疊に突き、和らかにからだをひねつて、『まア、いらツしやいまし。』

『暫らく』と、渠は輕く答へたが、心ではちよツとどぎまぎした。そしてさう堅苦しく出るにも及ばないではないかと云ひたかつた。

かの女の擧げた顏を身じろぎもせずに見ると、年でもあらうが、ふツくらしたところは少し失せて、頰ぼねさへ何だか目に立つて來た。が、多少は形が違つても、兩のゑくぼには、なほ當時の愛嬌は殘

つてゐる。
『こわい顔をして』と、かの女は目を低い裏窓の方にそらした。
『なアに』と、笑ひ出して、『年と云ふ物は争はれない物、さ。』
『それでも』と、少し躍起になつて、『あなたよりやア七つか八つ下でしよう。』
『さう、さ、ね――あなたが伊東で勤めた時は、もう、おほかたと――』
『七八年前でしよう。』
『いや、もツとにならう――あの時、二十七であつたぢやアないか？』
『うそ！あたしは二十四よ。』
『さうだ、さうだ！　僕はあの時あなたを――二十四とは云つてるが――ふけてたから――自分で二十七位だときあてゐたのだ。』
『ひどい、わ、ね――あたしはまた、あの頃から、あなたの事を毎日のやうに噂さしたでしよう――しまいく〵と思つても、つい出たのだから、てイちやんによく冷かされたものです、わ。』
『てイちやんと云やア、養子を貰つて、今ぢやア福田樓のおかみさんだツて、ね――』
『ええ、あなたも熱海で御存じの田中屋の番頭を――』
『僕はあの頃だけで全く伊東へは御無沙汰だが、人づてに聴くと。』

『人のいい主人夫婦であつたが、ねえ、死んでしまつて――』
『その主人、さ、僕をうらなひ師と見たのは。』
『さう〳〵！』坐わつたからだをおどらせて、『大きな番がさを斯うかかへて、さ、――お天氣のいいのに高い足駄をはいて、――あなたが歸る時に、あたしとてイちやんとが海岸まで見送つて行つたぢやアないの？』
『………』渠はかの女の云ふままにさせて、かの女の顏を見てゐた。
『あの時の格好ツたら、無かつた、ね――何だツてあんな風をしてらツしやつたんでしよう？』
『あれは――』と、渠は扇子を使ひながらあぐらになつた。
『お羽織りをお取んなさいな――、暑いんですもの。』かの女が斯う云つて立つて來たその手へ、渠はそれをあぐらの儘脫いで渡した。
『あれは二度目にあなたを尋ねて行つた時だが、東京を出る時おほ雨であつたからで――向ふへ着くと、もう、上天氣、さ。傘を小わきにかかへて、から〳〵した道を福田樓まで行きつくと、店の圍爐裏のふちに、あの死んだと云ふ主人が煮え立つ茶釜を番して、がん張つてゐた、さ。僕は無邪氣に這入つて行つて――』
『ふウちやんはゐますかツて、尋ねたツて、ね。』かの女は羽織りを衣紋竹で壁の上にかけてから、ま

との座についた。
『うん、さうすると、ゐないと云ふのだ。「ぢやア、てイちやんは」ッて云つてもゐないのだ。おかみさんもゐないと云ふのだ。「僕は東京から來た栗本ですが、ね」ッて説明しても、「何の用があるのです」ッて取り合はなかつた。僕は、來ないうちから、いい加減なお上手を云はれて、もう、全くみんなにふられたのだと思つた、ね。』
『ところが、あたしやてイちやんはその前の日にあなたがいらツしやるだらうッて、待つてたんだのに――あたし達アあなたがお手紙通り來ないッておこつてたのです、わ。』
『でも、丁度、てイちやんのお母さんが奧からお銚子を次ぎに出て來たので、やッと分つて、三日ばかりの宿を福田樓の向ふにきめて貰つたが――矢ッ張り、あの時の心持ちぢやア、ふられたのさ』と、わざと無邪氣さうにした顏を向けて、『二三度接吻をさせて貰つた切りで、ね。』
『そりやア』と、かの女は前齒を少しずらして輕くかみ合せながら――これがまたかの女の習慣を渠に優しく思ひ出させながら、『あなたが御無理だツたのですもの――でも、あとですツかりそのわけはお分りになつたでしよう――それ、みんな、元はと云へば、彌兵衞の件ですもの?』
『あの親方はどうした?』
『今年の二月に牢死しました、わ――それであたしも少しやアおほびらに東京へ出て來られたのです

の。』
『ぢやア、姉さんはどうしてゐるの？』
『今、大阪よ――』かの女は、手をついたかと思ふと、立ちあがつて行きながら、長四疊の方でちよツと立ちどまり、からだをやアわりとよぢつて、こちらを向き、『まア、お茶でも持つて來ないと、お話が出來ないから。』
『あなたも大阪へ行つてたの――？』
『ええ。』二三段おりたらしいところからこちらを向き、欄干の端を兩手でしツかりかかへ込み、『然しそれはちよツとの間ですが――姉さんは、彌兵衞が二年の懲役を喰ふと間もなく、あツちへ行くゑを晤ましましたの――お父アんやおツ母さんも一緒に。』
『では、兩親もまだ達者、ね？』
『もう、七十八に七十七――』口を珍らしいだらうと云ふ風にとがらせたが、『待つて頂戴よ』と云つて、こちらを見詰めてゐた眼をかの女ははしご段の下へ轉じた。が、欄干にかけてゐた手が最後に消える時、細い金の指輪をさしてゐるのが見えた。

三

信作は獨りで落ち付きが無くなつた心を立ちあがり、扇子をあわただしく使ひながら、自分の向きに對してゐる壁にかけてある寫眞の額のもとへ行つた。

寫眞は二つ並んでゐて、一つは頭巾をかぶつたふくぶくしい婆アさんので――これは、その娘と共に、曾て、伊東へ歸る旅費を借りに來たことがあるおツ母さんだ。その昔、まだ日本橋の魚河岸で、まぐろ、いるか、さめ、ごんぞう等のおほ物の店を立派にやつてゐた時には、いろんな人を親切にいい方に世話してやつたので、それが爲めに菓子屋の榮太樓、けんざん屋の〇〇屋なども、段々とよくなつたのを、いまだに恩に着てゐると云ふ。だから、道樂の爲めに相撲、藝人などを世話して、芝居の興行までに手を出し、とうとう家をつぶし、若い娘を二人とも藝者にさせたお父アんの方は、娘どもにくそ味噌のやうに云はれてゐても、このおツ母さんのこととなると、娘どもは今でも一生懸命になつて世話をしてゐるのだらうと、信作は渠等二人に對して忘れてゐた同情の涙をまでも思ひ浮べた。

今一つの寫眞は子供二人のだ。恐らく、文子を最初に芳町で引かせて妻に直した靜岡の――山大盡とか云はれる――人にかの女が生んだその子であらう。

『二人もあつたのか』と思ふと、かの女が二度目の勤めにふけて見えたのも尤もであつた。

『あたしやア、子どもが直き出來るの』と云つたことがあるのも、本統のことを云つたのだ。

ふり向いて、反對のかもゐ、乃ち、兩室の仕切りになるべきかもゐを見ると、また、かの女が立派な奧さまとしてお引きずりで寫した立ち姿が出てゐて、その橫にまた石州流の生け花陳列が寫してある。

『何を見てらツしやるのよ!』少しわざとらしい頓狂聲を張りあげた女を、渠は立ちながらにこりと返り見ると、かの女は渠の右手にきまり惡さうに立つてゐた。サイダ二本とコツプ二つとを盆にのせて持つたのが、衣物を地味な白がすりに着かへたし、また、さきには洗ひ髮を邪慳に結はへてゐたのが、髮を少しふくらませた束髮にかはつてゐる。

信作は再び生け花の寫眞に目をやり、

『昔の思ひ出でしよう、ね――?』

『何でもいい、さ!』かの女は渠を後ろから突いて、奧へ進めながら、『さア、立つてらツしやらないでお坐わんなさい、な。相變らず惡くち屋の、つくしん坊、ね、のツぽに延びて!あたしの氣象もちよいとあなたに似てますよ――石州流に宗旨替へをするなんて。遠州のやうにためたり、すがめたりはあたしにやア出來ませんの。』

『それはさうと――』まだ渠は坐わらないで、高窓に背をもたせながら、『下山君は?』

『伊東の方へ歸りましたの』と、坐わつてこちらを見あげ、『こないだまで來てゐたのですけれど。』

『ぢやア』と、渠はかの女の愛嬌ある目を避けなければならぬ氣がして、外を見ながら、『今、獨りぼッちか？』

『すき手が一人、桂庵から來たのですけれど、よくないからこれも歸して、今、伊東の方へ云つてやつてあるんですが――結句、自分ひとりが面倒臭くなくツていいし、――またつまらなくもあるし、ね。』

『全體』と、ふり返つて、『いつ東京へ出て來たの？』

『先々月。』

『大阪から直ぐ？』

『ええ――でも、あたしやア大阪に何ほどもゐなかつたのですの――梅忠を一段〇〇太夫に就いて、本式にあげたばかしで。』

『義太夫語りにもならうとしたのか？』

『さうぢやアないのよ。何から話していいのやら――』かの女は身をゆすつて立つて來て、信作と一緒に高窓の敷居に、無理な工夫をして、腰をかけた。渠と自分とをぱた〳〵うちわであふぎながら、

『一年ばかし病氣で、ね。』

『例の腦病――？』

『腦病はあたしの持病だが、ね――今度、もう、子宮をすツかり療治して貰つたの。』

『下山君がそんなにつよかつたのか知らん?』

『いいえ、靜岡のが、さ。』

『また――僕の知らないうちに、また戻つたのだ、ね?』

『それが、あなた、あたしだツて子供は可愛いから。』

『子供と云やア、あすこに二人寫つてるぢやアないか?』

『ひとりはめかけの子、さ。』投げ出すやうに云つてから、『あたしの知らないうちに、あたしの子で屆けてあつたので。來年中學へ這入ると云ふ兄の方があたしので――それが二度目のめかけにいぢめられて、ね――まさか、段々ひぼしにする氣でもなかつたでしようが、――學校へ持つて行く御辨當までがあんまりひどいので、あれぢやア子供のからだにも、精神にもよくないから、何とかこちらで考へてやれと、あたしの友だちの小學女教員からこツそり云つてよこしたのですもの。あたしも躍起になりました、わ。』

『ぢやア、下山君とは一時別れてゐたんだ、ね。』少し侮蔑の意を含めて、『あなたも隨分同じ男や逢つた男を持ちかへたわけだ。』

『どうして?』かの女はうちわの手を休めて、こちらを不審さうに見つめた。『あたしやア靜岡の人と

下山との外に、誰れとも關係はなかつたぢやアないの？』

『さうか知らん――たとへば、僕夫婦があなたのお產の時の手傳ひをしたあの時の鶴岡とか、何とか云ふ技師は？』

『あれは――あなたも御存じなかつたんですか、ねえ――關係など、ちツともありませんでした、わ。』

『でも、子を孕んだぢやアないか？』

『あの子は生れて直ぐ死んだ、わ、ねえ――然しあれも靜岡の人のよ。』

『へえ――』

『鶴岡さんは立派に男を立てて吳れたんだ、わ。あたしが伊東へ行つて、姉さんのそばで、身を落しさへすりやア、彌兵衞は二度と再び靜岡の方へ無心を云つてやるまいし、あたしもいやな靜岡の家と緣を切つて貰へるツて思つたのですが――その時、二度目の子がお腹にあつたのを知らなかつたのがあたしの失敗、さ。然し多少は氣が付いてゐたツても、あの場合は、どうしても藝者にでもなつてしまはないぢやアゐられなかつたのですもの。二百圓と云ふ金を、しよう懲りもなく、彌兵衞がまた無心に來て、出さないぢやア、あたしと姉さんとの素情を靜岡市內はおろか、縣下一體までも云ひ廣めて、あたしの主人を世に立てないやうにするツてンですもの――尤もそれが彌兵衞のおきまり文句で

したが、ね。』

『全體、姉さんがあんまり意久地がなさ過ぎたよ。』

『全く、姉さんは、もう、全くあきらめてゐて――彌兵衞の云ふ通りになつてゐさへすりやアいい、自分の考へや望みを云ひ出しちやアあたしがまた騷ぎ出すからツて心配ばかししてイたのですから、あたしだツても、どうなつたツてよかつたのですが、うちの人にやア彌兵衞の大きな無心を、もう、何度も叶へて貰つてるし、お父アんやおツ母さんも大變世話になつてゐないでも無いのですから、あたしがみんな背負つて立つたのよ。「よう御座います、二百圓出せばいいのです、ね」――から云つて、あたしやア直接に檢番へ相談しに行つたもの、さ、ね。靜岡の警察へはうちから手をまわしたので、藝者が許されなかつたので、伊東へ行つて、やツと鑑札がさがつたのが丁度あなたが初めていらしつた時でしよう――御存じの通り。』

『うん――』

『彌兵衞は姉さんを――一度あたしは姉さんを逃がしたことがありますが、それがつかまつてからは――大事にしてゐるツて云ひますから、どんなに暮させてゐるかツて思つてたら、丸でお三どんあつかひであつたぢやありませんか？　二十ばかりある兒分――と云つても、みんな石ころのやうにごろごろしてイる奴等ばかり――の御飯焚きですもの。あれでも、芳町に出てゐた時は一等の清元藝者で

鳴らした人が、ひびだらけの手をして、さ——あたしやアくやしくツて、くやしくツて——そツくり二百圓を揃へて出してから、姉さんのお三どん料一ケ年分を、かまはず、さし引いてやつた、ね。』『ふウちやんにやア』と、云はせたのは信作のわれながら緩んで來た氣分であつた。『あの嚴丈な親方もかなはなかつたのだらう。』

『そりやアひどい奴よ。』かの女は眼と首とに力を入れて念を押したが、下に置いたままの盆に氣を轉じた。『おしやべりばかりして』と、窓を離れて、けツたるさうに下に坐わり、口拔きを手にしながら、『まアー——サイダアを召しあがるでしよう?——お茶の代りに。』

四

『うん、飮むとも』と答へたが、渠は直ぐに坐わらないで窓をのぞいた。

目に付いたのは、隣りのいちぢくだ。隣りの狹い庭を一面におほつて、周圍から建て込んだ家根家根の上にまで延び、まだ靑いが多くの實の鈴成りしてゐるのが、あツちからもこツちからも、單スペイド型や三またスペイド型の廣葉の重なりの間から見えた。

『何があるの?』

『どうだらう、家根へ出てあのいちぢくを盜んだら?』こんなことを渠は云つて見たくなつてゐた。

『………』かの女は吹き出す眞似をして、『およしなさいよ、あたしのうちが泥棒に思はれますわ。』

『かまはないぢやアないか？』

『いやなこツた！　それこそ爭はれないぢやアないの――色けよりも喰ひけツて？　あなたのいちぢく好きは昔から、ね。』

『さうだツたか、ね――喰ひたいのだが――』渠も窓を離れて坐わつた。

『今に買つて來ます、わ――まア、お茶の代りに。』かの女はサイダを拔き初めた。

『栗本さん――獨りと云ふものは詰らないもの、ね。あたしやアこんな寂しいくらしをしたことは初めて、さ。たださへ腦が惡いのに、考へ込むばかしで――』

『だから、下山君と一緒にゐればいいではないか――かみいの亭主としては、持つて來いの人がらだア。』

『可哀さうに――』かの女は怒りもしないで、却つてふき出しながら、『自分でもそんなことを云つてるのよ。』『どうせおれは敎育もなし、一人前の仕事は出來ないが、石へかじり付いても自分だけの喰つてくだけは儲けるから』ツて。どツか十五圓でも二十圓でも取れるところがありませんか、ね？』

『料理屋は失敗したのか？』

『ええ――それから雜貨店をやつても、あたしがゐなくなりやア、それツ切り、成り立つて行かないし――別れてゐた間は運送の方に傭はれてゐましたが、今もまたその方の主人が病氣とかで手傳ひに行つてるのですが――』

『少しは僕も話が分つて來たやうだが――』

『でも、まだあなたにやア話さなかつたことが澤山ありますとも。』

『そりやア、音信不通になつた間のことは――』

『その前のことだツても――何だツて、親兄弟三人と云ふものは、みんな、あたし一人に手頼つてるやうなものですから、あたしだツてやり切れません、わ。』

『そんなことア前から知つてらア、ね――然し、ね』と、渠は暫らく言葉を切つた。かの女もコップを手にして、こちらを見てゐた。渠はそれから再び口をひらき、『ふウちやんのすることは、いつも、あんまり棄て鉢過ぎたやうだよ――何だと云やア、直ぐまた藝者と來たやうだ。』

『それが、あなた』と、力を入れて、『あたしのやうな碌に教育も無かつたものが、おい、それと手ツ取り早く僅かの金でもまとめられることは、外にないぢやアありませんか?』かの女の前齒合せの癖が、せんかの『せ』に、殊に目立つた特色を示めした。

『………』渠はその特色ある發音を一瞬間味はつてから、『なけりやア無いままで自分だけの處分を

自分だけでしたツてもよかつた。』
『それぢやア丸でぶち毀わしよ――うちの人にどんな不名譽がかぶさつて來るかも知れず、親や姉さんを路頭に迷はせるやうになるでしよう――？』
『それでもふウちやんの罪にやアなりはしない、さ――初めは親が娘を藝者に賣つたのが惡かつたし、次ぎに、また、姉さんが意久地の無い爲めに、その苟くも亭主でなけりやア亭主同樣になつてる者を、如何にいやでうツちやらかしてあつたにしろ、二度も三度もあなたの家へ無心に行かせたのが惡い。』
『そりやア、姉さんにも貧乏の苦しまぎれもあつたでしようが――あたしの憎かつたのはただ彌兵衞ばかり。ぢぢイの癖に、勝手におほ酒、おほ飯を喰らつて、博奕ばかし打つてやがつて、負けたりするたんびに、そのお尻をあたしの方へ持つて來たんですもの――一度や二度は、それでも、あたしだけの考へで、犬にさかなを盗まれでもした氣になつて、百圓、二百圓を出してやつたけれど、姉さんがあいつに生け捕りになつてる間は、切りがないと見ましたから、あたしも「ええツ、今一度」と云ふやうな氣で乘て鉢になつたのです、わ――あたしやア子供の時から男をんなのやうだとも云はれたほとですから。』
『…………』信作は以前に何度も聽かせられたことだから、一々應對してゐる氣になれず、無言で受

けながら、サイダを飲んでゐた。
『あの時だツて、あたしは隨分お酒をがぶ付いたでしよう――それでも、ちツとも醉はなかつたの、氣が張つてたから。さうして、お酒の氣がなくなると、考へ込んでばかしゐたもんだから、福田屋の主人も親切に云つてくれて、遊んでゐる晩でも、少しづつお酒をつけてくれたの。何だツて、――あの少し前に、一度、あたしが姉さんを靜岡へ逃がしましたの。原口と云ふ――これは鶴岡の親分に當る――人が――今ぢやア、もう、ゐない人ですが――あたしのお父アんをよく知つてゐたので、親切に姉さんをよくかくまつて置いて吳れたのですが、伊東と餘り隔たつてゐないので、うか〳〵外へも出られず、ちよい〳〵見知りのものもうろ付いてるやうだから、ぐづ〳〵してイりやア見付かるにきまつてるツて云ふ知らせが、姉さんからあたしのとこへ來たんですの。彌兵衞は丸で芝居に出る通りさ――短刀を一本、腰にぼツ込んで、のみ取りまなこで市中をぶらついてゐたのだし、兒分や兄弟分には一々お布れのやうな物をまわしたし。あたし達は相談の上、いツそのこと、廣い東京が却つて隱れ易からう。何でも、九尺二間の裏棚、裏棚と探し込んで、そこへ隱れてゐさへすりやアて、下谷の池の端に家を借りると、――殘念も、殘念も――その直ぐ二日目にかぎ付かれてしまつた、ね。』
『そりやア僕も初耳だぜ。』渠は膝をのり出させた。
『さうでしよう。』かの女は一層調子付いた、そして眞がほで、『二十人ばかりのごろ付き見たやうな奴

等がその狹い家へ遠慮なく這入り込んで來たのですもの――姉さんは、そんなことになると、から意久地が無いので、兩親と一緖に、隅ツこの方でぶる〳〵顫へてばかりゐました、わ。あたしやアそれを見ただけでも腹が立つてしまつて、そいつ等の眞ン中へ坐わり込んで、云つてやりました、ね――『女一人の爲めにさう仰々しく大の男が十人も二十人も來ないでいい！　分つた者を一人だけよこして話を付けろ！』ツて。』

『………』聽いてゐる者は、事實上、はツきりとかの女の氣質が分つて來たと思へた。『あなたは、つまり、さう云ふことをやつて見たいん、さ。』

『見たいも見たくないも、あたしにやア一生懸命でした、わ。はだしであとを追ツかけて、警察へ行き、巡査について彌兵衞の宿に行くと、ごろ付きがまだ一人、二人殘つてゐて、そんな女は連れ込んだおぼえが無いツてんですもの。あたしが姉さんにはかせて行かせたあたしのゴム草履があつたので、その證據をつきとめてやりましたの。然し、あとの祭りで、――姉さんは、直ぐ、そんな荒くれ男どもにかつがれて、また、伊東へつれて行かれましたの。あたしはまた――夜中でしよう――くやしくもあるし、それにお腹の兒に異狀が出來たやうなので、早く家まで行きつかうツて獨りで驅け出したら、途中で水ツ溜りへぶツ倒れて――それツ切り、一週間は夢中でした、わ。今思ひ出しても癪にさわるのは、その時呼んでゐた醫者ですが、この家には、もう、金が無いと見限つて――おやぢや、お

ッ母さんがその醫者に拜むやうに賴んで、一週間もしたら金は出來るから、どうか人助けと思つて見舞つて呉れいッて云つたのに、ぱッたり足を向けなかつたのですもの。直つてから、あたしやア散々惡口をつきに行きました、わ。靜岡の方から來た金で大學病院に這入り、あたしのからだは助かつたが、子供はとう／＼死んで生れました、わ。』

『全體、何人の子を生んだのだらう？』から云ひながら、渠はからだを延ばして肱まくらをした。

『みんな無事なら、三人でしよう――その次ぎに死んだのがあなたの奥さんにもお世話になつた子よ。』

五

『あたしやア、これでも』と、かの女も亦足を延ばして、こちらを向いて片手を突き、『人のやうに、さうべた／＼と誰れにでもくッ付いて來はしませんでした、わ――たとへ身は二度も自分から賣つても。男と云ふものは直ぐ「やつてやつた」などと自慢さうに吹聽するから、ね。――あなたにだツて、關係しようツて思やア何度も折はあつたのだけれど――』

『さうだ、ねえ――』としか返事の仕やうがなかつた、事實だから。

『あなたも、まだ』と、かの女は然し心もとないやうに、『鶴岡とのことを疑つてらッしやるんでしよ

う？』

『疑ふよりやア、一緒になつたと信じてゐたのだ。』

『田中屋の番頭にお聽きになればよく分ります、わ――今のてイちやんの御亭主に。つまり、かう云ふわけですの――あたしのお腹が少し目に立つやうになつたかと思ひましたので、福田樓とも相談づくで、先づ東京に出てから、廢業屆をしようツて――それには、下山のことがからんでまして、ね。』

『ぢやア、何か――僕を毎晩のやうに呼び出しに來て置きながら、僕が行くと、きツと一人別にふウちやんでなければツ云ふ風な者が來た、ね。あれが鶴岡だツたらうとあとで考へ付いたのだが、敵は本能寺にあつたのか？』

『そりやア誰れか他の人でしよう――もう、忘れてしまつたけれど。下山が熱心になつて來たのは、もツとあとのことですもの。あれには義太夫語りのあがりで七つも年うへのがありまして、ね。夫婦同樣にしてイたのでしたから、それがわざ〳〵あたしのとこへ尋ねて來て、何とか下山をあたしから遠ざける工夫をして呉れろツて賴みましたの。賴んで來る奴も奴だが、あたしだツても、その時、役場で二十圓かそこらしか取つてない者に身をまかせるつもりは少しもありませんでしたから――自分のことや人の功德が丁度一緒になつて、伊東を立ちのくことにしたところが、鶴岡さんもあす東京に行くツてんで、ぢやア、どうか一緒に行つて貰ひたいツてことにしたの。すると、汽船にもまれたせ

いか、途中であたしが動けなくなつて、熱海へ下りるツてんで、鶴岡さんも丁度ついでがあるからツて一緒に田中屋へ宿つた。その晩、田中屋の番頭がどツちの顔も知つてるので、いい加減な届けを書いて出して置いたのでしようよ――夫婦だとか、何とか。實は、然し、あたし達は別々に一室を中にして兩はじの部屋に寢ましたが。すると、どうして分つたのか、文子めが鶴岡と一緒に熱海に下りたが、遠出の届がしてないツてんで、――それにやアあたしを口說きに來てよくはね付けられた惡い巡査があつたので、――伊東の警察から熱海の警察へ電話がかかつて、無届け遠出、淫賣の件であたしに『ちよツと來い、』さ、ね。それはあくる日のことで、番頭も大變心配して鶴岡さんに相談すると、鶴岡さんは男を立てて呉れて、いいからおれと寢たと云へ、おれが引かせて東京へ連れて行くところだから、それを警察では何とも云へまいからツて。』

『けれども』と、渠は頻にまで熱をおぼえながら、『あなたは頻りに心配してゐたぢやアないか、僕が學校の歸りに――あの時はまだ僕は中學の先生もしてゐたが――はかまを着けたままで訪ねて行つても、旦那が來たら惡いから、成るべく來ないやうにして呉れろツて？』

『ありやア靜岡のこと、さ、ね、――あなたも察しが惡い。』

『さうかい！』渠はわざと眼を見張つて笑ひながら、遊んでる方の手で自分の房々とした髮のあたまを撫でた。

『そんなことを恨んでたの、ね。』斯う慰めるやうに云つて、かの女が肱まくらの上から眞ッ直ぐな視線を向けるのを、信作は受け切れなかつた。
『別に』と、口をとがらせて、『恨む、恨まないと云ふやうなわけでも無かつた、さ。』渠はちよッと眼をあたまの方にある低い窓の外に轉じてから、またかの女を見た。『それで、然し、僕の考へてたふウちやんの價うちが少しあがつたわけだ。』
『ありがたい、ね、こんなからだにも、まだ多少價うちがあれば。』
『もう、然し、つぶしの價段でなけりやア通るまい、ね。』
『それも田舍の、また田舍でなら、ねえ――あゝ、いやだ、いやだ！』かの女は組んだ兩手をあたまの下に敷き、揃へた膝を立ててあふ向けになつた。むき出しの右の肱さきがこちらへ突き出てゐる。
『子どもさへなけりやア、もう、死んぢまつた方がいい、ね。』
『まだ然し』と、渠は肱まくらで長く投げ出してゐた足をちぢめながら、『男と云ふ物も必要だらう。』
『男も一人は必要だツた、さ――靜岡の手を切る爲めにやア、ね。』足を延ばして今度はうつ伏しになり、肱を突いた兩手で、多少とがり加減のおとがひをささへ無理ににが笑ひをするやうにして、こちらを半ば斜眼に見つめた。
かの女の恰恰のいい鼻と、少し手の力で右の方へ引けた口との間に、ぽつと薄墨の線が左右に奥深

く刻まれて、渠にアイノの入れ墨美人を思ひ出させたが、同時に、この女は今、月々の役にかかつてるのだと分つた。
『月經だ、ね——今』と、渠は、右の手の人さし指で、自分の短く刈り込んだうは髯の上を横に撫でて見せ、目で以つてかの女の——人相書きで云へば、高貴のしるしだと云ふ——ほうれいのあたりを示めした。
『さうかも知れない、ね。』眼を疊に落した時、かの女の腕がぐら付いて、顏が手の上から外れかけたが、またもとの通りになつて、微笑しながら、『あなたは相變らず若い、ね、四十を一つ二つ越えたおぢイさんとはどうしても見えないよ。』
『そりやア、氣分が人と違はア、ね。』起きあがつて、またあぐらになつた。
『今度の奧さんがお若いのでしよう——?』かの女も亦斯う云つて起きあがつた。
『どうして知つてる?』
『そりやア』と、横を向いて、『有名なあなたですもの。』また向き直り、『あたしだツてどこかで分ります、わ、ね——靜岡のうちで取つてるのは、朝日と國民と讀賣と萬朝ですが、その時先づ萬朝に出ましたし、ずツとあとになつて、また朝日にも出たでしよう。』
『ぢやア、僕の今のゐどころが分つたのは』と、煙草をふかし初めた。

『ぢやア、ゆツくりしてもいいでしよう――何か御馳走します、わ。』
『おごるなら、おごつて貰はうが――僕は、けふは、急いで來たから、金を持つてゐない。』
『そんなことア――あたし、獨りでお膳に向つても、何もたべたくなかつたのですもの。――けふも、少しからだが惡いので、朝から寢てイたのですの――髮のお客が一人、二人來たが、ことわつて。何にしましよう――あなた、油ツこい物はお嫌ひ？』
『何でもいい、さ、――僕は、どうせ早い晩めしを喰つて來たのだから。』
『ぢやア、何か近いところで見て來ます、わ――で、ビール？　日本酒？』
『ビールだ、ね。』
『ぢやア、さうしましよう。』かの女は立ちあがつて、一二歩行きかけたが、またふり返つてにツこりして、首で念を押した。『少し待つてて頂戴、ね。』
『うう』と、渠も首で頷いた。そして考へたには、まさか、こちらを――曾て、かの女のお客のうちにかの女から肱鐵砲を喰つた恨みを報いる爲め、わざとかの女に酒さかなを注文させに行かせた留守に、裏手の田ン甫から逃げて行つた者があつたが、――そんな手を喰はせる者と疑つて、わざ〳〵念を押したのではあるまいと。

六

文子が外から歸つて來て、露路の中で誰れか女の人と話をする聲が聽えた。

『どうも、露路からしてむさ苦しいんで』と、はき〳〵とした明るい聲はかの女のだ、『珍らしいお客さまがあつても、如何にも見ツとも無くツて、ねえ。』

『…………。』

『それに、火事があつたら、丸で袋の鼠ぢやアありませんか？』

『…………』

やがて格子戸の明く鈴が鳴つた。また、締まる響きがした。

臺どころへ來てらしい、何かごと〳〵させてゐる。

そんな聲や音を、信作は一々身うちに滲み込ませて、あふ向けに足を延ばして手まくらの上で、天井を見ながら、聽いてゐた。きつい女でもあるが、また愛すべきところも多いのだが、と。

『あなたの好物を買つて來ましたよ。』かの女はいちぢくとビール三本とを載せた盆を持つてあがつて來て、サイダのあき殼をのせた盆のわきへ置いた。それからまた下りて行つて、ちやぶ臺を持つて來た。そして臺の上へ、いちぢくをのせようとしたのを一つ、渠は寢ころんだまま手を延ばして取つ

た。

『こりやアうまさうだ――そこのは』と、それを持つた手で後ろの方をさし示めし、『まだみんな青いやうだが――』

『まア、待つてらツしやいよ、電氣を付けますから。』かの女は兩手を浮かせて、足の力ばかりで急に立つた時、渠には、かの女の裾がふくらツ脛のところまでまくれて、何かの模樣の褪めたが、どツしりした紫ちりめんの切れツぱしが見えた。まさか、衣物を着かへた時に改めたのでもあるまいと思ふと同時に、渠はかの女が如何に利口のやうでも、まだそんなところに不調和な日常生活を見せてゐることに氣が付いた。

かの女はずツと胸をそらせて、兩手を上に延ばしたが、一向に、低いが天井近くの電燈がおろされないので、渠は起きて行つて手傳つてやつた。ふたりの胸と胸とがさわつたと思つたので、渠は下を向いて見ると、かの女は矢張り上の電燈を見てゐた。

『おれが取るから、そこをおどきよ。』斯う云つて、渠はかの女に代つた。

『情けない、ねえ、これが取れないとは――これでも男にやア負けない氣だのに！』

『すべてが舊式、さ。』はずせた電燈を膳の上に垂らしながら、『女が男そツくりを眞似しようなんて。』

『このかさも舊式だらう、ね――半分毀われてしまつて。』

『姫ごぜのお掃除の時、おほかた掃木でもぶつけたんだらうよ。』この時、渠もかの女とさし向ひに膳を隔てて坐わつてゐた。

『よく當つた、ね』と、ふき出しさうにしてから、『きのふのことですが――でも、あたしだツて、働らく時にやア働らきますよ。おととひ、いとこの家がおほ掃除だツたので、手傳ひに行つて、お尻まくり、頰かぶりで半日動きまわつたら、親戚のものが見て、姉さんか誰れだか、ちツとも分らなかつたと云つたが――』

『そんな氣象は分つてるとして、さ――』

『實は、あたし、下山とも綺麗に別れてしまひたいのですが、ね。』かの女は云ひながらこちらにビールをついだ。

渠はコツプにあふれようとした泡を一と口飮んでから、不思議さうに、

『どうして?』

『そりやア氣の毒なこともありますが、ね――一體、あたしがあの人と一緒になることになつたのも、向ふはいざ知らず、こツちぢやア惚れた膨れたのいきさつなんかぢやア無かつたのですもの。郡長や町長が仲へ這入つて、鶴岡さんとも相談の上、どうか賴むツてんだし、あたしやアまた誰れか獨りきまらなけりやア、靜岡のはらとの手がいつまでも切れないし――それにやア、あたしもからだ一

つだから、役場の書記ぐらゐが相當で、どうせ共がせぎをすればいいツて決心したのでしよう。さうしてお父アんから靜岡へさう云つてやると、主人がわざ〳〵伊東まで出て來て、下山の身もと調べをして、あんな安ツぽい人間には籍を送れないツてんですもの。』
『をかしい、ね――籍を送る、送らないよりも、先づあなたの不埒を責めなけりやアなるまい、表面だけでもまだ自分の女房となつてた以上は？』
『それが、あなた、前にもお話しした通り、あたしは對島ふみと云ふ百姓の養女ぢやないの？　あたしの家は武士の家で、自分は百姓だから、自分より身分の上のところから妻は貰へないツてんで、先づあたしを對島ツて百姓の養女にしてから、本式の妻としたのですが、めかけを入れるに就いて、あたし籍を、知らないうちに、また養家へ返してしまつたので。』
『さうだツた、ね。』
『あなたは忘れツぽいの、ね――けふの話だツて、本氣に聽いてらツしやらないんでしよう。』
『そんなことは無い、さ。』手がまたビールへ行つた。
かの女は下の音を聽きつけて立つて行つたが、やがて蒸籠の三つ重ねたのを運んで來た。
『おそばが先きへ來た、ね。』
『よからう。』

また音がした。

『はい』と、聲高に云つてから、また席を立つた。

『急がしいのツて、一緒になつて。』かの女はこれで落ち付けると思つたやうに坐わつてから、『早くすき手が一人來て吳れるといいんだけれど。』

『てんぷらだ、ね。』

『おいや――？』

『どうして〳〵』と、卽坐に仰山に答へて、渠はかの女の心盡しを成るべく心よく受けて見せる爲めに直ぐ箸を割つた。

『話あひ手があると、あたしもおいしく喰べられるでしようよ――どうも、こないだ中から食が進まないんで。』

『入らない心配までするからだらう。』

『全く、ね。』かの女は割つた箸を持つ手を輕く膳に置いて、素直にこちらを見あげた。

七

『かうして、またあなたと行き來するやうになるなら、僕も出來るだけのことはして、またもとのや

ちに、あなたの相談相ひ手にならないぢやアゐられまい、ね。』
『どうか、さうして頂戴よ。あたしやア昔からあなたを信用してゐるの。馬鹿ばなしばかりして人を笑はせるやうでも、いざツて場合にやア、締めくくりがあつて――大抵のお客なら、今晩の汽車で立つてしまうツても、なか〳〵そんな顏をしないで藝者に機嫌を取らせてゐようツて云ふところを、栗本さんは三日も前から正直に豫告してお遊びになるツて、福田屋でもみんな感心してイました、わ。それに、――それ！――あす立つからツて、そのお別れに遊びに來たりして――』
『そりやア、ふうちやんに氣があつたから、さ。』
『でも、あなたが人と違つて身のまはりをかまはないで、さツぱりしてらツしやつたのは、丁度、あたしを男にしたやう、ね。』
『その點だけで云やア、ね。』
『靜岡のと來ちやア、年寄りの癖に、見え坊で、ね。そりやア〳〵』と、眼を堅くつぶつて見せてから、
『めかけを東京、靜岡、沼津と三ケ所に、今でも、置いとくのをまで名譽にして――その癖、あたしがおやぢやおツ母さんのことを云ふと、『おりやア知らん』だから、ね。親や兄弟が喰ふか喰はずでゐるのを知つてながら、あたしやアちツとも贅澤なんかしてイたかアありません、わ。うちぢやアよ

く、金時計も買つてやつた、――衣物も買つてやつた、――親のとこへ行つて、見せて來いなんて云ひましたけれど、あたしやア親のかど口を這入る前に、必らずコートも脫き、指輪も三つはめてるものなら二つまでは拔いてしまつたものですの。何てツても、親だけはよくして置きたい、ね。自分の親を思つても吳れないやうな手賴りのない人に。あたしの氣象として、どうしてもつれ添つてたくないんですもの。あたしとしちやア、うちがめかけを入れて吳れたのが却つて仕合せだツたのですが、また別にさう云ふ次第で、下山との仲が本式の結婚が出來なくなつたでしよう。下山も亦がツかりして、さう云はれるのも尤もだ、どうせおれにやア男一人前の仕事は出來ないてツて、何をしても、あたしがゐなけりやア失敗でしよう。そのうちに、靜岡の方で子供虐待の一件が起つたんですもの。』

『そこで靜岡へまい戾つたんだらうが――』

『一と先づ下山と手を切つたことにして、ね――下山は、どうせおれのやうな貧乏人は見込みがないのだらうからツて、しこたかいや味を云ひましたが、あたしやア又靜岡に落ち付くつもりやア初めツから無かつたもんですの。第一着に、めかけを出すか、それとも子供を渡すかツて條件を出したところ、年を取つてからの子供で離せないところへ以つて來て、めかけと云ふのが惡い奴で、詳しく數へりやア二千圓にもなるでしようが、そのうち三百圓を十圓札で三十枚こツそりと簞笥の引き出しにしまつてあつたのが見付かつて、――本人は飽くまで知らないことで通さうとしましたが、――親類ども

に對しても、そいつを置いとくことが出來なくなつたのです。その叔父ツて云ふのがまた惡人で、人の子に惡名をつけて返すなら、一生よめにもやれないから、住む家と相當の金を出せツて、――あたしやアそれでもさうしてやりました、ね。すると、親類や土地のものが、あたしにあなたはもとの鞘に納つて仕合せだツて云ひますから、あたしやアそんな言葉を一々突ツ返してやつて、何が仕合せだか？　仕合せなんて、さう容易に――安値に――來るものぢやアない。一方に主人が千兩の儲けをしても、また一方にそれだけの借金があるかも知れないのが、人の運だツて。』

『然し、そりやア舊い哲學、さ、ね。』

『舊いツても、ほんとうなら仕かたがないでしよう。』

『まア、いいとして――』

『さうして、すツかり、家の整理をしてやりましたの。だらしの無かつたことと云やア、――うちの女兄弟にはみんな亭主を持たせて、關係のある會社で使つてやつて、望み通りの給料をやつてあるし、また水車をやらせてあるのもあるのに、――その女房どもたる女兄弟が入れ代り、立ち代り、米や反物の無心を云ひに來るんでしよう。一俵ぐらゐ持つてツたツて、兄さんに分りやアしないからとか、――あれに一反織つてやつたのなら、わたしにも織つて呉れろとか、――それを見のがして置きやア、つまり、みんなあたしの上にかかつて來て、計算時になつて何々が足りないが、お前は知らな

いかツて責められるのでしよう。あたしが何だか貧乏な親のとこへでもこツそり貢ぐやうに思はれて詰らないんですもの。あたしやア信用してまかせられた物なんかを、勝手に――いくら親にだツて――送つたことアないんですもの。實は、誰れ〳〵が持つて行きましたと云へば、その者が叱られるので、それがまたあたしのとこへ來て、あれ位の物を姉さんは默つてて呉れりやアいいのになんて――あたしだツて、やり切れない、わ、ね。それに段々と子宮を痛められて來たし、――そりやア、その點はひどいのだから、ね。大體の整理が付いたのをしほに、とう〳〵、丸一年半で靜岡の病院へ飛び出しましたの。』

かの女は、雄辯な話のあひま〳〵にえびの揚げたのを撰つてうまさうに喰ふその口のあたりに、油ぎつたつばが滲み出るのを氣にして、ハンケチでつつましく拭き〳〵、熱心に物語るのではあるけれども、信作には聽かせられない方がいいこともあるやうな、いやな氣がして、渠は眼をビールの瓶に轉じた。そしてそれを右の手に握つて、

『まア、一杯つぎますよ。』

『…………』かの女は箸を持つたまま、左りの手の親ゆびと高ゆびとで、自分の明いたコップの下の方を輕く觸れて、こちらがそのコップの中へビールを傾むけるのを見ながら、『すまない、わ、ね、あなたにお酌をさせて。』

『これも久し振りだア、ね。』
『全く、ね。』またこちらを見て、『もとの奥さんだツて、いい奥さんでしたが、ねえ、あなたの。』
『無論、僕は』と、笑ひもせずに、『子宮を痛められなどはしなかつた、さ。』
『…………』かの女は少しうは向きになつて引いてゐたビールを、『うツ』と喉につまらせかけた。わざと眼を一二度白くろさせて、右の手で帶よりも上の方を叩きながら、『あ、苦しかつた！』

八

『で、病院に這入つてから、子供を呼び寄せて、それと無く、お前はおツかちやんがゐる方がいいか、ゐない方がいいかツて聽いて見たら――不思議さうにここで聲にまで力を入れて、「ゐない方がいいツてんですもの！「おツかちやんがゐると、おとツちやんが何も買つて來て吳れない」が、ゐないと、よく可愛がつて吳れるツて。あたしがゐちやア、うちでは安心して、子供のことに限らず、何でもあたしにまかツせ切りですから、ね――何度別なのを入れて見ても、お前のやうに信用の置けるものは無いからツて。あたしやア、然し、ただうちのものや親類どもからまつり上げられて、床の間の置き物になつてるのアいやですとも！――「かアちやんもゐない方がいいツ」て思ふから、この病氣が直り次第、またどこかへ行つてるから、ね」ツて――あたしやア、子供に「おとツちやんが千兩のお

金を見せて、これもあとぢやアお前の物だなど云つて聽かせても、決していい氣になつて喜ぶな、――いつも云つて聽かせた通り、お前の身に着くものは、ただおとツちやんにさせて貰ふ學問だけだよ」と、よく敎へて置きましたの。割り合によく分る子で、不斷でも、貰つた金を――「もツたいない」ツて、――溜めて置いて、二圓なり三圓なりになると、おツかちやんにあげよう、あげようツて。「おツかちやんは別に持つてるから」ツても、聽かないで、「僕も亦おとアちやんに貰ふからいい」ツて。「おツかちやんはゐどころさへ知らせて吳れたらいい、中學へ行くやうになれば度々行けるから」ツて。もう、來年ですの。――「ぢやア、何でも僕は勉强すればいいんだ、ねえ」ツて。』

かの女の立てつづけの雄辯を聽いてゐて、信作はうツかりと『ほととぎす』劇を見せられた時のやうな、安ツぽい淚が浮びかけたのを、かの女には見せたくなかつたので、醉ひごこちのからだを膳から離してあぐらをかき、まぎらかしに、マチの箱から取り出した一本のマチの首をちぎつた。

『…………』

『あ、持つて來ます　かの女はいそいで下に行つて、楊子の小箱とお茶とを持つて來てから、『子供は可哀さうですが、あんな面倒臭い家に二度とゐ坐わる氣はなかつたですもの――籍だツて、めかけを出すと直ぐまた入れようと云ふのをあたしが反對してそのままにして置いたのですから。』

『長くわづらつてたのか、ね？』

『…………』こちらをじツと見ながら、『丁度病院で半年ばかし――うちぢやア、あたしが獨りでゐる以上、米一俵はかかすまいし、また相當に見てやるツて、入院中も毎月百五十圓や二百圓は送つて來ました。何だツて、新聞記者なども、入れかはり立ち代り、毎日のやうに見舞ひがてら遊びに來たんですもの――そのうち、少し加減もよくなつたので、病院も贅澤過ぎるツて、興津に小さい家を一軒借りることにして、看護婦と女中と三人で暫らく保養してゐたのですが――』

『さうやつてゐられたのなら、何もまた例の癖でやき〳〵し出さなくツてもよかつたのに。』

『さうは行きません、さ。姉さんの方ぢやア、逃げるなら、受け出してやつた時の恩返しに、『腕一本なり、脛一本なり置いてけ』ツて云ふ彌兵衛が、脅喝で牢へ這入つてから、やツとのこと伊東を兩親と一緒に逃げ出して、まご〳〵してゐたんですもの。その入費と云やア、みんなあたしのやり繰りさんだんでしよう。さうして、靜岡や東京ぢやア、とても、また駄目だからツて、ずツと飛んで、大阪へ行かせましたが、そこへまた下山が――あたしの興津にゐるのを聽き込んで――訪ねて來たぢやアありませんか？』

『なるほど』と、右手に楊子を持つたまま、左りの肱を疊に突いて横になり、多少醉ひと滿腹との壓迫に堪へながら、『それが二度目の人の三度目のより戻りだ、ね。』

『あたしやア困つた、なツて思つたから、一度は隱れました、さ。――まア、こんな明き瓶や明きが

らはわきへ片づけて置きましよう、ね。』かの女は、まだ一つ蒸籠がそのままに殘つてる膳と、ビールやサイダの明きを載せた盆とを、楊子を喰はへて、次ぎの室へ運び出しながら、『人間て云ふものア勝手なもの、さ、ね――喰べたいツて取つた物でも、お腹が十分になると、見るのもいやだ、ね。』

『それに、僕はめしを喰つて出て來たのだから。』

『まア、つき合つて貰つて、あたしやア仕合せ、さ』と、煙草盆を仲にして、信作の横になつてるのとさし向ひに膝を向けて坐わつて、『久し振りでおいしくツて――赤いでしよう？』

『…………』渠は、かの女が笑ひながら兩手でその頰を押さへて突き出した顏に下齒の前齒の金齒が一つ光つたのを見た。『僕も赤いだらう？』

『眞ツ赤よ、どこかの火事のやうに。』かの女は顏から離した右の手を疊の上に突いて、からだをその方にかたむけて、『お互ひに弱いの、ね――昔から見りやア、ビールの二本や三本、ちよツと人のあがりがまちでお茶を御馳走になつたやうなものだツたのに。』

『それだけ、ふウちやんにも』と、この呼び方に一段おもたいやうな感じが添つて來た、『不平がなくなつたのだらうよ。』

『不平は澤山ありますとも。――でも、あたしやア、もう、どうなつても構はない、親と姉さんと子供の爲めにならば。』

『まだあると云ふのに』と、渠はかの女を疊の上からからかふやうな――さなくば又、滿腹の上にもなほ不足を感じしめるからだ中の強い要求を遠ざけようとするやうな、――氣分になつた。『下山君と云ふ物が！』

『ありやア』と、かの女は顏をしがめたが、直ぐまた微笑になつて、『今度また一緒に住まうツてんなら自分の喰ひぶちだけはこツちへ出さないといけないツてツてあるんですの。云つて見りやア、下宿人を置いてやるやうに。』

『それでも、昔の髮結の亭主がはしごを賣り歩いたのよりやアましかも知れない。』云過ぎたかとも思つたが、渠は自分の熱して來た氣分をこんなことでまぎらせようとしたのであつた。

『もう、亭主でなくツていいの、さ。』かの女は、こちらの樣子を知つてか、知らないでか、ずるずると足を延ばして、渠と同じ方向へさし向ひの横倒れになつた。そしてたツぷりある髮の毛をつがねたその右の鬢づらへ、疊から立てた右の手をかまはず當てがつて、『この家だツて、下山の親戚の所有だから這入れツて云つときながら、みんなこツちで工面しなけりやアならないんですもの――おまけにこんな見ツともない家が十二圓ですよ。』

『そりやア高い！』渠は、横になつてだらけてゐては、とてもささへ切れさうでない藻がきを引き拔くやうに、突然からだを起した。そして煙草とマチを取りながら、われから苦い顏を微笑にまぎらせ

て、『僕の家だツて、さうして見れば、——もツとも、目白の郊外だからずツと割り合が安いのであらうが——ここの家賃とそこ〳〵だ。』

『あなただツて、さうお思ひでしよう。』かの女も起きて、自分の長いきせるを手にした。が、すはうとするでもなかつた。

かの女の膝さきは以前よりも信作の方へ近づいてゐた。

九

『下山にはあたしやア早く誰れかを細君に持つて呉れいツても、どうせおれのやうな者に來て呉れる女は無いツて、あたしばかりを手賴りにしてゐるんでしよう。それに、あれはあたしのお父アんやおア母さんを一生世話してやるツてんで、大阪の方にやア可愛がられてゐて、ね——あたしはどうせよそへ養女に行つてますので、下山にもとの、魚河岸の家をつがせたいなんて、年寄りどもは云つてるんですもの。』

『下だらない空想、さ。』

『あたしやア何でもかまはない——獨りになりさへすりやア、かみいでも、お稽古でもして、氣樂に暮して行けるんだから。さうして子供の一人前になるのを見さへすりやア、もう、死んぢまつてもい

いんで――あたしやア子供に世話にならうなんて思つてないんですから、ね。』

『いい心がけ、さ。』坐わつてゐても持ち切れないので、また、渠は横になつた。『あたしもその後暫らく姉さんの方へ行つてましたが――姉さんから親に至るまでがあたしを下にも置かないツて云ふやうな取り扱ひでしよう。妹が外へ出るのに、姉が下駄の世話まで燒いて『あれかい、これかい』ツて云ふんで、見ツともないから、よして頂戴』ツて云はないぢやアゐられなくなります、わ。こツちは少しも意張つてもしないのに、『あなたにうちのふウちやんツて、一體、どうしたお方です』と、みんなが不思議がりました。それにあたしにやア大阪のにちやにちやした言葉や氣象がいやで、いやでたまらないんで、早く東京へ出たい、出たいと思つてましたとこへ、彌兵衞が死んだことが分つたでしよう。ぢやア、あたしが先づ瀨踏みをして來るからツて、九十何圓かで買つた金時計を――まだ婦人會へ二度ばかりつけて行つただけで――たツた四十圓で質に入れて、出て來ましたのは先々月ですもの。』

『どうして、もツと早く知らせて來なかつたのだらう？』

『もとのところなら覺えてもゐますが、どうせ聽きに行つても分るまいツて思つて――』自分自身を輕蔑したやうに、かの女はこちらを盜み見て、少し小さい聲で身をすくめながら、『あたし、秀才文壇ツてのを讀んでゐましたよ――あツちで。』

『僕にやア別に關係のない雜誌だが――』

『でも、時々何か出てましたわ。』かの女も亦、再びからだを倒して、橫になつた。そしてそのちぢこめた膝のさきは、信作の橫たへてゐる膝と一層近くなつた。

渠は自分の肱を突いてゐた手を倒して、それを枕にしたが、女のあツたかい息が煙草盆を越えてにほつて來るやうに思はれたので、この上、自分の足でも膝でもを、ちよツとでも、動かすのは自分の心のそそりを大きくするばかりだと見て、ただじツとしてゐた。そして自分ののぼせ氣味がかの女の顏いろにも見える氣がした。

かの女は、默つてこちらの話を待ち受けてるやうであつた。

渠は然し言葉が出ないで、ただかの女のこちらに向けるやわらかな視線を自分でも眼で受けてゐた。そして、それまでにも勃發しようとしたのを抑さへてゐた心が、私かに手を出して見ようか？少くとも、もと〳〵通り接吻だけは、飛び付きさへすれば、許されようにと考へた。

が、また自分の心の一部からは、秋の流れのやうに澄んだ考へが出て來た。自分が新らしい妻に對して――道德上よりも、寧ろ利害上――飽くまで潔白を要求するこちらの正當な純粹權利を、今まで、無事に維持して來たのを、このあり振れたおきやん生活をして來た舊知の爲めに破られたくないのだが、――向ふも亦、弱いながらに、同じ精神があらう。女としては、あんなに苦しい中を、割り合に

淸く通り拔けて來たものを――たとへ正式の亭主はないにせよ、今更ら、この自分の爲めにも、また他の人の爲めにも、溝どろを塗り付けさせたくは無い、と云ふあはれみの情がこちらに起つた。
『で――つまり――あなたは――』と、われながら、心熱と共に、胸一杯になつた恐れと遠慮との爲めに、自分の聲が顫えて、低く、沈み勝ちになつたのをおぼえたが、その次ぎに何を云ひ出すと云ふ用意が無かつたので、高い家賃のことに持つて行つて、『長く――ここにゐる〱つもり――ですか？』
『それもあなたと相談して見たかつたのよ。』かの女も聲の調子が違つたやうにこちらには思はれたが、かの女はまたからだを起して、ちよツと姿勢を正しくして見せた。
『相談ツて？』渠も起きて、今度は眞ツ直ぐに坐わつた。
『彌兵衛にやア、もう、ながねんの心配は拔けましたが、あたしやアまだ靜岡の人にやア隱れてゐますんですよ――子供や婆アやからは、時々內證で物を送つて來ますが。』
『どうしてです？』
『ゐどころが分りやア、直ぐやつて來るんですもの――金にやア困らないとしても、また病氣になりたかアありませんから、――ね――たださへ腦が惡いのに、醫師の言葉ぢやア、それも子宮から來てゐるツて。』
『下だらない心配も手傳つてゐますとも。』

『そりやア、全くよ。』しみ〴〵尤もだと云ふうなづきをして、『この商買だツて、あたしの名は出せないので、下山の姉さんの名を借りましたんですが、もう、年が五十で、あたしとア十五六歳も違ふんですから、巡査でも調べに來たら、直ぐ怪しまれます、わ、ね。』
『本名を出したツて、——藝者の屆けぢやアあるまいし、——かみい位のことで本籍へかけ合ふことアあるまいて。よしんば、また、かけ合つても、前に藝者をするのをさへ故障云はなかつたのだから、今度も邪魔されるやうなことはあるまい、ね。』
『でも』と、笑ひながら、口をとがらせて、首で念を押し、『やつて來ますよ。』
『なアに』と、事もなげに、『やつて來た時は、やつて來た時、さ——あなたの心一つ、さ。』
『それもさう、ね。』ちよツと下を向いたが、直ぐ顏をあげて、『さうすりやア、あとは下山だけのことですが、あれをどツかへ周旋して貰へないでしようか？ 今別れの問題を云ひ出すと、如何にもあたしが向ふの困つてるのを見限つたやうになつて、ね——それに、下山もこツちがまた見棄てるか、見棄てるかと思つてばかしゐるので、時々をどし文句じみたことを云つて——お前の爲めにやア、兎も角も、家まで賣り拂つたのだから、棄てられちやア、ただぢやア置かないなんて。いくらでも給料が取れるやうになれば、また偶にやア遊んで見たくもなるのが分つてますから、その時をしほに、あたしは綺麗に手を切りたいのですの。』

『そんなことを云つてちやア』と、渠の沈んでゐた反動に今度は全く卑しみの口調となり、『一生切れる時は來さうではない。若しあなたが下山君にも別れるのが本心なら、身を隱すのは靜岡の人からりやア先づ下山からが順序でしよう。進んで云やア、親にも姉さんにも隱れた方があなたの爲めだが――あなたにさへ金が送れないやうなら、どうせあなたの親の方へだツてことわりやら申しわけやらをばかり云つてるに相違ない、さ。年寄りなんかは子供同樣の馬鹿になつてるものだから、それを信用して、もう、結局、その申しわけを實物の金を貰つたやうにありがたがつてるんだ。』

『さう云はれると、一言もないが、ね。そしてあたしも、下山が一緒にゐなけりやア、靜岡が來ても小さくなつてるにやア及ばないんですが――』

『靜岡の方は、あなたに本式に口を出す權利がないと僕は思ふ、ね――その主人のうちに籍があるのぢやアないから。』

『それに、このままだツて、もう今年中だけでしようよ――どうせあたしがゐなけりやア、どれか、めかけを入れるでしようから。――あたしやア、もう、つくづく男はいやになつたんですもの。』

『…………』渠はかの女の最後の文句を聽いて、またかの女があふ向けになつた時の姿を思ひ浮べさせられた。突然に立ちあがつて、然しそれとは感づかれないふりで、『もう遲くなつたやうだから。』おもてには斯う云つて、渠はからだ中にもがいてる心に云ひ含めた。氣をよわくしてゐれば、いつまで

も歸る時があるまいから、と。

『まだいいんぢやアないの？』かの女はあわてて、心配さうな顏になり、突ツ立つてるこちらを見あげながら、『電車はまだ御坐いますよ――何かお氣にさわつたことがあつて？』

『また來ます』と云ひながら、渠は不器用に衣物の襟を整へた。そして誤解でもされると困るからと思つて、しやれたつもりで、『あんまりいい氣になつてると、鼻毛でも拔かれるだらうから。』

『御冗談を、あなたに限つちやア、そんなことは――』氣取つた口調で云つて、かの女も安心したやうに立ちあがつた。そしてこちらに先きんじてこちの羽織をおろし、『立て絽、ね』と云ひながら、後ろから着せかけたが、こちらには自分ながらそれを背に受ける調子がしツくり行かなかつた。

『僕は惡魔のやうな忠告をあなたにしましたが、ね』と、何げなくかの女に向いて、羽織の白い紐を結びながら、『あなたはまだ、一時のがれや下だらない義理の爲めに、どツちかの人に迷つてるやうですから、今晩よく考へて御覽なさい。』

『ええ、考へて見ます、わ。』かの女はこちらの正面に立つて、微笑を向けてゐた。かの女の素直にからだを曲げた立ち姿には、苦勞人が愛を籠めたと思はせるやうな曲線がよぢ登つてゐた。そして電燈のかさの蔭がさして、かの女の腰から上全體に、こちらがかの女の口のあたりに見た薄墨いろを廣げてゐた。

『さうして、なほあなたが下山君を本心から戀しかつたら――』

『そんなことア、もう』と、からだをあまへるやうに振つた。

『それでも、まだあなたにやア自分の心が根底まで分つてゐないのですよ――で、改めて今度は無條件で呼び寄せてやり、靜岡があなたを床の間の置き物としようとしたやうに、今度はあなたが下山君を立派に亭主と立て祭る、さ。』

『冗談は置いて、さ。』少し身をあとずさりさせて、『もツと安いとこへ轉宅しなけりやアならないでしよう？』

『そりやア、今晩考へた上のことだらう、ね――ここで看板をあげたのさへ、聽いて見りやア、大して標準が立つてゐなかつたのでしよう。さう何度もかはつてゐちやア、とても、落ち付いて獨立の商買なんか出來る筈はないです。』

『あたし、――でも、今度こそ獨立して綺麗に暮して行きたいのよ。男なんてつくづくいやになつたんですもの！　そして見込みが立つたら、親や姉さんを呼んで、姉さんにこツちで淸元の師匠をさせてやりたいのです、わ。』

『ぢやア、大阪で今やつてるんだ、ね？』渠はじツとかの女の顏を見おろした。『ええ。』かの女もこちらを見あげながら、割り合ひにお白粉燒けの見えない首をうなづかせた。

どうせ持ち主のなくなるものなら、ここに最後の耻辱を犯して、せめてかの女の首にでも抱き付いてやらうかと思ふ感じが、渠の神經をゆるく廣げて、室内がその熱ある瞬間をうす暗くしたやうに見えた。

一〇

『これツ切り訪問はすまいか――近頃の自分をかき亂したくない爲め――また、かの女の感心な決心を破りたくはない爲め――？』専らこんなことを考へ込みながら、信作は自分のあたまから胸にまでも一つの新らしい苦痛を浴びせられて、かの女のうめばち屋を辭した。が、自分の正確な番地を聽かれて告げないわけにはいかなかつた。

『待つて頂戴よ――そこまで送つてきますから』と云つて、かの女も、急いで白足袋をはき、空氣草履を引ツかけて、あとに附いて來た。『いいお月夜、ね！』

かの女の聲も澄んで、露地ぢうに響き渡つたやうに思はれた。

『…………』良家と自稱するうちの生娘や、いやに世間の評判をおそろしがる奥さま連とは違ひ、苦勞人ツ氣のあるこの女は、以前から、男の來客を平氣で受け、また自慢さうにおほびらであたり近處を連れて歩いたものだ。

『あたし、ね、栗本さん』と、ちよこ〳〵追ッ付くやうにしながら、『少しお金が出來たら、もッと義太夫も稽古して見たいんですの〜五圓ばかし費つて、やツと一ケ月で梅忠一段を本式に仕込んで來たばかしですから。なか〳〵上げさせて呉れないもの、ね。おッ母さんや姉さんは、まだ病氣が直らないんだから、お稽古であたまを使つちやアよくないツてんですが、あたしやア好きなことをやつてりやアその間は苦勞も無く、またからだの加減もいいんですの。義太夫だけは、さすが大阪に限ります、ね——言葉のなまりだツて、しツくり合つてますから、ね——それに、あたし、お花も——これは靜岡で、隨分有名な師匠を呼んで中まで取つてますが、まだ奧ゆるしがないので。かねさへ出せば直ぐにも渡すツてんですけれども、あたしやアそんな——他の人のやうに——輕薄な、云はば實のない、許しなんか取りたかアないんですもの。』

『…………』つぶしにしても貴とい値うちだと、渠はいつのまにか涙を呑んでゐた。低く顫えた聲で、『さうです——その——心持ちで——何をでも——飽くまでおやんなさい。』

『惡魔と飽くまでと——？』

『…………』答へはしなかつたが、渠はかの女の言葉が自分の今夜の言葉じりを二つ合はせて見た洒落だとは分つた。

暫らく話は絶えて、かの女のただ歩いてゐるゴム草履の音がぺた〳〵と後ろから聽えてゐた。

『あ、しまつた、ねえ――』かの女は道ばたの水溜りへ左りの足を半ば突ッ込んだのであつた。『あんまり、あなたの足が早いから。』

　これを見た信作は、あと戻りをした。自分のハンケチをたもとから出し、われ知らず自分をかの女の支へにしてやらうとして、『おつかまんなさい――拭いてあげます。』

『見ッともない、わ!』かの女は顫えながらあとずさりをして、こちらをじッと見詰めて、子供が『いやいや』をする如く首やからだを左右に振つたやうに見えた。

『………』渠は默つてまたさきへ進んだ。

『もう一つ、あなたにお話ししようッて思つて忘れてましたが、ねえ、あなた、――まだお目にやアかかりませんが、――奥さんに御相談なすつたら、どう? こッちででも、もう、あたしア寶石入りのゆび輪をふたアつ、七つ屋へやつてありますの。兩方で七拾圓ばかしの物を、繻紾の帯や小紋と一緒にたツた六十圓で――大阪と下山の爲めに。どうせ假りに人の倉へ預けたのだと思つてりやア、おかねさへ出來たら取つて來られますが――あたしにやア當分見込みがないから、もう、これも流れる期限が來るでしよう。流すのも業腹ぢやアないの? あなたのお手にでも渡つたら、せめて未練もなくなるだらうッて、ゆふべ、あたし、寢てイて、ふいと考へ付きましたの。御相談なすつて見たら、どう――どうせあたしの權利は全く拋棄しますから?』

『さう、ね。』ふり向きはしないで、進みながら、『相談して見てもよう御坐いますが――衣物の方は、人の着たのは嫌ふでしようよ――いつかもそんなことがあつて、斷わつたやうだから。』

『ゆび輪だツて、惜しいぢやアないの――？』

『まア、――出來れば――その方でしようよ。』

ふたりは橋の上へ來てゐた。そこから、川しもを見渡すと、渠が先刻、まだ明るいうちに、ここを通つた時にどこ行きかの汽車が轟々過ぎるのを見たその鐵橋のあたりまでが、水も蘆も皆きら／＼と輝いて、涼しい風がその上を軌道外れに走つてる。

『いい月、ね！』かの女の、何もかも忘れたやうなこの叫びが高い空へ聽えて行つて、天空は雲も無く眞ツ青に澄んでゐた。

かの女はうへを見てゐるが、渠には、かの女が足袋の濡れた左りの足の方の褄を、氣味惡さうにだがそツと――渠がかの女の出の姿を伊東のゆふ立ちあがりの石ころ道に見た時のやうに、――上手に取つてるのが見えた。

『…………』どうしてもこのまま別れかねるやうな氣持ちが、むら／＼と、渠の胸には一度則に込みあがつてゐた。

――（大正九年三月）――

津田三藏

『さう、ね。』ふり向きはしないで、進みながら、『相談して見てもよう御坐いますが――衣物の方は、人の着たのは嫌ふでしようよ――いつかもそんなことがあつて、斷わつたやうだから。』
『ゆび輪だツて、惜しいぢやアないの――?』
『まア、――出來れば――その方でしようよ。』
　ふたりは橋の上へ來てゐた。そこから、川しもを見渡すと、渠が先刻、まだ明るいうちに、ここを通つた時にどこ行きかの汽車が轟々と過ぎるのを見たその鐵橋のあたりまでが、水も蘆も皆きらきらと輝いて、涼しい風がその上を軌道外れに走つてる。
『いい月、ね!』かの女の、何もかも忘れたやうなこの叫びが高い空へ聽えて行つて、天空は雲も無く眞ツ青に澄んでゐた。
　かの女はうへを見てゐるが、渠には、かの女が足袋の濡れた左りの足の方の褄を、氣味惡さうにだがそツと――渠がかの女の出の姿を伊東のゆふ立ちあがりの石ころ道に見た時のやうに、――上手に取つてるのが見えた。
『…………』どうしてもこのまま別れかねるやうな氣持ちが、むらむらと、渠の胸には一度則に込みあがつてゐた。

――(大正九年二月)――

津田三藏

ありがたいことには、僕（作者曰く、もと滋賀縣巡査を勤めてゐた者）も近頃やツと勳章を頂戴したが、曾て僕の同僚としての一友人であつた某のやうな勳章氣違ひになりたくないと思つてゐる。

某と云ふ友人は、その生活に近江八景と勳七等としか無かつたのだ。あいつが現に軍籍に在つた時は、近江人以外のものをつかまへると直ぐ八景の自慢をやつたさうで、一緒に軍隊を出た者の話によると、あいつのことは八景狂の名で通つてゐた。

『おい、八景』と呼ぶと、渠は同國人の僕等にでも喜んでこちらをふり向いた。そして勳章を貰つてからは渠の自慢がまた一つふえたわけ、さ。まさか便所にまでも着けて行つたかどうだかは分らないが、巡査の制服である時は、どこまでもそれを胸から取り離さなかつた。

『おい、勳章』と云ふ呼び名が今度は僕等の仲間中に廣がつた。『君は赤痢があつても、虎列刺があつても、その檢視にまで勳章をつけて行くけれど、な、却つてよごれる心配はないかい？』

『…………』渠は斯う冗談半分に云はれた時、きツとなつた。署長にでも呼びつけられた時のやうに、

揃へた靴のさきと一直線になるほど胸を反らして、生眞面目な顔つきをして、答へた『僕はいつ死ぬか分らん。いのちのある間は、勳章拜授の名譽を樂しむのぢや。』

その時の燃えるやうな眼つきを僕は今でも思ひ出せる。

それが、どうしたはづみか、あんなことを仕出かして、無期徒刑となつた。日本中が上を下へと煮えくり返り、大津へわが國の貴顯もわざ〳〵お見舞ひに御座る。地方裁判所に大審院の臨時法廷が開らかれる。院長と大臣とが眞ツ赤になつて衝突する。有名な辯護士や新聞記者はあらゆる地方から押し寄せる。知事、警部長、並に大津、守山兩警察署長は、免職となる。その署長の一人は、帽子を忘れて、制服に禿げ頭を露はして車を飛ばす。そしてその時のことは、或外國では、小學校の教科書にまで書き載せられたと云ふではないか？

『〇〇事件！』友人には、勳章と共に、琵琶湖や八景がどこまでも祟つたらしい。國粹の保存の說が盛んで、種々の方面で、如何にそれが爆發した時代だとは云へ、また伊勢の大廟に不敬を加へたとて、或大臣を刺し殺した者があつたり、某國講和使を狙擊して、その頭腦をエキス光線の試驗物にさせた者があつたりした時代だとは云へ、――友人が大津署の應援に出るその初めから外國の一大貴賓を切り殺さうと考へてゐたとは、僕には今でも思へない。

然し渠は謀殺犯に問はれたのだ。そして共犯者がありはしないかと云ふ疑ひを受けて、家宅搜索ま

でやられた。無論そんなものは無かつた。若し多少でもそれに似た嫌疑を受けるべき者があつたとすれば、恐らく僕であつただらう。『おい、勳章、今度わが國へ來遊したと云ふ貴賓を若しやッ付けた者があるとすると、どうぢやア、法律上何の罪に當るだらう』と、渠に言つたのは僕であつた。署の休憩室でだ。

『分らんぞ。』湯飲みの茶を飲みかけてゐた渠は、直ぐさま斯う答へた。渠も機敏なことには、もう、研究して見たらしい。

『殺人犯には相違ないが――條文がない。』

『わが國の貴顯に對する罪でもあるまいし――』

『うん、權藤（僕等と同じ署の巡査であつた）とも、ゆふべ、研究して見たが、なア、ただの殺人でも無からうし――外國人と云ふても、貴顯のお方だから、なア。』

『貴顯に對する罪に準ずるかい？』

『さうでもせにやなるまい、なア、ただの殺人犯ですませて置けば、ひよッとすると、無學なものはわが貴顯に對しても矢張り罪が輕い物ぢやと思はんでもなからう。』

こんなことを僕等はさきを爭つて考へ合つた。琵琶湖の東、守山と云ふ處の警察署では、僕等同僚はその頃法律研究に熱心であつた。いろんな問題を考へ出しては、皆でいろんな解決を着けて見た

が、空想から空想をたくましくして、僕等の狹い智識で思ひつけるだけの場合を盡してしまつた時に、突然外國の貴賓が東上の途すがら、琵琶湖見物に立ち寄ると云ふ新聞が僕等の研究の新材料を提供したのであつた。

兇行後の友人に對しては、國論は一般にわが貴顯に對する罪を以つてしたらいけないと云ふに歸し、とう／＼その説が勝利を得たのだが、友人その人はその兇行前に於て却つて無邪氣な貴顯説であつたのだ。

『………』といつ話せない、なア、と僕は思つた。僕が貴顯に對する罪に準ずるかと云つたのは、實は、ただ渠の意見を先づ糺いて見ようとしただけだ。この點に於ては、僕の考へに先見があつて、後日の國論に一致してゐたのだが、僕の感情は――今から思へば、おそろしいほど――空想に驅られてゐた。僕の先見と僕の空想とが、また、唯一致してゐたのだ。西野……來島……小山……僕だツてまだ足手まといの妻子も無い一靑年だ――今回來るのは、貴賓だと云つても、わが國のでは無く、また某々大臣とも違つて、全くの外國人だ。やつ付けたツて、もと／＼一箇の殺人犯で――自分のいのちだけを覺悟の前なら、わが國民の最も憎い敵に對する恨みを晴らすにはいい機會だとやうに、僕は私かに思ひ入つてゐた。が、

『僕も同感ぢや』と、この時友人に贊成するやうに云つてのけてしまつたのは、署長がまた茶を飮み

に還入つて來たからであつた。

『署長はん。』友人は無邪氣にあまへるやうなゆるみを帶びて云つた、『かう云ふ問題が出てるのですが、な――』簡單にだが、要領を得た筋を並べてから、貴顯に對する罪に準ずる說に贊成の意が述べられた。

『そりや、君』と、署長はひやかしのつもりで答へた、『君の近江八景と勳章とに面じてなら――』

『いや、署長！』友人はつツと立ちあがつた、そしてまた例の直立の姿勢になり、害意はないが、十分の抗議を、不斷でも靑い瘦せぎすの顏色に示めして、『勳章は僕のいのちです！わが天皇陛下の臣民としては、貴顯が同等にお付き合ひになるお方をわが貴顯と同等に見做すべきではありませんか？』

『は、は、は、は！』僕はどツち付かずに笑つてゐた。

『そりやさうぢや。』署長は興さめた樣子をした。そしてわざと落着いて熱い茶を吹きながら飮んだが、飮んでしまうと直ぐ、默つて向ふへ行つてしまつた。

『署長はええ人ぢやけれど、時々あないな不眞面目云ふていかん！』

『けれど、なア』と、僕も眞面目になつて、『如何に同等につき合ふてても、敵は敵やで。』この言葉も、亦、渠の意味でとは別で、當の硏究問題には外れてゐたのだ。

『阿呆云ふな！』渠はまだむツつりしてゐて、僕を叱り付けるやうに云つた。この時は、然し、渠も

腰かけに坐わり直つてゐた。『われ〳〵からそんなこと云ふて、若し萬一人民のうちから實際に手を下だすものがあつたら、どうする？』

『無論、これはうち輪ばなしぢやが、な、今日のやうに政府の外交軟弱や恐外病やに對して國民が憤慨してる時ぢやで、何か事件が起らんとも限りやへん。』

『無論』と、渠はもとの通りうち解けて來て、『そんな時のわれ〳〵ぢや――巡査かて、なか〳〵責任はおもい。』

『いよ〳〵、あすぢやで、なア――』

『また照りつけられるで』と、渠は微笑した。これは僕等が事件のある度毎に大津へ應援に行くことの符牒であつた。と云ふのは、大津警察署の署長はあたまが殆どつる禿げに禿げてゐたので、ランプ――まだ電燈はなかつたので――と呼ばれた。そして僕等がその人の前に立つと、何となくおも〳〵しい威光に打たれてまばゆかつた。が、この人だ、いよいよ事件がおツぱじまつた後、帽子を忘れて、無帽のまま車を飛ばしたのは。

明治〇十年〇月〇〇日が、乃ち、某國の小學教科書にもわざ〳〵書き入れられたと云ふ日だ。僕等はその朝大津署の巡査と共に、一同、禿げ署長の前に立ち並んで、おも〳〵しい訓授を受けた。――『われ〳〵に取つて、これほど責任のおもい日はない。否、畏れ多くも上御一人を初め奉り、下はわ

れわれに取つて、これほど責任のおもい日はない。わが歷史に於ても、亦、最も記念すべき日で——一國の主權者を除いては、その一國中で一番に位するお方が、外國からわが國へ御來遊あるのは、珍らしいことである。』

何でもその初めは斯う云ふのであつたが、これに感泣してすすり上げたものがあるので、僕はその方をふり向いて見たら、友人であつた。

『…………』馬鹿だ、なアと、僕は心のうちで下げすんでやつた。

『ところが』と、訓授はまだ續いた、『この頃のやうに物騷では、人民に油斷はならぬ——』

『…………』人民ばかりではない、巡査の中にもと、僕は云つてやりたかつたが、これは僕自身の當時の意氣込みをさしてゐたので——すすり泣きをするやうな友人などは僕の眼中になかつた。

『政府ではその國を最も尊敬してをるけれども、國民のうちには思ひ違ひをして、かたきのやうに見做すものがあつて、或は今回のお方の御來遊を機として、失禮なことを仕出かすものが無きにしもあらずと云ふ風說まで廣がつてをる時ぢやに依つて、われ〳〵はいつもとは違うて、餘はどの警戒を加へねばならぬ。殊に、そのお方ばかりでなく、その御親類國の、矢張り同じやうなお位のお方がまた一緒に御坐るのぢやによつて、——』

『…………』くどい〳〵と、僕は叫んでやりたかつた。どこの貴賓だツて、わが國のでない以上は、

馬の骨も同様だ——法律研究上の議論では、それを殺しても、ただの殺人犯に過ぎない、と。
なほ懇々と說いて盡きない老署長のくり言を一心不亂に聞いて感服してゐるのは、多くの巡査のうちで、恐らく友人ばかりであつたらうとまで、僕には見えた。

長い訓授がやツと終はると、僕等の出發にはまだ少し時間があつた。皆は思ひ〳〵に別れて、今まで整列してゐた警察の庭を歩いてゐるものもあつたし、また板塀のそばの炭俵に腰をかけるものもあつた。

『ここの署長は相變らずえらいで、な——』友人は斯う云つて、僕が皆とはかけ離れて、塀のつツかへ棒にもたれてゐたところへやつて來た。『あれだけ上手にしやべれたら、政談演說でもでける。』

『誰れだツて、あれ位のことならしやべるだろ、さ。』巡査なんて、どいつも、こいつも、碌でなしの無見識ばかりであつた。僕は、兎角、なほきのふからの研究若しくは空想の續きに思ひ沈んでゐるのであつた。

『さア、來い！』半ば氣合ひの這入つたこの聲を聽いた一瞬間に、僕は僕自身が外國の貴賓で、それを而も僕自身が眞ツ二つにあたまの上からやツつけた妄想を浮べてゐた。ふと見ると、友人が、これも守山から來た同僚の一人に、天秤棒を突き付けてゐた。

渠がこの場合に無邪氣さうに棒押しなどしたのは、謀殺の目的を達する時機の近づく喜びをわざと

押し隱してゐる爲めであつたと云ふやうな說は、正當な法律研究問題から云つて、僕の採らないところだ。

かの有名な三井寺は、大抵の人が知つてる通り、琵琶湖のそばにある。ごうんと幅びろく鳴つて、あさゆふに湖上を渡り響く鐘のあるところは、大分引ッ込んでゐて見えないが、――月見堂はずッと湖面に迫つた數十丈の崖の上にある。長等神社の鳥居を這入つてからの高い石段から登ると、直ぐそこへ行かれる。本堂もそこにある。ところが今一つ高いその上へ行くと、明治十年の役に戰死したものの記念碑が細長い三角錐形になつて建つてゐる。そのかたわらにはまた『玉座の處』があつて、明治天皇陛下が曾て御巡視の際、そこから湖上の風景を御覽になつたところだ。

最も眺室のいいところだから、お客さんも必らず來るだらうと云ふので、そこへも一隊の巡査が配置された。その中に友人が這入つてゐた。

果してお客は來られた。

友人は――云ふまでも無く、自分の勳章を制服の胸につけて――最敬禮をしてゐたが、お客はそれに答禮をしなかつた。前者はこの時初めて憤りを發したらしい。じツと蔭から見てゐると、お客はまた泥を突くステツキのさきを以て記念碑をさし示めしたではないか？　また、玉座の柵に靴の泥をこすり附けたではないか？

『巡査としての身分は如何にも低い。けれども、わが上より拜受した勳章に向つては、どうしても――苟くも――答禮せざるを得ないわけではないか？』渠は、その場を過ぎてから、斯う皆に向つて不平をこぼした。

『失敬な奴、さ』と、同意した巡査もある。

『なアに、あの位になりヤ、勳七等ぐらゐは目に入るまいて』と、ひやかし半分にすませようとしたのもある。

『それだけなら、まだええ、さ。』友人は威だけ高になつて、『杖で石碑をさし示めすとは、どうしたことぢや！　玉座の柵を靴で蹴るとは、どうしたことぢや！』

『僕は外國貴賓やおまへん』と、渠の憤り切つた面前を避ける同僚もあつた。

『その上、僕はあいつの旅行順序が氣に喰はん！あいつがたとへ日本を漫遊するとしても、順序から云へば、先づ東京へ行つて上御一人に謁し、然る後、地方へ出るべきではないか？　それを、何ぞやさかさまに九州から上陸しやがつて、まだ拜謁も濟まん時から、こんなええ日本三景若しくは四景の一つを勝手に見やがる！』

僕は、三井寺の石段を皆と一緒に下だりつつ渠のこの言を聽いた時、他の同僚のかげに隱れて、自分のサアベルの音にも殆んど縮みあがつたのである。お客の旅行順序に關する友人の不平は、僕がそ

の日、守山から出て來る汽車の中で、渠に語つたところそツくりであつた。

自分のほんの空想的に研究して見たり、憤つて見たりしたことが、再び他人の口から——友人の口吻に於ける如く——本氣で公言されるのを聽くと、僕はわれながらおそろしい一大事を考へてゐたことに氣が付いた。が、友人だつてまさか、僕が空想したところまで實行しようとは思はなかつた。

が、——お客は、それから、汽船で唐崎の松を見に行き、直ぐ大津へ歸つて來て、縣廳で中食をきこしめし、さて、いよ〳〵けふは京都までお歸りになると云ふことになつた。その道すぢはずツと三十間置きに巡査が配置されてゐた。これでは一丁の間に二人の割りだから、事件があつても、同僚が助け合ふことが出來なかつたのみならず、暫くは殆んど氣づかなかつたのも尤もだ。

友人は京町通りの或四つ角をいましめてゐた。結果から云へば、いましめでは無く、待ち伏せであつた。

この時の現狀は、僕は他の箇處に配置されてゐたのだから、實見しなかつた。が、——何でも——友人の血色が變つたかと思ふと、渠の劍は拔き身になつてゐた。然し人力車の走りかたが速やかであつたので、ねらひが外れて、お客の額にかすり傷を負はせたに過ぎなかつた。

二度目の劍をふり上げた時、お客の次ぎに續いた今一人の貴賓が、その車の上から、杖を擧げて友人の背中を毆打した。同時に、車夫の一人は友人の足をすくひ倒し、また一人はその劍を奪ひ取つて

渠の後頭部を切りつけた。某國の勳章と年金とを受けるやうになつたのは、この兩車夫で——大正〇年に死んだ方の車夫の如きは、一時に身上が出來たので有頂天となり、仕事をやめたと同時に、ありとあらゆる放蕩をし出したので、京都府がその生活に干渉して、某國に對する體面だけは保たせるやうにして、桂川のほとりに立派な別莊を建築させ、悠々と閑日月を送らせてゐたのだ。

『……………』お客は、年が若かつたからでもあらう、又突然であつたからでもあらう、その時、友人の勢ひに驚き恐れて、何とも形容の出來ない聲を擧げて、車の上に突ツ立つたさうだ。それが爲めに、車を挽いてゐた車夫はその兩手からかぢ棒を落した。がそれを幸ひに、お客は車から飛び下り、直ぐそばの或る呉服屋へかけ込んだ。

呉服屋では店の白木綿を取り出して、血に染んだ額を假りに繃帶した。その時の坐蒲團やら、水を盛つたコツプやらが、記念として、その家の寶物になつた。あまり大きな店でもなかつたので、その生活は店の品物の賣りあげによつてよりも、却つてこの寶物見物料で立つて行くやうになつた。それも、わが國人のが主ではなく、——また大津市民などは却つて詳しくないものが多かつたが、——本邦來遊の某國人等の心づけだ。毎年平均五六十名はあつたさうだ。

『これはその時お坐わりになつたお坐蒲團——これはその時お口に觸れたコツプ』などと云つてゐては、結局、わが國の恥辱だと云ふことになつた。且、某國からは永久の記念にして置かうとして、或

邦人の手を經て、そこを買取しようとすると云ふ風說も立つやうになつたので、大津市でこれを買ひ上げて、かゝるいまゝしい場所を寧ろ絕滅しようと相談してゐるうちに、無事に或郡長の手に落ちてしまつた。

お客は、直ぐ本艦まで引き上げると云つたのを、無理に賴んで再び縣廳へ招じたところ、この時早く、第九聯隊の兵士どもは一齊に劍銃を揃へて馳せ參じ、廳——これは豪傑中井弘の遺物で、當時は日本一の縣廳であつた——の周圍を、鐵柵の內外二重に取り卷いた。外なるは外に面じ、內なるは內に面して、隊伍堂々劉喨たる喇叭を吹き出した。

この響きに若いお客は二度びツくりして、日本人が揃つて自分を殺す氣かと思つたらしい。寢臺をはね起きて二階の窓からのぞいて見たさうだが、自分の護衞の爲めと說明されて、初めて安心し、今度は日本軍隊の機敏なのに感心したさうだ。その翌日、わが國の貴顯は京都におでましがあり、親しくお客のお宿を見舞はれた。

お客のお負傷點を眞ン中として、その前後三十間置きに立つてゐた巡査どもも、不注意の廉を以つて職を免ぜられたのみならず、また大津、守山の署長も、責を引いて、いづれも免職となつた。

『若し日本を見物しようとすりや、なぜわが上御一人に拜謁してからにしない！不埒きはまる——それに、又、もツたいない所を足蹴になどして！』友人は車夫や彌次馬どもに押さへ付けられながら、

お客の後ろ姿を斫う云つて睨み付けたと云ふことを聽いた時は、僕は恐れとひや汗とで穴へも這入り込みたかつた。そして僕の過激な空想は却つて全く消え失せてしまつた。

共犯者の有無が問題になつた時など、僕はわざと平氣をよそほつてゐたが、友人が若しやその行ひの動機を口外して、僕の言葉、乃ち、つまりは煽動と見れば見えた言葉に、歸しはしないかとばかりが心配であつた。が、渠は渠の動機と決心とを渠自身に歸してゐたらしい。おの客前額に與へた傷とは反對に、自分は後頭部に繃帶を受けて、膳所の監獄に送られたが、斷然たる覺悟を定めて、食事は一切廢してしまつた。監獄では特別の待遇を以つて、止むを得ず、渠の肛門から毎日牛乳を胃腸に送り込んだ。これは公判が長引きさうであつたからである。

その間に今一つ特別な事件は起つた。〇〇〇子と云ふ女の自殺だ。かの女はどこかでの下女奉公をやめて、京都に來たり、意見書を懷中して、京都府廳に行つたが、受け付けられなかつた。

『兇賊〇〇の如き者が出た爲めに、若し〇國の貴賓が東都にのぼられず、京都から直ぐ御本國へ引き返しでもしたら、それこそ日〇兩國の國際上、甚だ憂懼に堪へぬ。この意見書が受け付けられぬなら、府廳の手などは經ぬ。自分は死を以つて、直接に、この意見をわが國の貴顯とわが國民とに通達する』と云て府廳の門前で、女だてらに割腹したのだ。

わが國の遠近上下はたださへ僕の友人のことで沸き立つたところへ、またこの〇子の自殺で一しほ

おほ騷ぎとなつた。で、その中心なる大津市の混雜と云つたら、丁度僕のその時の隱れた內心のやうであつた。そして大審院の臨時法廷に於ける公判ばかりが――僕としても、私かに――待ち受けられた。

本體、○國の貴賓が何の爲めにやつて來たかと云ふに、その時の世界通どもの話を聽くと、某國では丁度西比利亞鐵道の起工詔勅が發布された時で、この貴賓は鐵道の豫定沿路を視察しかたがた、東洋の形勢をも觀に來たのだ。わが國は例の『黑幕內閣』、『暴虐內閣』などと呼ばれた某內閣の時で、國內のことでは意張り切つて、ひどい選擧干涉などをしながら、その他の事には丸でから意氣地がなかつた。云つて見れば、まア、うち辨慶そツくり、さ。當時、いぢめぬかれてゐた民黨は、そこでこの外國貴賓の警護怠慢の理由を以つて、內閣の一角をうち破つた。時の內務、外務大臣も責を引いたが、矢ツ張り、內閣の連中は――司法大臣の田中不二麿を初めとして――ひどい恐外病に冒かされてゐたので、友人を以つて――丁度友人自身がその法律硏究に於いて發表した偏狹な考へと同樣に――わが國の貴顯に對する罪に準ずべしと主張した。

ところが、僕の意見と同說であつたのは、賢明な大審院の連中だ。政權を得たのをしほに自分自身等の勝手放題をする閥族どもの軟論愚論を排斥して、これはただの一個人を謀殺しようとして未遂に終つたものであると云ふ說を採つて動かなかつた。で、內閣派と大審院派との確執は非常なもので

――その言語擧動にまでもよく顯はれてゐた。僕が別な同僚と共に――まだ混雜なので、應援中であつたのだが、――停車場の番に當つて、少し立ちあぐんでゐた時、支那人が一人呉服の包みを肩にしてやつて來たので、半ば口のうちで

『チャン〳〵』と云つて見た。すると、渠は怒つた顏つきになり、僕の方へ近づいて來て、

『あなたのやうなおまわりさんまでが、チャン〳〵云ふいけません！』

『…………』僕はしまつたと思つたが、別にあやまりやうも無かつた、『チャン〳〵だから、チャンチャンやないか？』

『わたくし支那人――チャン〳〵ありません！』

『さよか』と云つた時、僕は急に直立の姿勢を正した。と云ふのは、時の兒島大審院長閣下が突然やつて來たのに氣が付いた。なぜ突然と云ふかと云ふに、その時、僕はそとを、また僕の同僚どもの一部はプラットフオムを警戒してゐたのは、新内務大臣の品川彌次郎閣下がやつて來る前ぶれがあつたからである。この兩閣下は丁度停車場の中央の出口で出くわした。兒島さんは最初から何だかぷりぷりしてゐたやうであつた。

『…………』渠は品川さんに挨拶もしないで這入つて行かうとした。

『どこ行く？』立ちどまつてだが、これも語調が强つた。

『歸る！』と云つて、院長は初めて踏みとまつた。

『どうしてだ？』

『神聖なる法權を蹂躪されるに忍びん――行政官に裁判がやれるなら、やつて見ろ！』

『なにイ！』

一方がまた步み出したのを、一方はづか〳〵と追つて行つて、肩に手をかけて無理に引きもどして、

『まア、待て！』

『待つ必要はない――辭職する！』

『待て！』一方は、他方がまた行かうとするのをまた引きもどした、『田中は知つとるか？』

『あいつも馬鹿だ！』また行きかけた。

『待て――ゆツくり話す！』

向き合つた二人の顏には、どちらも怒りの朱色を帶びてゐた。

『國家の體面を穢す勿れ』と云ふ叫びが、閥族どもに對して盛んであつた。僕も私かにその氣になつて、友人があの時の勢ひで寧ろ軟弱内閣の主斑を斬つた方が國の爲めであつたのにとまで思つた。大津在住の谷澤△△と云ふ辯護士が僕の友人辯護の任を命ぜられた。すると、東京からも大阪からも、有名な辯護士と云ふ辯護士はすべて、有志として爭つてやつて來て、この未曾有の事件に對する各自

の意見を述べようとした。あまり多忙なので、谷澤は全く客を謝絶して玄關に左の控へ札を張り付けた、――

『若し〇〇〇〇に對して利益なる助言これあり候はば、何卒封書を以つて御送り下されたく候。』

肛門から牛乳を注入されてゐる友人のいのちは一にわが帝國の威信に關して來たのであつた。

いよ〳〵公判の日となると、殆ど日本中から熱心な傍聽者が集つたので、とてもその席の用意がなかつた。而し名刺を出すものも、出すものも、皆有名な人々のやうに僕には讀めた。が、以上の次第なので、僕はそのうちの三四名を――無理に押し入らうとしたので――つき飛ばしてやつたのをおぼえてゐる。人員を限つて入席を許されたのは、有志の辯護士並に新聞記者であつた。そしてその二名毎に巡査が一名付き添つて警戒した。

友人は法廷へも繃帶をして出たが、先づ、重傷の爲めに身體の自由を缺き　かかる席に相當の敬意を表してゐることが出來ないのを謝し、さて斯う云つた、

『この場にのぞみて、もう、何も申すことはありません。血氣にはやつて、かかる一大事を引き起した罪は何とも申しわけが御座いません。ただ願くば、――ただ願くば、――國際上の親和を破らず、またわが帝國の法權をも穢さず、日本人として日本帝國の法律に照らされて、相當の御處分あらんことをお願ひ申します。』

辯護士から敎へられたのか、それとも自分自身で悟つたのか、いづれにせよ、その意は僕並に大審院の主張の方に傾いてゐた。そしてそれツきり、口をとざして、またと再び言葉を發しなかつた。その辯護人の言も、この外には出なかつた。が、僕は審判長として坐わつてる兒島さんの顏に、如何に嚴格であつても、それを停車場で見た時のとは全く違つた光りが輝いてるのを見て、公判の結果を大抵想像することが出來た。

果してただの謀殺犯と決せられたが、而も未遂に終つたから死一等を減じて、無期徒刑に處すると宣告された。

行政官どもの干涉が死刑になるだらうと豫想して、最後に『馬鹿』とか『國賊』とかの罵倒を審判官にあびせかけようとしてゐた傍聽者どもは、怒つた肩をその場に落して、皆が皆申し合はせたやうに總立ちとなつた——

『萬歲！』

『帝國萬歲！』

『神聖なる法權萬歲！』

そして兒島さんの引ツ込んで行く顏にでも嬉し淚が浮んだではないかと思つて、僕が見まわすと、總立ちの人々にも亦それが見えた。この時は僕までも日本と云ふ國が分つたやうな氣になつた。

友人は北海道の懲治監に送られ、負傷がなほらないで死んでしまつた。北海道まで渠を乘せて行つた船の船長であつた人に、或時、——友人の死後餘ほど經てから——汽車の中で出あつた者が僕の友人中にある。この船長も亦餘ほど激し易さうな男で、○○には非常の同情を表し、話したいことは山山あるが、斯う云ふ場所では遠慮があるからと云つて、名刺を呉れたが、その時僅かに話した消息によると、友人は船中では別に異狀の擧動は無かつた。船から海中へ身を投げようとしたと云ふ如きは、ほんの噂さで、それは後悔と云ふこととの結果を凡俗的に臆測した言に過ぎないとのことであつた。

僕が友人と最後の言葉をかはしたのは、まだ渠が判決を受けないで在監してゐる時にであつた。僕はどうしても一度は渠を見舞ふ義務があるともおもへた。が、渠には共犯者が無いときまつたのを承知してゐながら、監獄の門を這入る時など、——何だか——丁度いいところへ來たからと云はれて召喚狀なしに、而も直ぐ、友人と入れ換へられはしないかと云ふ氣がした。

『○○君』と、僕は然し、渠の病檻で呼びかけた時は、つき添ひの看守のおもはくを考へてわざと、大膽に語つた、『ひよんなことになつた、なア！』

『…………』友人は直ぐには返事をしなかつた。僕は渠が僕をおこつてるのかと思つたので、たとへ冗談にも、君におだてられてなど云ひ出しはしないかと心配した。然し渠はやがて苦笑して、『君とも、

もう、法律の研究もでけん。』

『…………』僕は俄かに胸がつまつてしまつたのを、今日でも忘れることが出來ないのである。

僕はその後間もなくまた軍隊に入り、——無論、友人のことに凝りて、過激なことを考へたり、しやべつたりしないで——それから軍隊を幾度も出たり、這入つたりしてゐるうちに、今回の件に出會ひ、自分も勳章を貰つた。それでまた友人のことを新らしく思ひ出したのだが、僕は勳章を——無論、ありがたい物だが、——渠の樣には自慢しないつもりだ。

——(大正三年十二月)——

信より玉江へ

第一信

大津、明治三十六年十月十一日、月曜日。

玉江さん、――矢ツ張り、僕が子供の時に呼び慣れた通りに斯う呼ばせて貰ひますが、――十三年ぶりでお目にかかり、僕は一昨日からすツかり夢中になつてしまつて、――

僕が江戸堀の病院へお訪ねしました時は、お互ひに突然のことで――僕も直ぐには思つたことは云へませんでしたが、あなたも、あとで氣の少し落ち付いた時の顏とは餘ほど違つた顏つきをしてゐましたが、僕が豫期したほどの感情をあなたは見せませんでした。あなたの方はどうであつたか存じませんが、僕は直ぐにも先づ過ぎし日の薄情をお詫びしようと思つたのです。然し胸にいろんなことが込みあがつて來て、――それに場所が場所で、今のあなたがどう變つてゐるかにも遠慮して、――一通りの話しか出來ませんでした。それでも、

『今から五年前の夏にもこちらへ來て、あなたを大分探しました』と、僕が申しますと、あなたは指

を折つて見せて、
『その夏だツさ、お父さんの亡くならはツたのんは』と、云はれました。僕は今一つ詫びることがふえたのを知りましたが、その情をもその場で云ひ現はし兼ねたのでした。
『直ぐ往にまツさかい。一あし先きへ行てておくれやす』と、あなたはあなたの家のありかを敎へて下さいました、ね。
で、あなたにも急いで來いと云ふ意味の車賃としてあれだけを渡し僕は先づ車を飛ばしますと、兄さんだけが留守居をしてゐて、早速に、『夢のやうだ』と云はれ、母の行つてるところは分つてるから呼んで來るが、さぞびツくりして氣絶するかも知れないとありました。が、僕は、あなたの最初の御樣子に照り合はせて見ると、兄さんは自分の年だけに——實際、おぢイさんになりました。ね——ただおほ袈裟な形容的感情を述べてゐるのだと思ひました。
ところが、僕は暫く獨りで留守居をしてゐると、おツ母さんは格子をがらりと明けるが早いか、兄さんよりもさきに飛び込んで來て、『まア、まア』と叫んだ切り、言葉も出し得ずに、僕の前にころがりました。それでも、兄さんのぢぢイ臭く、あたまの髮も半白になつたのに比べては、おツ母さんは割合に元氣でした。昔の通り、相變らず嚴丈に肥えてゐて、聲も元々通りしツかりしてゐました。髮を茶せんに切つたあたまをもたげてから、『何からお話ししたらええのやら』と、目をしよぼつかせて、

初めのうちはおツ母さんの話にとりとめが無かつたのです。
『玉江さんは直ぐ歸ると云ひましたから、もう着くでしよう』と、僕が云ふと、
『あなたは――もう――奥さんも、お子供さんも――』
『ええ、――子供はひとり死んで、二人目が大津へ來ると直ぐ生れました。』
『そらさうでしよう、なア――』から云つて、おツ母さんけ兄さんと顏を見合つて、何だか失望の色が見えました。段々聽いて見ると、あなたの御家族は箸のあげおろしにも僕の事を忘れてゐないで、その上、お父さんは御臨終の床からも『早う信さんにめぐり合へばええのに』と云つて死なれたさうです。僕の詫びるべきことがそこまで行つてゐたとは、一しほ僕の心を打ちました。
『僕が玉江さんを初め、あなたがたに濟まないことをしたのです』と云つて、僕は先づあやまりました。僕の最初の變心は、大阪へ出て、當時の耶蘇教の潔癖と隱遁傾向とに觸れて女ぎらひになつた爲めでしたが、その後東京へ歸つてから、同教を離れ、再び今度は僕の必然の要求から世の婦人が戀しくなるに從つて、思ひ出されたのはあなたのことでした。方々の心當りを手紙で照會して見たこともありましたが、あなたと御家族とが國にゐないことと並に行衞不明のことだけが分つたのでした。それも家計の御不如意の爲めであつたとのことでしたから僕は一時殘念ながらそれツ切り斷念しました。
ところが、あなたのお父さんが御臨終の床で僕のことを云つて下すつたと云ふ丁度その頃――暑い

夏でして、大阪に虎列剌がはやつてましたが、――僕はいよ〳〵あなたを尋ねて、大阪の病院を三四ケ所驅けまわりました。そして生憎、愚かにも、あなたがいらしつたと云ふ府立病院を尋ねることをしなかつたのです。僕はたゞあなたが看護婦になつてゐることだけを聽き知つたので――これは、僕がその夏二ケ月の豫定で、兄の任地なる播州龍野へ保養に行つてた時、あなたの遠縁に當るとか云ふ裁判官――名は忘れましたが――から聽いたのです。僕は占めたと思つて、豫定を早めて大阪に出たのでした。この時の旅行は僕としてはただ保養の目的ではなかつたのですから。

その頃僕は今の妻と關係が付きかけてゐたのですが――今一應あなたを尋ねて見てからと思ひまして夏期休暇をしほにこちらへ旅行したのでした。聽けば、その時丁度あなたのお父さんも類似虎列剌に罹つて亡くなられたのです、ね。夢にもそんなこととは知らず、大阪市中があまり惡病の盛んな樣子なのに恐れて、たツた一日で逃げ出し、東上の汽車に乘つてまでも、ひよツとあなたに會ひはしないかと注意した位です。

『あの美人ぢやと云はれた有名な娘も、面疔がでけた爲めとか云ふて、氣の毒にも、頰の上に大けいくぼみがでけて、人相がまるでちごてた』と、龍野で聽いたのを私かに僕は目じるしと思つて、汽車の乘り下りをする婦人にすべて注意を向けたのです。そしてこのまゝ、上方的な優しい言葉の聽える範圍内を脫してしまうことが、どうしても、出來にくいやうな氣がして、僕は馬場停車場で下車し、

この大津の外れに至り、琵琶湖のほとりをぶら付きました。そしてゆふがたになつて、三井寺の高みへのぼり、段々と消えて行く湖水のおもてをながめながら、あなたの達つたと云ふおもかげを――どう云ふ風にだらうなどと――思ひ忍んでゐました時、突然撞き出された晩鐘の響きに驚いて、僕は再び無常の旅をつづけました。この時の考へでは、もう、昨日の如く、あなたと共にこの三井寺へのぼることがあらうなどとは夢更ら思へませんでした。

『それにしても、お互ひに區々になつたその原因は僕が最初の音信不通ですから』と、僕はおツ母さんに幾重にもあやまりました。こんなことは、もう、おツ母さんからお聽き及びにもなつたでしよう。また、石山の休息所で直接に可なり詳しくおしやべり致しました。

『久し振りでお目にかかつてお玉もうれしかららうけれど――この御親切なお話を聽いては、さぞがツかりしましよ』と、おツ母さんは斯う云はれました。

『何にやかやあたまへ一緒に出て來て、何から云ふてええか分らん。』『兄さんはただ斯う云つて、言葉が少なかつたのですが、このなんにやかやと云ふ國言葉で僕はあなたと一緒に、あなたの廣い御屋敷内の川ぶちで、嫁菜やたんぽを摘んで遊すんだことが思ひ出されました。

兄さんはその時から不具者と見做され、勉強もさせられなかつた代りに、あなたがた姉妹は僕等と一緒に、早くから僕等の塾へも、英語の研究會へも、行つてゐました、ね。そして僕はあなたが目あ

てであつたのに、世間では僕が年うへの姉さんとあやしいと評判してゐました。どうせ僕等はまだ年が行かなかつた時のことです。無邪氣な戀でした。僕がお宅の炬燵に當つて、あふ向けに寢てゐると、あなたが横からその上に乘りかかつて、反對のがはに伏せてあつたナショナル讀本を奪ひ取つたことがあります。

『をなごの癖に人さまの上へなど』と、その時おッ母さんにあなたは叱られました。

僕が大阪に出るまでは直ちに東京へ行くつもりでしたから、

『落ち付きさへすれば、玉江さんだけは呼んであげますから』と、僕はこツそりおッ母さんへ話しました――その時は僕は、今でも思ひ出されますが、云ひにくいことを思ひ切つて云つたので、のぼせて顏が赤くなつたやうでした。

『どうぞよろしうお願ひ申します』との御返事は、無論、あなたと僕とを夫婦にしてもいいと云ふ意味であつたと僕はその時から解釋して來ました。

『早う信さんにめぐり會へ』との、お父さんの御遺言もその意味からでしたらう。が、あなたが今まで御獨身でお通しになつて來られたのは、必らずしも僕を思つて下すつたからでも御座いますまい。

から申すと、何だか、僕が先づ氣の變つた生活をしてゐるのをこと更らに辯解するやうにも聽えるかも知れません。そしてあなたのお心だけに秘めてゐて、今更ら僕にうち明けたくないとやうに思つて

御座る秘密を――若しありとすれば――潰しもし、失望させもするか知れません。そんなことなら、僕も僕の心でまた幾重にも詫びて通しましようが、あなたが石山で僕に語られた極おもて向きの御言葉によつて考へても、どうせあなたは結婚などには斷念していらしつたのです。

『お父さんは病身でおましたし、兄さんは阿房で役に立たんし、姉さんかて――お父さんの遺言に一家の責任はこれからも玉江が引き受けてとあつた云ふのを楯に取つて――何かと云ふ場合を、わたしばかりに押し付けてしまうし、をなごの腕一つで大の男や老人を引き受けて結婚など云ふてをれまへん』と、あなたは最も不平さうに申されました。これには僕もこれから出來るだけ十分の考へをあなたの爲めにめぐらせるつもりです。無論、僕と結婚が出來てゐたのなら、そんな心配も不平もなかつたのでしようが、あなたはそこまで突ツ込んで僕に當つたのではなかつたやうです。――そこまで當つて貰つた方が僕がこれからあなたがたの爲めに力を添へることには一層熱心になれたのですが。

話があとさきになりましたが、兎に角、皆で待ち遠しがつてたあなたが病院から歸つて來られた時には、僕の心ばかりの馳走をおツ母さんが大抵料理し終つてゐました。

『お玉か――まるで夢のやうで、なア』と云つて、おツ母さんは臺所から濡れ手のまま出て來て、何よりもさきにあなたをあがり口で迎へ、『信さんは、然し、奥さんがでけた。』

『そらさうやろ――立派な男さんになつてやはるのんやさかい。』『あなたはかうもり傘を置いて、座敷

へあがりながら斯う云はれました。『をなごかて、厄介人を引き受けてをりさへせにや、信さんの歳までも――』

あなたのこの皮肉がてきめんに僕に向つたのかと一たびは思つて、その鋭いのに驚きました。

『まア、そないなことは――』お母さんは斯う、廣げてゐた濡れ手であなたを抑さへる眞似をしましたが、餘ほど下から出たやうな口調でした。そして僕は、兄さんがそばでいやな顏をしたのを見て、直ぐその意味が分かりました。

あなたは思つたよりも肥えてゐます。そして相變らず皮膚の綺麗な顏をしてらツしやいますが、何だツて――豫期してゐたところではありますが、――あんた傷が出來たのでしよう？然しあなたのお顏にどことなく、ぴんときついやうなところがあるのは、決してその傷の爲めばかりではないと感じました。僕と同じ年月をあなたが一人前の男子と同樣にお家族の爲めに働いて來た經驗の然らしめるところが多く與かつて力あるのでしよう。

『先刻は失禮いたしました』と、僕に向つて坐わつてお辭儀をなすつた時には、白い服で見た時とは全く違つて、――もつとも、あなたはいい衣物に着かへてゐられました――僕に取つては、昔の戀人とか妹とか云ふ感じを得たよりも寧ろ賴母しい姉か相談相手が出來たやうに思はれました。

『さつきから、みんなで待つてゐたのですよ』と、僕は洋服のあぐらで輕く受けたつもりでしたが、

僕の聲はわれながら顫えたやうでした。そして僕の方がうぶなやうに感じました。
『何にせい、朋輩に代りを賴んで來ますのんやさかい、な、さう早うも出られまへんで――詰りまへんこないな商賣に。何ぞええ思ひ付きをしてお呉れやす。』
『どうです、いツそ、あす、――けふはここへとめて貰ひますが、――僕と一緒に大津へ來たら？妻にもお引き合はせして置く必要もありますし。――お母さんには僕からお賴みしますから――？』
『それもよろしゆおまん、な。』あなたは斯うお答へ下さいました。
それからみんなで――姉さんは御無事でも、遠いところの病院へ矢張り看護婦に行つてゐられるのが殘念なだけで――四人は久し振りで一緒に晩食に向ひました。兄さんは茶碗と箸とを持つて、昔の通り、疊の上に腹這ひになりました。氣の毒な樣子ですが、僕はこれを見て却つて昔通りの親しみをおぼえましたところ、
『珍らしいお客さんが御座るのに』と、お母さんが叱つたので、兄さんは素直に起きあがつて、窮屈さうに座わり直しました、ね。あなたは、もう、諦めてゐて、そんなことはお父さんの時と同樣にうツちやらかしてあるやうに見えます。
『なにも用がないので、な』と、お母さんは笑ひながらわざと少し惚けた口調で、また兄さんのことを斯う云はれました、『夜になると、時々、新地の藝子さんのとこの格子さきに立つて、こツそり立

ち聽きしてをつて、こないな歌をうとつたとか、あないな話をしてをつて役にも立ちやせんのにとか、人のことをせんきにばかり病んで、な。』

『然し、な』と、兄さんはにこ付いてだが、眞面目くさつておつしやいました――世間に出たこともない兄さんには、無論、兄さん自身のお考へがあるのでしようから、『あないな猥褻な歌や話、せんでもえゝやないか？けがれる！』

『けがれると思たら』と、あなたはあなたのお父さんを思ひ出させるやうな口調で、叱るやうに申されました、『聽きに行かんでもよろしゆおまつしやろ。』

『ほんまに、な、をかしな人で』と、おツ母さんは笑つてゐられました。

『然し――然し』と、一種の道德家らしい兄さんは負けない氣になつて、『風儀の――害になるやないか？警察から手をまわして、さしとめてしもたらえゝのや。』

『警察は警察で』と、おツ母さんはそれとなくあなたの肩を持たれました、『またそれぞれのお考へがおありになるのやさかい――。』

『今の巡査が惡いのや、昔のやうな禮儀も禮節も知らんで！』

『そんなら』と、あなたは突然に、『あんたが巡査におなりやす。』

『巡査などつまらん。』

『それでも、な』と、あなたも意こ地になつて、『お氣の毒きヤけんど、巡査や藝子はあんたよりやヤえろおまツせ――ひとりで働いて、親や子を養のてるものがあります！』

『そやさかい、藝子でも看護婦でも駄目やないか――われから男のねきへ寄つていて？』

『お氣にさわるなら、これから中谷の御主人にたんとかせいで貰ひましよ。』この調でした、ね、あなたが『とても、あきまへん』とその翌日しみ〴〵とおつしやつたのは。たまに、區役所の傭ひに周旋されたり、會社の小使ひになつたりしても、士族と云ふ氣ぐらゐばかり高く、人におだてられては上の人と喧嘩をして追ひ出されるのは、兄さんとしては無理もないことでしよう。お父さんがいらつしやる間はお父さんが諦らめてゐたのでしよう――御自分があまり嚴格に子供を叱り、あたまなどを度度ひどくなぐつた結果ですから。今では、また、あなたのしよい込みは仕かたないのです。然し僕は兄さんの機嫌を取つて置かないでは、あなたのお家へ今後も度々伺はれないことだけは分りました。

それであなたの大津行きのことも、僕は先づ兄さんによく承知させました。すると、またおツ母さんが一緒に來たさうであつたので、それほど金の用意がないからと云つて、また他日のことにして貰ひました。僕は正直に申しますが、あなたと二人切りで一晩ゆツくり話して見たかつたのですから――

兄さんは感心に酒を一滴も飲みませんでしたが、あなたは三四杯召しあがつて、多少お醉ひになり

ました。衣物をお着換へになる時でした、あなたは少し浮き〱した御口調で、——

『きのふも、△△先生はおもしろいこと云やはつた、をなごと云ふ物は皆赤い物を好きな動物やツて、た——然し、うちヤ何も赤い物などつけへん。』

如何にも、僕がちらと見たあなたの長襦袢の裾は紫地に紅なし友禪の模様のやうでした。

『そりや、そやとも』と、おツ母さんはあなたの手傳ひをしながら、『あんたの歳で赤いお湯もじに赤いべにでもつけたら、人さまにはお化けか何ぞのやうに見えます。』

『でも、まだ』と、あなたはあまへたやうに、そして下あごへ力を入れた聲で、『信さんとおない歳だツせ。』

『さよかいな？わたしはまた一つ下かとおもてたのに。』

『なんぼ云ふても、あんたはあかん——忘れてしもて。』

『信さんはわたしより十したぢや』と、兄さんが口を出したので、

『そんなら』と、おツ母さんも分つたやうに『やツぱり丁度三十や。』

『そやさかい、いつでも云ふてるやないか？』あなたはこの時足踏みまでしてお顏をしかめました。ね。僕のことをさういつも云つて下すつてたと云はれば、感謝の至りに堪へませんでしたが、あなたは、御家族同士の間となると、どうも直ぐお氣が荒立つやうにお見受け致しました。そのお心持ちも

僕には分らないことはなかつたので、褥へ這入つてからも、僕はひとりで暫らくそんなことを考へて同情してゐました。

翌朝、車を二つ走らせて梅田に至り、十時の汽車で大津へお伴致し、湖水のほとりの僕の假寓へ着いた時は、妻はちよツと驚きました。僕が他の婦人をつれて來たことなどはこれまでに無かつたのですから。

『とう〲中谷玉江さんにめぐり會つて、ね』と、僕がわざとにも優しく説明してやると、然し、かの女もあなたの御らんの通り直ぐ分りました。あなたのことは前々から話してあつたのですから、ね。お引き合はせが濟んでから、かの女は云つたでしよう、

『お噂はわたしがこの伴田家へ來た時から伺つてました、わ――いえ、來た時どころぢやア御坐いませんの、もう、まだわたし共が一緒にならない時からですの。おのろけだか、何だか分りませんでしたが、ね、こツちでも隨分尋ねてゐたんだから、向ふでもきツと尋ねてゐるに相違ないツて、ね。』

『ほんまに、な。』あなたは斯う云つてうち解けて下さいました。『わたしの方でも、父や母は箸の上げおろしに伴田さんのことを思ひ出しまして、な、今頃はどこにゐやはるか、どないしてお出でかなどと、はたで聽いててもめんどい時がおました。――それがまた、母の年を取るにつれて、ひどなりまして――』

『そして今何をなすつて――？』

『……………』

『玉江さんは』と、僕があなたの返事を引き受けて、『僕の想像通り、矢ツ張り、看護婦をしてゐらツしやるのだが、老後までの獨立準備にと産婆のことも卒業したので、今、或産科病院につとめてるので、そこへ先づ僕が尋ねて行つたの、さ。』

『よく分りました、ね――？』

『それが、さ、例の、大阪醫學校出の醫師と話してる時、ふいと玉江さんのゐどころが分つたので、直ぐ訪ねて行つた、さ。』

『へい――長年の御志望がさうわけもなく』と、半ば冷やかし笑ひをしてから、かの女はあなたに向つておせツかひを云ひました、これがかの女のいつも云ふ癖です、『病院などよりやア獨立して産婆を開業した方がいいでしよう――お隣りも産婆ですが、ね、なか〳〵はやつてるやうですよ。』

『わたしの年輩ではまだ世間が信用して呉れまへん。』あなたのこの御返事も尤もですが、お隣りの産婆だつて、妻はこちへ來る早々取りあげて貰つたので信用してゐますものの、こんな地方では實入りは少いと見え、京都から月に何度か出張して來るおぢイさんの或漢方醫のめかけを兼てゐるやうです。これは然し、あなたをも伎倆なしと見て、この見せしめを云ふのではありませんから、惡く取つ

てはいけません。

『兎も角、お久し振りでしようから、けふはどうか御ゆツくり』と云つて、妻はまた——と云つても、あなたが見るのは初めてでしたが——子供にかまけ初めました。僕はそれを見るのがいやで、いやで溜らないのです。あなたは職業上子供を可愛がる人の方が商賣繁盛の味かたかも知れませんが、僕は子供に目も鼻もない女を見ると、僕の妻の狀態から推測してでしようが、これほどだらしない物はないと思ひます。この點はあなたも同感の御やうすでした。

で、僕は直ぐあなたを三井寺に御案內して、五年前にここで僕がひとり特別な無常を感じたことをお話し致しました。それから一先づ歸宅すると、石山へは妻が一緒に行くつもりで支度をしてゐましたのですが、僕はあなたのおツ母さんを遠ざけて來たやうに、かの女をも遠ざけてしまひました。實は、かの女はかげでぷり〳〵怒つて、すね初めましたが、相手にしなかつたのです。

僕が『第二の唐崎』と申し上げたところから小船をえらんで、あなたとふたりツ切りで湖上に出ました、ね。もう、ゆふかたで、たださへ寒くなつた十月の風は一しほ寒かつたのでしよう。僕は熱してゐて左ほどに感じませんでしたが、あなたは心配して、

『寒おまツしやろ』と注意して吳れました。僕もそれで氣が付いて、蔽ひなしの盛裝をしてゐるあなたの身に風でも引かせたら、わざ〳〵つれて來てゐながら、おツ母さんに濟まないと思つたものです

から、一つのござを風かみの方から肩の上に卷いて、あなたと二人でその兩端を持ち合つて一緒に並んで坐わりました。つまり、僕等は逢坂山を脊にして、あなたは僕の右に座わり、正面に叡山を眺めたわけですが、あなたは一度來て唐崎と三井寺とを見たことがあると云つて、湖上からの風景などを餘り氣にかけなかつた御樣子でした。

秋の赤とんぼが一つ、僕等の上を寂しさうに飛んで行つたでしよう――あのやうな心持ちでした、僕のあなたに對する心も。胸にはもや〳〵と心がさま〴〵に赤く燃えてゐながら、兎角、よそごとばかりを云つてゐました。

『玉江さん、昔通りのつもりになりませうか』と、僕は初めから、幾度も、たツた二つの袖の隔てを取り去つて出る機會を私かにうかがつてゐました。

『いよう、めをと觀音！よう似合ひました！』斯う、僕等の前を行き違つた船の船頭が叫んで行きました時、あなたは、然し、別に赤い顏もせずに僕とかほを見合はせました、ね。僕等の船は僕からあなたの方へと進んでゐたのです。あなたは前日のと同じ大島お召の衣物でしたが、僕は洋服を和服に着かへてゐました。

『縞の羽織はあんたに似合ひまへん、な。』

『さうか知らん――？』

『男はちよツとそないなことに氣イ付かんものやでなア、奥さんがもツと氣をお付けなさつたらええのんだツさ。』

『あいつア、どうせ、駄目です——子どもにばかり夢中になつて。』僕はこの時にも斯う申しました、ね。すると、あなたも僕に賛成して、姉さんらしく云ひ添へました、

『ちよツと見ただけでも、あんたの家はむさくるしい。』このお言葉を聽かされても、無論、僕には妻を辯解する考へは出ませんでした。と云ふのは、僕は、もうかの女に斷念して、僕の今の家を中心としての生活狀態を向上させようとは思はなくなつてゐるのですもの。

『旦那、あすこが膳所の城だツせ』と、船頭に注意されて、僕等は肩のござを少しおろして、お互ひにうちがはから背にしてゐた方をふり向きました。

見えたのは、浪が石がきに當つて碎けてゐる城あとの監獄でした。

『あんたの行きなさる中學校は見えまツか』と、おツしやいましたが、それは見えませんでした。

僕等は船の眞ン中に向き合つて坐わつて、膝と膝とが輕く相接してゐました。僕の身うちに血が燃え立つたのを知つてか、知らないでか、あなたはじツと僕の顏を見ました。僕は眼をあなたから反らして——實はさうしなければならぬやうになつたので——僕の右手前方の遠い山はなをさし示めして、

『あすこが堅田の落雁のところです』と云つた。

『消えて行くやうだす、な。』あなたはこの時初めて風景に關する感じを述べられました。が、僕は却つてよく僕の眼に映つたあなたの頰の傷あとを、どうかして、今一度もと〳〵通りに直せないものか知らんと考へてゐました。

『なぜあなたは結婚しなかつたのです』と僕が思ひ切つて申し上げたのは、――その眞意をお分りになつたか、どうだか存じませんが、――僕のやうな變心者に對して、あなたも若し結婚してゐたら、多少でも復讎が出來てゐたのにと云ふ意で、つまり、僕自身を責めたのでした。

この時、船はもう瀨多川へ入り、粟津ゲ原に添つて川を下だつてゐたので、有名な橋も見え出してゐました。そしてあなたと僕とは少し隔てを置いて、お互ひに兩肱を敷きごもの上に突いてお互ひに卷煙草を吹かしてゐました。

『わたしのやうな者をもろて呉れる人がありまッかいな？』あなたは斯う棄てるやうなお答へでした。

『そりやア、相當なところで滿足するつもりなら――』

『でも、そこにそこが有りまして、な。』

僕は、この時まで張り詰めてゐただけに、あなたのこんな、大阪流の、あひ口見たやうな返事に、

半ば張り合ひぬけがした。僕に對しては、もツと正直に云つてもいいではないかと云ふ恨み氣味が出ました。この恨みは、然し、石山へあがつてから、ひとり手に解けたことは解けましたが――

『瀨多の　唐橋ヤ
からかね　の　擬寶珠
水に　うつるは
――その名も　何だい？――
頗る　別品、
膳所　の　城！』

こんな、それこそ頗る別品か變挺かの調子の歌を、船頭が急に自慢さうに歌ひました。ね。僕は丁度これに耳を預むけるだけの餘裕を――あなたに對する熱がさめた間に――得てゐましたから、よくこれをおぼえ込んで、翌日になつて考へて見ますと、――僕は國語の教師ですから、ね、――この歌の組織はなかなか馬鹿にならぬところがあります。歌ひ方がぎごちない調子ではありましたが、そのぎごちなさにはわざわざさうなるやうな言葉を選んで來たのです。タ行、カ行の多いこと。ギ、ゼ、べ等の濁音がうまく組み合はせてあること。ンと云ふ反撥音が數ケ所に据わつてること、等です。然しこんなことはあなたに對する僕のありの儘の感じを書きつつ味はつて行くには無關係なことでしよ

う。
　石山の奇石や、本堂や、月見堂や、鐘つき堂を見た時は、もう、薄ぐらかつたです。山門を出てから川へ突き當つての、右の、川ぶちの宿――あの宿で僕はあなたにも、少くとも、おッ母さんに語つただけの告白は――飛び〳〵にですが――繰り返したつもりです。そしてまたあの宿でです、あなたが初めて本音らしいことを云はれたのは。僕の豫期から云へば、無論、まだ〳〵物足りなかつたわけですが、あなたとしては僕に聞かせたい絶頂のことでしたらう。その事とは、あなたの御家族に對する不平でした。兄さんの無能で而も燒き餅的な干渉――おッ母さんの入らざらんさし出口としての惡口的世間話――こんなことの爲めに、たとへあなたが獨立して産婆なり、看護婦會なりを開業しても――そして一二度は既にやつても見たが苦情やめんどうが起つて、――とても永續の見込みが立たないこと。それに、姉さんが割合に冷淡で――
『御もつともです、僕はそれに對しては、これから――これまでのことのお詫びとして――出來るだけのことは盡します』と僕はお誓ひしました。
『わたしも、うちに人數は仰山をつても、ひとりとして相談相手になる者がないのんだッさかい――』
『然し、ねえ――玉江さん――相當なところがあつたら、結婚してもいいぢやアありませんか？』
『あきまへん？わたしが結局食べさせにャならんものが三人もをつては――』

『そりやアさうでしようが、ね、そのもの等をも引き受けて呉れたら、どうです？』

『あきまへん！』

あなたは全くこの點には斷念してゐるやうです。實は、直接に云はうとして申し兼ねたのですが、大阪のまた別な友人が、その知人で二三萬圓はある藥屋の主人の爲めに細君がないかと、僕に云つたことがあります。これも一ケ月ほど前に僕の家へ尋ねて來た時のことです。女の方の兩親は勿論、子供の一人ぐらゐは一緒に世話してもいいのだ、と。その代り、向ふにも缺點があつて、當の男がつんぼで且片あしが利かないのです。あなたはいやだと云ふにきまつてましよう――が、厄介もの等の肩がぬける方を考へて見たらどうでしよう？

許して下さい――この話は僕としても書いた文字の上を幾たびか塗り消さうと思ひ惑つたのです。それに、僕自身の慾情が――この話を石山でしようとした時には――却つて盛んであつて、今にも手をあなたに出しかけてゐたのです。僕は氣が落ち付かないで、室を出たり這入つたりしました、ね。あなたは多分それを感づいてゐられたのでしよう、

『御酒を召しあがるのんはやめにしなアれ』と云つて、お酌をさへ爲し澁つてゐました。

『酒がいけなければ、ビールを取りましよう。』斯う僕が云つて、無理にビールを命じて來ても、あなたは少しも飮みませんでした。その癖、前日には、尤もおッ母さんもゐるところでしたから、多少お

醉ひになつたではありませんか？

『あまり警戒し過ぎます、ね。』

『でも、あんたかてほんまに呑めへん。』

『そりやヤ無論だけれど、――珍らしい奇遇ぢやアありませんか？』

『…………』あなたはただ默つて下を向きました。

『こんな時にやア、無理にでも酒が欲しい――あなただツて』と僕は先づみだらな氣分になつて見ようとして、おづ〳〵云ひました、『さうひとりでゐて――男を欲しくなる時がなかつたでしようか？』

『そこにそこがありまして、な』をまたあなたは繰り返して、僕を無感動な樣子で見ました。

『…………』僕は無言でビールのコツプを傾むけ、今一邊あなたにお酌をして貰ひました。そしてそれで僕のどこまでと云ふ切りがなかつた心持ちを切りあげることにしました。

『もう、往にまほ』と、あなたは丁度この時三度目の催促をしました。

あなたの一度目の催促には僕は最後の汽船を後れさせました。そして二度目のには、二人乘りの車を一臺命じて置きました。あなたが立ちあがつて、衣物のつまを揃へたりし初めたので、僕は最後の思ひ切りを付けて、下へ行つて勘定をすませました。それからまたあがつて來て、

『多分、こんな場合は二度とありますまいから、一緒に乘つて貰ひますよ』と、僕は半ば抑し付ける

やうにあなたに伺ひました。

『…………』あなたはまた坐わつて食卓のはじをさすつてた右の手をそこにとどめ、下を向いておとなしく低い聲で、『二つないのんなら――』

『ないさうです』と斷言したのは、僕のうそでした。せめて一つ車にでも乘つて見たかつたのです。

僕は過分に醉つてもゐましたが、心はあなたに對する情にばかり集つてたので、車が川のふちをさかのぼり、瀬多の橋ぎはを廻る時まで、物が云へませんでした。

あなたは亦無言で、下を向いた切りでした。

『あれが唐橋です』と、暗い外を僕が指さしたら、

『…………』あなたもちよツとほろの中から首を下げて、闇の中をおのぞきになつただけが御返事でした。生憎、月のある頃ではなかつたのです。

今度は僕が右手にゐましたので、左の手をあなたの後ろからまわして、僕は胴の長いあなたを堅い帶の上からしツかりいだき締めました。あなたは大理石のやうで、少しも身動きをしませんでした。

ただ車の驅けて行つた鐵道線路や道のでこぼこが、おのづから、僕等を一緒に車につれて左右させました。

『惡く思はないで、ね――』

『はい。』
ふたりの聲はいづれも顫えてゐました。
それツ切りまた無言でしたが、突然あなたが身を動かして、
『車やさん――わたし、おろして貰ひまツさ』と云ふので、氣が付くと、馬場の停車場下を通つてゐました。
『どうしてです?』
『歸ります――奥さんに惡い。』
『…………』僕はどうしようかと惑ひましたが、一しほしツかりとあなたを抱いて、『このまま歸つたらなほ變に思ひますよ――車屋、早く行け!』
『へい――』踏みとまつてゐた車夫はまた驅け出した。
『…………』あなたも別に反對をしませんでした。
『惡く思はないで、ね――』僕はまた、大津市内を進んでる時に、斯う申しました。これ以外のことは何も云へなかつたのです。
『…………』あなたに御返事があれば、直ぐお顔にでも接吻させて戴きたかつたのですが、御返事がなかつたので、ただ近い方のお手を僕の遊んでる右の手に取つて僕の口びるへ持つて行きました。

家へ歸ると、妻はもう二階へあがつてました。ふて腐つてゐたのです。女中に茶を汲ませて下で呑んでから、僕等も二階へあがると、――僕の驚いたことには、――そして又あなたに對して何だか恥かしかつたことには、――同じ坐敷に三つ床が並べて取つてあつて、その端のに妻が子供を抱いて寢てゐたことです。僕が内命でも與へてあつたやうにお思ひなすつちやア困ります。二階にだツて、室は今一つあつたのです。

『寒いので、子供の爲めに早く失禮してゐますが、ね』との挨拶が初めで、妻の言葉つきに劍がありました、『どうかよろしいやうにお休みなすつて下さい――お床は取つて置きましたから。』

『つい、おそうなりまして――』あなたは子供の寢いきがする室内に立つたまま暫らく考へてゐました。

『湖水の風は』と、妻はあなたにはとぼけたやうに思はれることを云ひました、『今からもう、お寒いのですよ。』

『わたし、矢ツ張り、失禮致しまツさ。』

『そんなことを云つたツて――』

『もう、おそいのですから、あなた』と、妻もむツくりと半ばからだを起しました。さうとぼけてもゐられなかつたのでしよう。『どうか――わたしはお先きへ失禮致しましたが、少しからだの加減もよ

くなかつたものですから。』

『まア、あなた、強情を云つたツて仕かたがない。――お休みなさい。』僕は斯う意外に強くなつてゐました。

『………』あなたは成るやうに成れと云ふやうな決心をお顔に見せました。そして妻に對するお言葉は和らかに、『では、とめて貰ひましよか？』

『さうなさいましよ』と――妻は子供がぎやア〳〵泣き出したので、『おう〳〵』と、直ぐその添へ乳にかかりました。

あなたは、出してある寢まき代りを遠慮して着かへないで、長襦袢になりかけながら、妻と反對の端へ行くと主張しました。が、僕はまた何だか氣がすまないので、自分でその場所を先づ占領しました。僕がぐづ〳〵してゐると、あなたがきツとそこを取つたに相違ありませんでしたでしようが――？『では、お休み』と、あなたが眞ン中のに這入つてから、僕は妻の枕もとのランプをからだを延ばして吹き消しました。

すると、くらやみの中に僕はあなたの髮のにほひを嗅ぎました。考へて見ると、あなたはその前日、病院を出るまでに、束髮をいてふ返しに結ひ直して來たのでした。

あなたも息の御樣子ではなか〳〵眠り付けなかつたやうですが、僕も神經が昂奮して、國の昔から

石山の歸りまでのことを幾度と無く眼の前にお浚ひ致しました。そしてあなたはお氣が付いたかどうだか分りませんが、隱さずに申し上げると、僕は――妻の寢いきが聽え出した頃――手を延ばしてあなたの枕もとをさぐりました。

こわごわでしたから、あなたのお手にもお首にもさわりませんでしたのが、今から思へば、あなたに最後の失禮を重ねないで濟んだわけです。

どうか僕に三度目の『惡く思はないで』を云はせて下さい。そして今後は、あなたと僕とは、全く綺麗な兄弟になりましよう。僕から故意にあなたを試みたわけではありませんが、この結果から見ると、あなたはさすがに、なか〳〵、しツかりしてゐられます。僕の方が寧ろ弟分で、意志も感情もまだぐら〳〵してゐることが分りました。

あなたが獨身で通して來たのは、あながち、おツ母さんの獨り合點してゐるやうなわけではありません。何も昔の戀物語りにあるやうに、僕との結婚を待つてゐられたのではありません。同時に、僕が妻子を持ちながらあなたをどうかしようと思つたのがあまり過ぎたのです。

僕はあなたと決して肉體上の關係はしなかつたと云ふことを妻に告げて、――また、實際がさうでしたから、――かの女の昨夜の失禮な態度を叱り付けました。これと同時に、僕も、きのふのけふとなつては、あなたに面じても、今一層奮勵して自分を向上させなければならぬことを悟りました。

あなたを思つてた爲めに、いつも西の方角が慕はしく、懷かしくあつたのですが、世間的な眼に肥えて御座るあなたにお目にかかつて見ると、——一つには、多少の滿足を得たからでもありましようが、——却つて再び東京へ早く歸りたくなりました。滋賀縣のやうな田舍にゐて、中學の教師や縣廳の通譯——僕は、既にお話した通り、縣廳の英語通譯を兼ねてゐます——などしてゐても、まだたツた三ケ月しか立ちませんが、どうせ末の見込みは立ちません。

あなたのお話の間で僕が推察したところでは、あなたのよく出入りして知つてる家は、——そして立派な生活の標準と思つて御坐るのは、——醫者でなければ實業家らしい。僕は、然し、そんなのとは違つた別な方面で、今後、一層進んで、あなたの相談相手、あなたの補助者となれる地位を作つて見せます。

それにしても、この地にゐる間は、また、かまひませんから、平氣で遊びに來て下さい。けさ、馬場停車場でお別れした時にお約束した通り、今度の土曜日から日曜にかけて、また大阪へ出て、あなたの病院へ伺ひます。その時までには、これもお話した『英和警察會話』の原稿料が取れますから、そのうちからあなたの指輪代として、御約束通り貳拾圓を持つて行きます。

また、御不快には思はれましようが、この手紙に書き込んだ求婚者の藥屋のことも考へて置いて下さい。

兎に角、僕はお目にかかつてからの方が、お目にかからない時よりも一層痛切に世の中が悲觀されます。そして悲觀が一層痛切に僕の惰弱をむち打つやうになりました。

來たる土曜日までにおうちの人にお會ひでしたら、どうかよろしく云つて置いて下さい。

先は以上まで。　　信より。

——(大正三年十二月)——

第二信

(金に添へて)

東京、大正四年二月二十日。

あなたの大至急の御手紙は僕のゐた大阪の新聞社から本日まはつて來ました。おツ母さんが亡くなられたとは、必然のこととは云へ、驚きました、ね。

御手紙では貳拾圓融通して呉れとありますが、只今ちよツと持ち合せがありましたから、別紙の如く郵便かはせにて——どうせその場の間には合ひませんのですからかはせにて、——五拾圓だけ送つ

てあげます。如何やうにともお使ひ下さればいいのです。こちらの名義はおツ母さんへの御花料に致して置きます――ずツと以前に僕はおツ母さんが御病氣にでもなつたら、僕がきツと引き受けますと口約したこともありますから。

その代り、この機を利用して、少しあなたとあなたの御家族との棚おろしをさせて戴きます。長い間僕が云ひたくツても、おツ母さんのゐる間は、遠慮してゐたことで――且、僕が段々あなたがたに遠ざかつたわけも分りませうから――。

あなたがたは一體にあまり金のことより外に考へが無さ過ぎます。そりやア僕だツても、貧乏疲れをした經驗がないことはない。が、貧乏にこじれてしまふことは考へものです。が、おツ母さんを初め、あなたでも姉さんでも、あまりに現金過ぎますよ。金のことでもなければ人のところへは來ないものだと云ふ掟でも持つてるやうに、あなたがたは去年春頃から音信不通でした。僕がお家へお訪ねすれば、そりやア歡迎してくれなかつたとは云ひません。が、何だか片思ひのやうな氣がいつも僕にしてゐたので、去年の暮に大阪を辭して上京する時にも、僕はお知らせさへしなかつたわけです。僕は、少くとも、あなただけには――僕の初戀であつた爲めに――親しみを持つてゐたいのは山々ですが、それさへ出來なくなつてしまひました。只今では、あなたの父なし兒の德太郞さんだけが、まだ無邪氣だから、僕の愛情を少しでもつないでゐるのです――恰も僕の兒でもあるやうに。

僕の兒ででも――と申しますと、あなたは却つて御不快に思ふかも知れません。が、僕にはそんな感じがもとからしてゐるのです。

詳しく申しますと、あなたと十三年ぶりで廻り合ひ、一緒に近江の石山へ行つた時の感じをあなたに書き送つてから、もう、またおツつけ第二の十二三年ぶりになります。其間にあなたがたと合ふ折は二回ありました。其第一回は、僕が大津の中學校に一ケ年餘り奉職してゐたのを切り上げて再び東京へ歸つてから、間もなく、――たしか一年も立たぬうちに――また僕が關西旅行に出かけた時でした。其時あなたは通ひ看護婦として、京町堀――でしたらう――の或人の二階を借りて、おツ母さん並に不具な兄さんと共に住んでゐました。姉さんはまだ橋立附近の病院に勤めてゐると云ふので、會へませんでしたが、今一人、人口がふえてゐました。それがやツと這へるやうになつた德ちやんでせう。

『お玉も、あなたにお目にかかつてから燒けになりまして、な』と、おツ母さんはあなたの留守に僕に說明しました、『男がでけたのはええけんど、九州の人で、子供が生れんうちに籍を入れるかけ合ひに歸る途中で、岡山の病院で脚氣衝心で死にまして、な。』

『てゝなし兒！』この考へだけを以つてでも、僕は一しほあなたに同情を加へないことはなかつたのです。無論、僕の爲めにあなたが燒けを起したとはおツ母さんだけの解釋でせうが、僕が女房を持つ

てたのが動機になつてあなたも男を持たうと云ふ氣になつたのかも知れない。十二三年前にやツと僕があなたがたに會つてから、半月もたたぬうちに、おツ母さんと兄さんとは一時國へ引き上げました、ね。あなたと喧嘩をしたからと云ふのでありましたが、察するところ、兄さんが例のあなたに對する變な燒き餅から、あなたの思ふ人の遊びに來るのを邪魔するやうなことがあつたのでせう。僕はそんなこととは夢にも知らず、おツ母さんや兄さんのめんだうが無いのを幸ひ、每土曜日若しくは日曜には、きツと缺かさず、大津からわざ〳〵大阪へ出て、江戶堀の產科病院へあなたに敬意を拂ひに行きました。それが何もで二ケ月か三ケ月つづきました。おしまひには、あなたがいやな顏をするやうになりました。そして病院の取りつぎや下駄番が僕に聽えるやうに、『中谷の色男』などと云ひ合ふやうになりました。僕はそんな噂の爲めにあなたが僕の來るのを厭がつたと思つてましたが、男は別にあつたのです、ね。これが僕の德ちやんに對する一つの思ひ出です。

それから、僕をまた久し振りの客として――京町堀の二階でです、ね――德ちやんを兄さんに預けて置いて、あなたとおツ母さんとが下へ行つて、僕の財布が注文した品物を料理などしてゐるうちに、德ちやんがはしご段の上から下までころげ落ちました。

二階が二間になつてゐた奧の方で僕は寢ころんでゐたのですが、その音を聽いてはね起き、

『さア、すまないことをした』と思つて、下り口へ驅け付けると、そこに兄さんはのツそり横になつたからだを延して、下の方をのぞきながら、

『どうしたのぢや』と云つてゐました。

『どうしたも、かうしたも――』下でお母さんはわく〳〵してゐた。

『…………』あなたは何とも云へない險相な顏をして、――こんな時にばかり、お氣の毒なことには、あなたの片頰の深い傷が最も役に立つのですが、――泣き入つてる子を抱いて段をあがつて來ました。

『ちよツと、とろ〳〵としただけぢやのに――。』

『年中寢てをれる人が』と、お母さんはあなたのあとからあがつて來て、心配さうに云ひました。

『大切な子をちよツとのまだけ預かつてて、とろ〳〵せんでもええぢやないか？』

『そりやそやけんど――つい、とろ〳〵と――』

『…………』あなたは兄さんの申しわけには頓着せず、やツと泣き出した兒をあふ向けに疊の上に寢かせ、獨り言のやうに、『若し死んだら、どないするんや』と云ひながら、それを裸にして、その兩手を別別に引ツ張つて見たり、兩足を延して見たりしました。多分、どこか挫けてゐないかどうかを調べて見たのでせう。再び衣物を着せてから、抱き上げて、『おう〳〵、役に立たん人がをるさかい、な

ア』とゆすりながら、あなたは德ちやんに牛乳の乳くびを與へました。
おッ母さんも多少安心したやうでしたが、兄さんに對して長たらしい愚痴と押し問答との末に、兄さんをしてあなたの前にあたまを下げしめました。
その間、僕は何と云つていいのか分らないので、默つてゐました。心では、然し、あなたがたのそれほど大切にしてゐる中谷の新らしいあと取りが、僕がたまたまに舞ひ込んだ爲めに若しかまだ兄さんのやうな不具者になつたらと云ふ心配がさきに立つて、物が云へなかつたのです。これが僕の德ちやんに對するまた一つの思ひ出です。てて無し子が僕の爲めに不具となつて、その上若しあなたが育て切れなくなつた時は、僕がしよひ込むより外に道がなからうと。これはその時の僕の眞實の決心でしたから、若し果してその場合にでもなつたら、一言も苦情なしに僕は德らやんを引き受けたでせう。然し又これは僕があなたに同情を賣り付けるやうな弱い、云ひ換へれば卑劣な、考へではなかつたのです。その證據には――これもただその時の心理狀態であつて、外部には實現しないことでしたが、――僕には厄介な親類を持つたと云ふのと同樣な呪咀心がありました。因業な家には因業なことが續くものだと――無論、德ちやんも不具になつたと殆ど想像的に斷定してゐましたから。
あなたは僕にまで斯う云はれてくやし泣きをしますか？いや、一度尋常に泣いて御覽なさい。若し僕の滿足するだけの誠實を以つてあなたが泣ける人なら、僕は、今でもあまり有福な身分ではあり

ませんが、あなたがあなた自身で――若しくは姉さんの手紙で――若しくはおツ母さんを通して――、時々僕は無心をかけた度毎にでも、僕は今度の如き五十圓は愚かなこと、もツと／＼奮發して奔走をし來てたのであつたでせう。が、僕は、もう、あなたがたを人情の點から――酷薄な云ひ分に驚いてはいけません――見限つてゐました。

僕はあなたがたに全くの他人であればこそ今まで別に衝突もなく、途切れ／＼の御交際をつづけて來ましたが、本統の御親戚と云へば、皆、あなたがたを初めから見限つてゐたのでした。ぶしつけに申せば、貧乏こじれがして、あなたがたの方から思はず知らず不義理をしたり、段々敷居が高くなつたりした點もありませうが、子供の時から僕がおぼえてゐる記憶によると、どうもあなたがたの態度にもよく無かつたことがあつたやうに思はれます。おツ母さんが人のことをよく惡口云ふ癖は、あなたも曾て僕に訴へた不平の一つでしたが、實は、僕の記憶によると、あなたのお父さんも國にゐた時から同じことで同僚から排斥されたことを、僕は僕の父からよく云つて聽かせられました。これは、但し、舊藩に於けるかの騷動の時に敵味かたに別れた反感が殘つてゐた爲めでもありませうが――これが爲めに、僕のあなたに對する初戀並に途中からまた燃え返した見ず戀の事情を知つてるのは、僕の姉だけであつて、父には（その後のことではどんなことを僕がしても責めなかつたほど寛大な父でしたが）その死ぬまで、あなたのことは塵ツぱしも語る折がなかつたのです。

それに、僕が國を出る時のいとま乞ひに、僕の叔父のところへ行くと、――今でもあり／＼とおぼえてますが――第一に忠告したことは、東京は生き馬の眼玉をも拔くと云ふおそろしいところだから、スリにスラれないようにしろ！　第二に、お前はよく中谷の娘のとこへ行くさうだが、今度國を出るのをしほに、以後交際はやめろ――あいつ等のおやぢは士族のかすで、去年、藩主の歡迎會をやつた時にも西洋料理のパンが珍らしかつたと見え、右隣りの客の知らないと思つて右手で鷲づかみにして泥棒したが、生憎、御本人の右の眼は不斷からつぶれてゐるのだと。

あなたのお父さんの片眼なのは、あなたが後に病ひから受けた片頰の傷と同樣、止むを得ないことです。また、お父さんが藩主歡迎の席で泥棒をしたとは俄かに信じられぬことでしたし、またさうであつたとしても、それはまだ無邪氣であつたあなたの罪にはなりませんでした。が、僕は何だか、斯う急にあなたに對する十年の戀も――とは人のよく云ふ形容ですが、實は、僕の十一歲から十三歲まで私かに戀ひ慕つてゐて、十四歲から直接に往き來して親しむやうになつた無邪氣だが、その時代としては狂熱な戀も――一朝にしてさめてしまひました。かの第一信――と申しても、あなたに初戀物語りをするのはこれが第二回で、さきのは十二三年前の長い手紙です――には、あなたと最初の音信不通になつたのは僕で隱遁癖に落ちたからと斷つてあります。無論、それが大原因でしたが、實は、今一つ、この叔父の言葉を聽いて、叔父にもあなたにも兩方に興ざめたと云ふ理由があつたのです。

然し僕にはそんな不興は、隱遁癖と共に、段々無くなつて行つたのですが——

どうして、まア、あなたの家には因業なことが續くのでせう？　それがまた外部的にばかりでなく、內面的にも現はれてゐます。あなたを僕が初めて大津の假寓に案內した時、あなたは翌朝のあツたかい飯を飯びつの眞ン中をゑぐつてよそつて行つたさうです。僕の先妻はその時、あとで、何たる無作法だらうと云つてゐました。僕は大して氣にもかけてゐませんでしたが、大津を引きあげて東京へ歸つた時、父の話によると、また、あなたのおツ母さんが僕の大津在住中に上京して、僕の父を尋ねられた時にもあなたと同じことをなすつたさうです。僕の先妻と父とは意見が相一致して、あなたがたのさもしい心根を非難しましたが、僕は辯解の言葉がなかつたのです。

『人が馳走をしてやるのに——乞食根性に限つて、そんなさもしいことをしやアがるものだ。それに、金がないから、旅費を貸してくれろツて——』

『さうでしよう——』

『汽車賃だけしてやつたが——』

『その歸りに』と、先妻は待ちかねるやうにして父に云つた、『あたし達の方へも來て、矢ツ張り、お金を貸せいでしたよ。』

斯うぶしつけに申せば、如何にあなたゞツても、少しは考へるでせう。昔の士族が貧乏したからツ

ても、さうゆとりが無くなるものとは限りませんよ。あなたがたはすべてさうしたことで、いい親類から――近頃、あなたの田口の叔母さんと從兄妹とが時々やつて來ますが、その人々からでも――遠ざけられてゐるのです。

あなたの姉さんでもさうで――僕が、あの頃、天の橋立へ行つた時、二三里さきの病院へ電信を打つて呼び寄せ、文珠堂のそばの宿屋の二階で、二つ床を並べて一夜を話り明しまして、ね、實は、あなたに石山の歸りで對したやうには大膽にでなかつたですが、折を見て、

『どうです――手を握り合ひませうか』と僕は云ひました。

『さア――』姉さんは斯う叔母さんらしい口調で輕く考へ込みましたが、それツ切りで直ぐまた昔の物語りに移りました。

それでも、その翌朝早く車を列ねて途中まで一緒に行き、僕は但馬道の方へ別れた時には、少しも悪い感じを僕は持ちませんでした。が、その後、大阪で度々逢つて話して見ると、あなたよりは責任が輕いだけ呑氣なところはありますが、矢ツ張り、あなたがた共通の趣味――と云へば、悪い趣味の貧乏ひねくれと薄情とです――が見えます。

兄さんと來ちやア、また――

ちよツと待つて下さいよ、話の順序があまり勝手氣ままに延びてしまつたやうです。初めの方で僕

は『第二の十二三年ぶり』と云ふ範圍を附けて置きましたが、その間に於ける第壹回の會見當時のことは、もう疾くに云つてしまつたのでした、ね。これから、第二回のことに移らねばなりません、それは僕が一昨々年から新聞記者として大阪へ赴任してゐた間のことです。あなたは、今もさうでせうが、若松町で産婆の看板を出してゐました。

僕のこの赴任中に度々お尋ねもし、またいろんな御無心に會ひもし、――これはどうせ僕が滿足に應じるだけの實力も無かつたわけで、甚だ不本意でしたが、――つく〲あなたがたを――但し德ちやんを別として――いやになつてしまひました。然し德ちやんが無事に育つてたのだけは僕の最も安心したところです。この期に於て初めてあなたがたをお尋ねした時は、僕の話はあの子のことに成るべく觸れないやうにしてゐました。と云ふのは、

『あの子も亦あたまが惡おまして、なア』とでも、あなたなりおツ母さんなりに聽かせられでもしたら、僕のおづ〱豫期してゐた心がその場で直ぐにもすすり泣きをし初めたか知れなかつたのです。そして、『德太郎もおかげさまで』と、おツ母さんが――時々ぶしつけにいみやを云ふ人が――語り出した時には、僕は心の耳をふさぎたかつた。が、僕の豫期とは幸ひにも反對でした、『學校の成績がようて、なア。』

『さうですか』と、僕は膝が飛びあがりました。そして多年の氣がかりが一時にすツかり直りまし

た。

そのうち、あの子が外から歸つて來たのでした。――如何にもいたづらツ兒のやうすをして。

『お客さんの前で立つてるとは何ですか？』斯うあなたに云はれて、あなたのそばにどたりと坐わつて、お辭儀をしてから、直ぐあなたにすがつて、

『貳錢おくれ、めんこ買うたるんや』と云つた。

『また負けて來たんだツしやろ――これが東京の叔父さんだツせ。』

『さうか？』あの子はあなたと一緒に僕の顔を見ました。

僕がその時めんこ代を出してやりましたら、直ぐまた飛び出して行きました。

『やんちやで困ります』と、そのあとを見送りながら、おツ母さんが云ふと、あなたはまた母親らしい聲で、微笑しながら、

『學科の方は優等やさかい、品行さへ直せば級長にしてやる云はれても、僕は級長なんか入らん――餓鬼大將がええツて！』

『それもいいでせう』と、僕け答へました。そしてそれから月に一度や二度はきツとお尋ね致してゐましたが、僕には、昔からの關係上、何だか、ただそうしなければならぬやうな氣がしたからであつて、實は、段々とそれが苦痛になつて來ました。姉さんはいつもあなたのとは別な病院のゐ附き看護

婦でしたから滅多にお目にかかりませんでしたが、つまり、おもにあなたとお母さんとの惡い本性が――如何に遲鈍な僕にでも――十分に見えて來たのです。その上、兄さんと來ちやア、年と共に例の燒き餠心が進んでゐて、あなたに男が――僕でさへ――近づくのをやきもきする樣子が見えました。その癖、面と向へば猫のやうにおとなしくなつてたぢやアありませんか？
　今でも忘れません。――矢ツ張り、何でもそんなことで誰かのことに就いて兄さんがあなたを二階に呼び付け、猛り狂つてたのでせう。
『たんとお怒鳴りやす！　近處ではまたかと笑ろてまツさ』と云ひながら、あなたが二階からはしご段を下りて來たところへ、僕がぶつかりました。
『近處がなんや？　笑ふものは笑はせとけばええ！　今の奴らはどいつもこいつも禮儀を知らん！　男と女と一緒に道を步いたり、女のところへやつて來たり――』
『あれだツさかい、な』と云つて、あなたは僕を迎へました。
　そと格子から一直線に裏へ通ろうち土間のひらき格子の中から、おツ母さんも僕を認めて、たすきをはづして、上の方から出て來ました。
『相談があるツて、女と相談してなんになる？　中谷の主人はおれだ！　おれは斷然あんな奴の出入りを禁止する！』

『信(しん)さんだツせ』と、あなたは上を向いておほきな聲を出した時は、僕はさきへ奥の座敷へ這入つてました。

『信さんだツて、誰だツて、かまふもんか？　女は女らしくせい！　兄を馬鹿にして——近處に聽えても、おれの恥ではない？』こんなことをなほ十分ばかりも二階のおほ聲がつづけてゐましたが、僕はあなたがたに挨拶をしたり、狹い裏庭(うらには)の便所のそばに短い竹二三本の——これもせせこましくいぢけた——朝顔の小さい花が午後になつてもなほ咲いてるのを見たりしてゐたので、あとの方の聲は聲ばかり聽えて、何を云つたのかおぼえませんでした。

　そのうち、聲がやみ、兄さんがどか／＼と下りて來ましたので、どんな活劇(くわつげき)が初まるかと思つたら、なアに、——おとなしくにこ／＼と僕に挨拶して、今までのことはけろりと忘れたやうな樣子でした。

　確か、その翌日(よくじつ)でした——あなたが僕を新聞社へ尋ねて來て、兄さんを氣ちがひ病院へ入れる打ち合せをしたのは。

　以前にも一度さうしようとして兄さんを車に乘せてつれて行つたが、感づかれてその計劃(けいくわく)は病院の門の手前で失敗したことがあるので、人力車に乘るのをさへ兄さんはその後は承知しないと、あなたは語りました。車どころか、便利(べんり)な電車をさへいやがつて、どこまでもてく／＼歩いて行く人なんで

すもの！

然し割合に僕を信じてゐるのだから、兄さんをその好きな古物掘り出しに行くと云つてつれ出し、郊外の或癲狂病院へつれ込むことにして、あなたが先づさきへ出發しました。僕等はあとから車で行きましたが、この時も、兄さんは門内に引き込まれるが早いか、車の上につツ立ちあがり、猛烈な勢ひで飛び下りて、門外へ逃げ出しました。僕が直ぐあとから下りて、引きとめましたが、力負けがしてどうしても、門内に入れることが出來ませんでした。少しでも門を出てゐれば、もう、暴力は警察に問はれますから、僕も致しかたが無かつた。そして玄關まで來ればいや應なしにふんじばらうと、手ぐすね引いて待つてゐたあなたと醫員等とを失望させました。今回の御不幸もおツ母さんでなく、兄さんであつたら、極順序がよくツて、誰かまた二度目のこんな失敗をしないでもよかつたのですが――

『おれは病院へ入れられるやうな氣ちがひやない！　惡いこともせん！』何でもこんなことを兄さんはその時叫んでゐました。兎に角、それ以來僕は兄さんに全く信用がなくなりましたが、それでも面と向つて見れば、あの人もにこ〳〵してゐました。一體、あなたがたは僕をいつも歡迎してくれましたが、行けば必らず御馳走の費用を出す爲めだけのことではないか知らんとまで、僕には思はれ出したのです。決して恩にきせて云ふのではありませんが、あなたがたの貧乏こじれがした薄情を思ひ合

せるやうになつたからでした。
曾て僕が、あなたにめぐり合つた喜びとあまり夢中になつた失禮のお詫びとの爲めに、あなたに指輪代貳拾圓を送つた時も、――その時はまだ僕も割合にうぶであつたのですが、――あなたは受け取つた知らせのハガキしかよこしませんでした。僕としては、あなたからもツと感情の籠つた手紙を受ける意であつた――やツとめぐり合ふことは出來たが、信さんには奥さんができてゐるのだから、私も心置きなく結婚の相手を見つけるかも知れないとか――なほこれからも私は獨身でゐる覺悟だから、兄弟として相談相手になつてくれろとか――少くとも、それに似たことがあるべきだと僕は豫期してゐたのです。が、それから五日間程も待つてゐても、何の便もないので、僕はおツ母さんに訴へました。あなたを嬉しさと懷かしさとの餘り、車の上で抱き締めたと云ふことを白狀して、それでもそんなことの爲めにあなたが怒つて了つてるのなら、僕の冷めてからの親切をも餘りに馬鹿にしてゐる譯ではないかと。
『あの子は筆ぶしやうで御座います故に』と、おツ母さんからは詫びの手紙が來ました。無論、あなたがたの筆ぶしやうなのは、その後も、僕はおほ目に見て來ました。が、今日では、もう、僕も感情をうそにも成るべく綺麗に取り扱つて置かうとするやうな氣分を失つた年齡に達してゐますし、從つて、あなたから若い戀人の情を要求しようと云ふ野心なども持つてゐません。が、あなたがたから僕

が以上述べ來たつたやうな惡印象を受けたことは、おツ母さんの死と共にはまだ帳消しになりません。

今後のことを想像すると、あなたは兄さんとの下らない喧嘩の度數がふえるばかりでなく、それがまた一層激烈になるでせう。おツ母さんは無し、籍だけがある姉さんはいつも外の人であつて見れば、仲裁者と云ふ仲裁者もないのですもの。そしてその喧嘩は察するところ、段々――兄さんの心持から云へば、――兄弟喧嘩よりも、寧ろ夫婦喧嘩と同樣になつて行きますよ。厄介な人があとに殘つたものだと思はれますが、氣丈だと云へば云へるあなたのことですから、僕などが入らない口を出さないでも、何とか切り拔けて行くでせう。

然しあなた御自身だツて、そんな厄介が皆取り拂はれたあかつきにも、從來のままの心がけでは、とても、僕の望むやうな情愛の厚い人にはなれますまい。無論、なれないでも、あなたはあなたとしてこれまでもやつて來たのですから、これからもそれで通せることは通せるでせう。が、女が長く獨身でゐた爲にヒステリになつたと云ふやうな――まだ少しは奥ゆかしいところがある――こととは違ひ、心のさもしさは身體の健全を以つて補ひの附くものではない。まだ僕に殘つてる老婆心から云へば、あなたのお家の遺傳若しくは惡風と思へることは、せめて、まだ無邪氣だらうと思ふ德ちやんには傳へたくないものです。

學校なら、もう、今年から中學でせう。それとも、丁稚にでもおやりになりますか？
思ひ起すと、僕があなたと德ちやんとをつれて、僕の櫻井新市街地の家から箕面の動物園へ行つた時のことです――僕の後妻は僕があまり年うへなのをいつも不平がつてゐるのですが、僕と同年のあなたと一緒に僕が德ちやんをつれて僕の門前を出るのを見送つてたので、あとになつて、『よく似合つてましたよ』と冷かしました。無論、これはただの冷かしで、先妻の時のやうな燒き餅などは少しも入つてなかつたのです。僕は、一時のやうな放蕩をやめて、今の妻を貰つてからは、どんな場合にでも他の女とは關係しなくなつたことを、かの女は信じてゐますから。また、僕の實際がさうですから。然しこんなことを云ふのではなかつた――德ちやんのことを最後に思ひ起したいのです。
動物園は山に設けてあるので、その絶頂の觀覽車などは僕の家からも見えました。そこへのぼつて行く途中に、――無論・箕面に行つてからのことですが――二頭の象に對する象舍があります。その前に立つて、あの子は象に煎餅をやりながら、何度も象におじぎをさせてゐましたそのそばを、一人の旦那につれられて、一人の可愛い舞ひ子が下りて行きました。あなたも思ひ出すでせうが・德ちやんはその方に目を向けて、それがまた別な勾配を下りて行くのを見送りながら、あなたに云ひました。

『あの子をつれていて、うちのをなどにおし、よそのをなどは皆きたない。』
『それも好が、ね、德ちやん、お前が大くなれば、綺麗でもあり、又人情も深い細君を貰ふんだ、ね。』
『さうしてたんとお金を持つて來る――』と、あなたは笑つて附け加へました。
あなたは僕のあなたがたに對する當てこすりを感じなかつたのです。これは必らずしも東京人と大阪の習慣に染んだ人との間の相違ばかりではありませんよ。
僕は金を欲しい人には、ありさへすれば、與へたいのです。が、金を欲しい時にばかりやつて來て、金を貰つた時にばかり人の親切を感じるだけの――云つて見れば、まア、鈍い、然らざれば、生活にばかり勞れ果てたやうな――心根を、あなたがたの家風らしく、まだちツとも世間にもまれた影もない無邪氣な子供には、傳へさせたくありません。然し、それも、もう、生れながらにしてあなたの血と共に既に傳はつてるものとすれば、僕は今からあの子をも――今までは、あなたがたのうちからただ一人、眞人間として出るかと賴母しく思つてたのですが、そのあの子をも――見限ります。
ながが年云はうとして云はなかつた言葉ですから、感情が激して、多少はおほ袈裟に見えませうが、この手紙を讀んであなたが泣かないまでも、むきになつて怒るのは承知の上です。が、これが爲めに少しは悟るところもあつて、德ちやんだけはよく育ててお行きなさい。

あなたのお考へ次第で、是があなたとの最後の文通になるかも知れませんが、夫も僕は承知の上です。

兎に角、兄さんとお母さんとの死に順序が、僕等の望み通りに行かなかつたのは、お悔み致します。

信より

玉江さま

——(大正三年十二月)——

懶け者の日記より

▼或日、――

おれは植物園のかたわらの坂の上に立つてゐた。盲啞學校の庭の櫻の蕾が大分ふくらんだやうに見えて、あたたかい春の日だ。そらはうららかに晴れ渡つて、碧い弓なりの天井が向ふへ垂れ下がつたのに接して、小日向の高臺がぼうつと霞んでゐる。前の谷あひには久堅町の不揃ひな家並みが穢らしく立て込んで、その灰色のいらかの上にも春の日は萬遍なく愛嬌をこぼして見せてゐる。

おれは成るべく植物園の土手の方に寄つて立つてゐるつもりであつたが、出し拔けに、

『はいツ!』怒鳴られたのでびツくりした。ふり向くと、ごむ輪の車の深くほろをおろした奴が威勢よく走つて行く。

『馬鹿!氣を付けろ!』おれは突發的にだが斯う怒鳴り返した。腹のどん底までもふらふらと目舞ひがしたかと思つたのを堪へて、暫らく車が坂を下りて行く後ろ影を瞰み付けた。が、われながら苦笑しないではゐられなかつた。『詰らない』と思ふとたん、忘れてゐた空腹が俄かにまた感じられて來

た。
ゆふべから飯を喰はないと云ふ事實が――これがおれの一番いやな事實だが――機會に乘じてまたおれを脅迫したのだ。おれはこれを高利貸の來訪を防ぐやうに、寄せ付けぬ方法として、朝の十時、十一時頃まで寢てゐる。時によると、一日寢てゐることもある。それだから、晩はいつも梟のやうに起きてゐる。で、宵の中は市立圖書館へ出かけて行く。(尤も、うちでともす石油がない時が多いのだから。)歸つて來ると、丁度十時頃になるので、お寺の門のくゞりをこツそり明けて這入ると、足おとのせぬやうに石段を下りて、本堂の狹い横みちをそツと裏の三疊敷へあがるのだ。そして眞ツ暗やみのまゝで、敷きツ放しの褥にもぐり込んでしまう。(おれは庫裡から自分の部屋へ行くことは知つてをらぬでもないが、間代が三ケ月分もとどこほつてるのを催促されないので、却つて一しほ寺の人と顏が合はせ難い。)火の氣はなし、薄團はうすツぺらだ。おれが大抵それから眠られないのは、一つには、これが原因でもあらう。

そしてさえにさえて行く神經と共に、おれは猫の眼のやうにくる〳〵と闇の中をまわつてるが、そんな時に限つて、不斷は氣の付かぬ物おとが聽えて、また〳〵おれの邪魔をするのである。阿彌陀如來の像に鼠が小便をしツかける音――どうした拍子か、どのあたりかの小い位牌が倒れた音――天蓋に忍び込む穴氣の顫える音――がアんと、幽かに、これも鼠公が大きな磬の底に落ち込んで、それか

ら驅けあがらうとしてゐる音——
『亡者のさきぶれ、』これはおれに於ては未だ曾て聽いたことがない。が、うちの和尚などは、時々、それを聽き分けて、さア、あすは佛さんがひとり來ると豫知して前祝ひをしたり、けさの音が大きかつたから、きツと、けふ朝のうちに一と商買やれると待ちかまへたりする。それがまた、たまには、當るのだからをかしい。

　おれにはそんな商買もないのだ。どうせ寢苦しいのなら、同じ神經のさえでいい夢でも思ひ浮べる方がましだと思つて、おれはいつもそんな時にはかの一少女のことを浮べる。うるみを持つた大きな眼、笑ふと可愛らしいゑくぼを出す頰、お下げにクリム色のリボン、派手な友禪の振り袖にすツきりした姿——自分の胸さきを兩袖で押へて、ちよこ〳〵と歩いて來る。
『常子さん、隨分だわ、ね、澄まし込んで——今日は』と、おれはわざと丁寧にあたまを、今回は腰まで折つて、下げて見た。
『だツて、——濱田さんてばまたあんなお辭儀をなさるんですもの。』
『馬鹿！』おれはまた斯う叫んだが、今度はわれとわが心に云つたのであつた。こんなあぶない坂に立つてまで、空腹をかかへながらも、本年十四で三輪田の二年になる娘ツ子のことを考へてゐた。
おれの心はいつも顫えてゐるのだ。おれの心はいつでも、その場のいざなひにより、ありの儘の自

然に感應して行く用意が出來てゐるのだ、無邪氣な、天眞爛漫な、淸淨な、春の若草の一葉に宿る露の滴りにも、おれの心は顫え、おれの心は腹のどん底までも響く。

「吾等は彼の露の滴りの落ちかかるによりて戰慄する所の薔薇の蕾と何等相似たるものぞ。實にや吾等の人生を愛するは吾等の人生に慣れたるにあらずして、寧ろ吾等の愛することに慣れたるが故也。愛には常に何かの亂心あり、されど亂心の中にも亦常に何かの理性あり――』と、ニイチエは斯う云つたではないか?

亂心に就けば戀だ――おれは時々或敎會に行つて、子供の爲めにお伽ばなしをしてやることがあるが、そんな時にも、少女の――どんな少女のでも――瞳をじツと見詰めてゐようものなら、おれの眼の中に何とも云ひ知れぬ涙が一ぱいに溜つて來る。おれはまだ何か淸淨無垢の物を得て生きたいのだらう。

然し、理性に就けば死だ――おれは働きたくは無い。否、自分の氣の向かない事にこき使はれて、おれのこの自由な氣分を疲れさせたくない。おれにはどツちとも分らぬ。或哲人が云つた通り死んだ方がましか?それとも、或時人が歌つた通り、『神聖な遊惰』に於て生きながら涅槃境に這入つてゐる方がいいのか?

兎に角、おれは午前の十時頃から家を出て、何のあてもなくここまで來てゐたのだが、おれは猛烈

に餓ゑの攻撃を受けてゐた。おれはどうにかしてそれを癒すべき方法を講じなくちやならなかつた。
おれはラスコル＝コフのやうな心を懷いて坂を下り、交番の前を右に曲つた。

▼或日、――
曇、風、雨――雨、風、曇――から云ふ風に續いて來た天候はけふも曉けがたから雨になつてしまつた。おれは蒲團の中にもぐり込んで外の雨垂れのびしや〳〵する單調な音樂を聽いた時には、もう、つく〳〵泣きたくなつてしまつた。
天氣になつたらば――暖くなつたらば――と、毎日のやうにそらを見上げて、心に描いてゐた劃策もすツかりはづれてしまつた。おまけに寒さにいぢけたおれの心は何とはなしに滅入り込んでしまつて、暗い、陰氣な、情けない、詫びしいことばかに考へてる。
おれは襟もとから這入る冷たい風を氣にしながら、蒲團が短いので冷たくなつた足をちぢめて、からだを圓めてゐた。それでも、雨垂れの音を聽くと、そして外氣のじめ〳〵としてゐるのを想像すると、そして又けふ炊く米も炭も、それにがま口に一文もないのを考へると、どうしても起きる氣にはなれなかつた。おれはこの儘死んでしまひたかつた。おれはこのままおれの體溫のぬくもつてる間に消えてしまひたかつた。――おれの頬には、いつか冷たい涙がこぼれてゐた。

おれはやがてドンを聽いた。そこらあたりの諸工場から一齊に起るポーを聽いた。ドンやポーがおれに人生の多忙と奮鬪とを致へようとしたのは、もう、昔のことだ。それでもおれは何か喰はずにはゐられなかつた。

おれは急に思ひ切りを付けて、蒲團の中のぬくもりになほ未練はあつたが、ワン、ツー、――スリーで突然はね起きた。そして冷たい衣物に着かへて、面倒だから顏も洗はないで出る支度をした。支度と云ふのは、机の上に新飜譯小說『遊蕩兒』と雜誌二三冊と(いづれも友人から借りて來たのだ)を風呂敷に包んだ。そして足駄はこの間前齒が折れたままなので、ちびた日より下駄にハンケチの片はじを裂いてはなををすげた。そして雨のびしよ〳〵降つてる中も、傘もささないで、外に出た。それでも、歸りには、風呂敷の中に、少しばかりのふかし薯といい色の草餅とが這入つてた。

▼或日、――

冷たい春の雨がしと〳〵と降つてゐる。槇町の煎餅屋の角には立ん坊と車夫と夕刊賣りの子供とがしよんぼり立つてゐた。三人は同じやうな憐れな眼付きをして往來をながめてゐた。然し、夕刊賣りの子供は骨が折れても蝙蝠傘をさしてゐる。車夫は所々破れてゐても雨合羽と饅頭笠とをかぶつてるが、立ん坊に於ては、きたならしいシャツの上にぼろぼろの腹掛けを着て、股引きと云へば膝までし

かないのをはいて、鳥の巣のやうにそそけた頭髪には雨をよける何ものも無かつた。渠は腕組みをして、時々風の工合で吹きつける雨を短い廂に避けながら、顫えてゐた。そして青黒い頬骨の出た顔の中の、くぼんで光澤のないガラスのやうな眼は、じツと坂下の方を見詰めてゐた。

その前の往來を自働車、ごむ輪の車、豆腐屋、煮豆屋、箱車等が通つた。清方の繪に見るやうな女が高い塗り下駄に合羽を着て、すツきりした腰付きを見せて、藍蛇の目の傘を心持ちかしげて通つた。電車は絕えず地をとどろかして通つた。が、渠だけは動かなかつた。夕刊賣りは求めに應じて一錢二錢とため込んで行くが、――車夫は出鱈目の旦那を呼んでゐるが、――立ん坊は、そのからだが寒さで顫えてこそをれ、その目はひもじさを訴へるやうにくる〳〵轉じてこそをれ、少しもその場を動かなかつた。

渠は磁石のやうにおれの目をも心をも引き付けた。が、どうすることも出來なかつた――おれも渠の狀態に最も近いのだ。

狹い町の一角――さうだ、地面の上へ人間が勝手に家を建て、道路を區切り、電車を走らせ、電線を引ッ張つたそのほんの狹い町の一角だ。その一角にすら、おれを初めとして、かうした悲劇的な動物が集つて行く！そして殆ど何ものも得られないのだ。社會と云ふものはなぜ天然自然の喰ひ物が成る樹木を澤山植え込みにして置かないのだらう？おれ達にまでなぜ働いて喰へと命令するのだらう？

泣きたいよりは寧ろ反抗心が起きる――南洋かどこかの無人島へ行つて、あたたかい椰子の樹かげでぐツすり寢ころんでゐたい。

灰色の空からは絕えず冷たい春の雨がしとしとと降つてゐる。

▼墓場の上にて、――

昨夜の雨の名殘りが、朝のうちは、まだ煙のやうな陰氣な靄でそらを閉ぢ込めてゐたが、正午近くになると、こころよく晴れて、藍を流した鏡のやうな空はうるみを帶びた日光に輝いて來た。

空氣も綠り色を帶びて這入つて來る窓――そこから下を見ると、五尺ばかりの間隙を置いて直ぐ崖で、そのおもてには桑の木や欅の若木に、蔓じとみやのうぜんかづらなどの蔓が這ひまつはつて、粗末な垣根のやうになつてゐる。

その下は墓場だ――朽ちて倒れかかつた卒塔婆や、靑く苔のむした石塔やがそこらあたりに見えてゐる。この墓場をゆるく取り卷いて、榛や欅や榎の木などがあつて、その枝葉の間から見えるのは、暗褐色のお寺のいらかだ――お寺の陰氣臭い窓が、また、遠い昔の聖者のまなこであつたかのやうに覗いてる。山門に近い松や杉の上からは、家鳩のむれが舞ひあがつて、一樣に白い羽根のうらを見せて、碧空を飛んでゐる。

さう云ふ光景をおれは窓によつてじツと見入つてると、向ふの丘を通る電車の響や、下駄の齒入れの鼓の音や、時々聽える自働車の唸りなども、けふに限つて、如何にも心よく晴れやかな感じを與へた。見よ、日光の輝き——おれの周圍を活かす緣りのひらめき——おれの爲めには、何と云ふ強い生々慾の挑發だらう！

おれのやうな者でも生きてゐたくなつたと云はうか——それとも、おれの主觀の如何によつて、どうとも解釋出來ると云はうか？これも、然し、おれには自然だ。

自然は人に生を強いる。また、死を強いる。この生死兩樣の交叉した矛盾の人生に、人間も亦矛盾な生活を——馬鹿なやつは、平氣で——して行くのか？おれには、冷酷な落し穴と慘忍なくびきとが絕えず人間を脅かしてゐるのが分つてるのに！

おれは現在を返り見、過去未來を思ふて實に暗憺たらざるを得ない。

どこからかピンク〱と云ふ小鳥の聲がして來たが、そんな夢のやうな聲にさそはれるおれではなかつた。

▼或日、——

おれは牛天神のベンチの上に眠つた。あたたかい日で、日光はおれの顏に心地よくあたつて呉れ

た。おれは非常な疲勞から來た、穴へでも引き込まれて行くやうな倦怠と睡魔とに襲はれたのであつた。五體もとろけよとばかりぐツたり横になると、街の物おとはうしほの湧くやうな遠鳴りをしておれの耳に響いた。忍ぶやうな風がまた時々おれの裾を掠めた。あたまの上の梢では、水の流れるやうな微妙な音樂を小鳥どもがかなでてゐた。

すべてこれはおれの感覺ではないか？すべておれの意識にのぼる心よい和らかい調子の感覺ではないか？そしてすべてかかる快樂を放浪者でなければどこに得られよう？おれは一種の快樂主義の勝利者となつて、かかる牛天神ベンチ國を獨りで占領してゐたのだ。

そのうちにぐツすり寢込んだと見え、ふと氣が付いてベンチに起きあがると、日はもう餘ほど傾いてゐた。西の方の遠い地平線の上には、淡い斜光を受けた秩父連山（であらう）が夢のやうに美くしく浮き上つて――それがおれの眼には、如何にも非現實な芝居の書き割と映つた。が、それはほんの瞬間のことで、直ぐまた相變らず同じやうな不安がおれのからだのまわりに集つて來た。

おれは、つい二時間か三時間まへまでは、パンの口にありつかうと思つて、尻のこけた犬か狼のやうに東京市中を駈けづり廻つたが、おれの得た結果は疲勞と困憊と失望と、矢ツ帳り空腹とであつた。おれはつくづく、もう一切がいやになつてしまつた。

おれはただじツと考へてゐた――立ん坊同樣にまた車夫のあと押し同樣に働いて見ても、おれの得

た物はおれのその時その時の働きに皆喰はれてしまつた。

少し冷えて來たと思ふと、もう、魔のやうなゆふ闇が足もとの市中を立て籠めてゐて、高架線の土手の上や人家の間から、あちらにもこちらにも電燈の光がおれを瞰み付けた。それが爲めにおれはおれの腹の中をからツぽに射照らされたのだ――不斷なら何でも無ささうなゆふ風の冷え氣味にこたへられなかつた。

▼或日、――

おれはけさからぼんやり机の前に座わつてゐる。社會のおほ馬鹿もの等のやうに手あしを働かせるだけがあながち仕事ではない。然し何かしなくちや、しなくちやとは、おれも絶えずおれのあたまで考へてる。それでゐて、おれはこの二三日をただ白紙の原稿紙をにらむだまま、一字も書くことが出來ない。

おれはこれでもおれにはいつかインスピレイションが來ると信じてゐる。それが來れば、立ちどころに何か一大傑作でも出來ないものではなからう。が、このおれのインスピレイション熱も久しいものだ――何が情けないと云つて、原稿紙に向つて文字と云ふ糧を與へてやれない時ほど情けないことは無い。おれは全く生きてゐる甲斐がない。

おれはそんな時に能く空想を描く。とり取めもない空想だが、何となく神秘的なおもかげがあるやうにも見える。ここに、一つ、多くのうちの一例を擧げて見よう、——

おれはふと、或時、或境内をさまよつてゐた。境内は欝蒼として杉や松や公孫樹が森々と生ひ繁つてゐる。樹木の間からは遥かに丹塗りの殿堂がほの見えて、折からの紺碧の空に照り映えてゐる。傍らの榎の木などには蔦かつらが靑く這ひ纒はつて幾千年の昔を語つてゐる。境内は非常に廣く靜かだ。おれは枯れかかつた大木の根もとに行つて、試みにその大木の周圍を兩手をひろげて計つて見た。驚いたことには、それが八かかへと一尺ばかりあつた。おれの兩手の長さを假りに五尺五寸としても、その木の太さは四十五尺だ。おれがふと見てゐないうちに、その木は伐られてしまつた。そして八疊敷もあらうと云ふ伐り口が樺色に光つてゐた。その上へ、おれは間もなくおれの家を建築した。すると、家の中は何とも云へぬいい香りが漲つた。おれは滿面にほくそゑんで、これでおれの家とからだとにおそるべき地震の憂ひがなくなつたのを、おれの奈落まで貫いてる幸福だとして、大いに祝福した。

▼或日、——

宵から出た南風が夜中になつて餘計ひどくなつた。おれは——どうしたものか——この頃、不眠症

が一しほ烈しくなつた。今夜も十二時を過ぎてからまだ眠られないと思ふと、もう獨りで癪にさわつて、癪にさわつて――矢鱈に髮の毛を搔きむしつたり、蒲團の中で足をじたばたさせたりした。いやに生暖い晩だ。一枚の煎餅蒲團の上にかけた着物が、今夜に限つて、馬鹿に重苦しい。やツとはねのけて、今度こそはとあたまを枕につけたが、矢ツ張り、同じことだ。

時々坂をのぼる電車が地響きをさせて通つて行く音が聽える――裏の西洋館には風が絶えず當つてごうごう鳴つてる。そしてその餘波がおれの枕もとの雨戶をがだぴしさせる。それがまた順々に廣い本堂の戶、障子に異樣な音響を傳へてツてから、遠く闇の中に消えたかと思ふと、第二のやつが直ぐ、もう、枕もとへ來てゐる。おれはいよ〳〵神經がたかぶつて行つて、何とはなしに矢鱈にのしりたくなつた、――

『馬鹿！馬鹿！風ん畜生！』

ああ、眠られないのか、なアと、敵に透きを見せたかのやうにゆツくりと半身を起したが、いきなり、拳骨をかためて闇の中をなぐり付けた。こんな時に、おれに〇〇主義者の代理でも賴んで來たら、きツと無報酬ででも引き受けたか知れぬ。こんな時に、おれを泥棒に出かけようとさそつた者でもあらば、きツと喜んで出かけたかも知れぬ。所謂危險思想とは、實際に、こんな時にこんな古寺の貸し間から黴のやうに生ずるのかも知れぬ。

『おまわりさん、ここに一人泥棒がゐますよ』と、云つてやりたかつた。

おれはマチを探してランプに火をともさうとしたが、それは無駄であるのに氣が附いた。ランプの油はゆふべで、もう、無くなつてたのだ。

さうだ、ゆふべのことであつたTのところへ金を借りに行つたのは。渠のところへ金を借りに行くのは初めてで、云ひづらかつたのだが、思ひ切つて、

『ちよツと十五錢貸して呉れ』と云つた。

『…………』Tは暫らく額の禿げ上つた幅廣の顔を煙草の煙に埋めたが、『實は、君、おれも無いんだよ四錢しか。』かう云つて、にツこりした。

『はア、さうか？矢ツ張り同じか？』おれは口では斯う輕く笑つたつもりだが、心の中ではがツかりして、石油とあすのお茶を買はうとした計劃がくづれた。『情けないやつだ！』かう心で罵つたのは、自分をか、またTをか、おれでおれが分らなかつた。

『どうだい、△△へ口を賴みに行つたかい？』

『行かないよ。行つても徒勞だと思つたから、な――あいつがほんとに誠意を以つてやつてくれりやいいが、徒らに蔭で嘲笑するやうぢやアいやだから。』おれは實際嘲笑されるやうな氣がして賴みに行けなかつた。あいつは如何に働きがあるか知らぬが、宿ぐるまをかかへ車の體にさせたりして、から

景氣をつけてるやうすを見ると、おれも男だ、あんなぺてん師にあたまを下げたくはなくなる。『さうか、ね――そんなら、何か心當りを探して置かう』てなことを云ふて、又おれの見すぼらしい身のまわりでもぢろ〳〵眺められやうものなら、おれはもう心から一生の侮辱を感ぜざるを得ない。▽△等に誠意誠心などがあらうか？おれは誠意とか誠心とか云ふ言葉が輕薄不徹底の徒に使用されるほど世の中に癪にさわることはない。然しさう云ふおれは無能なんだらう。融通のきかぬ男なんだらう。さうして懶惰なんだらう。おれには世俗の眼をくらます履歷もなく、巧言令色もなく、鐵面皮で行く外交術もない。おれにあるのは――あるのは――ただ貧乏と疲弊とばかりだ。

おれは東京へ出てから、もう十年餘りになるが、

『その間にお前は何を得た』とでも聞かれると、おれはこれに答へる言葉を持つてゐない。その間どうにかかうにか生きて來ただけは事實だ。或は嚴密な意味で生きてゐたとは云はれぬなら、ただうごめいて來たと云ひ換へてもいい。おれは世間で貴重だと云ふ長い時間を都會の塵の渦卷きにまじつて、暗い陰氣なじめじめした隅くたに投げ退けられて、みみずのやうにのたくつて來たのだ。

おれはおれをどう贔負目に見ても確かに利口ではなかつた。けれども、世間の僞善的なやつ等に比べては決して惡いことをして來たおぼえはない。店番の出てゐない煙草屋の前に立つて、敷島を一つかツ湊へばかツ湊へたこともある。電車の上で、或立派な紳士が醉つ拂つてゐて、金時計がポケトか

ら出てゐるのに氣が付かなかつたのを、おれはそばで見てゐたこともある。ちよツと環を外せば、何でもなかつただらう。或時など、夜、寂しい道でおれの前をたツた獨りで年の若さうな女髷が通つてゐたので、おれは餘ほど氣がむら／＼としてゐたが、自分で自分をさし控へた。それでも、今の偏狹なそして僞善な社會は、おれのやうな正直者を容れる雅量はない。悲觀して見ると、今の社會は恐らくおれのやうなものを無理に泥棒や追ひ剝ぎにして澤山の罪を着せ、社會のおほあたまどもの大罪惡や大僞善の埋め合せをしようとしてゐるのだらう。

　こんなことを考へると、おれのいよ／＼昂奮した頭腦の中を暗愁と不安とむほん氣とが旋風の如く狂ひまわるのだ。が、おれは昨夜Tが云つたことを思ひ出す、――

『古いこと葉だが、おれはどこまでも自己本位だ。おれはさう云ふ立ち場から萬事を見てゐる。だから、社會に起つたあらゆる事件は直接におれと交渉しない――おれはまたそれに痛痒も感じない。一面からおれはそれで、非常に冷淡のやうに人に見えるが――實際、また冷淡かも知れぬ。』

『さうだらう、ね。』おれは渠の何事にも動じないやうな膽汁質の性質をよく知つてゐる。「まあ、君は實際に德な性分だ。おれは人間味が勝つてるせいか、どうしてもさうした平氣になれん。おれは二六時中現實から遁れたい――社會から離れたい――また自分自身を去りたいと思つてるが、さう思へば思ほふど現實は餘計に執念深くおれに纏ひ付き、社會は一層おれを壓迫するやうで、おれはおれのか

ら只一つをもて餘すのだ。おれだツて、人並み以上に自己本位かも知れん、さ。けれども、おれの卑怯と弱蟲とは自己をじツと守つてゐられないで、絶えず動搖してゐる。おれは今、主義とか主觀だとか云ふことを考へたくない。それも亦おれの自繩自縛にならう。おれは束縛を恐れる。今の道德はおれ達を僞善的に束縛しようとするのだ。おれはこれが不幸だか幸福だか分らぬ。』

何でもこんなことを頻りにしやべつたかと思ふが、今思ひ出せば、空體なことだ——現在のおれは石油と米とがあれば、少しも動搖しないだらうに！また、よく眠られもしようものを！

闇の中の、そのまた自分と云ふものの中をのぞいて見ると、全くからツぽのやうだ——そして眼のふちに一種の疼痛をおぼえて來た。

そとの風に今度は雨をまじへて來たのが、時々ざア〱と云つて雨戸へ打ち當る音がする。白山の樹立ちに鳴る風の音が物凄く聞えて、その度毎におれを輕く運んで行くやうだ。そしておれはその輕さに乘つてまたいろいろな妄想に耽つた。

おれは闇の中に思索の絲をいろ〱に引ツ張つて見た。おれは子供の時分から臆病で、闇その物を見ると獨りでいろ〱な幻影を描いて恐れをののいた。今はそれほどでもないが、いまだに闇に對する不可思議の觀念は去らない。衣物を干したのを幽靈と見たり、柳の木立をおほ入道と思つたりすることは別として、おれは闇の中に元始的な恐怖が伏在してゐるやうな氣がしてならぬ。宇宙の本體を

闇だと思つてるおれは、光明の生れぬ前からの混沌たる闇の中には、人間の力では到底知り得ない不可解の或物があると信ずる。それがおれに根本的な恐怖を與へてゐる。さうおれは哲學的に解釋する。

それから、おれは闇の中に人生の諸相が却つて明らかに認識されるやうな氣がする。光の中に擴げられた人生が容易におれに分らないのに反して、闇を透して見る人生には統一もあり、秩序もあり、光彩もあつて、厚ぼツたい黑羅紗の幕に映つて活動寫眞のフイルムのやうに、おれにいろ〳〵面白い驚異な現象を見せて呉れる。おれは何とはなしに、こんなことで、哲學上の大眞理を發見したやうな氣になつて、一種の三昧境に恍惚としてゐた時、突然、

『ガアン』と耳もとへ一つ喰らはされたので、折角のエクズタシを破られてしまつた。

『いつしんきようらい、まんぞくゑんまん、しやかによらい…………』

本堂の正面の方から、坊主が朝のお經を讀み初めた。まだ本統に夜が明け切つてないのに、因業な奴だ。

▼或日、――

日曜なので、午前、久しぶりで角筈のN氏を訪ふた。N氏は幸ひにゐて呉れた。おれは例の六疊の

日當りの好い部屋で、赤いメリンスの座蒲團に座わつて青磁の圓火鉢をかかへた時は、珍らしく人間らしい心地がした。この日は曇つたいやに寒い日であつたが、正午近くになると、雲が薄く散らばつて、日光の暖か味を漏らした。そして庭の花壇の溫室のガラス板に晴れやかな色を見せた。

園藝に關する雜誌の株式組織はいよ〳〵十二三日前に解散したと云ふ。その時の通知のハガキをおれにも見せて呉れた、

『とう〳〵駄目なんですよ。今度はそこに書いてある通り合資會社にすると云ふのですが、それにしてもこれまでの連帶費用なにがしツてのを僕にまで押し付けるのは隨分ひどいです、ね。』

『さうすると、この間の決算書は會社の解散を見越して拵らへたもんなのです、ね――一人の負擔四百何十圓なんて？』おれは斯う N 氏の耳もとへ口を寄せるやうにして云つた。渠の耳は非常に遠いのだ。

『ええ、さうなんです。』

『隨分不誠實な話です、ね。』

この會社の解散はおれにも少なからぬ打擊だ。今までこの雜誌に寄稿してゐたおれは、會社の成立と共に入社する口約があつたのである。個人の經營が困難になつて、株式組織の計劃をしたのだが、いろ〳〵な事情で一ケ月延び、二ケ月延びして――その間は雜誌も廢刊同樣であつた。おれも殆ど諦らめてゐたが、さて、いよ〳〵と聽いて見ると、今更らのやうに悲哀を感じた。が、一番馬鹿を

見たのは好人物のN氏で、――初め雜誌の發行を主唱したやうなものの、内部の經營や經濟に關係しない約束が、段々引ツかかつて行て、その負擔が全部（作者曰く、少し矛盾があるやうだが、斯う書いてある）氏にも係つて來た。何かなしにめくら判を押したのが渠の落ち度だ。

おれは茸飯を馳走になり、何か就職口をと頼んでから、その家を辭した歸りに、四谷のKの家へ立ち寄つた。Kは××座の失敗からこの方四谷の裏通りへ引込んで、この頃はおやぢを養ひながら、本屋の夜店を出してゐるのである。それが大分景氣がいいので、おれにも遊んでたら初めないかと、以前に云つてくれたことがある。その時は、おれは大道の夜店本屋などやるのはいやであつた。今だツていやだが、かう窮乏してゐては、渠の仕事の手傳ひでもいいからやらせて貰はうと云ふ氣になつてゐたのだ。

Kは大黑さまのお堂に接したうす暗い六疊に、例の通り本を一ぱいに擴げて、短冊がたに切つた紙札を一冊毎に貼り付け、角張つた太文字で以つて、

『大特價、大安賣、金十錢』なんてなことを書いて、その横へ赤いインキで棒註をしたり、圏點を打つたりしてゐた。そして『春畫を賣らせてくれると儲かるんだが、なア』と云つた。

『春畫でなくても、昔の草雙紙の畫だけ集めて賣つたらどうだ、な』と、おれの口から何の氣なしに出た。

『それも面白いぞ――君、やり給へ。』

椽がはに寄つた塀の上には椿の木が立つてゐて、黒い葉のうらを見せてゐた。そしてそれがお堂の明るい障子に淡い影を投げてゐた。お堂の奥からは、ここでも木魚の音が聽えて來たが、うちで聽くのとは違つて何だか氣持ちがしめやかであつた。
おれは、おればかりがごろ付いてるやうに思はれはせぬかと、陰氣な感傷的な氣分になつて、ただKの本に貼り紙をする手元をじツと眺めてゐた。そして自分の弱みを見すかされるのがいやさに、仕事を手傳はせてくれろとは云ひ切れなかつた。ただ別な、下だらぬことをおしやべりして別れたが、その間にでもおれはおれ自身で一つの光明を心に浮べてゐた。それは外でもない、何氣なしにおれの口へ出た草ざう紙の繪を集めることだ。
然し、それから、神田の古本屋通りをぶら付いて見ても、なか〳〵草ざう紙は揃つたのも端本もないやうだ。日が暮れたのを幸ひ、その足で上野の廣小路をまわつて見たら、そこの夜店に一人、おれの思ひ付いた通りの品物をならべてゐる書生あがりらしい男がゐた。それとなく、その店をのぞいて見ると『白縫姫物語』とか、『あづま文庫』とか、『まぼろし日記』とかを――端本かどうか分らないが――より分けて竝べてあり、また一册三錢づつで買つてるお客もあつた。
ああ、社會の人はおれよりも機敏だ――然しおれは、考へて見れば、あんなに、否、あの十分の一も草ざう紙を集める資本がない身分だ。おまけに、けふは角筈で晝飯をよばれただけで――市中をぶ

らついただ折角の腹を損したわけだ。直ぐ歸つて寢てたらよかつたのに！

▼或日、――

おれは机の前に坐わつてた。机の上には原稿紙がいつからとは知れず白紙のまま延べてある。その傍にランプ、筆立、インキ壺、硯・藥瓶・シャボン箱などが雜然と置いてある。もう幾日か掃除をしないので、それ等の上には一樣にほこりがたまつて、そのむさぐるしさが目につく。机に添つた白い壁の上にはルソーの胸像が額になつてかゝてるが、その愛嬌のある優しい眼はいつもにこ〳〵笑つてゐる。

けふは外は雨がしと〳〵降つてゐる。廂が短いので雨あしが窓の障子に當つて、その度每にすすきの花のやうな形が繪の如く現はれる。おれは机の上に頰杖をついて見るとはなしにそれを見てゐるうちに、もう夕方になつた。遠くの方で豆腐屋の喇叭がきこえて、何か喰ひたいやうな氣がして來た。そしていやに寒くなつた。おれくらゐ氣候の變化に感じ易いものもあるまい。無論、喰ふ物もなく、大氣の流動ばかりを神經の末梢にまで吸ひ込んでゐる時が多いのだから。

おれは三疊の部屋を見まわした。この間までそこの柱に引ツかかつたマントも袴も、いつのまにか無くなつてゐる。机の隅の方で夜分などおれの神經をちか〳〵させた置時計も、無くなつて見ると、

一つの淋しさを添へる。おれはこの三月ばかり遊んでゐたので、おれの貧弱な財産から、いくらか貸しさうだと思はれるものは皆、蟻がその穴へ喰ひ物を引ツ込んで行くやうに、いつのまにか質屋へ運んでしまつた。それにおれはおれのからだに付いた信用を以つて借金の出來るところはすべてし盡してしまつた。おれは、もう、生活の斷崖に立つやうになつた。死の峭壁に望むやうになつた。

おれは、少くとも、今までのやうに泥と遊惰との生活はしたくない。おれの無精はそれにも飽いてしまつた。おれはおれの生活に光明ある一大革命を起さなくちやならぬ。おれはおれと云ふ物が何よりも可愛いのであるから――こんなことを考へて、おれはこの三ケ月の間を暮してしまつたが、それがおれの生活を一歩一歩にこんな斷崖へ近づけてしまつたのだ。實行の伴はない考へは、如何にも、空鳴りで終るのであつた。

『生命は汝等に取りては激烈の勞働也、不安也、汝等は甚だしく生命に疲れたるにあらずや。汝等は死の說教を受くべく大いに熟したるにあらずや………』ザラツストラはおれの耳もとで斯う云つて怒鳴つた。

『死は永遠の涅槃なり』とは、毎朝坊主が本堂で讀んでるお經の一句だ。おれは今まで死その物を怖いと思つたことはないが、その方法がいやだ。おそろしい。いつも死を思ふ時、おれの意識の中には死のいろ〳〵な樣式が餘りに鮮明に、醜惡に、印象される。然しそれは死を形式の上でばかり考へた

時だ。一旦、おれの人生觀が死の內容に立ち入つてしまへば、死はおれの絕對であり。安心立命であり、また悟入である。そこにおれは虛無となり、おれの認識する宇宙も、おれの嫌惡する社會も、全く閉息する。これくらゐおれに光明を與へる生活革命はない。おれにはぐんにやりして生きてゐたツて、結局、空腹の繰り返しではないか？

おれはこれまで寂しい時になると、親しい友人があればいいと思つた。が、おれに引け味があつて、どうしても親しい友人が出來なかつた。そして今と云ふ今、おれの求めてゐる親友とは死であることが分つた。おれは無上に嬉しくなつて、大きな聲を出した、

『おい、死の兄弟分！早くおれをつれて來て吳れ！』

おれにはこの死に對する猛獸のやうな信念が起つて、嬉し淚がおれの眼に滲み出たと思つたとたん、『かア〱、かア〱、かア〱』と、ねぐら烏が何羽か窓のそとを鳴いて行く聲が聽えた。それが爲めにおれはこの實際的、實行的な結論と氣分との腰を折られてしまつた。

空虛な腹に同情してゐてやらなかつた復讐にだらうか、けさから何も入れてやらなかつた空腹が、いつもよりは猛烈に、承知しなくなつた。

おれは孕み女の如く、おれの腹の中に、おれそれ物ではないやうに生れようとする餓鬼を一匹孕んでるのだ。そのむづかりをおれは、晝頃までは、習慣によつて忘れてゐた。午後からは、また、不平

と悲哀と頰杖と妄想とによつて押し付けて置いた。ところが、もう、承知しなくなつたかして、意地惡くもいろ〳〵な甘味物のかげをおれの眼の前にちらつかせて、おれをじツと座わらせて置かない。

おれは立ちあがつて部屋中を步きまわつて見た。それでも承知しないので、また坐わつて見た。が、また〳〵立ちあがらないではゐられなかつた。

餓兒がもがくにつれて、おれの眼までが飛び出るかのやうに痛み初めて、見るものが——一つを定めて見ても——あたりに散亂して、かたちを成して來なくなつた。

立ちながら、額に手を當てて見ると、滲み出したあぶら汗にすべつた。

機關のつぎ目から熱を發して、からだ中が今にも燃え出すかと思はれた。

おれは、もう、——

何でもかまはない、一錢でも貸してくれさうな物はと机の上や行李の中を探して見たが、もう、一つだツて物になりさうなものはなかつた。

おれはおれの眼にかけてゐる近眼鏡のことに氣が付いて、それをはづした。そしてそれを手に握つて飛び出し、雨の中をいつもの質屋さして走つた。

『銀緣だから、少くとも二十錢は貸すだらう！』此考へばかりがおれの此時の緊張した世界であつた。

——(大正四年二月)——

四十女

この作は材料の性質としては『憑き物』（第五巻）の補遺としてみるべきものである。

編者識す

四の橋の電車を下りると、意外にも、その女は橋のたもとにある郵便箱のかげから出て、ちよこちよことついて來た。
正徳は直ぐそこの坂を本村町の方へのぼらうとしたのであつた。
『築島さんで御座いますか――？』
『はア。』渠は踏みとまつた。向ふもまだ少しも親しみのなささうな聲をかけたのが、こちらも亦その顏を見て、この間突然に突然のことを話し込んで來た女を思ひ出した。
『過日はどうも出しぬけにあがりまして――』
『いや、どう致しまして――』
『御こりではないかと心配致しまして――』
『そんなことはないのです。』
『それから、昨日さし上げましたハガキを御覽下すつたでしよう、ね？』

『はア、それでまゐりましたが――』

『實は――それが』と、女は少し躊躇する氣味で『少し手ちがひが御座いまして、ね、ハガキは今日の日曜が宅ぢやア當直になるやうに申し上げましたが、昨晩と入れかはつて、けさから在宅なので――』

『ぢやア、また今度に致しましよう。』正徳は可なり張りつめてゐた氣持ちを折られて、直ぐにもその反動で引ツ返しかけた。

『いえ、おさし支へがなけりやア、どこかへおつき合ひ下すつてもいいですが？』

『ぢやア』と、また渠は勢ひづいて、女と殆ど同時に橋の向ふを見た。電車みちに二人で突ッ立つてゐるのも面白くなかつた。

『……………わざ〱御足勞をかけた上に、………………また、こんな………おさまたげをして――』

『……いや、……なにも……』

二人は、少し離れてだが、相並んで白金臺の方へ歩いてゐた。

全體、この女がいい歳をして、この間も、見ず知らずの男にこんなことを訴へに來たのには、餘ほどの證據か確信かがなければならぬ。そしてまた果して事實であるとすれば、正徳に於いても心私かに待ち望んだことでないことでもない。

――自分は自分の女房の爲子を嫌つて、わざと長らく別居してゐるのである。そして離婚の出來る機をうかがつてゐたのだ。が、その爲子は三人の子供のあるを口實にして――まだこちらの叔父の名で許しを受けた煙草屋の店を占領してゐられるのをいいことにして、――なか〳〵相談づくでは承知しない。
　女としての非常なことでもして呉れたら、その時をいいしほにと心ひそかに願つたのも、もう、舊いことのやうに思へるのが、今回、たま〳〵、――果して事實なら――うまい工合にころげ込んで來た。渠が玄關へ出て見ると、
『わたくしは故人武山敏行の姉で御座いますが――』と云つた。
『………』正德には、誰れのことだか分らなかつた。ただその女の顏つきと尖つた聲とでヒステリらしい女だがと思つた。
『お忘れですか存じませんが――あなたの奥さんの爲子が』と險しく云つて、すぐ『あの』と、わざとらしく和らかに云ひ直し、『奥さんが――あなたと御結婚當時うち明けて置いたとのお話でしたが――』
『ああ、あいつのもとの色をとこですか』と、渠はふと自分の女房に對する侮辱の調子が出た。
『そんなわけでもなかつたでしようが、――兎に角、綺麗な交際の上でやがて結婚しようときまつてましたので――』

『僕もくツ附いてたとは思つてませんが――まア、それぢやアおあがんなさい――十七八年も以前のことぢやアありませんか？』

渠が斯うした調子でかの女を玄關から客間へみち引き入れると、女は先づ鹿爪らしい初對面の挨拶をした。

渠は奥の女中に聲をかけて茶を命じたりなどした。

『ところが、弟があア云つた病氣で亡くなりましたものですから――』女が斯う云ひ出した時には、多少その聲も慣れ〴〵しくなつてゐた。

『さう〳〵、確か肺病で、ね――僕もその人のお墓へは一緒に何度もつれて行かれましたよ。』

『然し、爲子さんは變な人ですよ。』

『どうしたんです？』

『…………』女は客間の右隣りの室で人のけはひがしてゐるのを氣にしたやうであつたが、少し聲を低めて、『だツて、さ――』

『…………』正德はかの女が可なり横柄な口調を出すのでむツとした。が、何氣ない風をして、かの女があとを繼ぐのを待つてゐた。女はぢツとこちらを見くだすやうにして、暫らくたつてから言葉を繼いだ。

『これまでにもあなたはあの人にお恥かしめをお受けになつたやうなことが御座いまして？』

『恥かしめとは？』

『お話にならないんですから、ね』女は斯う云つて、少し顏を右に向け、その方に口をひン曲げて、意味ありげにこちらを横目で見た。

『………』

『昔の關係が成り立つたと見て言つて見りやア、まア』と、また落ち付き拂つて來て、『あの人とわたくしとは義理の姉妹になるわけでしよう――わたしは宅の勤めの都合上長らく長崎の方へ行つてましたが、ね、昨年の九月にまた上京致しまして、あの人とも往き來するやうになりましたのですが――』

『ふン――』

『その間、たツた半歳ばかりのうちにですよ――丸でお話にならないんです。』

『爲子がどうしたと云ふのです？』

『あんまり馬鹿々々しくツて――わたくしも殘念ですが、あなたも默つてゐられますまいと思ひますが――』

『と云ふと――』渠は女がこちらを見すゑてゐる目付きで大抵その意味が分つたので、ちよツと間を

置いてから、憚ることもなく、『あれがあなたの御亭主とくツ付いたとでも――?』

『まア、さうなんですよ。』女はこれで一と肩おろせたと云つたやうに、顏の色をやはらげた。

正德は、かの女を上げる前に玄關へ出て見た時には、先づ神經をその顏に出して挨拶をさせてるやうな女だと思つた。おづ／＼してゐるやうだが、どこかに劍があつて――然しその所以の一つが、少くとも、分つた時には、向ふから早くも同一訴訟に共に原告になり合はせたやうな親しみを見せて來た。そしてかの女はいろんなことをこちへら密告した――かの女の亭主が女にはだらしのないこと、また女を口說くことの上手なこと、爲子と初めには料理屋か待合で逢つたらしいが、今では男が爲子の家へ毎日逢ひに行つてること、など。そして、

『あなたも、たとへ別居してゐたからツて奥さんぢやア御座いませんか――さう冷淡にばかりらツちやつて置かないで、少しはわたしの心配も思つて、加勢して調査して下さいよ』と云つた。

『僕は、然し、もう、二三年も斯う獨り住ひをして――無論、多少の放蕩はしながらですが――ゐるんですから、とてもその場の證據などを突きとめる道がないです、ね。僕は官吏だから、役所は同じやうに引けるとしても、そんな時間にをどり込んで行つて見たところで仕かたがないでしようから、ね。』渠は苦笑ひをして見せた。『あの、子供もゐるし、爲子の母親や妹もゐるところへ、如何にあなたの御亭主だツて、まさか、とまり込んでまでは――ね――』

『宅では、どんな場合にも、決してとまつて來たりして、わたくしにあげ足を取られるやうなへまは致しません――云つて見りやア、まア、利口なやり方でしよう。けれども、その、役所の歸りが怪しいのですよ』と云つて、笑ひながら、女は自分の膝で輕くたたみを打つた。『宅の口ぶりをよく引いて見ますと、ね。』

『そりやア、然し、あなたがうまく御亭主にからかはれてゐるんぢやアないのですか？』

『正德さんは』と、女は男の名を呼んで、『まだそんな呑氣でゐらツしやるからいけませんよ――うちの子供までが、もう、感づいてわたくしと一緒に心配してくれるんですから――そして築島さんに濟まないツて、ね。』

『そりやア、子供は母親の云つてることにやア、わけもなく贊成します、さ。』

『でも、もう、十六の男の子で――獨りツ子ではありますが――物が分つてまゐりましたから。』

『兎に角、もツとしツかりした證據をあげて貰ひたいです、ね――これは僕からもあなたに特にお願ひ致しますよ。』正德は斯う答へて、その時かの女に別れたのが、かの女の弱みを一層刺戟して置いたと思つた。そして自分自身には望んでゐた問題と材料とが出來さうなのを却つて喜んだ。

そしてきのふのハガキは、その證據を話したいから、丁度主人が當直でゐないのを幸ひ、聽きに來てくれろと云ふのであつた。

それにしても、苟もまだ自分の女房たるものに自分が裏切られてゐるのを知らないでゐたと云ふ――ことがあるとしての――恥辱はおほはれない。で、これを雪ぐ爲めの離婚の意志が堅いことを第一に云ひ現はすつもりで、渠は四の橋すぢを女と共に殆んど棄てぜりふのやうなことを云ひながら進む間にも、その機會を待ち設けてゐたのだ。

『この事實が突きとめられりやア、僕も日頃の問題が直ぐ解決出來るので、却つて本統に結構なんですが、ね――』

『わたくしも、これはあなたの爲めにもなることだし、また子供の爲めにもなるんですから、隨分心配してをりますが――』

『ゆふべの當直と云ふのも』と、一つ先を越して鎌をかけて置くつもりで、あとになつた女を返り見て笑ひながら云つた、『怪しいのぢやアないんですか？』

『いえ、それは』と、二あしばかりに、ちよこ〱追ひついて來て、『本統の當直ですが、ね、ゆふべ小使ひがさうことづてがてら、お辨當などを取りに來ましたから――』

『…………』

『で、昨晩から子供にも云つて聽かせて置きまして、ね、宅が歸つてから若しあなたがお出で下すつ

ても、面白くないッて、――わたくしが今出て來るまで門のそとで子供に番をさせて置いたんですよ、――築島さんはかう〳〵云ふ御樣子のお方だッて申しまして、ね。』
『ぢやア、あなたの出たあとででもまだ氣を付けてゐるのぢやアないですか？』
『そりやアその通りですが、ね、十一時半までに入らつしやらなきやア、わたしが電車通りでお目にかかつたものと思へと申し付けて置きましたから――』
『なんだか、變なものです、ね』と、正德は洒れて見た。
『宅へはちよツと買ひ物に出ると云つて來ましたんですが』と、女も笑ひをつくろひながら、『まア、どこかでお話さへ出來れば――』
『…………』
『でも、さうお歩かせ申しちやア』と、女は踏みとまつて、あたりを見まはした、
『濟みません、ね。どこか――』
『なアに、どこかそこいらに休むところでもありましよう。』渠も一あし立ちどまつたのであつたが、斯う云つてまたさきに立つた。渠は女もついて來たのに歩みながら向つて、『いい證據が見付かりましたですか？』
『あんまりいいのではありませんが、ね、一昨夜も宅とこの事で遲くまで云ひ合つたんですよ――子

供がそれでまた心配致しまして、ね。』
『子供の聽いてる前ぢやア、如何にあなたも少しひどいです、ね。』
『どうせ承知してゐることですから。』
『然しあなたさへさし控へてゐらツしやりやア――』渠は今の中心問題たる自分の女房その者のひどいヒステリ性を思ひ出したのであつた。から女房をいやで遠ざかるやうになつたのも、もとはと云へばかの女のヒステリ性をいやになつたからだ。役所の歸りが後れたからツて小言を云ひ。下に使つてる女雇ひから盆や暮れの贈り物が來たツていや味を云ひ。俸給の持ち歸りが少し少な過ぎるツて泣き言を云ひ。面倒くさいからたまに安待合にでも行つてとまると、また、一ン日嫉妬の爲めに當り散らす。おもて向きでは、家の爲めにならぬから、子供らの爲めによくないからと頻りに云つてるが、實はかの女の慾情が――四十歲に近づくに從つて――こちらの割り合ひ淡白な性質では滿足出來なくなつた不平だと分つた。それが爲めに、渠はとう〳〵堪へ切れなくなつて、別居した。そして偶にはあツさりと違つた女どもからの慰めを得てゐる。すると、かの女はまた、煙草の店だけでいかない筈はないのに、あたり近所や親類どもへ行つて、うちでは薄情で金を少しも送つてくれないとしやべりまはつた。そして子供に向つてまでお父さんは薄情だ、馬鹿だとばかり云つて聽かせるから、子供は正直にそれをその通りに信じてしまつて、――たま〳〵止むを得ない用事で父が家へ行つて見ると、

――下の子などは何にも知らないで、ただ父のことを、
『馬鹿、馬鹿』と呼ぶ。
　この女も亦自分の女房と同じ質の女に違ひないと、この時、――第一回の印象と照り合せて――正德には斯う思へた。

　曾て或屋敷の家庭敎師として行く途中で、毎日通つたことがある道なので、知つてる筈だとしてずんずん進んで行つたところ、現在は丸で違つてるので、一向に白金の高臺の通りへは出られなかつた。そしてどうした拍子か、一間ばかりの細い路で、一方は五六尺の高さの石垣がつづいてるところへ突き當つた。
『變なところへまゐつたぢやア御座いませんか』と、女は云つた。
『さうです、ね――もととは丸で違つてしまつたんで』と答へながら、渠は自分だけで左右へ驅けて行つて見たが、しんかんとした寺院が二つ三つ並んで、その庭から三四本の櫻がぽつ〳〵咲き出てゐるだけで、上の方へ行ける道はなかつた。『高臺へ出れば、おそば屋がある筈ですが――』
『そば屋なら、どこにでもあるでしようよ――こツちへ行つて見ましよう。』女は東へと左りの方へ進むので、それについて賑やかな道へ出ると、松坂町とあつた。

その邊に一軒、きたならしいのだがあつたので、渠が先づ這入つて見ると、まだ用意が出來てゐないとのことであつた。

　また二人は裏臺町と云ふのを歩いて、伊皿子へ出たが、或角の、これも小さいのにあがつた。一と間しかない穢い二階で、註文を聞きに來た娘の子にさるを命じてから、二人は角火鉢をさしはさんだ。

『もう、寒いわけでもないが、ねえ――』からぞんさいに言つて、女はひら手をこすつて、からだをこごみ加減にして、手を火の上へ出し、その瘦せぎすの顏を擧げた時、こちらを見つめた目の下のひからびたやうな筋肉がびく／＼と動いた。

『……』渠はちよツと自分の女房の肉不足のあし腰を思ひ浮べながら、わざとにも丁寧な言葉でかの女の言葉を受けた。『冬以來の習慣がまだ拔けませんから、ね。』

『人間と云ふものはをかしなものです、ね――寒い時は寒い／＼と云ふし、暑くなると暑い／＼ツてばかり騷ぐし――』

『然し、まア、この頃が』と、渠は卷き煙草に火を付けながら、『一番いい時候です、さ――花も咲きかけて來ましたし。』

『でも、花どころぢやア』と、苦笑しながら、『御座いません、わ、ね。』

『全體、あなたの御主人はどう云ふ地位に御座るんです？』
『○○省の判任文官二等ですから、あなたよりやア、つまり、一等うへなわけなんでしよう――？』
『は、はア――』から云つて、正德は暫らく女の得意らしい微笑にまかせてゐた。さうして心で考へたによると、かの女の横柄らしいところがあるのは、こちらよりかの女が年うへな爲めばかりではなく、かの女の亭主がまたこちらよりも――あちらの鐵道院とは場所こそ違へ――官等がうへな爲めだ。
『あなたも、もツと御奮發なすつたらどうです、ね――わたくしどもよりやアお歲も若いんですから？』
『さア――僕は、然し――實は――官吏をやめて、――何か事業をしたいと思つてるんですから。』
『それでもよう御座います、わ――早く澤山お金を取つて、子供の方へもおやんなさいよ。全體、あなたがあの爲子を』と、呼びずてにして、『うツちやつて置くからいけないんですよ。』
『あいつはあの商賣さへやらして置けば喰へる筈です。』
『それが、さ』と、右の膝で疊を打つて、『女を獨りで手離して置くから――』
『そんなことアー―』おせツかいに及ばぬと云ふ風で、渠は横を向いて、煙りを吹いた。
『…………』女は暫らく無言でゐるうちに、註文の物が來た。かの女は渠に酒を飲むなら遠慮には及

ばぬが、自分はうちへ歸つて怪しまれるといけないから遠慮して置くかはり、今度主人の留守に來てくれたら、少しは相ひ手をする、けふもその用意はしてゐたがと云ふことを述べた。

　渠は別に飮みたくなかつたので、直ぐ箸をそばにつけた。

『まア、人間は喰つてゐさへすりやアいいので、さア、ね。』

『ほんとに、ね。』二口三口やつてた箸を置いた、『今回の上京で、宅が少し遊んでゐましたものですから、當分は少し思ふやうにいけないのですが、ね——長崎にゐました頃は多少有福でしたから、わたくしも指輪の二つや三ツつははめてあなたの奧さんのお里へ——と云つても、御存じで御座いましようが、困つてますが、ね——訪ねて行つたのですよ。すると、わたくしが立派な成りをして來たと聽いて、爲子はわたくし達を何か物にしようと思つたのが初めですよ。』

『まさか、ね——いくら僕にはいやな女だツて、さうわる機敏でもないのでしよう。』

『それが、あなた』と、押しつけるやうな口調で、——それがまた渠をして爲子その人の不斷の口調を思ひ出させた、『奧さんから正德はお人よしだからなど云はれてゐる原因でしよう——？』

『ふン——そんなことを云つていい氣になつてたのですか？』渠は斯う云つて苦笑して見せた。が、蓋しそれが自分の女房の事實か事實でないかまだよく分りもしない今回の事件に關してよりも、寧ろかの女がこちらと一緒になる以前にあつた戀の關係から、その戀の姉を信ずるか賴るかして、こちら

のことを大分立ち入つてうち明けてあるらしいのを面白くなく思つたのだ。

『そりやア、ひどい人だから、ね――手紙もやらないのに、突然むかふから訪ねて來て、自分も今はから／＼云ふわけで棄てられたも同前だから、姉さんとは昔の關係できようだい分になりましようツて！』

『無論、口はうまい奴ですが――』

『さうでしよう。』女は分つただらうと云はないばかりに目の光りをとんがらかして、『さうしてわたくしばかりでなく、宅までもだまし込んだんですもの！』

『そのだまし込んだと云ふ事實をです、ね』と、正德はわざと落ち付きを見せながら、『確かに突きとめましたか？』渠にはこの女の樣子がその云ふところを疑はせるやうに思はれて來た。

『あなたのおツしやるやうな現行犯まではなか／＼突きとめられるものぢやないのですが、ね』と云つて、確信がある如く顏の筋肉を引き締めて、『毎月いくらと云つてお金を確かに取つて關係してゐるんですよ。それでなけりやア、宅が俄かにこの二ケ月間きまつた俸給を同じほど減らせて來る筈がないぢやア御座いませんか？』

『然し僕の妻が旦那取りをするとアきまつてませんよ。』渠は少しむツとした。

『それが、さ』と、女はこちらの樣子には頓着せずに微笑しながら、『困つて來りやア誰れでもさうな

るんですよ――さうして亭主がうは氣をすりやア、その女房だツても、少しやアうは氣をしたツて仕かたがない道理だなんて、始終云つてる女ですもの。』

『無論、さうして呉れりやア、僕の方では却つて離婚の理由が成り立つて便利ですが――』

『それ――』と、女は一層いやアに笑ひを引き延ばして、『あなたの叔父さんが煙草店を讓り渡した時に忘れて行つたと云ふ變な繪が二三枚あるでしよう。わたくしには自慢さうに見せましたが、あれを見て獨りで樂しんでるさうですから――』

『へい――』渠はこれを聽いてあきれた。叔父が忘れて置いたやうに、自分も別居する爲めにあの家を出た時荷物に入れることを忘れた繪だが、或時、思ひ出して取りに行つた時には、爲子はそんな物は知らないと云つて渡さなかつた。それを見せて貰つた者も者なら、見せる者も者だ。

それを見て樂しんでるツて？　自分の女房がそれほど大膽なことを云つたとすりやア、こちらの内情をでも、すツかり――俸給やらわツつらの生活のことばかりでなく、その他に自分等二人の間のことまでをも（馬鹿！）――この女に語つたことがあるのだらう。そしてこの女はまたその（女好きだと云ふ）亭主との仲がいい時の物語りの種に、少くとも、一度は利用したのだらう。

そしてこの女の亭主が、その翌日なり、翌々日なりに、――どうせ上京の初めから紹介されて知つてたらうから――爲子を訪問して、そんなことを空とぼけて、そしてそんなことをおびき出したとす

りやア――

こんな想像の爲めに、正德は耳たぶまでが熱くなつてゐた。

そばのおかはりを聽きに來た時には、渠は既にさきのをすませてゐたが、女は半ばごろをすすつてゐた。

『あんまりうまくも無いです、ね。』

『どうせこんなところのですもの。』女は箸を運ばせながら、『一度また近々にいらしつて下さい。わたくしの近所には、一ケ所、上手に出來るのが御座いますから――その時ア、子供にこんな話をきかせたくもないから』と、にやりとして、『どツかの活動寫眞へでも行かして置いて、ゆツくり、ね。』

『はア。』渠は斯う賴りない返事をしたが、心では、こちらが何だかおもちやにされかけてゐるやうな氣もした。この女の話によると、この女の子供はこちらの味方にもなり、また邪魔にもなつてゐる。

『…………』女は箸を置いてから、『それでですが、ね』と、取ツときの材料をでも語り出すやうにあらたまつて、『實は、四五日前に爲子が圖々しくもまたやつて來たんですよ。』

『…………』

『關係のついた頃から、向ふはぱツたり來なくなつたのを、こツちは知らないものですから、いい氣

になつて訪問してゐましたが、ね――感づいてからは、こツちも足をとめてしまひました。向ふは却つてそれを喜んでたでしようよ。』

『ところで、いつから關係があつたと思つてるんです？』

『それも確かには分りませんが、ね、まア、今から二ケ月半ほど以前からでしよう。わたしが感づいた頃には、もう、宅の役所からの歸りの道順が確かに變つてゐました。あなたも御存じでしようが、愛宕町の通りを眞ツ直ぐに芝公園をぬけて來るのが當り前なのに、宅はわざ〳〵飯倉の四ツ辻を片町の方へあがつて來るやうになつたのです。あなたの御本宅――か、奧さんのお宅ですか――は永坂のうへでしよう。先日もお話し致したやうに、わたくしはよくあの近所で宅の歸りに合ひました。』

『爲子のところへ行つたとは限りますまい。』渠はまた十分に裁判官的な冷靜に戾つてゐた。自分の若い時、或友人が他の友人の姦通事件を敎會に持ち出し、――事實は確かにあるに相違なかつたが、實證をあげることが出來なかつたので、――却つてしツぺい返しの恥辱を被つたことを知つてるから、たとへ自分の女房のことでも、容易に信じたくはなかつた。

『いえ』と、女は然し、信じ切つてゐるやうに、『それは、もう、宅の話し振りとわたしが爲子を訪ねた時の向ふの話とを照り合はせて見ると、みんな同じやうなことを云つてますから――』

『それもです――訪問するのがいけないわけでもなし、訪問して話が合へばまたおんなじことも云ふ

やうになりますよ。』
『それにしても、何も、名だけでも亭主のある人のうちへ度々行く用はないぢやア御座いませんか？』
『そんな古くさい考へぢやア、まだあなたも駄目だ。僕だツて、氣が合へば、どこの細君とでも交際します。』
『だから、わたしのうちへもお出で下さいツて云つてるぢやア御座いませんか？』
ぢツとこちらを見たが、『でも、爲子のはあんまり變ですわ、ね。』
『あなたは、こないだも、爲子の家からあなたの御亭主が出て來はしないかと、時刻を計つて、度々近所に隱れて待ち受けてゐたと云つたでしよう――？』
『ええ』と、勢ひづいて、『見付かれば、立派な證據になりますもの！』
『そんな證據が――？』この時、二度目の註文を持つて來たので、暫らく話が絶えたが、娘ツ子を下へ見送つてから、言葉をついだ。『あなたはあまり迷つてるから、下だらないことを當てにしてゐるんです。』渠はこんな時に十分向ふの權威じみた態度を抑さへて置けと思つた。
『生憎、そんな時には見つかりませんでしたが、ね――宅にそのことを話して少しおどかしましてからは、ちやんと時間通りに歸るやうにもなりましたし、先月の俸給なども滿足に持つて來ました。が、

爲子が珍らしくやつて來たのは、だから、お金の催促か呼び出しのつもりであつたのです。丁度、宅が留守で、わたしが火鉢のそばで浮かない樣子をしてゐますと、──無論面白い筈はないのですから、わざとにもさうして見せたのですが、──相變らず白ばツくれて、姉さん、姉さんと親しさうに物を云つて、病氣ならわたしが直してあげますよツて──』

『ふん。』正德はそんな時の樣子を想像しながら、『神さまにお祈りでしよう──?』

『それなら、まだいいのですが』と、女は澄まし切つて、『向ふが何か面白い話をして聽かせますからツて──もう、下だらない繪の話なんか十分だと云つてやりましたが。』

『…………』渠はそんな話をたま〳〵どツちが好きで語り合ふやうになつたのか、よくは推測出來なかつた。

『え、まだ歸らないの?　どこへ行つたの?　いつ頃歸るのツて、うるさいので默つてると、自分で立つて行つて窓からそとをのぞいて見たりして、宅を待つてる樣子でした──とう〳〵往生して、歸つて行きましたが、ね。』

『然しあいつはいつもさうしたがさつで、無遠慮な奴で──不斷から人のおもわくなんて考へることが出來ないんです。』

『まだあなたは信じ過ぎてるの、ね。』女は、餘ほどこちらに肩を持つてくれたかのやうに、うは氣で

親しさうな調子だ。

『あなたこそ』と、渠は冷やかに、『迷つてるんぢやアないですか――一度あんまり親しくなり過ぎた反動で？』から云つたのは、無論かの女とこの女とが例の繪を二人で見てゐた樣子を想像してのことであつた。

『そりやア、わたしも向ふが來てくれた義理もありましたから、また、そのあくる日、こちらからも訪ねて見ました。さうして氣を引いて見る爲めにそとへつれ出して、二人で龍土町の西洋料理屋へ這入つたのですが、ね、――こツちから先づ鎌をかけて、うちでも今の地位は不安心だから何かしなくちやアと云ふと、姉さんのだけのからだはどうしても自分が引き受ける。さうして自分は別に考へることがあるから、あの店をこツちにやつて貰つてもいいなんて！』

『そりやア本氣かも知れません』と、飽くまで冷靜に、『あいつは時々いろんな事を考へ出しますから。』

『でも、わたしの考へでは、何か宅と相談してあることがあつて、自分はその方へ行つて、その申しわけの爲めにわたしには繁昌もしない店をあてがはうと云ふ所存なんですとも！　初めて訪ねて來た時からして、直ぐ資本を融通してくれないか、店を大きくしなけりやアとても商賣にならないからツて云つてましたもの！』

『商賣は、然し、大きくも小さくもやれます。』

『でも、苦しいのは本統らしいです。それに、そんな大きなことを云ふんでしよう――わたしはわざととぼけて、わたし一人ぐらゐ女中になつても喰べて行けるから、若しそんなに景氣がよくなつたのなら、宅を引き受けて貰ひたいが、どうですと云ふと、あの、例の赤い齒ぐきを向き出して喜んだのですが、いいとも云へないから、わざと少し考へて、それはちよツと變ぢやアありませんかツて――變なのは向ふぢやア御座いませんか?』

『そんなことなら、なアに』と、渠は根本に否定的な調子を見せて冷淡に笑ひながら、『却つて向ふの樣子に何もこだはりがない證據にも取れますよ。』

『それがとぼけてるんでさア、ね――あなたはまだ宅を御存じないから、そんな呑氣なことが云へるんでしようが、ね、そりやア女にかけちやアだますのも、また女に人をだまさせるのも上手ですから。』

『ぢやア』と、渠はわざとむツつりして、『あなたの御亭主が惡いことになりますが――』

『そりやア、宅も惡いにやアきまつてますが、ね、――それだから、長崎をやめて上京する時には、わたしやアまたそんなことがありはしないかと反對したんですが、――女の方でしツかりしてゐさへすりやア、いいぢやア御座いませんか? 早く離緣しておやりなさいよ――苟しくも主人たるあなたに恥ぢをかかせたんぢやア御座いませんか?』

『無論、ちやんとした證據をあげて下すつたら――』

『あなたは證據、證據とおツしやいますが、ね、何よりの證據があるんですよ！』女は言葉と共にからだをうは付かせて、下り口の方を目で警戒してから、少し顏をこちらに近づけた。そしてにやりと笑ひながら、『からだに着けるものを――時々――』と、何だか云ひにくさうに云つて、言葉を中止したが、『ね、それで分るぢやア御座いませんか？』

『…………』正德はそばの半分ばかり殘つてる眞ン中のところを取つて口に運びかけてゐたが、この時、何だかよごれた物のむさいにほひが聽えたやうな氣になつて、箸を途中から置いてしまつた。

女には、初めからどことなく妄りがましい樣子が見えてゐた。その本性をそツくり出したと云ふやうなにやけた笑ひと顏つきとを以つて、女は勝利がほに顏を引ツ込めた。そしてその目でこちらを引きつけるやうにして、神經質のとがつた聲をひそめて顫へるほど和らかに云つた、

『あなただツて、出來ないことはないでしよう――一度やつて御覽になれば分ります、わ。』

『やつて見なくツたツて――』と、渠もつい釣り込まれて笑ひながら、『天下に女は僞子ばかりぢやないし――』

『それが、さア』と、女は待ちかまへた返事を得ないのをぢれたやうに、坐つてる右の膝でちよツとまた疊を打つて、――渠には、こないだも、それが氣になつたが――またにやけた笑ひをやり出し

た。『爲子は素人でしようーー月にあゝ安く關係出來る苦勞人はありませんわ、ね！』

『成るほど、あなたは、こないだ、若い時に一度酌婦をしたとおッしやいました、ね。』渠は、もう、

蕎麥に手をつけまいと決心したので、煙草を吹かしてゐた。

『それは宅の爲めでーーちよツと宅が困つた事情がありましたからのことでしたが、ね、ーー三四ケ

月間のことでーーわたしやア何もお客にくツ付いたりしたことは御座いませんがーー』

『そりやアさうでしよう、ね。ーー爲子だツても、まさか、そんなに馬鹿にもろいわけも御座います

まいよ。』

『然し、宅と來たらひどいんですからーーどこへ行つてもーー』

『…………』渠はただぢツと傍觀的にかの女の熱したやうな目つきを受けてゐた。『ですから、わたし

やア、いつも毎朝、宅が役所に出て行く前に、紙で宅のからだに或しるしをして置きますんですが、

ね、矢ツ張り、駄目なんですものーーその癖、時時通りをたツた一時間か一時間半ほど後れて、すま

アして歸つて來ることがありまして。』

『それが果して爲子のせいでしようか？』

『まだあなたはーー』この時、下から湯を持つて來たので、かの女はそツちを見て話を切つた。そし

てその聲をも態度をもよそ行きにして、『あなたはあまり召しあがらないんです、ね？』

『ええ――もう――よしましよう。』たとへ喰へても喰ふ氣がなくなつてゐた。

女が先づ勘定をしようとしたのをとめて、正德が拂つた。

『ぢやア、わたしの方にもツといいお膳立てが出來た時に、お呼び申しますから――』

『さうです、ね――けふのお話ぢやア、まだ物になりませんよ。』

『あなたは思つたよりやア世間見ずなの、ね、――』

『ええ、僕アこれでもさう放蕩ものぢやアないんですから――』

『わたしがこれだけ云つても分らないんですもの！』

『なアに、あなたのおツしやることは、あなたのおツしやる事としては分つてますが、ね。』渠はかう遠まはしに云つたのがかの女にこそよく分らなかつたと見たが、かの女がこちらをなほ妄りがましく見つめてゐるので、それを避けた。『どうです、あなたにはおなかがお減りになつてるんでしようから?どうか御遠慮なく――』

『さうです、ね。』目をやツと下の喰ひ物に向けて、『殘すのも勿體ないから。』女はまた箸を取つた。そしてそれを運ぶあひま〳〵に、『兎に角、早く離緣をしておしまひなさいよ――わたしやアそれをあなたにさせただけぢやアまだこの恨みは晴れやアしない。どうしても、もツと、復讐してやらなけりやア――』

『………』渠はかの女がいそぎ氣味で殘部をうまさうに口へ運んでるのをそれとなく見ながら、この女も、亦、女としての燈し火のまさに消えんとして、その情火が最後の熱を保たうとあせる四十女に相違ないと思つた。そしてその所謂『復讐』とはかの女の疑ひ――正德には、まだ疑ひ以上には見えぬの――を、あべこべに、かの女がこちらに實行して見ようと思つてるのではないかと考へられた。

そば屋を出てから、女は渠を伊皿子停留所まで送つて來て、渠が淺草行きの電車に乘るまで立ち去らないで、幾度も今一度お迎へするから來て呉れろと賴んだ。そして、

『あなたのところにゐる、あの若い女中は何ですか』と云ふやうな、入らざらんことまで氣にしてゐた。

『ありやア、ほんの女中です――僕だツて、さう〳〵馬鹿なことはしませんよ。』かう答へて、渠はかの女のあまりの淫亂から出た疑ひに手易く釣り込まれるやうな者ではないことを發表したと思つた時に、電車がやつて來たのであつた。『ぢやア失禮します。』

『では、今度、ね――』

こんなことの思ひ出がまだ正德の心に生々しい翌々日のことであつた――またかの女からハガキが

來た。——

『先日はまことにぐれ違ひさふらふて、すみませんでしたが、明晩は宅がまた人の代理で當直になり候へば、何卒お役所のお歸りの足で御飯をあがりにお出で下されたく、子供は前以つてさし支へなきやうに致し置き申すべく候。必らず必らずお待ち申すべく候。かしく。本村町より。築島正德様』

渠はこれを何度も繰り返して讀んで見た。今回は、爲子のことに就いては、何とも云ひ及んでないのだ。

爲子のことが事實だとすれば、その證據を一でも早く擧げたい。

が、このハガキの書き主がこちらを一度でも何とかして、それを爲子に對する復讐にしようとしてゐるのなら、もう、眞ツぴらなことだ。

渠は、ハガキに指定の當日、鐵道院の事務を執りながらも、行つた方がいいか——行かない方が無事か——迷はないではゐられなかつた。

——(大正四年二月)——

秘書官

『…………』

一

社長の紹介を以て會見してから浪川が四五年も出入りして御機嫌を伺つてた子爵閣下である。その子爵が〇〇大臣になると云ふ號外が出たゆふかた、至急親展書を届けて來たので、さては、こちらの本望も成就かと踊りあがつた。

おほ急ぎで車を飛ばして子爵邸に伺ふと、主人は今また相談があつた新總理大臣のお屋敷へ行つてるからと云つて、奥さまが代理で應接室へ出て來たので、渠は何よりもさきにかしこまつて、

『この度はまたお目出たう御坐います』と云つた。以前にも一度こんなことを云はなければならぬ場合があつたが、その時はまだ云つただけのことであつて、それ相當の報いがこちらにも向いて來るほどの信用はなかつた。

『まあ、あなたも子爵の御機嫌を伺つてお置きなさいましよ――いつかはまたいいことが御坐いまし

ようから、ね』と、子爵夫人に愛相よく云はれただけがまだしも頼りであつた。そして子爵のお留守の時などの御つれづれを慰める爲めに、度々意外な時に招かれて小說の話のお相手などをした。『近頃の作では矢張り鏡花や天外のがおよろしいのでしよう、ね』などと——前月やその月に發表になつたやつの批評などを乞はれた。自分の畑ではないのだから、大いに面くらつてしまうことがあつてからは、中央公論や新小說を初め、好みもしない小說雜誌や婦人雜誌を、いろ／＼不斷から讀んで置いて、夫人の襲擊に對する常備的軍備を整へてゐることにした。夫人は子爵と同席の時にも話をそんな方に持つて行くので、子爵はただにこ／＼と笑つて御坐るが、こちらの答辯はなか／＼責任を感じないではゐられなかつた。

　ところが、今回は、夫人までが愛相のいい顏に引き締まつたところを見せて、——無論、小說の話どころではなかつた——

『あなたもお目出たいのですよ』と、じツとこちらの顏いろを見た。

『…………』浪川は成るべく野卑な喜びを示めすまいとしたのが、われながらただ鹿爪らしい様子になつたと思つた。が、さう思へば思ふほどなほその様子を改められなくなつて、最もうや／＼しく、

『先刻お招きにあづかりましたので、早速伺ひましたのですが——』

『御不足かも存じませんが、秘書官ですよ。』

『いや、結構です！』案のじようなので、つい自分ばかりのにツこりを出したが、これをさうでないふりに見せる爲めに叮嚀に下を向いておじぎをした。そして渠が顏をあげると、夫人の何だか皮肉な微笑に出くわした。きまりが惡かつたのでやツと何げないふりをして云ひ添へた、『どうも子爵閣下を初めまして、奧さまの御盡力を感謝いたします。』

『で、――あなたの御拜命も明日ださうで御坐いますが、――すると、直ぐにも官舍へ這入つて貰はないぢやア困ると子爵が申してをられました。』

『はい、それは承知致しました。』

『ところが、ね』と、夫人はこちらを少しくつろがせるやうな口調になつた、『その丸のうちの官舍は――お氣の毒ですが――冬はなか〳〵お寒いので御座いますよ。わたくしも、前に子爵が同じ大臣の時に、其時の秘書官を訪ねて、一度、行つて見たことが御座いますが、ね、それは〳〵床がお高過ぎまして、――お寒いのはそれが爲めかとも思はれますが、――おもに日本造りで、應接室だけが洋館建てになつてますが、ね。』

『わたくしの方では、そんなことは不平を申す場合では御座いませんので――』

『まアお寒ければストーヴに澤山石炭でもお入れになることですよ。』

『はい。』この時は、もう、渠も椅子に腰をおろして、夫人と相對した。が、どうも、不斷のやうに巧

みな應對言葉が出なかつた。
そのうち子爵閣下が歸つて來たので、いろんな心得を云ひ含めさせられたが、お屋敷を辭する時、子爵の手から——然しこれも親切な夫人の注意によつてであらう——移轉その他の支度料に入るだらうからツて金五十圓を立てかへて貰つた。
その足で、早速、社長の宅を訪問し、兼てそのさしがねで紹介を受けた目的が今回やツと成就することの禮を云ひ、新聞記者として長らく同社に厄介になつてゐた地位を辭する言葉を述べた。それから、浪川政次郎と云ふ標札のかかつてる赤坂臺町の自宅へ歸つた。
つい、この間、八圓の家賃を五十錢あげさせて腐つた門を直させたところだのに、氣の毒にも引ツ越さねばならぬなど考へて、玄關を這入ると、妻を初めとして、うへの子二名と女中までが——多分、この女中の發議でであらう——ずらりと並んで渠を出迎へた。
『さうでしたの？』
『無論、さ！』渠は靴をぬぎながら、にこ付かないではゐられなかつた。
『ありがたい、ありがたい！』妻は早口に斯く二度唱へながら、立つてたからだを踊らせて、くるりと一つまわつた。
『ありがたい、ありがたい』と、うへの娘つ子がまた母の眞似をした。

『あり――あり――』次ぎの眞似師も、あぶなツかしいからだを横に動かさうとした。

『坊ちやんまでが嬉しがつて』と、女中はそれを抱きあげたが、矢ツ張りかの女も頰赤の平ベツたい顏をにこ〳〵させて、一緒に主人の室までついて來た。

渠は氣づかれがしたと云はぬばかりにどツかりと腰をおろして、洋服のまゝあぐらをかき、妻のいい顏を見ながら、家には不相應に大きな有田燒きの丸火鉢のふちをなでた。

『よかつたの、ね。』

『斯う來るのが』と微笑を浮べながら、『當前ぢやアないか？　四五年間も御機嫌を伺ひに行つたり、意見書の代筆をしたり、大きな飜譯を子爵の名で出してやつたり、さ。』

『でも、それにやア』と、妻は今夜に限つて色つやが一層よくなつたと見える瓜ざね顏を斜めにして、所天と女中とを半々に見ながら、『その時その時のお禮を貰つてます、わ。』

『お前たちやアまだ分らない、さ――さうしたお禮などを貰つてることが重なるので、却つて向ふが斯うおいでなさるんぢやアないか？』

『さう云へばさうでしようが――』女中と嬉しさうな顏を見合はせた。

『まア、これで』と、女中は渠の妻に代つて妻の胸のうちを述べた、『靑山へも澁谷へも意張つて行けます、わ、ね。』

青山には渠の妻の姉婿が住んでゐる。澁谷には妻の妹の家がある。共に軍人だ。そして妻の父は退職軍人だ。この主人だけが軍人でも官吏でもないのを、何だか肩身が狹いやうに思つてたのは、浪川自身の知つてる通り、妻ばかりではない。或ミションスクウルの神學部を卒業する間ぎはから、小使ひ取りに英語を敎へに行き、つい出來合つたそのそも〳〵から、二人の味方になつて働いて吳れ、家を持つてからも三人の子をすべて手しほにかけて來た女中の考へも、また、同じであつた。

『せめて、文官でもいいから、高等官になつて下さいよ』とは、かねがねの賴みであつた。渠自身も亦惡くはないと思つたから、その方針で進んで來たのだ。

『でも、ね、お貞』と、渠は女中に向つて云つた、『まだお前達の滿足には行かない、さ――特別任用だから。』

『特別任用だツてかまひません、わ、ねえ、奥さん。』

『そりやア軍人なんぞとは違ふから――』

『お前なら、さう、さ、軍人なら平兵隊でもいいんだらうから。』

『まさか――そんなことは』と、妻と女中とが同時に笑つて取り消した。

『實は、ね』と、渠はにこ〳〵顏を新たにして、今まで隱してゐた紙の包みを横あひから取り出した、『いい物があるん、さ。』

『なに？』
『お菓子、お菓子！』うへの娘の子は飛び立つて喜んだが、渠のひらき出したのを見て失望の樣子であつた。
『いいお下駄——奥さん！』
『いくら？』妻はいそいで手に取つた。
『當てて見な。子爵が移轉費にも入るだらうと云つて、五十圓立てかへてくれたから、ね、前いはひに一つ買つて來たの、さ——お前は下駄、下駄と云つてたから、ね。』
『お禮をおツしやいよ、奥さん。』女中はのぞき込んでゐた。
『お貞にも、何か買つてやるよ。』
『どうかよろしく——坊ちやんにも、ねえ』と、膝の上のを抱き締めた。
『あたしにもよ。』
『さう、ね、お孃さんにも——』
『繻珍でしよう、これは』と、妻は鼻緒をいじつて見ながら、『まア、一圓八十錢から二圓まで。』
『馬鹿な！』渠は少し不興げな顏をして、『三圓二十五錢に負けたんだ。』
『奥さん、結構です、わ。』

『嬉しい、嬉しい!』妻は突然その下駄のかた一方を兩手であたまにかぶつて、からだを左　させた。

『あんなこと――お母ちやん!』子どもはそばで笑つた。

『あなたも嬉しいでしよう』と、笑ふ子の肩を押さへて見てから、眞がほになり、『ちやア、引き移りでしよう。』

『さう、さ、あす任命を受けたら、直ぐにもツて。』

『大變だわ、ねえ――と、また女中と顏を見合はせた。

『でも』と、女中は答へた、『ひとり人足を雇つて、お父さんにも來て戴いたら――』

『さう、ね――』

『官邸の應接室は西洋造りだぜ――日本建ての方も床が高いツて。』

『まア――』妻はそれから思ひ出したやうに、『奥さまはどうしてらしツて?』

『矢ツ張り喜んでたよ。――然しあの夫人も隨分皮肉、さ、おれがつい嬉しい様子を見せたのをその時はいやアにただ笑つてゐたと思つたら、あとで子爵の前ですツぱ抜いて、浪川さんもお正直で御座いますよ、先刻申し上げた時に何とも申しやうのないやうなお喜びの御様子でと、さ。』

『あなたは人がよ過ぎるからですよ。』妻は不平さうであつた。『そんな時にやア少しおもみを持つてる

ものです、わ。そこは軍人なんか――』
『また軍人か？』今度は渠がむツとした。
『もう、およしなさいよ、奥さん、軍人でも秘書官でも、高等官になれたんぢやア御座いませんか？』
『さう、さ、お貞の云ふ通りでいいんだ。』渠は斯う云つて主人がほを正してから、早く食事を命じた。そして不斷は飲んだこともない酒を少し飲んで見る氣になつた。

二

拜命の當日から、大臣の公用私用と自分の不慣れとの爲めに、碌々新居なる官舍に落ち付くひまがなかつた。
そして三日目の午後に、一つ、初めて大臣のお目玉を頂戴した。そのわけは、その翌日或法律學校で行はれる式場に於てこの省の大臣が演說をするか、若しくは祝辭を讀むかすることになつてゐるのであるが、新任早々のことだから、浪川が大臣代理として出席し、一篇の祝辭を讀めとの命令を受けた。で、一大事と思つて、他の用をそこのけにして一心にいゝ文句を考へてると、大臣に呼び付けられて、『そんなことはいつでもやれる』と叱られた。が、渠はこれを妻には報告したくないので、しなかつ

た。そしていよ〳〵その翌日、代理を勤めた時に、多くの人々の面前に、廣い演壇の上で自分の聲が——自分の書いた文章を讀んでるのだのに——おしまひまで顫えた。

『こんなことぢやア仕かたがないが』と思つて、兎に角、忠勤をぬきん出て、その補ひを付けるより道がないとし、その日も一部の人々と共に夜遲くまでも殘つて、省の仕事をした。

それでも午後十時近くには、渠も自分の官舍に在つて、家族が茶の間と定めた六疊敷きの長火鉢のそばに四日ぶりで氣を休めてゐた。

丸の內の一部で、——周圍はしんとして、赤坂あたりよりは寂しいやうだ。そして子爵夫人の云つた通りに、寒さも違ふやうだ。

『子爵夫人が、けふ、突然、いらツしやいまして、ね』と、妻がその時の樣子を語つたのは、もう、十分か二十分も前のことだ。『直ぐ歸りますからと云ふ前置きで、ほんのちよツと話して行かれましたの——官邸がお互ひに近くなつたから、また來ますツて。』

『一度うんと御馳走して置かんといけない、さ。』

『でも、何だかそわ〳〵してらシしやるんですから、こツちも一緒にそわ〳〵してしまつて——』

『無論、いい折を見て、さ——わざ〳〵呼んぢやア大變かゝるにきまつてるから、ね。』

こんなことを話してゐたのであつた。さし向つてる妻は子供を寐かしたあとで、胸もだらしなく、

また赤い目をして、ねむたさうにふところ手をしてゐる。

『應接室のストーヴを焚いて意見でも聽かうか？』渠は蓐に就く前に妻に自分の議論を聽かせるのが一つの樂しみであつた――』

『また伺ふんですか、ね』と、氣の無ささうな顏をして笑ひながら、『政治論なら、ここでも出來ます、わ。』

『かかりますよ、隨分石炭が。』女中はいつのまにか酒の燗をして持つて來たのだ。

『やア、氣が利いてる、ね。』

『ええ』と、女中は笑ひながら、『醉つてききたいことがあるツて、お父さんはよくお歌ひなさいました。』

『おやぢだツて、碌に飲めやしない。』

『でも』と、妻は手をふところから出して不器用にお酌をしながら、『あなたよりやア――』

『ぢやア、お前達アおれを機關車のやうに無理に焚き付けて、働かさうとするのだ。』

『ふツ』と、妻は女中の方を向いて吹き出したが、『そんなわけぢやア御座いません、わ。』

『…………』渠は妻の後ろに當る壁に某雜誌發刊廣告の、もう、古くなつたビラ繪がかかつたのを見て、『またあんな物を掛けとくぢやアないか？』

『いいぢやア御座いませんか』と、妻もちよツと後ろを向いたが、また女中と顏を見合はせて、『樂でようと思つたのですが、お貞が置いとけと云ひますから――子供が見て喜んでるんですもの。』

『もう、然し、あいつにも意張れる、ね。』あいつとはその雜誌の有名な編輯者で、浪川の妻を崇拜する友人等の一人であつた。そして妻も亦その人の金儲けに上手なのを羨んでゐた。ここ二三年は全くやつて來ないが、よくやつて來た時は、それが爲めにここの夫婦間にわけもない喧嘩が起つたこともある。

『ああ云ふ人の仕事では、勳章や位はつかないから――』と云ふのにつけ込んで。

『ぢやア、もう、思ひ切つた、ね?』

『また馬鹿々々しいことを!』妻は赤い顏になつた。

渠は、自分の妻がこちらの冗談の爲めに氣が引き立ち、目と口とに釣り合ひのいい愛嬌を浮べて來たのを見て、自分も調子づいた。そして今回の政治問題に關する政府黨と反對黨との立ち場を說明し、同じやうに問題をただ手段視して黨略の具に供するのなら、自分は政府黨の飯を喰ふやうになつた以上、一個人としても恩ある方の意見を採用するのが別に恥ぢとするに及ぶまいと語つた。

『お前の意見はどうだ、ね?』

『さア』と、あまり熱も見せないで、『それで結構でしようよ。』

『そんなことぢやア』と、渠は齒がゆいやうすをして、からだに力を入れた、『反對なら、反對でもいいから、しツかり云つて見ればいいだらう。』

『でも、ねえ』と、笑ひながら、女中と相談するやうな目つきをした。

『女は女の川が別に御座いますから――』

『あつたツて』と、渠も女中の方を見て、『少しは主人の話あひ手になるやうでなけりやア――』

『そりやアさうですが――』と、妻が高聲になりかけたのを、

『まア、待て』と、渠は早口に低い聲で制した。變な音がきこえたのである。

女どもも渠と共に急に心配さうに耳をそば立てた。

子供は三名ともよく寢てゐるやうだ。

渠の耳には、吳服橋からつづく外堀ばたの石垣の上の松や、うち堀和田倉門あたりの松を吹く風の音らしいのが聽えるほかに、今一つ最も近い音が聽えた。

低くだが、がり〱！

『それ。』

暫くして、またがり〱！

『それ。』渠は眞ツ直ぐに座わり直して、おそろしい爲めにきよと〱と目を浮かせて、妻と女中とを

順番に見まわしながら、自分の角ばつた顏の長いうは髯を片手で撫でてゐた。

鼻でしよう――？」

『黙れ』と、渠は妻を目つきで制した。

『またいつかのやうに。』妻も心配さうだが、案外平氣らしかつたので、渠は女の淺墓なのを怒らないではゐられなかつた。代々木にゐた時のあの事件は如何にも鼠であつた。自分は先づ妻をさきに立てて、怪しい音のした臺どころの唐かみをあけさせたら、自分の持つてる手燭の光に大きなやつが天井にかけあがるのが見えた。然しあの時はあの時だ

『身分が違ふ！』と、身づから壓迫したよりも、他から壓迫されたやうな顫え聲であつた。そして警戒深い目を尤もらしく妻から女中に轉じた。

『鼠にしては』と、女中も不斷は締りなく平べツたいその顏から頰ツぺたの赤味を全く押し退けて、この二三日よくなで付けるやうになつたと見えるいてふ返しのあたまを傾けた、『少しあやし過ぎます、わ。』

がり〱、がり〱と、音が皆にはツきり分るやうになつた。皆の息をひそめてゐるところから最も遠い室なる、日本間の客座敷の床したあたりだ。

『ぢやア、この邊にやア狸でもゐるんでしようか？』

『馬鹿』と、渠は自分の妻の呑氣さを罵りたかつたのが、聲には出せなかつた。同じ動物を想像してゐるのではあるが、自分のは四つん這ひのではなかつた。自分には、男の助か何かのやうに大きな図面の人間が半ば腰を曲げて、頻りに疊の下をのこぎりで挽いてる姿が、ぞツとする闇の中にあり〳〵と見えた。自分のからだ中が總毛立つたと同時に、力強い決心を以つてだが、然し押し伏せた顫え聲で、『電話をかけろ――電話を！』

『どこへ？』妻は直ぐ立ちかけたが、中腰で片手を火鉢のふちへかけた。

『知れたこツた、警視廳へ！』

『警視廳へ――』立ちあがつてから、『何と云つて？』

『〇〇大臣秘書官邸に、今あやしいものが來てゐるから、直ぐ來て呉れろツて。』

『それがおよろしいでしよう』と、女中も立つて妻の躊躇するのを電話室に急がせた。妻は女中に脊中を押しやられながらも、なほ不安心らしくこちらを向いたのに向つて、渠は聲をかすめて叱り付けた。

『こツそりだ！』

『…………』電話室から女中と共に戻つて來た妻は、少し燒けを起したやうに無作法に、どツかりともとの坐に坐わり、兩手を揃へて火鉢のふちにかけたが、反對のかはにゐる所天が顔の色を換へて、前

と同じやうに直坐して、鬚をひねりつつ耳をそば立ててゐるのを見詰めながら、低い聲で『承知しましたと――あなた、若し違つてたらどうして？』

『違ふもんか！』斯う云つて、渠は妻が自分よりも左ほど恐れてゐないのを小憎らしく思つた。同時に、かの女や女中の手前を初めてひやりと感じた。實は、電話の應答がこちらへも聽えた頃から、あやしい音はしなくなつてゐた。渠は三人に向つて自分の威嚴を取りつくろはねばならぬ氣がしたので、それをこの不平にまぎらせた、『もツと靜かに電話をかければいいのに――お前達が逃がしたのだ！』

『だツて――』妻はこちらを馬鹿にしたかのやうに横を向いた。

渠はこれを見て慚愧と忿懣とが俄かに心のうちでかき亂れた。が、間もなく、玄關の呼びりんが鳴つた。警視廳は直ぐそばであつたから。

『しまつた』と思つたので、あわただしく立ちあがつて、渠は寢室の方へ行きかけたが、こちらを見返つてる妻のそばへ片足を踏みとめて、『おれは寢たことにして置け！』

三

寢卷きも着かへないで寢どこにもぐり込み、誰れも見てゐないくらゐ闇を幸ひに、自分で自分の顏を

しがめて、兩手であたまを投ぐつた。

『えゝツ、馬鹿！』聲のない言葉で叫んだ、『これが子爵に聽えたらどうする！　子爵からまた子爵夫人に傳はつたらどうする！』

息を殺して半ば首を擧げると、妻や女中が何だかくど〳〵と說明してゐる。來た人數は一人や二人ではないらしい。

渠はまた額をしがめて、枕の上で自分のあたまを投ぐつた。

家族が茶の間へ戾つて來たけはひがすると、客座敷の床の下あたりで人の聲がしてゐる。やがて、また、自分の寢てゐる下でも話し聲がする。自分はこのまゝかついで行かれるやうで――ちよツと氣が遠くなつたが、直ぐわれに返つてひやりとしたのは、床したの話がはツきり聽えた爲めだ。

『一體、主人はゐるのか？』

『寢てゐると、さ。』

『白ばツくれやがつて――』

『犬か何かにおぢけたんだらう。』

『人さわがせにも程があらア、な。』

段々その聲が移つて行つて、何を云つてるか分らなくなると、茶の間の下からそとへ出たらしい。

そこの雨戸が一二枚明く音がして、妻の聲で云つた。
『まア、お茶でも――どうか。』
『へい――別に異條は御座いません。』
『さうでしたら安心ですけれど――主人は宵から疲れて休んでしまひましたので。』
『なアに、御心配にやア及びません。』
『何のこともないぜ。』『臺どころの方からまわつて來たらしいものの聲だ。
『犬だらう』と、またこれも加はつた、『一つ二つ足あとがあつたから。』
『まア、そんなところでしよう、な。』最初のが云つた。『さア、行かう――どうか御主人によろしく。』
『どうも濟みませんでした。』妻が最後の挨拶をしたのも聽えた。
浪川は寢床のうへに半身を起し、その室のそとをまわつて行く人々の話し聲に耳を向けると、渠等の棄てぜりふが皆自分をあざけつてるやうに思はれて、自分の兩手に冷汗を握つてゐた。
『おれの面目がつぶれたぢやアないか？』電話など出來たのがあまり便利過ぎた。それにしても、妻が、
『若し違つてたら』とあとで注意した時、あの時なぜ取り消す智慧が出なかつた――只今電話をかけましたが、もう、安心になりましたと？　さうすれば、あいつ等の來た時に、體よく斷わることも出

來たのに！『馬鹿！』またわれとわれを罵つた。

妻は氣轉を利かして、主人を宵から寢かしたと云つても、渠等はとても信用してゐさうではない。斯うなると、家族のものにも自分の慣うちが全くさがつてしまうので、先づその取り返しかたを考へてゐた。

すると、ひツそりしてゐた茶の間の無言が妻によつて破れた。

『若しあの奧さんに聽かれたら、どうだらう？』

『さうです、ね。』

『これだから、軍人でなけりやア――』

かげでまごついてた渠は、これを聽いてむツとしたと同時に、いい出の手がかりを得たので、無理にも怒りの顔色を見せて飛び出して行つた。

『そんなに軍人がよけりやア、直ぐ歸つてしまへ！』

『そんなことを、旦那さん！』女中が先づ聲を出したが、いづれも呆れた顔をしてこちらを見あげた。

『いいや！』つツ立つたままがん張つて、『今、ひまをやるから出て行け！おれは軍人でないから――卑怯者だから――おれの面目はどうせつぶれたのだから』と、語調をつよめて疊みかけて、『出て行け

！出て行け！　直ぐ里へ歸れ！』
『そんなことをおツしやつたツて、旦那さん。』
『いいや、お前も一緒に歸れ！』
『わたしは女中で御座いますから、いつでも歸りますが――』
『田鶴子も一緒につれて歸れ！』から女中に云つてから、また妻を猛烈に目の色まで變はつてると思へるやうに見おろしながら、『お前のおやぢも軍人だから、おやぢにやアお前の申しわけが立つだらう――どうせ軍人でない亭主は見込みがないからツて――』
『まア、お坐わりなさいませ。』女中は横合ひから立ちあがつて渠を無理に細君のそばに坐わらせた。
『突然どうなさいましたので御座います？』
『おれは以前から』と、渠は妻があきれて顔色を青ざめて、こちらをじツと見てゐるのをなほ瞰み付けながら『軍人でない、軍人でないと云はれるのを癪にさわつてるんだ。今回のやうな拜命だツて、もとはおれから進んで運動したのぢやアない。おれはどうせ意久地がない――お望み通りの軍人にも高等官にもなる資格がないのだ。あす、斷然辭職する！』
『…………』妻の顔は見る〱死人のやうになつたかと思ふと、『あたしが惡かつたのですから』と半ばも云はず、渠の前に泣き伏してしまつた。

『奥さんがお可愛さうぢやア御座いませんか？』女中はまた半ば母親のやうな優しさを見せて渠の妻を見ながら、渠に訴へた。

渠は本當に胸がむしやくしやしてゐたのだが、この樣子を見て、多少主人たるの威嚴を取り返したと思つた。

そのうち、渠のそら寢をしてゐた室で子供が泣き出したので、妻はその袂で目を押さへながら、すすり上げつつ、その方に行つてしまつた。

『今のさわぎも、まア、無事で御座いましたし――』

『決して無事ぢやア濟まん！』

渠と女中とはそれツ切り云ふこと葉がなく互ひに橫を向いてゐた。

渠は手持ち無沙汰を感じたので、妻の坐わつてたあとへ行つて、わざとにもこわい顏をして、火の上に片手をかざしながら、猫板の上に在つた一枚の名刺を別な手に取り、警視廳探偵なにがしと書いた字のおもてを見詰めてゐた。

その翌日は、胸に傷持つ思ひをして、渠はおづおづ勤務してゐたが、別に大臣の機嫌を損じてゐるやうなやうすは見えなかつた。

事務も大分わかつて來たので、丁度さう用がないのを幸ひ、午後の四時頃に歸宅して、ここへ移つてから初めての晩食を妻子と共にした。

『さア、來い』と、渠が女中の手から末の男の子を取つて、膝の上に抱いた時は、妻子も食事を濟ませてゐた。

妻はこの時思ひ出したやうに、だが、落ち付いて云つた、

『けさ、電話がかかりまして、ね、――警視廳から。』

『何だツて？』

『もう、犬のがりがりは聽えませんかツて。』

『人を――馬鹿！』渠は斯う云つて何氣ない樣子をして見せたが、忘れようとしてゐた一生の耻ぢを思ひ起して、自分の心は大臣室で全くちぢみあがつてゐた。

――（大正四年二月）――

女四人と男三人

『僕はどうしたと云ふのだらう――？』

二十二歳にしては餘り思索的經驗に耽り過ぎてたと云はれるのを寧ろ寂しい誇りにしてゐた卯之吉だが、今回の事件にはすツかり心が宇頂天になつて、この二三年來の獨身主義がどこへか行つてしまつた。

A雜誌の附錄にして連載した處女作脚本がそのままの不體裁な形で一つの單行本になつたのさへ得意であつたのに、これを讀んだ女の一人がどうしても自分を婿に貰ふ、さうでないと死ぬと云ひ出したのだ。

『至急會見したいことがあり、櫻根氏の病床まで來て呉れ』と云ふ通知が、A雜誌を發行してゐる女學校の校長から渠のもとへ届いた時は、渠も何のことだか分らなかつた。ひよツとすると、以後その女學校へ出入りすることをさしとめるとでも云ふのぢやアないか知らんと思はれた。

渠が同校へ出入りするやうになつたのは、渠の東京に於けるもとの同窓生が――荳村とか秋風とか稱して――二三名も教師をしてゐたし、また仙臺での同窓なるB氏は同校の周圍に建ち並んでる二階長屋の一室に住んでゐたしするからのことだ。B氏からの關係で、當時雜誌界の一覇者であつたA雜誌にも卯之吉は寄稿することになつた。渠はよく議論や無駄話に夜をふかして、B氏の室にとまつたB氏は酒好きで、少し寂しくなると、そばにある茶の土瓶を持ち出してこツそり酒を買つて來た。

その翌朝、渠等二人も校長等と共に寄宿生一同と同じ食堂で朝飯を食する時、どこかの隅の方で、『このお茶はお酒くさい、わ』と云つてる女學生などもあつた。こんな時には、渠はB氏と顏を見合はせてくす〳〵笑つた。そんなことが校長に知れた爲めに、渠は自分と共にB氏をも校長が學校からのける話を、病人の櫻根を煩はせて、させるのではないかと心配した。

櫻根――は金がある家の子なる爲めに校長が大切にしてゐたのだが――の寢てゐるところは、學校に近いところで、或代議士が所有してゐる廣い屋敷のうちの二階の一室であつた。初期の肺病の爲めにだ。その離れ座敷の二室には、代議士の娘と今一人他家の娘とが――共に同じ女學校を前年度に卒業したと云ふのが――住んでゐた。が、代議士の娘の方が荳村に對する失戀の爲めに氣が觸れてからは、今一人の娘だけでゐるのも、卯之吉は知つてゐた。

卯之吉は櫻根の病室へあがつて見ると、校長の置き手紙があつた。

『まア、讀んで見給へ。』病人は枕のうへでいつもに無い厭な顏をして云つた。渠はそれまでには卯之吉を見ると、いつも顏がうるはしくなつて、渠の故鄕に於ける所有地を卯之吉と共に經營する話をし出したものだ。君も僕も將來は文學に身をゆだねるのだが、文學ではどうせ喰へない。就いては自分には越後の村上附近に所有の山があつて、山上に溫泉が涌くから、それを經營すると同時に、山を桑畑にして養蠶を初め、二人の生活を別に確立させよう、と、斯う云ふ風な相談をしてゐた。當時、A雜誌から分立して『文學界』と云ふ新雜誌が出てゐて、女學校の若い敎師の荳村や秋風はその方にばかり筆を執るやうになつてたが、櫻根がその方の連中を嫌つて、自分をばかり取り入れようとするのを卯之吉は——自分が誰れからも粗暴だと云はれてるのを知つてたので、殊に——不思議にも思つた。櫻根は男に似合はずからだも精神も透きとほるやうな優しい質なので、皆に『おかひこ』のやうだと云はれてゐた。渠が年うへでもあつたので、卯之吉は渠の爲めに時機を見て信州の或養蠶學校へ這入つて置くことまで相談してゐた。

然し出し拔けにいやな顏をして、まア讀んで見給へと云はれた時は、その手紙に何か不吉なことが書いてあるのだと卯之吉には思はれた。ところが、その前日に、初めてB氏の室で面會した新卒業生のことであつた。

『山中照子が君と結婚したいと云ふのです。兎に角、直接に會つて見て、何とも御返事を願ひます。

かの女を氣違ひにしてしまうとしまはぬとは單へに君の返事にあります。』校長の書いてあることはこれ以上には出なかつた。

『…………』卯之吉は突然のことでもあり、豫想外のことでもあるので、ただじツと友人の顏をにツこりともしないで見詰めた。

『何か——あまいことを——云つて——聽かせたのだらう——』

『…………』

『きのふ——會つたと云ふから——？』

『馬鹿を云ひ給ふな！』卯之吉は初めて笑つて見せたが、胸には動悸の烈しくなつたのをおぼえつつあつた。『B君が知つてる筈だが、あの天才氣取りを冷かしてやつただけだよ。』

『然し天才は天才だ。』『病人は眼を渠から離して天井に向けた。

『そりやア天才かも知れない、さ——然し、君達があんなにまでたツた十七の娘ツ子をおだて上げるのはよくない。』斯う云つて、卯之吉は思ひ出した。自分がきのふB氏のところでかの女と熱心に文學談をやり初めた時、かの女を『文學界』の連中の一名なる秋風が呼び出しに來たので、かの女はあわただしく別室へ去つて行つたことを、それが今日のやうなことにならうとは！『兎に角、僕は山中に會はないでもいい——歸る！』

『まア、さう云ひ給ふな。』病人はあわてたやうにこちらを向き、『もう來るだらうから。』
『來たツて、ことわるだけのこと、さ。』
『ことわるなら、ことわるで君の勝手だらうが――』少しうち解けて來て、『けさ、ありツたけのいい衣物をみんなあの小いからだに着込んで、君と一緒になれなければ死ぬと叫んで、校長の細君の室から寄宿舍の廊下ぢうまでを、狂ひまわつたさうだよ――この陽氣に向いて來た日に。』
如何にもこの二階の病室の外には、大きな櫻の木があつて、半ばは花を開らいてゐた。そして卯之吉のあたまも俄かにぽツとなつて、心はむずくとあツたかい花ぐもりの空に包まれてゐた。それを自分が見透かされまいと用意しながら、
『然し、それは少し順序が違ふやうだ』と、いつも通り大きな口を開いておほ聲で笑ひながら、『男のいろ氣づくのは大抵春の氣候にだと云ふが、女のは寂しい秋に多いさうだて。』
『でも、山中には今が一轉期だ。もう卒業もしたのであるから、父親が近々國から迎へに來ると云ふし、親と一緒に歸つたら、結ひ名づけの番頭が待つてると云ふし。山中が獨りでどうだだをこねたツて、どうせ君とは一緒になれやせん――その番頭を親は子飼ひの時から信用して來たさうだから。』
『何も』と、態度がまたおもくしくなつて、『僕があの女と一緒にならうとは云つてやしないぢやアないか？』むツつりした口調で云つては見たが、自分自身では、櫻根の言葉や樣子に――淡いにしろ

――嫉妬の意味があると見えたのに反抗したのか、それともまた自分がこの經驗したこともない事にぶつかつて萬ざら悪い氣持ちでも無かつたのをわれから淺墓だと懲戒したのか、實は、孰れとも曖昧であつた。

が、結ひ名づけの番頭があると聽かせられたのを考へてる間に、卯之吉はやツとわれに返つた。そして『あの女だ――あの女だ』と、心でうなづいた。思ひ出すと、渠が仙臺に於ける最後の學校生活をやめていよ〳〵歸京することにきめて、三ツ四ツ年うへのTと云ふ新同窓生と別れの一夜を向ふ山の上で自分等の戀物語りに過ごしたが、その時、T――A雜誌の關係からさきに女學校の校長の世話になつてゐたのだ――の話に據ると、渠に向ふから近づいて來た女學生が一名あつて、或時など校長宅の二階に許されて、一夜を二人切りで明かした。そしてその口ぶりによると、からだの關係が少くともその時だけはあつたらしい。年齡から云へば、まだ滿十五歳何ケ月であつたが、ずツとませてゐて、天才肌の女であつた。が、國に結ひ名づけの番頭があつて、親はその番頭を店に置き据えのままその女の亭主にするつもりだと聽いたので、相談の上斷念することにした、と。して見ると、それが――年頃から云つても、また性質の工合から云つても、――呉服屋の娘なる山中孃であつたに相違ないと思ふと、既にかの女の處女性を破つてゐたのに對する反感が生じたと同時に、Tに對する自分の體面上とてもかの女の要求をいい氣になつて承諾することは出來ないと云ふ決心が付いた。

『大變考へ込んでるぢやアないか？』

『うん』と、卯之吉は微笑にまぎらせながら、『山中は、實際、――君達は却つて知らないのだらうが、ね――仙臺に行つてるT君と關係があつたらしいのだ、少くとも一度は、校長の二階にとめて貰つて。』

『T君は――僕と親しく――して――をつた人だが――』病人の顏色はまた青くなつて、言葉をおどませた。少し默つてゐてから、『然し、校長はそんなことをする人か知らん？』

『そりやア、君』と、いつのまにかまた卯之吉の笑ひまじりのおほ聲になつて、少し皮肉も加はつた。『君とお綱さんとを約束させるに至らせたのも、校長ぢやアないか？　卒業生なる金持ちの娘を何でも人にくツ付けて置くのが渠の手だわ、ね――君のいつかの白狀によつて見ても、お綱さんが眼の療治に再び信州から出て來て、校長を音づれた時、その歸り途を校長はわざ〳〵君に四ツ谷見附けまで送らせて、あのお堀に渡した橋を西ひがしに「左樣なら」、「御機嫌よう」――「御機嫌よう」、「左樣なら」なんて段々と名殘りを惜しませたなどは、丸で、舊芝居の舞臺と花道とでのかけ合ひを演じさせたやうだぞ。』

『…………』櫻根は微笑し出してその時の味はひを嚙みしめてるやうであつたが、『その君の露骨が却つて山中の氣に入つたのだらう――鶴見さんの創作にはあんな野卑なところがあるやうだけれど、將

來きツとえらくなるにきまつてると云つてをつた。』

『あんなまだ小便くさい娘の預言なんかありがたくもない、さ。』斯うは云つたが、卯之吉の鼻はうごめいた。『露骨を直ぐ野卑だと思ふのが、僕のいつも云ふ通り、君達の偏見さ――矢ツ張り、君達も小便くさい方だ。片寄つた趣味と云ふものには、能く――いくらむツくりしてゐるやうに見えても――却つて野卑若しくは卑劣その物を包んでゐることがあるのだ。』

『でも、あの子は』と、病人も、もうわだかまりの無い様子で、かけ蒲團の上に生ツ白い兩手を投げ出して、『神經が鋭敏なだけに驚いたことをするよ。こないだ、ここの家族と一緒に飯を喰つた時、あれが箸を置いてじツと主人の代議士の顏を見詰めてゐたので、主人は思はずほほゑんだのだ。すると、あれはどんなおぢイさんでも男は女には動かされると云つた。年不相應にませてるからでもあらうが、その天才肌は遺傳らしい。本統の父と云ふのも繪が好きで、その早く死んだのは氣が狂つての自殺であつた。今のおやぢと云ふのは、そのあとへ番頭が直つたのだから、山中は初めから馬鹿にしてゐる樣子だ。』

こんな話を櫻根がしてゐるうちに、その本人なる山中孃がやつて來た。

二

如何にも小をんなではあるが、――そして低く横ツぴろがりに廣がつた鼻が而もうわ向き加減にはなつてるが、――丸ぽちやで愛嬌のある顏つきは、きのふ會つた時にもこれを卯之吉は可愛く思はないでもなかつた。それに、けふはあツたかいので、障子を明け放した二階へさし入る午後の薄いほこした光りを受けて、かの女のめかし込んだ友禪縮緬の着物に西陣の圓帶が光つた。少し固くなつて座わつた膝の上の眞ツ白な手に金の指環がはめてあるのを見ては、一しほふるひ付いてやりたいやうな氣もした。卯之吉はさう有福に育つて來た者ではないのだ。

が、渠の心に反感を增させたことには、女學校の舍監なるお婆アさんが一人附き添つて來たのが餘りにおほぎやうに見えた。

『澤山さんとかはまだ見えないので御座いますか』と、舍監は病人に向つて聽いた。

『まだですが――』病人の答へは最も叮嚀で而もやわらかであつた。『もう、來ましよう。』

卯之吉はあとで知つたことだが、若し自分が山中孃の申し出をことわつた場合、かの女の氣を好きな美術に向けさせて落ち着きを得させる爲め、自分と同時に澤山をも呼び寄せのハガキを出してあるのであつた。そして澤山とは卯之吉の處女脚本の表紙書の意匠をした者だ。

『さう致しますと――』舍監はもぢ〳〵と云ひにくさうにしながら、『どう云ふ風にお話を初めたらよろしいのでしようか――一向まだこの年までも經驗のないことですから』と、どちらの男にとも即か

ず笑ひにまぎらせた。
『鶴見君の意見は、もう』と、病人が受けて卯之吉にもちよツと横目をつかひながら、『分つてをります。』
『……………』卯之吉は山中孃の顏がさツと赤くなつたのをも見たが、直接に舍監に向つて、『僕は山中さんをそそのかしでもしたやうに思はれてるのが不本意です。』
『そんなわけにも思はれてやせんで御座いましようが――』
『僕は一度女に失敗したことがあるのを白狀します。が、その後は無妻主義です。』
『それならそれで――』
『わたしだツて――何も』と、山中孃はこの時にが笑ひをしてちよツと卯之吉を見たが、直ぐ少しした向き加減になつて、『あんたがいやなのを無理に賴むんぢやない。』
『さうよく分つてゐるなら――』舍監は斯う云つて言葉を切り、眼を山中から卯之吉へ轉じた。二人はこのお婆アさんの左右に座わつて、病人に對してゐた。
『初めから分らないことなど云やせん。』山中は怒つたやうに舍監の顏を見上げた。
『でも』と、病人もその方を見て、『けさの勢ひツたら、なかつたと云ひますよ。』
『そりやア、ね』と、舍監も笑ひ聲になつて、『ありツたけの衣物を着込んで、――髮をばらツとさん

ぱら髪のままで、ね——兩手に花を以つて——ほかのものは皆で、丸でオフエリヤさんだと申してをりました。』

『だツて』と、むツつりしたあまへた口調で山中は舍監を責めるやうに、『わたしの勝手にしたことぢやないの？』

『その勝手がいけませんよ。』頤で押さへ付けるやうに、『皆に心配やら手を燒かせて。』

『ほんとに、あなたも手が燒けます、ね』と、病人が微笑しながら舍監に云つたのを、山中は直ぐ自分に受けて、

『でも、あんたはわたしよりも弱い人よ。』

かの女は初めて勢ひづいたやうににこ付いて來たが、病人は何だか變な顏をして卯之吉には分らない云ひのがれのやうな事を云つた。

ここへ澤山が案内されてあがつて來た。

『遲くなつて失敬した——ちよツとおやぢの用があつて、よそへまわつてたので。』坐わるが早いか、手ぬぐひの小さくたたんだので鼻の汗をふいた。それから、渠は病人から山中と舍監とに紹介された。『で、事の意味はハガキで大體分つたが、——どうなつたのでしようか』——渠がおとならしく一座を見まわして、最後に舍監と顏を見合はせた時、舍監はわけも無かつたと云ふ風で渠の問ひに答へ

た、
『もう、分つてしまつたので御座います。』
『さうですか?——あ、それは——』澤山が餘り手持ち無沙汰になつてるのを見た爲めらしくも、病人は話を今度の展覽會の事に向けた、
『今回のはどうだらう?』
『うん』と、澤山は今回のに對する評を手初めにA雜誌で美術批評欄を受け持つことになつた意氣込みをここでも示めすかのやうな口調でいろ〱話をつづけ、『黑田さんのはさすがまだ見るところもあるが、和田や久米になると、から成つてゐない。』
『わたしは、もう』と、舍監は座わつたまま一つあとずさりをして、『用が濟んだわけですから——』
『さうですか?』病人は手をたたきながら、『どうも御苦勞でした。』
舍監は卯之吉と澤山とにも挨拶し、山中孃へは分りました、ね。と、念を押してその場を退いた。そのあとに卯之吉は、山中と澤山との間にはさまつて、暫らく無言でゐた。
『山中さん。』澤山はにや〱笑ひながらかの女に聲をかけた、『事件はどうでした?』
『…………』
『鶴見君に、まア』と、病人が受けて、『嫌はれたと云ふやうな——』

『へい――』
『はね付けられたの。』かの女は澤山と卯之吉とを等分に見て、にが笑ひをした。が、圓い眼を病人の方に向けると、皮肉のやうにからかひ笑ひに變じて、『それでも獨り、わたしのやうな者をでも好きな人がゐるからいい、わ、ね。尾竹さんが泣きましように。』
『そりやア泣きましようよ、今ぢやア一生懸命だらうから。』澤山も病人と尾竹綱子とのことは知つてゐた。
『…………』病人は少し顏を赤らめて横を向いたが、また誰れにともなくこちらを見て、『僕だツてそんな意味ではなかつた。』
『でも、あんたは弱い人――ゆふべわたしの手を取つて、つらいツて泣いたぢやアないの？』
『…………』卯之吉はこれを聽いて、むら／＼とのぼせないではゐられなかつた。そんな自由がかの女の周圍にはいくらでも出來てゐるのかと思へば、一方にはこの女學校の關係範圍の如何にも緩漫なことが思ひやられ、また一方には、櫻根が病人の癖に再度の野心を起してゐるので、先刻もかの女に關していや味ツたらしい言葉を自分に向つて云つたわけが分つて來た。實際に好きなら、今故郷へ歸つてる綱子との約束を破棄しても、山中孃と一緒になりたいとはツきり、先刻、手紙を渡した時に正直にうち明ければよかつたのに。自分は別にけふのことを知らないで過ぎてもよかつたのだ。が、知

つた以上は、――而も女の方からの望みなので、――無下に返り見ないのも損なやうな氣も出てゐた。それを渠は押し隱して、おほ聲に笑ひながら、『ぢやア、僕が改めて仲人にならうか？』

『いやです、わ、わたしが！』かの女はこちらを見て怒つたやうす。

『あは、は！　失敬、失敬！』卯之吉はなほつづけて大きな聲であつた。

『そんなことよりも、山中さん』と、病人はやわらかな聲になつて云つた、『澤山君に得意の美術談でも聽かせて貰つたらどうです？』

『美術談か』と、澤山はちよツと迷惑さうな樣子を見せて、『隨分面倒だから、な。』また手拭ひを出して鼻の汗をふいてゐた。

『わたし、文學も好きだけれど、美術も好き――大抵の繪のよしあしは一通り展覽會を見て通つたら分ります、わ。』

『ぢやア』と、澤山は乘り氣になつて、笑ひながら、『先づそこへ一つ線でも圓い輪でも引いて御覽なさい。』

『そんな子供ツぽいことを！』

『でも、それから見ないと、美術心があるかどうか分りませんよ。』

『…………』かの女は返事をしなかつた。

『無論そんなことは』と、澤山はかの女の病人に向けた横がほをちよツとながめて、しよげ氣味になり、おのれも病人の方に向き、『極初歩の人をためす法だが――』
『わたし、油繪だツてかけます、わ。』
『えらい、ね。』澤山は斯う冷かしてゐた。
『いくら意張つたツて、山中さん』と、病人はこの二人の間を取りつくろふやうにして、『專門家にはかなひますまい。澤山君のうちへでも行つて、說明でも聽いて來て御覽――いい繪が隨分あるさうですから。』
『まア、いらつしやい、今からでも。』
山中孃がその氣になつて、卯之吉にも一緒に行かうと云つたので、櫻根の方で車を三臺あつらへた。その時はまだ電車がなく、馬車鐵道の線路が一つ市中をまわつてゐただけなので、番町から淺草へ行くには、目がね橋まで出て馬車に乘らなければならなかつた。

三

澤山の家は十二階の眞ツ下に在つた。
かの高山樗牛等も屢々やつて來て、馬のやうに大きな前齒をむき出して氣焰を吐いたところだ。木

村鷹太郎氏等もここに集つて國字改正案の爲め新國字の工風を相談したこともある。然しそれはすべて澤山の兄の關係であつて、澤山はただ繪を書いてゐた爲めに五十音字を横がきにする時のいいくづし方などの相談を受けたに過ぎなかつた。

そして中村不屈と澤山とは畫家としてどちらがえらくなるだらう、寧ろ後者の方だらうと云はれてゐた時で、後者が――親から貰ふ小使ひに滿足して――金などに高くとまつてゐたのをしほに、『日本新聞』のポンチ畫家として既に名を出してゐた不屈は十二階の百美人畫を――澤山の父がそこのお株主であつたのをつてにして――受け合つて書いた。

こんなことは卯之吉には、もう珍らしくなくなつてゐたが、澤山は頻りに得意さうにまた山中孃に語つた。

澤山の兄は大學を卒業すると同時に地方の教師になつて行つたので、兄の友人どもも從つて遠のいてゐたが、從兄弟なる(他日文學博士になつた)者が中學生として寄寓してゐた。その人の勉强室とはずツと隔つて、――梅毒患者の診察室と藥局とを通り過ぎた奥の室で三人は話し込んでゐたのだ。が、そのまた横手にある澤山の父の刀劍磨ぎ道樂の室から澤山がいろんなかたなを持ち出して來て、ランプのあかりに照らして、身に浮ぶにほひの工合などを説明し出した時は、ルペンスやレンブランやコンスタブルなどの畫帳を山中孃は一通り見てしまつたのであつた。

『わたしの父はむらまさのかたなで切腹したのだ、わ。』かの女は突然かう云つた。
『どうして？』澤山は一つのかたなを持つてた手の緊張をゆるめた。
『氣が狂つて――何かの衝突から。』
『いいかたなを見ると、死んで見たくなるか、人を殺して見たくなるかするから、な。』
『いいえ、わたしの家は代々氣違ひの家なの――だから、わたしも氣違ひになるのでしようよ。』
『は、は！　そんなことア――』默つて聽いてゐた卯之吉は冷笑した。そして退屈まぎらしに二人を置いて立つた。いつも澤山と會ふと、酒を一本飮むのだが、その夜に限り、例よりも醉ひが出たやうであつた。
　男ふたりで一人の女をつれ込んで來たのを、澤山の家では驚いたが、また歡迎もした。そして卯之吉が三つ四つの坐敷を通つて家族のゐる茶の間に行くと、澤山が國の或女郎屋の娘を――或同情心から――他日自分の妻にすると云つてつれて來てあるそのお靜と云ふのが、第一に、卯之吉の肩につかまつて、
『鶴見ツアん、あれはあんたの？』
『いいや。』
『では、謙ツアんの？』

『いいや。』
『ぢやア、何よ？』
『實は、ね、僕と一緒になりたいと云ひ出したのをことわつてるところ、さ。』
『お前は』と、澤山の母はそばから笑ひながら、『色をとこだ、なア？』
卯之吉はただ微笑してゐたが、ことわつたが爲めにかの女が却つて燒け氣味でこの家の友人と仲よくなつて、お靜を棄てるやうになつたらどうしようと考へた。自分はお靜には、無論澤山の知つてる範圍で、別に意味はないのだが、これまでにも多少の小使ひなどを呉れてやつてゐた。
茶の間からもとの室にもどると、卯之吉はつッ立つたまま、
『さア、歸りましよう』と云つた。
『君は山中さんを』と、澤山は名殘り惜しさうに渠を見上げて、『送つて行く責任があるぞ。』
『無論、さ。』
山中も立つて、裾を揃へた。
江川の玉乘りや常盤座のあかるい前を通つて馬車通りへ出ると、かの女は、
『乘らないで歩きましよう。』
『それでもかまはないが』と、卯之吉は少し躊躇して見せたが、『歩けますか？』

『歩けますとも！』かの女は、もうさきへ立つてゐた。『暗い方をわたし好き――こツちへ行きましよう。』

手を出しさへすればしツかり受けさうな樣子で、かの女は人通りの少い横丁へ這入つて行つた。

あとからついて行く卯之吉は、それでも、櫻根の前で云つたことを思ひ出さないでは置けなかつた。誓ひか何かのやうに、あんなことを云つて斷わらなければよかつた。この女がTと關係があつたか、なかつたかのことも、實はまだ突きとめたわけでもない。本人の男自身からの白狀で關係があつたと云ふ如きは、却つてその話を誇張したり、その白狀なる懺悔を――耶蘇教的に――尤もらしくしたりするに過ぎないこともあり勝ちだ。よしんば、また、さきにかの女がTに一度關係があつたとしても、Tは他日えらくなる人とも思へないから、そんな關係を氣にしてゐるにも及ばぬ、と。

その間にも、かの女は二人が一緒になつた上を豫期しての事々を――あまり卽かないやうにして――語つてゐた。

『吳服屋なんて、男の主人は別に働かなくツてもいいのだ、わ。わたしが歸つたら、わたしが――金山の事務員などは皆初めからうちの得意だから、――十分に出入りして働いてやる、わ。主人は主人で文學をやつてればいいのだから。』

『そりやアさうだらうが』と、卯之吉はわざとにも言葉を不丁寧にして、『あなたには立派な結ひ名づ

けがあるのぢやアないか？』

『番頭のことなんか、わたしがいやなら仕かたがないでしよう――？』

いつのまにか、たツた一尺ばかりを隔てて平行してゐたのが、女の方から横にこちらの顔を見あげてまた近づいて來た。その眼は、今しがた西洋の畫を熱心に見てゐて、たま〳〵いい思ひ付きの批評を加へた時の大きな圓ツこい眼だと、卯之吉には思ひ出された。

右と左りとから袖がすれ〳〵になつて歩きながら、渠のどぎまぎした胸は優しい手さへ觸れれば一遍で決着がつくのであつたらう。が、突然、正面から人力車がやつて來たので、また兩方に別れてしまつた。

どこを歩いて出たのか分らなかつたが、もとの目がね橋へ來た頃、卯之吉は話の前後とは釣り合はぬほど不自然なところへ左のやうな言葉を拋り込んだ、

『僕だツて、――嫡子が家のあとを取らなければならぬと云ふものでもない――時が來るかも知れない。』

とう〳〵番町まで歩き通しで、夜中の十二時少し前に、卯之吉はかの女を櫻根のもとまで無事に屆けることが出來た。そしてその翌日は、渠の芝なる家へかの女も澤山も來ることになつてゐた。

四

卯之吉はつい、こないだまでは、京橋なる或演劇雜誌社に住み込み、その雜誌の編輯やら探訪やら會計やらをごツちやにやつてゐたのだが、主人を初め、年寄りの女中どもがあまり自分を書生扱ひにするのが面白くないので家に引き取り、或外國宣教師の日本語教師に毎日築地まで行つてゐた。その仕事を濟ませて歸つて見ると、もう、約束の客は來てゐた。

『澤山さんが、ね』と、母は玄關へ出て來て心配さうに告げた、『若い女の人をひとり連れて來なすつたが――あれは誰れ？』

卯之吉はそれにはちよツと答へないで茶の間に行き、

『只今歸りました』と、無骨にだが、そこにゐた父へ珍らしく挨拶をした。そして立つたままむツつりとした顏つきで、父にも聽えるやうに、

『あれは佐渡が島の或大きな吳服屋の子だ。』

『また引ツ張り合つてるのぢやアないかい？』母はこの二三年前に卯之吉が或女に失敗したのを思ひ出してゐたらしい。

人が欲しいと云つたのを何も橫取りしたわけでもなかつたが、渠はその女と暫らく耶蘇教會で交際

してから約束もした。また、かの女が教會の番人なる老夫婦と同居してゐたので、教會のがらす窓をぶち破つて這入つて行つたこともあつた。自分が學校を出た上は一緒になることにきめたので、自分の家へもおほぴらに出入りをさせ、平氣で讃美歌を歌はせたりしたこともあつた。聲がよかつたからだ。そしてあの子はやがて僕の妻にしますから、そのつもりでゐて下さいとまで兩親に發表した。それが然し、卯之吉が學校を仙臺に轉じると間もなく、看護婦として病院に勤めてゐながら、或る男に關係したのが分つたので、こちらから約束を取り消した。

『卯之吉の云ふことなど當てにならん。』と、父などは事情を知らない爲めに云つてゐた。それに對して卯之吉は今回父に、それとなく、自分の不信用を取り返す考へもあり、また同時に、廢嫡にして呉れる意志があるかどうかをも知りたかつたのだ。

『うらん』と、渠は母に對して否定の意を示めしてから、『僕を養子に來て呉れろと云ふのだが――』

『へい――』

『僕はいやだと云つた。』

『…………』暫く渠の顏を見てゐた母は、半ば父の方にも向いて、『さうお金のあるところなら、行つていいぢやアないか、ね。』

『…………』父は笑ひもせずまた返事もしなかつた。

多少きまりが惡い氣もしたので、卯之吉は正午から出る時に命じて置いた馳走を出せと女中に云つて置いて、その室を出た。そして家族が山と云つてる傾斜の中腹から江戸自慢と云ふおそ咲きの櫻が大きな赤い蕾を吹いてゐる、その下の離れ座敷なる自分の勉强室に來て見ると、澤山の向ひ合つて坐わつてる山中孃は、荒い縞お召か何かの衣物の上にあづき色の綸子の被布を着てゐたが、這入つて行く卯之吉を見あげてにツこりとした。その胸の左右に垂れてゐる被布の、水色のかざり紐が幽かにゆれてゐて、かの女の顏にはぽツと——家根の上に江戸自慢が咲いた時の色を忍ばせるやうな——紅みがさしたのが見えた。

『どうせ來る道だから』と、澤山は少し云ひにくさうに口をまげながら、『僕がさそつて連れて來たよ。』

『さうか?』卯之吉は西洋人から借りて來た英文雜誌北米評論を持つてゐたのを、山に面した窓のそばの机の上に拋り投げてから、『いらつしやい』と山中に挨拶しながら坐わつた。

『ゆふべ、あれからまた櫻根さんにすねられたのよ。』

『…………』卯之吉は机に片肱を突いてその方の手さきで和服の襟をかき合はせながら、暫らく默つて、山中が床の間を背にしてこちらを見てゐる眼をこちらからも意味があるやうに迎へてゐた。

『燒けたのだらう、な』と、澤山は入り口の方にゐて、笑ひを見せるやうにしてだが、自分の口をま

た左右に引ん曲げた。これは渠がいつも別な意味があるやうな時にする癖だと分つてゐたので、卯之吉の心には澤山自身も實は燒けてるんぢやアないかと思はれた。わざ〳〵さそつて來るにも及ばないではないか？別々に——直接に——ここをさして來たらよかつたではないか？　こちらは一度山中とさし向ひでよく話して見たいとも思つてゐたのだのに、と云ふやうな恨みが私かに卯之吉の胸一杯になつてゐた。が、そんなことは少しも顏にだツて出さないつもりでゐた。

『けふだツても』と、山中はなほ卯之吉に訴へるやうに渠を見詰めて、『危險だから、行かぬ方がいいツて——』

『それで僕等が出る時にもあいつ、變な樣子をしてゐたんだ、な？』

『ええ。』かの女は斯う無邪氣に答へて、ちよツと澤山の方を見た。それからまた卯之吉に向つて、『新らしい友人にばかりわたしが親しくなるのは、氣持ちが惡いツて——だツて、あの人にもわたし、時時行つては病氣の世話をしてあげてゐます、わ。』

『まア、病人のことだ。僕等はあのおかひこのやうな優をとこに成るべく氣をもませないやうにしなけりやア——』

『そりやア、ね』と、山中は十分納得してゐるらしく小くびをかしげた。

『兎に角、櫻根君は』と、澤山はあとをつけて、『お綱さんを近頃いやになつて來たのは事實だぞ。』

『そりやア、君がお靜をいやになつたやうに、ね。』

『然し事情が違ふやうだぜ――あのお靜なら、欲しけりやアいつでも君にやるが、櫻根のはまだそもその戀中ぢやアないか？』

『まだ君の子宮目がねにはかかるまいから。』

『馬鹿ア云へ！』

『男はそんなに』と、山中はをとならしく云つた、『氣の多いものか知らん？』

「そりやア、ね』と、澤山は優しく引き取つて、『女だツてさうでしよう？』

『女はさうしたものぢやない、わ。一度この人と思つたら、死ぬまでも思ひ通せます、わ。』から云つて卯之吉の方を眞面目に見てゐるので、渠は微笑を以つてそれを迎へてゐる外は無かつた。

そのうちあかりがついた。

どうせけふは二人切りでさし向ふをりはないと見たので、卯之吉は自分のところへも女の來訪があつたのだけをでも自慢する爲め、自分の家にとまつてゐる仙臺からの年うへ同窓をもここに招いて、紹介をしたり、食事を共にさせたりした。そして文學談や美術談や金取り仕事のことなどを熱心にしながら、皆僅かの酒に額を染めた。

卯之吉は床の間に立てかけてあつた――鄕の吉弘と云ふ銘があつた――そのかたなを持ち出し、山

中の横手に立つたままで、片手に持つた鞘からなか身を引き拔き、
『僕がこれを以つて毎日運動の爲めにふりまわすのは澤山君もよく知つてるのですが、ね――こないだ――御覽なさい、斯う云ふ失敗をしたのです。』言葉が何だか堅くるしくなつて素直には出なかつたが、劒のさきを以つて疊のおもての縱よこに切れたところを二ケ所追つて見せた。その一つは山中の坐わつてる座蒲團の下に這入つて行つてるので、かの女は劒さきの向くところの自分の座蒲團の端を――さきの進むだけ――指輪の光る方の手でまくつて見せた。
『よせ、よせ、あぶないから！』澤山はよこから斯う叫んだ。
卯之吉は少し劒を横にあげて、
『どうです、山中さん、これで切られますか？』
『それでなら切られて死んでもいい、わ。』かの女はこわがりもせず、顏を上げて微笑して見せた。
『おい、よせと云ふに！』
「大丈夫だよ』と、澤山に念を押してからなか身を納め、卯之吉はかの女の膝近く坐はつて、かの女の顏を見てゐることは出來なかつた、が、かたなの鞘じりを以つてかの女の膝を少し力强く押さへ、
『さア、踊りますか？』
『ええ。』かの女は卯之吉からかたなを受け取つた。『わたし、當り前の踊りも隨分習つてますが、今夜

は劍舞にします、わ。』

かの女が直ぐ舞はうとして、この狹い六疊の坐敷に立ちあがつて、身がまへをしかけたのを見て、澤山はあぶないから鞘だけを持てと注意した。すると、かの女はなか身を手ぎはよく拔いて、床の間に横たへた。そして鞘を以つて劍に擬して、『鞭聲肅々』を澤山に歌はせて舞つた。

その間にも、卯之吉が感に打たれたのはかの女の舞ひが上手な爲めではなかつた。食事中に澤山が『實は』と云ふ前置きで語つたによると、山中の父がきのふ上京して越後屋（三越の前身）にとまつてゐた。いよ／＼かの女をつれて歸ると云ふのだが、かの女がこれを拒むので、櫻根が病中にかの女の父の爲めに一策を案じて、かの女を歸らせるやうにする爲め、澤山を伴つて行き、途中やら、また佐渡に於ても暫らくは、晝の話や文學談をさせて、かの女の氣をまぎらせることにしたところ、かの女もそれには反對がなかつたさうだ。そして澤山はここからの歸りに、今夜、かの女を越後屋へ送り屆けがてら、その父にも會つてよく相談するのであつた。

卯之吉には如何にも淡い別れとなるのであつた。この惜しい時間がかの女の劍舞にひらめく袖の後ろへ刻々に逃げて行つた。

『ワガーモノートか』と、卯之吉はまだ子供の時妹が習つてゐた端唄の調子をうろ覺えに、獨り言のやうに、劍舞がすんだ時に歌つて見たが、やる瀨ない心は納らなかつた。

『いづれ國から手紙で申しますから』と云ふかの女の別れの言葉だけがその夜の名殘りとなつた。

五

自分のふところへ這入つて來ようとした幸福を橫取りされたやうな氣がして、卯之吉は二三日がほどは澤山ともハガキの往復をさへしなかつた。向ふが來なければこちらから出かけ、こちらが行かなければ向ふから來るし、二日と會はないやうなことはなく、會はない日はまたきツと何かの感想や出來事を書いたハガキが往復してゐた。ところが、それが不思議なことには、澤山の方からもこの二三日何のたよりもなかつた。

山中孃からは、

『昨夜は御馳走になりました。わたしは兎も角明朝出發、歸國致すことになりました。詳しいことはいづれあちらから。左よなら』と云ふ日本橋の消し印あるハガキが届いた。が、澤山からは何とも音さたがなかつた。おほ急ぎで旅裝をととのへて一緒について行つた爲めか知らん？　それにしても――

每朝すねたやうな氣分で起きると、先づ目の前に浮ぶのは無邪氣なやうでませた一人の小をんなと、皮肉のやうで而もどこかににやけたところの有るぼつちやん畫家とが、信州のかはつた景色を汽車の

窓から一緒にながめて、一々にきいた風な美術的批評を加へてゐる樣子をだ。

あの一度ぽツと赤らんで見せたやわらかさうな頰ツぺたへ、同じ一つの窓に倚つて、男はわざとおのれの頰ツぺたをも接近させてゐはしなかつたであらうか？

『淺間のけむり』と歌にあるその噴火山などは、まだどこに於いても、一度だツて見たことはない。おば棄て山や田毎の月は勿論のことだ。が、自分は仙臺にゐる頃、新潟へは殆ど無錢旅行も同樣のことをやつたことがある。學校の幹事が新潟へ着いたら二三日はとまれ、留守をしてゐる家妻にはさう手紙で云つてやつて置くからと云ふ親切らしい無責任の保證を信じて行つて見ると、そんな手紙は來てゐなかつたので、そんな子供ばかりの家族に自分はゆすりかたりででもあるやうに思ひ取られて、癪にもさわつたし、また情けなくもなつた。その時、芭蕉の句であこがれてゐた佐渡と云ふ島は、新潟市の海岸からこれを雲か霞の間に夢のやうに奥ゆかしく見ることが出來た。

金をさへその時持つてゐたら渡つて見たかつたところだが、そこへ――澤山は――而もこちらを思つてる女と共に！

萬疊の浪よ、立ちさわげ！　百隻のおほ船も轉覆せよ！　そしてその中から、天才じみた利口な小をんなだけを今一度わが手に取りもどせ！

かかる感傷的な呪ひが春のどんよりした天氣と國ざかひが無くなつて、ぼんやりしたあたまを二三

日かかへたり、放したりしてゐるうちに、澤山からハガキが屆いた。

先づ消し印を見ると、矢ッ張り、淺草であつた。すると、行かなかつたのか知らんと思ひながら、裏がへして文句を讀んだ。櫻根の病氣がよくないので山龍堂に入院してゐる、一度見舞つてやれと云ふことが書いてあつた。

かうなつて來ては、渠と約束した村上在の山上溫泉の經營や養蠶の事業なども、とても、行つて見ないさきから駄目だと、卯之吉は――これを何よりのたよりある將來として、現在の報酬少き仕事をあまんじてゐたのだから、――がツかりした。

そこへ澤山がひよツこりやつて來た。

『どうだ、ハガキは屆いたか?』

『うん、今見て心配してゐるところだ。』

『けふも、これから見舞つてやるつもりだが、君も一緒に行け。』

『うん、行かう。』

『今、おやぢの用で三田まで刀劍を一つ屆けて來たのだが――』澤山は坐わると、きツと手ぬぐひを出して鼻のさきの汗をふいた。『櫻根にも困つたもの、さ。山中がいよ〳〵歸國すると聽いて、病氣が惡くなつたのだ。餘ツぽどほれてゐたと見える。』

『僕も多少感づかないでも無かつたが、ね。』卯之吉は片肱を机について、澤山をもぢ〳〵と見詰めて、『さうして君もどうしたのだ――一緒に行かなかつたのか？』

『行くなら、君に今一度相談すらア、ね。』何げないやうに云つた風だが、これも變な顏になつた『僕があの親と直接に談判して見ると、一先づ山中をつれて歸つてから、あとから用意をして僕を呼ぶことになつたの、さ。』

『然し、親の方では、娘をつれて歸ればそれでいいのぢやアなからうか？』

『そんなら、それで――苟も大きな一呉服屋の主人としてそんな約束をしないでもいいではないか？』

『それも、ね――』さう、さとも、疑はしいとも、どツちにだツて取れる返事であつた。

『僕は君に恨まれないやうに今から云つて置くが、まア、畫の教師とでも云つた資格で旅行がてら山中の家へ二三ケ月行つて來るからと兩親にも告げて許可を得て置いたので、もう、いつからでも旅に出られる用意をしてある――向ふからだツて、呼びに來るなら、さう時機を逸する筈はない。』

『………』卯之吉はただ――澤山に山中を戀慕する氣が出たか、出ないかは別としても――櫻根が澤山を仲に入れて卯之吉とかの女との間を隔て、そしてまた櫻根自身の病氣を獨りで進めた徑路を考へてゐた。『君の云ふ通り、櫻根も困つたもの、さ――見舞ひに行かう。』

『まだ君は知るまいが――これは知らないことにして置いて貰ふが、ね――氣の多い病人はお綱さんをいやになつて、別れようと云ふ手紙をかの女に送つたんだ。』

『そこまで行つたのか？』卯之吉はこないだ病人が山中の手を取つて泣いたと云ふ事實の現場を想像して見た。

『それが大した理由もないの、さ。』馬鹿々々しいと云ふ風に笑ひながら、『わたしはどうせ死病に取りつかれたのだから、おん身と末長く幸福を共にすることは出來ないツて――そんなら、なぜまた別な女を戀ひ慕ふのか？』

『君がお靜に對しては』と、卯之吉もこの女のことは澤山がすると同樣呼び棄てにしてゐたのだが、『一緒にゐたから飽きが來出したんだが、――櫻根のお綱さんは一緒にゐないからそんなことになるんだ。』

『それ、さ。それで、僕は』と、澤山はずツと眞面目になつて、『お綱さんにはまだ會つたことがないが、友人の愛する人として手紙を書いたよ。』

『早い、ね。』卯之吉は、ふと、澤山が自分よりも部屋住みでありながら、何にだツて、自分よりも利口らしく立ちまわるのを妬ましく思つた。

『どうせ――向ふから、きツと手紙で歎いて來るに相違ない、さ。向ふのおやぢは多額納稅者だと云

ふので、二人の關係を感づいた以上、――そして一度も二度も自分の輕い眼病にかこつけて東京へ出會ひに出て來たりしたのが分つた以上は、だ、――體面上、まだ結婚も濟まないのに、本人を直ぐよこす氣づかひはない。僕はその手紙にさき立つて、――ひよツとすると、行き違ひになるかも知れぬ、が、――慰めの言葉を云つてやつた。病人の心持ちは友人として僕が受け合つて取り直させるから、成るべく早く正直な都合をつけて、親にもおほぴらに――泣きついて、この場合、頼んでもいいから――出て來いと。』

『君は策士だよ。』

『なアに』と、いやな顏をしたが、また本氣になつて、『それが穩當な行き方だらう――?』

『來たら、病人は死んでしまうよ。』

『だから』と、強く念を押して、『來ても肉體上の關係は將來の所天の爲めに斷然遠慮しろと云つてやつた。』

六

櫻根が入院したと云ふ日から五日目に、綱子は澤山の建策を實行して信州から出て來た。そしてわが身をも忘れたやうに晝夜付き切りで病人の看護をしたが、病人は急にまた惡くなつて行つた。

卯之吉はかげで澤山を責めて『空想家だ』と云つた。澤山は然しおのれを辯解して、『お綱さんがだらし無い爲めだ』とした。

綱子はまだ眼病が全快しないので、看護のひまを見ては、自分の眼を洗つてゐた。可なり肉づきはいいが、窓のもとに立つて眼を洗つてる姿などは如何にもすツきりして、ただ聽いてゐたのにも勝る美人だ。見ただけでも氣持ちがよかつた。ここへ來ると、卯之吉の無作法なおほ聲の笑ひも愼むやうになるのが常であつた。

或日、病人がよく熟睡してゐる時、卯之吉はかの女と倚子をさし向ひにして、詩の話や今の詩人等の事やを話し合つた。古萱庵とも云つてた人で、櫻根がゐた家の代議士の娘を思ひ落してからまた裏切つたが爲めに、その娘を氣遠ひにさせた萱村や、時々山中孃を呼び出してゐた秋風などは、綱子はこれを教師として學校の教場で直接に知つてたさうだ。

『餘り女々しい方々で——女の方から申せば、矢ツ張り、もツと男らしい人が評判がいいのですが、ね』などと云つた。『詩人としても——これはあなたのいらつしやる前だからお上手を申すわけぢやアないのですが、ね——病人もきのふ申してゐましたことで——矢ツ張り透谷さんとあなたとが一番末頼母しいツて、ね。』

『…………』卯之吉は透谷などと同じ地平線で比較されてゐるのかと思ふと、自分の意氣込を傷けら

れたやうな氣がした。が、かの女の氣を害するやうなことは云ひたくなかつたので、『まア、皆好き好きでさア、ね。ただ文句が奇麗なテニソンを好くものもあれば、ぎく／＼してゐても意味の深いブラウニングに就くものもあります。』

『あなたのは――よくはわたしなんかにやア分りませんけれど――男らしくもあり、また深くもおあんなさいますから、まア、そのブラウニングの方でしよう、ね。』

『まア、その方に見て下すつたら、僕も滿足の方です。』

如何にも理解のありさうな――そして如何にも物腰のしとやかに優しい――そしてまた、手に受ければあツたかい雪か何かのやうに手のひらに直ぐ解けてしまいさうな愛嬌が、かの女のふうわりと圓みある肉づきの顏に浮んでゐた。多少赤みを帶びた髮の毛のたツぷりた束髮で、その後れ毛が、二三本づつ、血色のいい額や兩の頰にこぼれてゐるのをさへ、卯之吉はかの女を直接に見る爲めには邪魔物だと思つた。

かの女はその優しい顏を以つて――その少し赤すぢの立つたしよぼ／＼する眼を細めに明けて、――こちらをじツと、罪の無さそうな親切を以つて見詰めた時などは、却つて卯之吉の心は底の底までも顫えて、渠の目はおのづからかの女が足を揃へて腰かけてる白衣の膝のあたりまで落ちた。それでもなほ氣が引けて、顏までがまた病人の方へ向いた。

―斯う云ふ人がその男には却つてだらしがないのか知らん――』かの女の看護服のしたに着てゐるい衣物のちらと見えた絹のにほひが、私かにやアわりと聽こえたやうだ。そして卯之吉には、つい、こないだ、或他の病院で、病人の妻が病人の寢臺のもとであだし男と途方もない間違ひがあつたことが思ひ出された。

その夜から、目の惡い綱子の姿が渠の夢を私かに占領するやうになつてゐた。が、渠が日に一度は毎日のやうに見舞ひに行くと、きツと澤山も來てゐるか、あとから來るかするのだ。

そして或日、病人が珍らしくまた不興な顏をして、

『君達は餘り不注意だ、ね』と云つた時には、澤山にも亦ちよツと恐怖の樣子が見えた。卯之吉はてツきり病人からお前は病氣見舞ひが目的ではなく、綱子を見に來るのだと叱られるのだらうと思つた。

ところが、案外にも、A雜誌に出た山中孃の『秋の歌』と云ふ新體詩はそツくり摸倣に過ぎぬと云ふ注意であつた。

『君達二人で掲載させることにしたのださうだが――そツくり透谷の摸倣ぢやないか？』

『あ、さうか』と、澤山は申しわけのやうにあたまへ兩手をやつた。『實は、鶴見君にも相談した上、よからうと云ふので僕が――こんな傑作を葬むつて置くのは惜しいツて――社へ持つて行つたの、

さ。『笑ひながら、『道理でうまく出來てたと思つた。』

『透谷なんか眼中にないから』と、卯之吉は澤山がこちらを見たのに答へて、『僕はどこが摸倣か知らなかつたが――』如何にも無頓着に斯う云ひ放つたのは、澤山からの相談を受けたのに贊成した責任を感じなかつたわけではない。が、山中が人の作を摸倣するにも人に依りけりだと思はれて、せめておれのをでも摸倣すべきだのに――馬鹿！

それには、なほかの女並にかの女の父の無責任に對する不平も加はつてゐた。卯之吉の友人なる、否、友人としても最も親しい澤山に、佐渡行きの旅裝までも支度させて置きながら、いまだに何等の音沙汰もないのであつた。自分には初めからただあのおやぢが娘をだまして連れて歸る手に過ぎぬと考へられてゐたが、それにしても、中止なら中止と云ふ斷わりの手紙をかの女がよこさせるのが至當だ。それだのに、澤山の方へはまだハガキ一つもよこさない。一時熱心になつた渠が怒つてるのも尤もではないか？

こちらにだツても、かの『御起居如何に候や』と云ふやうな平凡きはまるハガキが一つ來ただけで――どうせ養子の問題など云つて來てもことわつてしまうつもりだが、――言葉の責任を重んじなさ過ぎるにも程があつた。

『して見ると、あいつは摸倣家から直ちに番頭の女房になつたのだらうよ。』

『まア、そんなもの、さ。』澤山もこの卯之吉の言には胸がすツとしたやうに見せて、綱子の方に笑ひながら、『天才の化けの皮がはげてしまつたのだ。』

『可哀さうに――』綱子は遠くにゐるかの女に對して姉らしい思ひやりを見せた。『利口な子ださうぢやア御座いませんか？』

それからなほかの女に關するうわさで暫らく持ち切つたが、澤山は一緒にそこを出てから、長い廊下を歩きながら云つた。

『實際、お綱さんは理想的な女だ。』

『さうだ、ね――尊敬して見ると、ちよツと姉さんらしくツて』と、卯之吉は答へた。『然し君はだらしの無い女だと云つたぜ。』

『そりやアかまはないぢやアないか？』さきに下駄をはきかけた澤山は、斯う云つて卯之吉を返り見た。『若し別に又彼麼のが發見出來れば、さ。』病院を出ると、澤山は道を歩きながらお靜の處分を相談した。

『どうせいつまで僕のうちに置いといたツて、仕かたがないから、なア――君も知つてる通り、女中も同樣で可哀さうだ。それに、また、僕自身の他の女に關するこんたんの――若しそれをやらなければならぬ時があるとして、さ――邪魔になるから、なア。』

『そりやア、君から頼むんなら、――さうしておッ母さんも承知なら』と、卯之吉もわけなく答へた、『當分、僕のところへ來させて置いてもいいだらうよ――どうせ今だッて、顏を合はせるたんびに可なり小使ひをと云つて取られてるんだから。』
『ぢやア、さうして呉れ。』
『よし』と云ふことになつて別れた。

七

『謙ツアんは人が惡いからあんただまされたら駄目よ』と、お靜は澤山のことを卯之吉に語つた。
『どうして？』
『どうしてツて――』
『お前の亭主であつたぢやアないか？』
『だから、云つてあげるのですが、ね――浮氣で、薄情で、うそつきで、惡がしこいことばかり云つて。』
『そりやア、お前が棄てられたからの恨みごと、さ。』
『でも、あんたのことまでも惡く云ふてゐますよ。』

『何だツて――？』

『世間知らずのぼツちやんがまた――どうして――脚本なんか書けるものかツて。』

『そんなことを云やアお互ひだア、ね。』

これはお靜が卯之吉の家へ預けられることになつた最初の夜の話で、かの女も渠とは反對の方に足を投げ出して、どちらもだりの手を肱まくらにして、互ひに顏を向ひ合はせてゐた。

かの女の遠慮なく肱までも出した腕や、眞ツ白い瓜ざね顏やの十分に堅肥りに肥つてるなどは、澤山の家で、澤山が油繪に書いた姿を初めとして、實際に見飽きてゐるので、卯之吉には心を動すものではなかつた。『ちよツと見せて御覽。』かの女は顏をのり出させて來て、遊んでた手と肱を突いてた手とを以つて、渠の鼻のさきから何かを取つて見た。笑ひながら、『蟲かと思つたら、ごみであつた。』

『まだおれの鼻は蟲などにやア喰はれない、さ。』

『ふ、ふん』と云つて、かの女はまた身を離れさせた。

『全體、どんな時にそんなことを云つたのだ』と、渠は氣になつたので斯う聽いた、『あいつだツて僕よりも部屋住みの癖に？』

『お父ツアんやおツ母ツアんがよくないと思ふのだけれど、――もツとも、お父ツアんはおツ母ツアんの云ふ通りになつてるのだから、――あんたの方が謙ツアんより働き者で、謙ツアんは甲斐性なし

のやうに云はれてるの。』

『そりやア謙作君も、こないだ、自分でさう云つて、不平をこぼしてゐた――「君がうちへ來るやうになつてから、君の方が評判がよくなつて困る」ツて。』

『さうでしよう』と、かの女は横になつたからだ全體に力を入れて見せた。『初めはあんたはおほ不評判でお父ツアんなどは、人に碌な挨拶もしないあんな禮儀知らずとは交際してはならぬと云ふてたのに――』

『それも聽いたよ――謙作君の云ふには、おれのおやぢは旅へ出れば、あんな年をしてもちよツと女を引ツかけて來たりするのに――』

『わたしのうちへ來れば、きツと一番若いおいらんを買つてよ。』

『さうださうだが、ね、子に對しては僞善的にも出入の度毎に嚴格らしい挨拶をさせたりしてツて。』

『でも、謙ツアんのいつも親にお辭儀をするやうすを御覽なさいな――中腰にでも兩手を突いてあたまを下げるのはいいけれど、お尻の方が高くあがつてる。』

『そりやアさうだ。』卯之吉は友人のいつもの樣子を思ひ浮べて微笑した。『僕にもその尻あがりのお辭儀をでもしろと謙作君は云ふのだ。それから僕の評判はあの家でよくなつたさうだ。』

『けれど、おツ母ツアんはお金を取ることばかり云ふてて――だから、謙ツアんが負けん氣になつて、

あんたの惡口も云ふやうになる。』

『まア、そんなことならいい、さ、ね――あッちだッて、繪の注文を受けりやア、一時に僕の二三ケ月の收入よりも多く這入ることがあるのだから。』

『でも、この頃は女のあとばかり追つてそれをなまけてるッて――』

『そりやア、お前をいやになつたから、さ。』

『そんなら、あの佐渡の人だッて、どれだけ謙ツアんのことを思ふてると云ふの――まだ一度もたよりさへ無いやうすだ？』

『ありやア僕を思つてたので、謙作君を思つてたのぢやアない。』

『でも、謙ツアんは一生懸命になつて旅の支度まですッかりして、ちッともうちに落ち付いてやせん。』

『お前のおかはりを探してゐるの、さ。』から云つて、渠は澤山が綱子に日參してゐる熱心を自分のと放して考へて見た。そして自分も、かの綱子がどうせ死ぬ病人を愛し愛して、そのからだに抱き付き、

『一緒に死ぬ、死ぬ』と泣き出すやうなことが屢々になつたほど、病人が重態になつて行くのを、かの女の爲めに最も可哀さうだと、また思ひ出した。すると、たださへだらけてゐた自分の前にお靜が

ゐるのが邪魔になつたので、『おい、もうお寢よ。お前の床はあツちの二階に敷いてある筈だ。僕もねむたくなつた。』

『ぢやア、わたしが床を取つてあげましよう。』かの女は素直に微笑しながら、床の間の横手なる押し入れから蒲團を出して敷いて呉れた。そして『お休み』と云つて出て行つた。

卯之吉は寢卷に着かへて床の中にあふ向けになつた頃、ぱた〳〵と廊下を傳つて來る素足のおとが聽えた。段々こちらへ近づいて來るのだ。

『まさか、お靜では――』何だか不安の胸を抑へて顏だけをあげるうちに、かの女はまだ明け放しにしてあつた障子の敷居の上に突ツ立つて帶ひろはだかの衣物を兩手にたくし上げて微笑した。派出な切れが下から出てゐるのが見えた。

『木枕は堅いので――』

『ぢやア、そこらの本でも。』

『坐蒲團がいい、わ。』つか〳〵と這入つて、かの女はそれを取り上げたが、卯之吉がまたあふ向けになつたその顏の上を見おろしで、『あした小使を呉れる――枕も買はにやならぬから？』

『うん――障子を締めて行つてくれよ。』

『いくら？』

『あすのことだ。』うるさいと云はぬばかりであつた。
『きツと？』
『やると云つたら、やる！』
斯うそツけなく取り扱つてはゐたが、卯之吉にはお靜も可愛くないことはなかつた。が――考へて見ると、――澤山家の人々が親も友人も、今では、厄介になつて來たかの女を自分に押し付けようとしてゐるのではないか知らんと云ふ氣が出た。
『誰れが女郎屋の娘なんか――而も友人のおふるなんか？』多少憤慨の情が燃えてもゐた。かの女は今十九歳だが、十七歳の時にその國の家が火事に逢つて、かの女は五十何人かの飯を一人で焚いた。それを見ても、澤山がいつも感心してゐるやうな働らきのある女ではあらうが、卯之吉には飯焚きの腕前などは何でもなかつた。
翌朝、例になく早く雨戸が明いたのにはツきりと目をさますと、お靜がにこ〳〵して這入つて來た。
『まだ皆寢てゐる。』
『さうだらう。』横向きに顏をかの女に向けた。
『あんたも寢てていい、わ。』ベツたりと枕もとに坐わつたその顏を見ると、朝水に洗へた顏の地肌が

まだおしろいがついてるやうに白かつた。

『今から起きたツて、なか〳〵まだ飯は喰へない。』一方を明け放した障子の明きから、ひイやりと氣持ちのいい空氣が呼吸された。

『けふから、わたし臺どころの手つだひをするから。』

『無論、さうしないと、うちにやアゐられまいから。』

『わたし、あんたに面白い歌を敎へてあげる。』机のそばに立つて行つたかと思ふと、かの女は原稿紙に『月』と云ふ字の外はすべて假名ばかりを並べたのを持つて來て、そちら向きになつた卯之吉に示めした。

手に取つて讀んで見ると、

『月月に月みる月はおほけれど月みる月はこの月の月。』

『なアんだ！』渠はこれを片手の指さきではね飛ばしてしまつた。

『でも、あんたは謙ツアんよりいい男よ。』かの女は相變らず――無意識にか有意識にか分らないが――微笑しながら、『謙ツアんはおこると直ぐ口が兩方に引けて、額と兩方の頰とに憎らしい皺が出來るけれど――』

『それがまたそのままで口を明けた時のにやけ工合はどうだ？』

『う、ふ！あんたは、然し、この鼻すぢが斯う」と、かの女は指のさきで渠の目と目の間をさわつて、『低くなつてるのが傷だけれど、あとは額でも、頬から顎へかけても、ゆツたりと男らしい所があつて――そしてもツとおふとりなさいよ、痩せてゐないで。』
『痩せてるのがおれのいのち、さ――おれがふとつた日にやア、あたまが馬鹿になつてしまはア、ね。』

八

お靜がそばからそれとなくせつつくのと、綱子の姿が夢に自分を壓迫するのとに堪へ切れないで、卯之吉は西洋人の仕事を休み、東京人等の面白さうにうかれてゐる都の春を免れて、一週間ばかり九十九里の海岸の方へ行つてゐた。
　それから歸つて來ると、お靜はもはや卯之吉の家にはゐなかつた。
『あんな女をつれて來て――』父はいきなり卯之吉の機先を制して、卯之吉に相談なく出したのを申し分けするやうであつた。『成る程、よく甲斐々々しく働いて吳れることは吳れるが、女だてらにお客さんと相撲を取つたりなどして、さ。』
『ふん、平氣でそんなこと位はしたでしようが、さう間違ひなんか起す女ぢやア――』

『そりやア、さうかも知れないが――』

『…………』卯之吉は父が世話を頼まれてる書生のうちでかの女に野心を懐いて相撲など取つたりした者はどいつだらうと考へてゐた。

『如何にも見ツともなくツて困る。』父はなほ息子から反對の小言を聽かされるかと言ふ豫期を以つて、不安らしく防禦の樣子であつた。

『歸したら歸したでいいです、別に僕が世話してやらねばならぬ女でもないのですから。どうせ今一人女中が入るとのことだから、丁度いいと思つただけで――』

櫻根代として、綱子の手でちよツと話があるから旅行から歸り次第來て呉れろと云ふハガキが來てゐたので、卯之吉はその日直ぐ病院へ行つて見た。

『いらつしやいましたよ、鶴見さんが。どうした〳〵と每日のやうに云つてまして、ね。』斯うは晴れ晴れしさうに云つても、綱子の悲しみの樣子が一週間以前よりもずツと增して見えるので、病人の病勢がます〳〵よくないのだと分つた。

『君と相談して――一緖に着手しようと――思つた事業も、斯うなつては――駄目だ。』枕の上で强いて微笑してゐるやうではあつたが、その顏は卯之吉には如何にも寂しく見えた。そのそばで、もう、綱子のすすり泣きが聽えた。

『まア、さう失望はしツこなし、さ。』卯之吉は斯う云つて病人の故郷なる桑山と溫泉とはその經營をこの友人が着手しなければ――兄なる人はどうせ子供の時から他家へ貰はれてたのだから――どうなるのだらうと私かに心配しながら、『まア、ゆツくりと君の氣病が直つてからにする、さ。』いつのまにか自分の頰にも淚がつたつてゐた。

『いや、――もう、――駄目だ！駄目だ！』その聲も力なく、腹からたわいもなく出る咳の間にまじつてゐた。

『…………』綱子は渠の咳をする度每に蒲團の上から渠の胸のあたりを心配さうにをさへた。

暫らく皆が無言であつたが、また病人は天井の方を向いたままで、

『お靜――さんは――君のとこ――を出――されて――しまつたさうだ。』

『うん、歸つて見ると、あとの祭りであつた――おやぢが云ふには、客と相撲なんか取つて困るツて。』

『ほ、ほ！』綱子は病人の顏を上から見詰めながら珍らしく笑つた。『面白い方ですこと。』

『…………』病人も幽かに微笑しながら、『今度――女學――校――の――まかなひ方――へ這入つた――さうだ。』

『さうか？』卯之吉はそれで安心だと云ふ風をして、『あいつはさう云ふところにやア最も適當だらう

――澤山がいよ〳〵校長に話してか？』

『さうだ。』

『どうせさうなるなら、初めからさう頼んだらよかつたのに――何だか自分の女房を飯焚きにするやうでなんて澁つてたのだ。』

『そんなことを――可哀さうに――させないだツて――』綱子はまた別な考へもあらうのに、と云ふやうに、『澤山さんもあんまりな！』

『でも、そんなことしか出來ない女ですもの。』卯之吉は貴族的なかの女をやツと慰める機が出來たと思つて、斯う云つたのであつた。

九

病人が卯之吉の詩の雜誌に出たのを今一度揃へて讀んで見たいと云ひ出したので、卯之吉自身が使ひとなつて病人の兄なる人の家まで行つた。

この兄の家とはかの番町なる代議士の持ち家で、卯之吉がさきに山中孃の申し出を拒んだ場所だ。渠はあの時の緊張し過ぎてだらけたやうな心持ちを再び思ひ出しながら、あの時案内やら茶の世話やらをした松本孃に玄關で用向きを傳へた。

『まア、おあがりなさいませ。お急ぎでなくば、どうぞ――』
『ぢやア、ちよツと失禮致しましようか？』
下座敷に通されたが、他に誰れもゐるやうすはなかつた。どこへ行つたのか知らぬが、櫻根の兄は、農學士として今回、地方へ轉任して行く筈であつた。
『奧さん、お味噌を持つてまゐりました』と、臺どころ口の方で商人の聲がした。
松本孃――名は光子――は眞ツさきにあわただしく茶を出すことをしてゐたなど、まだうゐ〳〵過ぎるところがあると卯之吉には見えた。が、一昨年の學校卒業式に、かの荳村が裏切つたと云ふ女と共に、なぎなたの試合を演じたと聽いてるほどであつて、さすがに、坐わつて相對すると、どことなく落ち着きもあつた。
あの山中のゐた席へ全く何も云はず、無言で茶を出したり引ツ込んだりしたそのしとやかであつたり、奧ゆかしかつたりしたことが、その時の地味な着つけと共に思ひ出されて、黑びかりに光つた。
『商人がいつも』と、微笑しながら冷やかに、『わたしを奧さんなんて申しますの、一々ことわるのも面倒ですからうツちやつて置きますが、櫻根さんに氣の毒でして、ねえ――あの人は老人くさいほど眞面目な方のところへ、わたしがまたこんなにお婆アさんくさいのでしよう――』
『さう云ふわけでもないでしようが――』卯之吉がかの女の顏を初めてよくながめて見ると、角張つ

た細おもてにはどこと云つて別にいいところもなく、且、化粧と云ふものを少しも施してないが、黒目がちの大きな目を明けてしツかりとこちらを見たのには、渠は姉に對する弟のやうに小さくなつて、吸ひ込まれるやうであつた。『確かに、自分よりも年うへだ』と、渠には信じられた。

『照子さんから』と、かの女はわざとらしく眼を細くしてしよぼ／＼させながら、『お便りが御座いまして？』

『ありましたが、ね』と、調子外れに聲高く笑つて山中のことを、『ハガキで達者でゐるかと云つて來たに過ぎませんでしたから、僕からも皆達者だと云つてやりました――僕は初めから養子なんかことわつてるのですから。』

『さうですとも！』かの女の眼はまた大きくなつて、否定的に、『まだ、ほんの、子どもではありませんか？』

『如何にも、ね。』卯之吉は、女學校の卒業者間には、かうした賢明な觀察をしてゐたものもあつたのだと云ふことが、今更らしく分つた。『みんなで天才らしく見ておだててゐたのがよくなかつたのです。向ふをばかりいい氣にさせて――たださへ氣ままな娘であつたのに。』

『さうですとも！』

『澤山君なんて』と、渠は自分の非を推し隱すやうにして、『これもいい氣になつて、佐渡までついて

行からうとして旅仕度までしてゐるのに――可哀さうに――來いとも、來ないでいいとも、何とも云つてよこさないのです。』

『當り前です、わ――あの子をただすかしてつれて歸るお父さんの計略ですもの！』

『は、は！僕もさう思つてたのです。』

かの女は最近のA雜誌を十二三冊、病友の寢てゐた二階へ行つて持つて來たが、

『あなたも詩集がお出來になるとよう御座いましようが、ね。』

『まだ〱――』謙遜らしく云つた。

『でも、あなたのはみんな分りにくいと申しますよ。』

『無論、豈村君の作などのやうに分り易いのは』と、こんな場合には渠はどうしても辯解攻撃をしないではゐられなかつた。『單純で淺薄な感情ばかり歌つてるからです。』

『でも』と、また目をしよぼ〱させながら、『ゲーテを讀んで見ても、シエキスピアのソネトを讀んで見ましても、――わたくしなんか深くは分らないのでしようが、――相應に意味が取れて行きますが――』

『そりやア、外國語と日本語とに對するあなたがたの錯誤ですよ。外國語と云ふと、あたまから尊敬し、ありがたがつて、分らないところは頻りに字引きと首ツ引きしてもと云ふ熱心を起しながら、日

木語となると――不埒にも――馬鹿にして、ちよッと六ケしいとそのまゝにしてしまふからです。』
『さうでしようか？』目をはツきりさせて、こちらを疑はしさうに見つめた。
『…………』卯之吉も暫らく言葉はなかつた。
『それはさうと、あなた、櫻根さんの御結婚式にお臨みになつて？』
『え、結婚式を擧げたのですか』
『ええ』と、首までもうなづかせて、『帝國ホテルで。』
『いつです？』
『おとゝひ――わたくしも見たかつたのですが――何だか悲劇のやうな氣も致しまして、ね。こちらの櫻根さんのお話に據りますと、綱子さんの希望でどうしても病人が死ぬ前に式を擧げるツて、病人の少し氣ぶんのいい日を見て、車に乘せて行つたのです、わ。』
『そんなことだから、またけふのやうに惡くなつてたのでしようよ――然し僕は旅行してゐたので』と、親友だと思つてる友人の結婚式に呼ばれなかつた恥辱を感じたと同時に、あの澤山は呼ばれたか知らんと考へて見ないではゐられなかつた。そしてあんなだらしのない仕わざばかりが目につくやうになつた綱子よりは、まだしもこの松本孃の方が賴母しいと思つた。
　こんな雜誌を持つて行つてやるのをさへ俄かにいやになつたが、引き受けて來たのだから仕かたが

なかつた。

光子が女中代理をしてゐる家を出る時かの女は、

『わたし、明日、また學校へ歸りますの――ここの櫻根さんがいよ〳〵地方へ行かれますから。』

『どの室へ？』

『東がはの入り口を這入つて、直ぐ右側の二階へ――』

『あ、それならB君のゐた室と壁を隔てて隣りです、ね。』

Bなる友人はその從妹との子供の時からの結婚約束を破棄する爲め歸國してゐたのであつた。

一〇

『如何にほれてるからツて』と、澤山は口の兩がはに例の皺をよせて、『死に瀕する病人を帝國ホテルへ引き出して結婚式を擧げたなんて、お綱さんもあんまりだらしがなさ過ぎるぢやアないか？』

『さうして』と、卯之吉はわざとにもあせらないで、『君は列席したのか？』

『行くもんか？――君はどうだ？』

『無論、僕も行かなかつた。』かう云つて、卯之吉は初めて安心した。

新橋ステイションのプラトフオムを、皆のあとから少しかけ隔つて、二人は歩いてゐた。さきへ

行つたのは、病人櫻根の伯父なる人、女學校の校長、同校のなぎなたの教師で『文學界』の編輯者、綱子がはの親戚なる某會社の重役や辯護士等であつた。

またあとから光子があわただしさうにやつて來たのを卯之吉は呼びとめた。

『一昨日はお邪魔致しました。』

『またいらッしやいませ――もう、越しましたから。』

『君』と、澤山を近づけて、『松本光子さん――』

『あ、いつか櫻根君の二階でお目にかかりました、ね。』

光子はちよツと澤山にも言葉をかはしてから行つてしまつた。一緒に乘つて行かねばならぬからと云つてだ。

『あれも化粧をさせると、いい女になるかも知れぬ』と、澤山はかの女の後ろ姿を見ながらささやいた。

櫻根は病氣の昂進の爲めとう／＼東京にゐたたまらなくなつて、けふ、鎌倉へ綱子附き添ひで出發するのであつた。

卯之吉には化粧をこらした綱子が何だかよそ／＼しくなつてるやうに見えて、そのそばにかの女の世話をしてゐる無化粧の光子の方ばかりを――汽車の窓のそとから――遠く注意してゐた。

その翌日（よくじつ）のことであつた。佐渡から手紙が來て、山中孃から直接にいよ〳〵卯之吉に養子に來て呉れるかどうかと云ふかけ合ひであつた。

『今まで何をぐづ〳〵してゐたのだ』と云ふさげすみの心も出たので、自分は養子に行けぬ、あなたはもと〳〵通り番頭さんと一緒になつた方がいいでしようと返事を書いて、別に未練（みれん）は起らなかつた。

『もう、歸つてゐるだらう』と思つて、その日の午後、この返事を報告がてら、番町の學校まで光子を訪問に出かけた。

したは裏おもての二室ともがらんとして、人が住んでるとは思はれない。そこを裏の椽（えん）がはからあがつて、直ぐそばのはしご段を二三段踏み進むと、客が來てゐるけはひがしたので、

『鶴見ですが』と、卯之吉は聲をかけて見た。

『おあがりなさいませ。』光子の聲であつたので、私かに胸がとどろいた。

『お客さんのところを――』欄干（らんかん）の上へ半身が出るほど段をあがつた時、もう、むら〳〵としないではゐられなかつた。

かの女は床の中にあふ向けに寢てゐると、その枕もとのかみに若い男が一人坐わつてゐた。

『かまひませんのです』と、かの女は人なつツこさうに云つた。『弟も同樣のうちわの人ですから。』

『…………』その弟に卯之吉もして貰ひたかつた。かの女の横ッぱらのあたりへ少し蒲團を離れて坐わつてから、『いつお歸りになつたのです？』

『きのふ』と、かの女は大きな目を細くして、微笑しながら、『直ぐに――いやな氣がして、それから寢てゐますの。肺病が移つたんぢやアないか知らんて！』

『は、は、は！そんなことが――？』

『ぢやア、僕は失敬します』と、客は立ちあがつた。

『まア、よろしいでしよう――では、向ふへおつきになつたら、おハガキでも。』かの女は寢どこを動かなかつた。そして客が行つてしまつてから、卯之吉に、『あの人は今度北海道に行くのです。』

『さうですか？』氣だけでは少し座を進めた。

『わたくしの周圍は段々寂しくなつてまゐりました、わ』と云つて、かの女は櫻根の鎌倉保養、櫻根の兄の地方轉任、今の靑年の北海道行きなどを數へた。

『ぢやア、これから僕もあなたの友人に加へて貰ひましようが』と實は聲までも顫はせて云つたが、まだ遠慮がありさうに、『然し御病氣のところをあまりお邪魔では――？』

『よろしいのですよ、さうひどいのでも御座いませんから――少し熱があるだけで。』

『風でしよう――』

別にまだ醫者にかかつてゐるやうでもなかつたので、かの女の爲めに卯之吉は賣藥の熱さましを買つて來たり、食事がいけぬと云ふので、玉子をついでに取つて來たりしてやつた。その費用は出さないでもいいと云つても、かの女はこれを無理に渠に手渡ししようとして、半身を床から動かした。

再びかの女がもとに納まると、卯之吉も多少氣が落ち着いたので、かの女を慰めがてら、山中孃の手紙が來たのに對して冷淡に答へたことを告げた。また自分のさきに女に裏切られた爲めに獨身主義になつた事情を、その時の女に對してまだ殘る恨みをもまじへて、詳しく白狀して聽かせた。

『髮の毛の黑くツて多い、聲のよかつた女ですが――今では何でも同志社出の牧師の細君になつてる筈です。』

『誰れでしよう――?』山口生れだと云ふ光子は、東京へ出るまでに、京都の同志社女學校にもゐたことがあるのだ。

『僕もその人の名は知りませんが――』

『あなたはきツと――』かの女は理解を持つてると云ふ調子で、『それまではおとなしいお方でいらツしやつたのでしよう?』

『さうかも知れません。から粗暴な投げやりの態度に皆から見られてゐるのは、無論、本來の性質ではないのです。』

『あなたの御作を拜見しましても、ね。』

『…………』渠は心ではしんみりと滿足して、もうこの人より外に取り付きやうのないやうな寂しい氣がしたが、矢ツ張りうわべでは投げやりの口調で、『さうですか、ね』と笑つた。

『わたくしも失敗者なの』と、微笑し乍ら『でも、これはわたくしの方から云はず戀であつたのですから。』

『あなたが卑怯であつたからでしよう――』それは誰れであつたらうと卯之吉は考へて見た。或牧師でちよツと英詩などを飜譯してゐた人のことは、向ふが一時熱心であつたが、この女の方で動かなかつたと聽いてゐる。が、そんな經驗のある爲めに、かの女も身のまわりなどをかまはぬ風になつたのであらう。

『ええ、わたくしは卑怯者なの――』その細い微笑の眼が大きく明いた時には、卯之吉のありツたけの同情を吸ひ入れるほどの訴へが見えた。

『姉さん』と、云はせて貰ひたい氣持ちになつて、『あなたも――然し――さう自分を投げツぱなしにしないで、お綱さんまでとは云ひませんが、少しやアお化粧をなさいよ。化粧さへしてゐれば、美人に見えるのにと云ふ、みんなの評判です。』然し渠は、ほんとうは、ただ澤山の言を思ひ出して、以後また澤山にさう云はせるのが殘念であつたのだ。

『さうでしようか、ね』と、かの女は私かに誇りがに見えたが、『もう、お婆アさんですもの。』

二

書齋の家根のうへの江戸自慢はいつその花が散つたのかも知らないでゐたうちに、庭の櫻はどれもこれもみな青葉の盛りになつてゐた。仙臺なら、しめツぽい朝ゆふに、ほとゝぎすが庭さきの樹木の枝を渡つてぴイ〳〵と鳴くべき時節だと思はれた。

二日とは置かずに、殆ど業務のやうに自分の築地に於ける業務の歸りを光子訪問に轉じさせてゐた卯之吉であつた。度々食事の厄介にもなつた。

『あまり學校中に評判になつてますので――少し來るのを控へて下さいな』とかの女から云はれたのである。が、かの女を自分よりも二つ三つ年がうへだと少なからずあまへる氣味で信じた先入見が――その後自分とおない年だと分つても――なほつき纏つてゐたので、こちらからいい氣になつて條件を持出した、『ぢやア、あなたが僕のところへ遊びに來て下さい――まだ一度だツて』と、渠は眼に恨みを含めてかの女を見詰めながら、――かの女が櫻根の兄から預かつたやうな、また貰つたやうなと云つてる長火鉢を間にして、――かの女のふところへもたれ込むやうに火鉢のふちへつツぷして見せた。

、その結果でもあらう、かの女は珍らしく卯之吉をおととひ訪問して來た。そしてかの山中孃がさきに劍舞をやつたと同じ室に於て、落ちつくと間もなく、なか〳〵靜かなところです、ね、などとかの女が話し出した。で、卯之吉は庭の樣子などを說明したあとで、

『見て御覽なさい、窓から直ぐ山が見えます』と云つた時、かの女は素直に直ぐ立つて行つて窓の障子を明けた。が、卯之吉もあとから無頓着に立つて、かの女のそばへ行からとすると、かの女はびツくりしてこちらを見たが、顫えた身を橫の方に引いた。何でも、手でも引ツ張られるかと警戒したやうであつた。

『僕はさう亂暴は致しませんよ』と云ひたかつたのを控へて、渠もからだを成るべくかの女から離れたやうにして、一緖に鼻のさきなる山腹の松や檜の木の太い根を見つめた。花いかだのにほひがぷんとした。『成るほど、少しは化粧をして來た、な』と思つた。

こんなことを默想しながら、渠はあたまの重いのを直しに、書齋の上なる高臺の方を散步してゐたら、市兵衞町を眞ツ直ぐに溜池へ出て、堀のふちを通つて、いつの間にかまた赤坂見附けの橋うちなる青葉のトンネルをくゞつてゐた。

『曾て荳村がこのあたりまで——おれを送つて行くと云つて——犬のやうについて來て、親切さうな言葉をかはして置きながら、渠の連中におれのことをあいつは傲慢で駄目だと報告したさうだツ

け――。』
或女學生があんどん袴をまくつて――角帽と――のところをついこの間、探偵に見つけられたと云ふ、大久保利通の石碑がある紀尾井町公園へ這入つて見ようとしたが、それも面倒になつて、俄かに足を速めて麹町の通りに出で、それを横切つて女學校へと向つた。
生憎留守であつたので、他の人には逢ふ氣もなく、――否、寧ろ來たのを知られないやうにして、――同じ道を歸途に就くと、一丁とは行かぬ坂の下から、一人の女が、顏は白のかうもり傘で隱してゐるが、赤い蹴出しをぺら／＼と見せるまで裾を烈しくさばいて、やつて來た。
その兩足のふくらツたぶまでが見えた時、ふとかの女も立ちどまつた。
『おう、松本さん！』近眼鏡をかけた卯之吉は斯う大きく呼んで先づふみとまつてゐたが、少し小さい聲になつて笑ひながらだが、たしなめるやうに、『どうしたのです、そんなに急いで？』
『おなかが減つたの。』例の目を細くして、顎を出し加減に微笑した。
かの女は、卯之吉にもさきに語つた通り、いよ／＼或有名な女學者の家庭へ揃つて二名の低能兒に英語を敎へに行くと云ふ面倒な仕事を頼まれたのであつた。
『ぢやア、何かおごりましようか？』
『いいえ――わたくしのとこへいらツしやつたの？』

『ええ、――然し――』

『まア、それならいらツしやい。』何だか仕かたないからと命令するやうであつた。

卯之吉はどうしようと考へたが、またあともどりをして、天どんをあつらへて二人で喰べた。

例の長火鉢に向ひ合つて、猫板の上をお膳の代りにしてゐたのだが、かの女が箸を運ばせる間に云つた。

『ゆうべお友達と吉原を見物して來ましたの。』

『初めて？』

『ええ、初めて――わたくしどもは丸で、今まで、世間と云ふものを知らなかつたのですもの。』

『それもいいでしよう』と云つて、卯之吉はかの女が秋風氏から發賣禁止の西鶴を借りて、近頃讀んでゐるのに思ひ當つた。『ぢやア、今度は僕の以前から勸めてゐる芝居を御覽なさい。』

『それも一度は見て置いても――』かの女が斯う、急に、もとは嫌つたり、卑しんだりしてゐたものに注意を向けるやうになつた動機は何だらうと、卯之吉に考へさせた。『シエキスピヤのハムレットだツて、オセロだツて、實は、書物で讀んだだけでは本當に分りません、わ。』

『無論！』

こんなことから、その翌日、卯之吉はかの女を赤坂の演伎座に案内することになつた。たツた二人

切りではいやがるだらうと思つたので、渠は自分の家からよそへかた付いてる實の姉をもつれて行くことにした。早くから場を買つて置いて、姉にその留守をさせて迎へに行つて見ると、光子は——卯之吉がまだ實際はどう云ふだらうと危ぶんでゐたにも拘らず——小さい信玄ぶくろの用意までをして待つてゐた。而も不斷は飾りけもない束髪に結つてるのがみづ〳〵したいてふ返しになつてゐた。
『めかし込みました、ね』と云つては見たが、渠は何となくそこを一緒に出る時が氣恥しく豫想された。
　自分は平氣で西洋人の仕事を休んだが、この學校では教授の最中であつた。今這入る時にも、そこで荳村氏と秋風氏とが教へに行くのに出會つた。
『けさ早く結はせに行つて來ましたの。』如何にも嬉しさうにして、浮氣ツぽくも見えるほど調子づいてゐた。『實際にいらツしやるかどうかと思つてましたけれど——』
『そりやア、僕の方がですよ。』思はずまた大きな聲であつた。
『…………』かの女は俄かにちよツといやな顏になつて、靜かにしろと云はないばかりだ。
『あなたがいらツしやると、二丁さきから分つてると、秋風さんも冷かしてゐましたよ』とは、こないだ、かの女から云ひ渡されてゐるのであつた。
『なアんだ、秋風に少しこの女に氣があつたのぢやアないか——山中孃を引ツ張りそこねてから』と

卯之吉は心に疊み込んだ。取り付きにくい女だとは、文學界の連中はすべて云ひ合つてるのを卯之吉は知つてゐたので、一方では、その女を斯う動かしてゐる共の腕まへを學校の意久地のない教師連中に見せてやりたかつた。

椽がはを下りて裏口の板べいを出ると直ぐ學校のまかなひ場があつた。

『行つて來ますよ』と、かの女は浮き〳〵した聲でまかなひがしらの女に云つた。すると、女は兼て知つてるかの如くにやりと笑つて返事をした。卯之吉はお靜がゐるか知らんとそれとなく見まわしたが、あたりには見えなかつた。

そとへ出てから、

『お靜はよく働いてますか？』

『ええ、よく働いてゐなさるやうですけれど――あの人の事情は止むを得ませんです、ね――澤山さんの奥さんとなるにはあまり無敎育過ぎますから。』

『そりやア、さうですが、――』そんなことは初めから分り切つてるのを澤山が、わざ〳〵國から、物好きにつれて來たのが惡いのだと、卯之吉は云ひかけたのだ。が、ふと考へて見ると、かの女がさう斷定的に而も少しの思ひやりも殘さずに云へるのには、この女の性質として間接に聽いたうわさ位を根據にしてゐるとは思へなかつた。『して見ると、澤山もこの女のもとへしげ〳〵行つて、お靜との

内情をうち明けた程の中になつてるのではないか知らん？』此頃は隨分遠のいてるので渠のことは分らなかつたが、――またほかのことに氣が取られて渠を思ひ出すをりも少なかつたが、――卯之吉は自分が毎日築地の仕事に行つてる時間を出し拔かれてゐたのではないかと云ふ氣がむら／＼と起つた。

一昨夜かの女に吉原を見物させた『お友達』と云ふのも、きツと澤山であつたのだらう――その家が淺草に在るので――思ひ至ると、卯之吉も初めてあの北廓へ素通りにつれて行かれたのは澤山を最初に訪問した日のその夜であつた。

あの家の嚴格さうな顏つきをしてゐる父と、なか／＼如才なく物を云ふが、お靜をこき使つてた母との樣子まで思ひ出されて、あすこには自分の直接並に間接の敵が二人ゐることになつた。

その一は友人だが、いつもこちらの交際事件に割り込んで來る者――他の一はまた、こちらを實の子同樣に親しんで呉れてるが、口の上手な實子に云ひまるめられて、お靜のことをあまりよく云はない者だ。

『そしてお靜を皆で邪魔にして、おれのところへよこしたり、學校のまかなひに入れたり――』吉之吉はわれを忘れてさきに立つて急いでゐた。

『もう、初まつてるので御座いましようか？』光子は遠慮がちに後ろから、少し離れてだがこれもは

や足であつた。
『まだでしよう――若し初まつても、序幕の初めだから。』
『見物するなら、いツそ初めからの方が、ね――』
『ちよツと待つて下さいよ。』心當てのくるま宿の前に來たので、卯之吉は踏みとまつた。そして二臺をあつらへた。
『それにも及びませんのに――』
『………』渠はかの女が車をことわらうとするには頓着しなかつた。下を向いて下駄で道の土を輕く蹴ながら、『あなたのところへは、澤山君もやつて來るのですか――』斯う尋ねて見たが、――そしてまた、來たツて、こちらがかれこれ云ふ權利はない。こちらはまだ姉に對すると同樣の敬愛心を以つて向つてるのだからと、心では一たび奇麗に申しわけをして見たが、自分はひがんだやうな顏つきになつてゐはしないかと思つて、てれ隱しに附け加へながら、かの女の方に顏を向けた、『度々？』
『いいえ――』かの女が斯う答へて、車やどの方で用意が出來かかつてる車を見てゐた横顏をちよツとこちらへ直した時の目つきは、いつものやうには眞ツ直ぐでなかつた。
『………』この女も矢ツ張り、一般の女のやうに平氣でうそを云ふのか知らん、それとも、こちらが度々とつけ加へたので、さうたびたびではないと辯解する意味であつたのか？

『へい、お待ち遠さま』と最初にやつて來た車へかの女を乘せ、つぎのに卯之吉が乘つて、道を急がせた。

渠は紀尾井坂下公園のおもてを通る時、かの女のつや〳〵した髮の毛が青葉の風に靡く後ろ姿を見つめて進みながらも、自分等の進みが青い葉の吐く空氣を切るその涼しさ冷たさとは違つた冷たい氣ぶんを全身に浴びてゐた。

二

『矢ツ張り、戀だ！眞面目な戀だ！』

友人なる澤山とこれを競爭しなければならぬのかと思へば思ふほど、この意識が明らかになつて、芝居の筋の進み方などを見てゐる氣もなくなつた。

こんな安芝居へつれて來ないで、もツといいのに案內すればよかつた。澤山の方でこれを聽けば、きツとかの女をまた歌舞伎座か市村座かに案內することを云ひ出すだらう。

かの女もこれまでに澤山の美術評論文のはツきりとして確かなところがあることを讃めて、卯之吉の詩の難解ではツきりしないのを暗に注意したことがあつた。それが心に在つたので、舞臺の方をさして、渠は、

『どうです、あんな淺薄な發想で本統の劇が出來ると思ひますか？』などとも云つて見た。お岩が男に對して嫉妬のほむらを燃やしてゐる場面であつた。

かの女も亦、卯之吉の姉が頻りに感服した言を發表するのを聽いて、何だ下だらないのにと云ふ風を自分にはあんな藝が上手なのか下手なのか分らないと云ふ返事でまぎらせてゐた。

卯之吉はかの女と姉との間へ後ろから片足を出し、したくもない貧乏ゆすりをしてかの女の膝のさきに觸れてゐた。そしてもツと近く近づいてゐたい氣がしたのだが、芝居がはねてから夜みちを送つて行かうと云ふのをかの女が無理にことわらうとした時、俄かに種々後悔の念が湧き出た。

『あなた、おこつてはしませんか？』

『いいえ――何にも――』と答へながらも、かの女は卯之吉が少し横に離れて送つて行くのを餘程警戒してゐるやうであつた。手を見えないやうに袖に引ツ込めて――無言で。

その翌日、築地の仕事の終はるのを待ちかねて、卯之吉はまた光子を訪問した。不斷に變はらぬかの女の取り扱ひ振りを見て却つて渠の胸一杯に優しい訴へ氣味な不平がみなぎつた。

貰つたと云ふおこわを二人で分けて喰べたあとでだが、

『どうかお願ひですから』と、卯之吉は火鉢のふちに兩肱を廣げて、平たく組んだ兩手の上に自分の顎を置き、頰にぽツと熱をおぼえながら、じツと恨めしさうにかの女を見て、『あなたの手だけを握ら

せて下さいな。』

『…………』かの女は顏を赤くして、火鉢にかけてゐた兩手を引ッ込めた。『そんなことは云ひッこなしよ。』これも訴へるやうであつた。

『ぢやア、云ひません！』わざとらしくからだを正した。が、外のことを話してゐるうちに、かの女はふところ手にしてゐた兩手のうち、その左りの手を出してまた火鉢にかけた時、『どうしても、姉さん』と云つて、渠はかの女の手を握つた。

『いけません！』力弱くだが、卯之吉をふり拂つて、別な方の手をもふところから出して立ちあがつた。

『そんなことをなさるなら、わたし行きます、わ！』

『もう、しません！』渠も立ちあがつてかの女の道をふさいだ。このまま逃げられたら、以後の面會は謝絶だらうと思つたからだ。

かの女がまたふところ手をして立ちどまつてる前に坐わつて、——然しあたまは下げたくないやうな氣がしたので、言葉だけで、——にが笑ひをしながらあやまつた。そして一たびは各々もとの坐にもどつたが、互ひに調子ぬけがしたので、さう多くを云はないで別れることにした。

かの女は卯之吉のあとから段をくだり、あとから椽をおりたのだが、

『さよなら』と云ふが早いか、あとをも見返らないで行つてしまひ、まかなひ場の臺どこに在る手桶から子杓で水をぐい飮みにし初めたのが、卯之吉に見えた。

『鶴見ツアん、鶴見ツアん』と云つて、直ぐ卯之吉のあとを追ツかけて來たのは、お靜であつた。

『……………』卯之吉は今のことを最も恥辱に感じてゐた顏つきをして、出口のところで踏みとまつた。

『あんた知つてるの』と、かの女は低い聲になつて、渠の眞正面で渠をあふぎ見ながら、『松本さんが淺草でとまつて來たのを？』

『いつ？』渠はかの女を上から息を殺して見つめた。

『おととひ。』かの女はわざと微笑してゐたが、不平さうであつた。

『さうか？』思はず聲を高くしたが、渠は自分のからだ中にぐツと熱い顫えが響き渡つた。暫らく默つてかの女をなほ見つめてゐたが、自分の眼から火でも出さうに思はれた。『ちよツとおいで』と命じて、かの女を、出口を中に隔てた――そして光子の室とは二階廊下の壁を置いて隣つてる方の室（さきにB氏がゐた室）の眞ツしたなる――明き間へ來させて、そこで詳しい事情を語らせた。

かの女にも燒き〳〵したところが見えて話に落ち着きがなかつたが、その言葉に據つて見ると、果して光子の一昨夜の吉原見物は澤山の案内であつた。そしてその夜は渠の家にとまつて、二人で一つ

の部屋に休んだ。まア間違ひはないだらうからとおッ母さんは云つて、兩親の寢る次ぎの間へお靜に二つの寢床を取らせた。お靜はたま〳〵とまりに行つてたので、女中部屋でだが、心配の爲めに夜ッぴて眠られなかつたさうだ。

『馬鹿だ、ねえ、棄てられてゐながら、まだ燒き持ちかい？』斯うは云つたものの、自分も腹の底まで熱くなつてゐた。

『これまでにも松本さんが度々手紙をよこしてある。わたしがおととひ、謙ツアんの留守にこツそり見てやつたら、鶴見ツアんの誰れかと結婚するまでは、お互ひに結婚だけは致しますまいとあつた。』

『人を！――おれを亂暴でもする壯士か何かのやうに思つてやがるんだ！』

『さうよ――きツとあんたが横取りされたツておこり出すかと思つて。』

『ふん、僕がさう熱心なもんか！』光子がまかなひ場の手桶から子杓で水を仰向き加減に飲んだその庭鳥のやうな卑しい樣子を見ても、もう、姉としての尊敬心さへ夢と破れたのだから、惜しくも何もないと思つた。矢ッ張り普通の人間なる女だから、而して結婚さきのよしあしを利害上から考へるだけの年齡にもなつてるのだから、こないだおれの家へ來たのは、おれの家と澤山の家とをどッちが有利か比較しに來たのかも知れないッて――さう結婚の動機を不純にして、而もあまり熱もなささうにかた付いて行くことを考へるやうな女ぢやア――渠は決心の臍を固めて、『よし、どこかへ行つて紙と

硯箱とを持つて來な。』

卷き煙草の灰をあたりかまはず疊の上へ――掃除をしてないところだと思つて――まき散らしてゐるとお靜は命令通りの物を持つて來た。硯は澤山の家で見おぼえのあるかの女の所有なので、ここへ來ても相變らずおぼえた手習ひだけはやめずにゐる、な、と可哀さうになつた。

『火事にでもなつたらどうします?』

『かまうもんか!』煙草を口に喰はへ、急いで藥は筆を走らせた――『君にすまないことをしたよ。君等が大事さうに隱してゐるのを知らなかつた爲めだが、けふ僕は君の光子さんの手を握つて失敗した。その直ぐあとでお靜から君と光子さんとが結婚の約束までしてゐることを聽いた。如何にもすまなかつたが、分つた以上は、僕も光子さんを以後苦しめるやうなことはしないから心配し給ふな。そして僕は君等二人の共通心配を除いてあげる爲め、どうかして近々に僕自身の結婚相手を見つけます。以上』と書き終つて宛て名を『澤山謙作樣』とし、お靜が氣を利かして添へて來た狀ぶくろへ卷き納めた。

そしてこれを松本孃の机の上に置いておけとお靜に云ひつけて別れた。

一三

その夜から朝にかけて、卯之吉のひどい苦悶と云つたらいつもに無かつた。

いツそ山中をうまく手に入れて置いたら――いや、お綱さんのやうな美人で、而も光子の學問があつたら――なアに、肉的に云へば、お靜ほどの女なら、無學や野卑を問はなければ、藝者や女郎にはいくらでもあらうか――

こんなことを、丁度日曜であつたので、午後までもぼんやりと繰り返してゐるうちに、澤山がやつて來た。

『おい、おい』と强さうに云つて坐わつたが、先づ鼻のさきをふいて、『きのふの手紙はどうしたんだ？』

『君に謝罪したの、さ。』むツつりした微笑した。

『そんなことをしなくても――』これも笑つたが、さう打ち解けた樣子ではなかつた。『お靜が何を云つたか知らないが、――馬鹿な！――まだはツきりきまつたことでもない――「君等の共通心配」なんて、あんまり皮肉ぢやないか？』

『まア、いい、さ――僕としては、ああ云つとけば氣が濟んだのだ。』卯之吉は澤山に手紙をお靜に見られたのを知らない樣子があるのを見て取つて、あまり深くこの話に立ち入らぬやうにきめた。

『僕等が君を』と、澤山はなほ本氣であつた、『早く誰かと結婚させようとでも計劃してゐるやうに

――？』

『まア、いい、さ。』わだかまりの無くなつた顏をして、『そりやア何んだ、ね？』

『うもれ木細工だ。』澤山は自分のそばの小さい風呂敷包みを出して、黑びかりの盆を出した。『四五日前に仙臺に行つて來た。僕は今度、君の第二のおやぢだと云ふK先生に會つて傳道師になることを相談して來たのだ。』

『………』突然のことではあつたが、卯之吉はこの友人も段々と自活問題にぶち當つて來て、――或はその近因は結婚の準備の爲めに、――その方面にあり勝ちな惡い手段的志願を思ひ付いたのを卑しむ氣が起つた。傳道師なんか八百屋の小僧でも二三年間で出來る！卯之吉自身はそんな安値な生活保證を豫期出來るところにゐるのさへいやになつて、やツと昨年仙臺を拔け出して來たのに――。で、反對を表する口調を以つて、『畫の方はやめか？』

『やめないでも行かれるぢやないか？』渠はなか〳〵の意氣込みであつた。しよてから傳道師の報酬を貰つて、仙臺に近い敎會を引き受け、一週に二度づつ特別な學科だけを仙臺學院神學部に聽きに行くのだから、一般の神學生とはわけが違ふと辯明した。

『然し僕は矢ツ張り文學をつづけるよ。』卯之吉は同盟の一角が破れたやうな寂しみをおぼえた。それをまた皮肉の微笑にまぎらせて、『光子さんの建策だらうな。』

『さうでもないが――』澤山は曖昧な口調で横を向いたが、また『どツちかと云へば、あの婦人は詩人や美術家よりも宗教家が望みらしい。――然し第一に、僕のおやぢが感服したのは、あの澄んで正しい視線で、――女で男をああ大膽に正視出來るのは珍らしい、確かに品性の正しい娘だツて。』

『そんなことア、君、山中だツて、お綱さんだツて、みなよく出來たぢやアないか？おやぢは今の若い女を知らないのだ。』

『それもさうだ。』澤山は不服らしかつた。が、なほその調子をつづけ、『然し、君、ゲーテのエルテルを面白いので一晩で讀んでしまつたと云ふ程の讀書力がある女が、あの『文學界』の編輯者の弟にこツそり死ぬほどの戀をして、而もとう〳〵云はずに濟んだなどア、最も愛らしいほど不思議でないか？』

『僕もその事は直接に聽かせられたが――』斯うは云つたが、卯之吉はそれだけ具體的なことは初めて知つた。

『兎に角、これから一緒に行から――松本孃も君に氣を惡くされるのは本意でないと云つてるから。』

卯之吉はしぶ〳〵澤山について、また學校へ行つて見ると、病人の櫻根が危篤だと云ふ電報が來たので、校長を初め、二三名のおもな人々は鎌倉へ出向いたあとだ。が、光子は最初に氣病みをした經驗を忘れないので、行きたくはなかつたと云つた。

澤山はゆる〳〵としてセルの袴を脱したかと思ふと、それをはしご段の欄干へそツと持つて行つてかけ初めた。

これを見た卯之吉は、友人のここに來ての今までの樣子をすツかり想像出來たかのやうに思はれて、自分の迂濶と不明とを諷刺されたほど熱い恥辱をおぼえた。『…………』もう、どうでもいいと云ふ氣になつて、『ああ、勞れた』とわざと大きく叫び、ばツたりと自分のからだをあふ向けにうち倒し、手と足とを踏ん張つて十分に延びをした。

『君そんなことはよせ』と、澤山は欄干のところからふり向いた。『婦人の前で失敬になるではないか？』

『それもさうだ、ね。』初めて氣が付いたやうに半身を起したが、今度は、また投げ出してゐた兩足に少しも力がなかつた。

光子はこれを目の前に見てゐながら、別にいやな顏も見せてゐなかつた。そして微笑しながら、『鶴見さんが一番このうちでませていらツしやるの、ね。年から云へば、みんなおなじでも、矢張り、生れ月は』と、卯之吉を見つめて、『あなたが一月でしよう。それから澤山さんの三月、わたくしが九月で一番すゑの妹です、わ。』

卯之吉が櫻根を鎌倉に三度目に見舞つたのは、病人危篤の知らせが女學校に屆いたその翌日であつたが、行つて見ると、もう、病人は死人であつた。そして綱子はしほらしく髮の毛を切つて、茶せんになつてゐた。

その歸り汽車に同乘した見舞ひ客のうちには、綱子のあまりに早いはや變りを不思議がつた者もあつた。また、あれは初めから定めて置いた手順で、今度髮の毛が延びた時は、もう、死人の兄の細君であることが迅くから約束出來てゐるのだと云つた者もあつた。

これを隅の方で聽いてゐた卯之吉は、――そんなことがかの女には事實になるにせよ、ならないにせよ一般にはあり得べきことだらうと思ふと、――女に對する興味がます〳〵さめて行く氣がした。

お靜のことはと云ふと、また、澤山の兄の友人が一名、かの女に途中で出會つたのをしほに、どこかで密會を就げたので、かの女はその人の妻になるつもりで熱心になり、學校のまかない方をやめて、澤山の家に歸つた。が、おもちやにされたのだと分つてから、澤山の兩親と兄との相談で兄の友人なる大學專科出の或る歷史家で、地方の學校教師をしてゐる者にかたづけることになつた――謙作との間がらがどうであつたかと云ふことだけは、正直に向ふへも隱さないでだ。

その間、三四ヶ月間の澤山家に於ける事情は、その家の子なる謙作よりも卯之吉の方が實際によく分つてゐた。謙作はいよ〳〵獨りで仙臺の方へ傳道練習に行つてゐたが、卯之吉はお靜の代理として、かの女をおもちやにしたその男の本意を聽きにも行つてやつた。同時に、卯之吉は謙作に對する誓言通り自分の結婚相手を――これも友人であつた――或小學女教員に見付けたのであつた。

『お前も立派な奥さんが出來たし』と、澤山の母は卯之吉に云つた。一度つれて來たので見たことがあつたから、『お靜もう ちからいいとこへ方づけてやつたし、今度はまた謙作の番になつた。』

『さうです、ね。』卯之吉はうわべばかりの大きな笑ひをして答へた。

澤山がいよ〳〵光子との結婚式を仙臺の教會で擧げると云つて、光子をつれに來たので、光子も番町の女學校の貸し間の方を引き上げて澤山の家に來た時のことだ。

立つてゐる光子を中心にして、澤山の母も、澤山も、卯之吉も、客座敷の周圍に坐わつてゐた。

『何だか晴れがましくツて！』かの女は斯う云つて、一度はきまりが惡さうに横を向いた。式場に着て出るお引ずりの紋つきが出來上つたのを自分のからだに着て見せてゐるのであつた。これを見ながら、卯之吉はかの女がいよ〳〵澤山の妻とならば、澤山同様にこれから兄弟としてやらねばと考へてゐた。

『よく似合つてる――いいお嫁さんだ。』おツ母さんは嬉しさうに見とれた。

『………』光子は素直に立つてゐながら、優しい目を卯之吉の顏に向けて、『あなた御存じ――佐渡の山中さんがどろ棒に切られたのを？』

『ええ』

『どろ棒が這入つて』と、澤山も目をかの女から卯之吉に轉じた、『あいつ、隨分强情な女だから、抵抗したらしい。右の手の指二本を切られた上に、額に大きなかたな傷を受けたさうだ。』

『そりやア可哀さうだ、ね。』

『亭主はどうせ例の番頭あがりだから、どこか隅ツこの方に小さくなつてゐたのだらうが、若し君が行つてて見給へ――きツと一緒にやられるところだぞ。』

『ほんとに、なア』と、おツ母さんは云つた。『いつかここへも來たあの子の家だらう――？』

『いのち拾ひだと思へよ。』

『さう、さ、ね』と、卯之吉はにが笑ひをして、『いのちは拾へたが、戀にはいつも君に負けたのか？』

斯うでも最後に云つて見たかつた。この瞬間に、澤山から轉じて光子の顏を見上げると、光子もちよツと渠の顏を見たが、渠はかの女の視線を十分に受け切れなかつた。戀であつたのだらうに――否、戀まで行つてなかつたとしても、もう少ししてゐれば戀になつたのだらうに――

『慾張つてゐらア！』澤山は勝利がほに大きく云つて笑つた。

夜食はすんでゐるし、花嫁裝束の調べもすんだので、三人は共に散歩に出かけた。十二階したから公園を雷門の方へ拔け、馬車通りから吾妻橋の上に出た。その間誰れからも一言だツて口を出さなかつた。

もう、秋風じみた風が橋のうへを吹き越えてる時節であつた。川かみにも川しもにも兩岸の料理屋やその他の家のあかりがさして、水の上をきら〳〵させてゐた。それでも、三人は誰れからも口を聽かなかつた。

他の二人は新らしい夫婦として明朝は東京を出發して、新生活——卯之吉にはあまり高貴な生活とも思へないが——を初めに仙臺の方に向ふのであつた。兎に角、ここ二年間を最も親しく往來した友を奪はれるあとの寂しみも卯之吉には加はつてゐた。

橋の中央で、川かみの方の欄干にもたれて、卯之吉と澤山とは光子をさしはさんで、こと問ひのあたりの空がぽツと明らんで來たのをながめた。月の出だらう位のことは光子からでも云ひさうだがと卯之吉は待ち受けたが、誰れも口を切らなかつた。渠には、かの女が『鶴見さんの結婚するまでこちらも結婚をさし控へて置きましよう』と相談してゐたのを知つたので氣の毒なばかりに、自分があまり本意でもない結婚を今の妻とするに至つたのは、澤山も分つてるだらうとばかりが思ひ思はれた。

ぽツと明るい空の部分が段々廣がるかと思ふと、大きな赤い月がその半顏を出した。そしてそれか

らこちらへの土堤の水の上のやみがぱつと開らけた。金色の浪が流れに添つてちら〳〵と下つて來た。

『いい景色、ね』と、かの女が初めて感嘆したが、他の二人はなほ口を切らなかつた。卯之吉はただいつまでも斯うしてゐたいと思つた。

月はずん〳〵昇つて、二三尺の高さになると、もう、當り前の小さい姿になつてゐた。卯之吉がちよツと光子の方に横を向くと、三人の影が別々に長く車道の方に横たはつて、橋を渡つて行く人力車に順番に敷かれてゐるのが見えた。

もう、十時を過ぎたに違ひなかつた。

『寒くなつた――歸らう。』澤山は出しぬけに斯う云つて、足を運び初めた。

『ぢやア、――まア、――達者にお暮しなさい。』卯之吉も欄干を離れる時、光子に向つて云つた。

『…………』かの女は何か云ひかけたやうであつたが、それが喉につまつたやうにぐツと呑み込んで、ただあたまを下げた。

また暫らく無言の歩みがつづいたが、橋のたもとまで戻つて來た時、澤山は、

『また時々歸つて來るから――』

『うん、その時は逢はう――僕も一度仙臺の舊校へは遊びに行つて見たいと思つてる。』

『鶴見さんは』と、あとからついて來た光子も、『これから大きな聲でお笑ひなさるのをおやめなさいましよ。』

『二丁もさきから』と、澤山も云ひ添へた、『來てゐるのが分つたと云ふぜ。』

『そりやア、秋風君の誇張、さ』と、矢ツ張り大きく笑つて見せた。が、よく／＼おれの笑ひ聲をいやであつたのだと見えた。

　然し卯之吉としては、このおほ口笑ひを以つて第一の戀の失敗の悲みを身づから胡魔化してゐたのが、いつのまにか習慣になつたのだ。それだのに、第二若しくは第三の戀に於ても思ふやうなのを得させないでその上にまたこの胡魔化し笑ひをやめろとは――？

　二人に別れてから、

『もう再び逢ふまいか』と云ふやうな寂しい冷たい氣ぶんを以つて雷門から芝行の鐵道馬車に乗つた。

――（大正四年十月）――

膝に飛び付く女

『島津さアん！』ねばりツ氣のある調子でよく斯う叫んで、突然こちらの——まだ多少は遠慮勝ちがあつた時から——坐わつてる洋服の膝の上へ飛び付いて來た女だ。こちらをも酒に醉はして置いて、かの女の得意の清元を聽かせた位では納つてゐずに、いつも興が涌いた上にも興を涌かせて、男に突飛なことをしてかからねば滿足しない女だ。

平氣でこちらが膝をくづすやうになつてからも、——さし向つてゐながら、——今か、今かと、向ふが飛び付くのを待つてる間は、膝が空虛を感じて、何となくむづ〳〵し詰めになるやうになつた。ところが、今、その自分の膝にうんと力を入れて、島津は雪が東京には珍らしく四五寸も積もつた夜ふけの道を、女をしよつて歩いてゐるのである。

一つ木の狹い圓通寺通りをだが、探してゐる人の家が分らない。

『どうして吳れるのよ、島津さん！』脊中では大きな赤ン坊がだだを捏ねるやうにからだをゆすつた。

その癖、捏ね返して泥まじりの雪の上へ落されまいとして、かの女は兩手をこちらの兩の肩からまわして、こちらの喉くびのあたりをしツかり握り合はしてゐるので、こちらは息さへも碌々出來ない。

『さう悶いちやア――』渠は不平さうに云ひかけたが、高いカラの合せ目が喉の肉を嚙んだので、何よりも先づその痛みをはづす爲めに、頸をやツとのことで加減した。

惚れ合つてる女の方の發議であつたからとは云へ、全體、何の爲めにこんなところをこんな風つきでぶら附いてるのだ！　脊中のおも荷と、その重みに堪へる苦しさと、頰をちぎるやうに吹く風とで、飮んだ酒の醉ひはさめかけて來た。

然し冷たい感じを與へるのは雪やから風ばかりではない――どうも、この女は今探してゐる瀨尾にも氣があるらしいのだ。して見ると、渠は自分の愛する玉を奪はれにその玉を運んで行くやうで、馬鹿馬鹿しくなつて來た。

思ひ出すと、こよひ、まだ少し明るかつたうちに、――かの女の旦那が今夜は來ないと分つたので、かの女は獨りで濱町の家を赤坂の田町まで出て來て、――例の玉突屋の戶口で先づ瀨尾を呼び出した。で、瀨尾がいい氣になつて、

『おい、露子さんが來たぞ――どこかへ飮みに行かうツて』とこちらへ告げた。

それから、島津は雪の中を自分等の行きつけの田町の待合田每へ案內したのであつた。女中が驚いたほどの意氣な美人をつれて行つたので、女中が氣を利かせて呼んだ藝者は、如何にも三味は達者であつたが、器量にも劣らぬやうな格腹をしてゐた。

露子は自分ももと新橋藝者であつたことをほのめかすやうな口ぶりで、近頃有名なもとの同業者どもの名を擧げて、その消息を聽いた。それから瀨尾にへたな唄を歌はせたあとで、あらたまつて『明け烏』の一段をやつて聽かせた。その聲にも音樂論に巧者な瀨尾は一度で感服したやうであつたが、露子が瀨尾にちよツと惚れしたのはこの前に一度――而も初めて――會つた時からだらう。

島津の考へは濱町の方へ飛んで行つた――自分が或相場師を尋ねて向ふの方面へ行つた時、その人がつれて行つて吳れたのが初めで、よく玉突をやりに行つたその玉突屋で一二度自分は一名の美人に突き方を敎へた。誰れかのめかけだらうと云ふ見當は付いたが、それが三度目にそこで自分をも加へて二三名のものに蕎麥を馳走した。四度目には、自分だけをかげに呼んで、これからどこかへお伴致しましようと云つた。そしてとう〳〵斯う云ふあひだがらになつたのだが――。

『なぜ僕なんぞに惚れたのだと聽くと、落ち着いた玉の突き方にもだが、また女に對する言葉の優しいのにと云つたよ』と瀨尾に報告すると、瀨尾は例の無頓着で、

『そりやアさうだらう――君のやうな不男が――まア、アメリカ歸りのお蔭ださ』と云つたツけ。

かの女に前々から附きまとつてゐた同町内の若い衆、と云ふよりも寧ろ若い遊び人肌、が一名あつて、かの女に云ひ寄つたり、金の無心をしたりしてゐた。渠と自分とは、自分のかの女と密會する鳥屋で度々出くわすので、とう〱渠は感づいてしまつて、これを種にかの女を強迫して、旦那に云ツ付けられるのがいやなら、まとまつた金を出せと云ひ出した。

自分は渠を同じ鳥屋へ呼び寄せて、直接に談判して見ると、金よりも寧ろかの女に氣があるのだと白狀した。

『何をなま意氣な！』いきなり渠を――かの女の見てゐる前で――柔術の手を以つて羽がひじめにしてやつたら、渠はこれから自分を先生と云ひ做すから許して呉れろと云つた。

『今夜はいい氣び、ね――あなたをまたずツと好きになつたの』と云つて、かの女はあとで自分に抱きついた。

その鳥屋で自分は瀨尾と今一人の友人とをかの女に紹介しようと思つて待つてた時、――その若い男も一緒について來てゐたが、――夜中の十二時過ぎまで待つたが、そして何度も女中を密使につかはしたが、姉のうちのお浚ひへ世話しに出てまだ歸らないとの返事であつた。

電車が無くなりさうなので、そこを出て皆でぞろ〱と或河岸まで來ると、向ふから橋を渡つて來た車がぴツたりととまつた。

『島津さん！』月の光りに透き通るやうな聲であつた。
『今まで例のところで待つてたが、ね、歸らないと云ふので――』
『それは濟みませんでした、ね。いらツしやい、な。』
『もう、おそいぢやアないか？』斯う云つた瀨尾の聲が先づあとまでもかの女の耳に殘つたと云つてるのだが――氣があるからだらうと責めた時、かの女はさうぢやアない、自分を思ひながら來たところで折角出會つたのを、はたから歸らうと云つたからだと答へた。
『まア、さうおツしやらないで――どうか。』兎に角、しやんとした言葉つきで、而も人をそらさない女だ。

かの女をさきに驅けらせて、自分等は皆揃つてあとからその家へ行つてごたごたと二階へあがつた。婆アやを鳥屋へ走らせても、もう、斷わられた。蕎麥屋へ行かせても寢てゐた。どうせ電車もなくなつたから、皆で一緒に夜明しの話をでもしようと、火鉢に火を澤山おこして、雜談に耽つた。

歸つて來たままの服裝でゐるので、
『衣物を着かへたらどうだ』と注意すると、
『わたし、出の衣物で慣れてますから、少しも窮屈ぢやアありませんの』と云つた。
『これが一番よく似あふのよ』と云つたことがある。ひさし髮を戴いた、おも長の、鼻すぢのよく通つ

たかの女が、少し缺點だと云へば云へる大きな口をつゞまやかに動かして、瀨尾と頻りに日本の音樂のことや芝居のことや全くの笑ひばなしなどを語り合つた。

あまり酒を好きでない瀨尾は、他の客どもの宵ひに飮んだ酒の醉ひが段々さめて行くに乘じて、獨り天下のやうにかの女に向ひ合つて、かの女を笑はせた。

肝腎の自分はそこどけにされてゐたやうであつたので、かの女が圓い眼をねむさうに細くしてこちらを見た時、自分はちよツと合ひ圖をして下へおりると、かの女はいきなりこちらの頸に抱き付いた。

『あなたお獨りでいらしつたらよかつたのに！』

『でも、紹介しろと云ふから――』

こんな時にまた旦那と云ふ老人が來たりでもすると、自分が再びあの黑塗りの土藏のわきへ隱れるやうなことではおツ付かなかつただらう。

だのに、その次ぎからは、逢ふ度毎にかの女が『瀨尾さんは、瀨尾さんは』と云ふやうになつた。そしてとう〳〵辛抱し切れなくなつて、今夜、まだ雪が降つてたのに、こちらを出しにして、かの女は瀨尾もよく來る玉屋へ出かけて來たのぢやアなからうか？

『藝者でも何でもおごりますとも！』かの女は待合へ向つて步きながら、瀨尾に斯う受け合つた。氣

まへのいい女であることは、こちらにも慣れ合ひのそも〳〵から分つてゐたが――。
『僕はいつもの浪花節をやつたツけ』と、島津は自分としてその時のことを思ひ浮べた。
『平ベツたい鼻の、大きな顔の人にやア、浪花節の聲が一番釣り合ひます、わ、ね』と、かの女は瀬尾に笑つて告げた。
「馬鹿を云つてらア！』これでも浪花節と講談とにかけては、紳士の隱し藝としてアメリカに於いても、また歸朝の船中に在つても、有名なものであつた。
『奥さんの清元と云ひ、旦那さんの浪花節と申し、皆お手の物で――』闘取り藝者は斯う云つて、三味線を置いてゐた。
『この人なんかと比べられちやア、ねえ』と、露子は瀬尾に云つた。
『そりやア、――勿論、あなたが可哀さうだ。』
『ねえ、さうでしよう。』かの女は床の間を脊にして、黒縮緬の羽織りの左りの襟と共に、左りの手を後ろへすべらせて、疊の上に突き、それとなく藝者につら當てのやうに、しだらのない眞似をした。しツくりとからだに添つて曲線をゑがいてる、茶と黒との大名縞のお召しのうは膝をこちらの方にずらせたのだが、板じめ縮緬の赤地に蘭と菊との花か何かを白く染め拔いた長襦袢の端が、ちよツとうへしたの膝と膝との間に出たのを意識してから、眼を細くしてちやぶ臺の向ふなる瀬尾の顔を見詰め

て、突いた手と反對の方に頸を曲げて、どうかして吳れろと云はないばかりに、醉ひ苦しさうな息をして見せた。それと知つてか知らないでか、瀬尾は少し心配さうに、
『さう苦しいんですか？』
『この馬鹿が！』自分は友人のうぶををかしくもなつた。
『苦しいの、瀬尾さん！』女は肩をゆすつたのが、腰の方までも動いて、下着の裾の裏葉色がおもてへ返つた。
『どこまでもあの狂態を突ツ込んで來るから面白いのだ。』
待合で客三名のうち、酒を控へる友人を除いたあとのものは隨分醉つてゐた。そして露子は例の手を友人にも行なつたのである。
『瀬の尾さアん』と叫んで、かの女は突然立つて行つて、渠があぐらを端座に直したそのセルの袴の膝の上へ、かの女がまた倉から裾を取つて前を包んだからだをまたぎ掛けた。そして兩手を渠の肩にかけてゆすぶりながら、『なぜ飲まない――もツと飲みましようよ。』
渠は兩手を後ろに突いてにが笑ひをしてゐたが、調子ぬけがした聲で、
『飲みますとも！』
『ぢやア、先づあなたについで戴くの。』後ろを向いて延ばした右の手で臺の上から猪口を取つた。藝

者が横から銚子を持つて來たのを見て、渠はそれに向つて、
『ぢやア、賴みますよ。』
『そんな水くさいこと、いや！』露子はからだを左右にふりながら、猪口を持つ手を引ツ込めた。
『ぢやア、僕が確かにつぎます。』渠はその言葉に生地の無骨をまる出しにしたけれども、それでもずツと碎けてゐるつもりのやうに左りの手を後ろに突いたまま右の手に銚子を受け取つて酒をついでやつた。
それから、三四度も立てつづけに二人は、同じ態度で、飮みかはした。そしてこちらの考へでは、自分がうち忘れられてゐるかのあり樣であつたが、瀨尾が自分に遠慮した爲めにか、時々自分の方へ渠のゑがほを向けるので、その度每に自分はにが笑ひをして見せた。
『醉はなけりやアいや！　醉はなけりやアいや！』から云ふ風にかの女が瀨尾に對して調子づいてるうちに、却つてかの女自身の醉ひが十分にまわつたものと見え、珍らしくも吐き氣が出たので、苦しさうにしてその室を出て行つた。
自分が介抱してやらねば承知すまいと思つて、島津が直ぐ立ちかけたところ、出口に近くゐた瀨尾が先づ立ちあがつたので、自分はまた渠にかの女をまかせるつもりにして、座に殘つた藝者を相ひ手にしながら、直ぐ横の壁ひとへ隔てた手洗鉢の方へ耳をかた向けてゐた。すると、暫らく經つてか

ら、

『もう、大丈夫』と、渠は得意がほをして獨りで戻つて來て、『僕が口へ手を突ツ込んで吐かせてしまつたから。』ハンケチで手をふきながら、どツかりとあぐらをかいた。

『ひどいことを！』斯う云ひたかつたのを押さへて、思はず立ちあがつて、飛んで行つて見ると、かの女は戸を開けツ放しにして便所へ這入つてゐた。

『どうだ？』自分の聲はむツつりしてゐた。

『苦しい？――手を取つて頂戴よ。』立ちあがつて、かの女はいきなりこちらの肩に抱き付き、殆ど全身のおもみをもたせ掛けたので、そのまま引きずるやうにそこを手洗鉢のそばへつれ出しながら、滿身の恨みを込めて、

『馬鹿！』

『でも』と、聲を低めて、こちらを訴へるやうに見ながら、『ひどいのだもの――わたしの口へ手を突ツ込んだりして！』

かの女の出した手へ、返事はしないで子杓の水をかけてやつた。自分にも、瀬尾がやつた應急のあら療治の理由が分らないことはなかつた――蓋し手洗鉢のあたりを探して見ても、ふりやんだ雪を咲かせてゐる何かの木はあつても、南天はなかつた。從つて、その葉を取つて嚙ませることが出來なか

つたのだ。

それでも島津の氣はどうしても平らかでなかつた。

皆が再びもとの座に納まつてから、かの女は叱るやうにだが、笑ひながら、

『瀨尾さんはひどいの、ね。』

『失敬しましたが、吐いてしまへばけろりとするのは僕も經驗がありますから。』渠はこちらにも忞がほを見せたが、こちらは答へをしたくもなかつた。

座が白けてしまつたので、

『早く一と休みおしになつた方がようございましよう』と云つて、先づ藝者が引けた。

『僕はあす、朝から學校がある日だから』と、瀨尾が次ぎに歸つた。

『先生、おぼえていらッしやいよ、いづれこのかたきはお打ちしますから。』こんな言葉を、かの女は横にぶッ倒れたまま、瀨尾の後ろ姿に浴びせかけた。

『如何に調子づいたからッて、——おれの友人にまであんまりだらしが無いんぢやア——』

『さう。』かの女は嶮ある聲を出して、俄かに半身をはね起した。そしてこちらを見詰めた眼は意地惡さうに据わつて、顏の色は靑ざめてゐた。『あなたにそんな燒き持ちをおッしやる權利があつて？』

『…………』島津はこんなことをかの女に云はれたのは初めてなので、ちよッとまご付いた。低い窓

の敷居に脊中をもたせかけて、兩足を投げ出した洋服の片膝を立てて、これを兩手でかかへ、顏はかの女の視線に箔を洗ひ落されて向き出しになつたやうでも、なほ恨みがましい腹の中を自分の眼に燃やして、じツとかの女の視線を眞正面に受けると、かの女が片手を突いてこちらの方へ投げ出した足を重ねてゐるその姿がそツくり眼に這入つて、やはらかい縮緬に包まれた白い肌の、至るところつるつるしてゐるのが思ひ出された。それをもやがて獨占したいほど自分の熱心は嵩じてゐるのに、かの女は却つてそれを誰れにでも觸れしめて美人たる條件を飽くまで手廣く廣告しようと云ふ氣味がないでもない。その無學と無見識とはさきにも一度諄々と說き聽かせてやつたところ、如何にも御尤もと涙を流してまでありがたがつたではないかと云つてやりたかつた。けれど、まア、おとなしく出てゐろと決心して、『そりやア、お前にやアれツきとした旦那がある、さ——而も老人の、ね。』

『老人だツて、何だツて』と、無しように强い調子の早くちで、『あなたはまだ部屋住みぢやアないの——』

『………』いつも斯うあなどられてゐる爲めに、かの女に愛せられながらもなほ夫婦になる機會がないのである。

『而もからだがちんちくりんで、平べツたい顏の、ね?』

『ふ、ふン!』いや〳〵ながら鼻で笑ふより外、仕かたがなかつた。

『…………』なほこわい顏をして見詰めてゐたかの女も、『ふン』と急に鼻で吹き出して笑つたかと見ると、どツかりあふ向けに倒れてしまつた。うは着、した着の裾がはね返つて、長繻袢の綾が眞紅に燃えると見えた。

その上に眼を放つてゐると、こちらの情が段々と集中して來て、瀨尾のことも何も忘れて行つた。

『おい、風を引くよ。床を取つて貰つたら、どうだ？』

『…………』

女に返事は無かつたが、こちらはぽん〳〵、ぽんと手をたたいた。

『可にして頂戴よ、島津さん！』起きあがつて來て、かの女はこちらの横からこちらの肩に抱き付いた。『惡かつたわ、ね。』そして大きな口を持つて來た。

女中が緣がはをつたつて來る足おとが聽えたので、二人は手を離した。

『でも、瀨尾さんは――』かの女は笑ひながら、平氣で云つた、『わたし、好き――うぶで、無骨で、正直で。』

『而も』と、島津は最初に自分から出た口調をかの女が摸したその優しい口調になぞらへて、後ろ襟を後ろへ突き出す眞似をして見せながら、なほ嫉妬の消え殘つてるのを見せるつもりで、『學校の教師で、子供がぞろ〳〵ゐて、ね。』

『さう』と、かの女は知らなかつたがと云ふ風に、下から顔を少しこちらへ突き出した。
『ふ、ふ、ふ、ふ』と、渠は自分の前の言葉につづいて、なに氣ないやうに笑つた。
二人の女中が食器やちやぶ臺をかたづけて、床を一つ敷き延べるまでは、こちらの二人も口を入れまじへて、下だらぬことを語り合つて笑つた。
『御ゆツくりお休み遊ばせ』と云つて女中どもが行つてしまつたあとで、直ぐ床に就くのだらうと思つたところ、かの女は氣ぶんも直つたかして、また元氣づいて來た。
それをこちらから押さへてやるつもりで、下の方に突ツ立つたままわざとにもからだをすくめて、筒袖の兩肱を兩わきに縮めて見せながら、
『寒くなつた、寒くなつた。』
『そのざまツたら!』かの女は上の方にペツたりと坐わつたまま、微笑して見あげながら、『これから瀬尾さんのところへ行きましよう。』
『もう、遲い。』いやな顔を見せてそれが爲めにまた意地張られるのも厄介だと思つたから、成るべく素直に受けるつもりで、こちらも微笑を返しながら云つたが、その聲は自分にも否定的な重くるしいものとしか聽えなつかた。
『遲くツたツてようございましよう。』かの女の言葉は憎いほどとどこほりなく出てゐた。

『寢てゐる！』
『叩き起します、わ。』
『…………』何を云つてると云はないばかりになつて、炬燵の這入つた赤うら蒲團の端に腰をおろすと、したたかに嫉ましくなつたその賓女の、姿が却つて觀音の坐像のやうに目の前にちら付いて、自分のからだ中がからツぽになつて、ただ一方にばかりそそいで行くのであつた。
『それしきのことアしたツて——わたしだツて、いつか一と晩ぢう、徹夜をして、あの人につき合つたぢやアございませんか？』
『下だらない！』斯う云つて、渠は横を向いた。
『それに、今夜だツて、わたしの口へ手を突ツ込んだりまでして——』
『…………』もう、返事をしなかつた。
『行きましよう——どうしても、今夜ぢうに二度のかたきを一緒に取つてやる、わ。』かの女は立ちあがつた。そしてすツきりした腰のしごきをしツかりと締め直した。
時計を出して見ると、もう一時を少し過ぎてゐた。それでも、こちらもしぶしぶ立ちあがつて、
『一時十五分だ。』
『一時だツて、二時だツて——』かの女は早速さきに立つて室を出た。

新らしい葉巻き煙草に火をつけたのを口に喰はへてから、手を叩いて置いて、自分も室を出て、足を靴に入れて編み上げの紐をかけた。かの女の足駄の音がもはや袖垣の向ふなる敷き石の上にきしつてると思ふと、

『早いの、ね、もう門を締めて。』

『ふン』と、こちらは獨りで私かに笑つた。何が早いものか？そして、敷石を三つか四つか踏めば達するこの家の玄關口へ進んで行つて、締まつてる戸を叩いた、

『姉さん――おかみさん！』

『はい』と、奥では直ぐ返事をした。そして戸を明けに來た女中に、ちよツと出て來るが、直ぐまた歸つて來るからと告げた。

『まア』と、びツくりしたツけが、それは尤もなことだ。

自分で門のくわん貫きを拔いたが、明けて置くのだらうと思つたから、そツと締めた風に見せかけて置いた。外へ出ると、そらはからりと晴れて、星がきらきらしてゐたので、雪あかりが一層あかるく見えて、歩くのには樂であつた。

が、高齒の足駄をはいた露子は、溜池の電車通りをたツた半丁ばかりで左りへまがるところまで來るにも幾たびか倒れかけた。

かつた。

『全體、無理だ——物好きにも程がある』と叱つては見たが、手を引いてやらねば一層あぶなツかしかつた。

『コートを置いて來ましたが、ね、さう寒くもありません、わ』と云ふほど、かの女は苦心して歩いてゐたけれども、ひゆう〳〵風が吹いてるので、こちらは——同じく外套を忘れて來たので——寒くてたまらない。

田町二丁目から新町二丁目へ渡るところで、冷えた頬をこすらうとして、ちよツと手を放すと、早速かの女は片足を足袋はだしになつた。

『しまつた』と云つて、かの女はその場に股を少し開らいたまま立ちどまつてしまつた。そして情けない聲を擧げて、『薄情、ね、あなたは！』

『それだから、よすがいいと云つたのだが』と返しては見たが、こちらはかの女の樣子をすツかり氣の毒にもなり可哀さうにもなつた。

『おぶつて貰ふ、わ、島津さん！』

丁度こちらもその氣になつたのだから、直ぐ脊中を向けてしやがんだ。

一つ木の交番では、うろん臭く思つたのか、それとも急病人とでも推したのか、巡査が一人つかつかと出て來て、

『どうしたのです』と尋ねた。

『なアに、今』と、葉巻きを口にくはへたまま、『下駄の鼻緒を切らせたので――』こんなわけであつたが、やツとのことで、この圓通寺通りの中ごろまでやつて來たところ、一度來ておぼえてゐると思つた友人の家がどうしても見當らないのだ。

『どうして呉れるのよ、島津さん！』

『さう悶いちやア――』高いカラの合せ目が喉の肉を嚙んだのはこの時だ。

高が女の一人をだが、斯うつゞいてしよつてるとますく重くなる。こちらは段々力が出るに從つて寒氣には平氣になつた代り、今度は女が、

『寒い、寒い』と云ひ出した。

自分の兩手を後ろへまわして、渠は女の兩足を膝の折れ目のあたりでしツかり持ち上げてはゐるが、なほ殘る重みを女はその兩手の握り合せ目に集めるので、自分は喉の骨を力ませてそれを受けるのが如何にも苦しい。

片手を放して口の煙草を手に取り、殆ど口一杯にたまつたつばきを吐いた。

『落ツこちるぢやア――』

『う！』急いでまた葉巻きを喰はへて、遊んでる手を後ろへまわして、やツとのことで、あとずさり

して行きかけた自分のからだの中心を取つた。
『どこよ、瀨尾さんとこは？』
『困つた、ね。』獨り言のやうに云つて、立ちどまつて考へながら、『この通りぢやアなかつたか知らん。』
『あら』と、また女はからだを小さくゆすつた。『薄情、ね！お友達の家を忘れちまつたツて！』
『晝間なら直ぐ分るだらうが――なんしろ、夜中だから――』
『夜中だツて、不斷から親切があれば――』
こちらは親切どころのさわぎではないのだ。
『ちよツと、一と休みおりて貰ひたい。』
『だツて、はき物がないぢやアございませんか？』
『ぬいでしまつたのか？』どこの馬の骨の名前か田口と書いた門燈の光りの範圍へ突き出た、かの女のよごれた方の足の足袋さきを、目を下に向けて見たとたん、半分ばかりになつた葉卷きのさきが自分の鼻の眞ツしたなるかの女の手の上からけむりを出したと思ふと、
『あつい！』かの女はびツくりしたやうに叫んだ。
『ふン』と、つい、こちらもをかしくなつて氣がゆるむと共に、一二歩またかの女の重みの爲めに後

ろへひよろ付いた。
『ほんとに』と、かの女も笑ひ聲で、一層しツかりかじり付きながら、はや口で、『笑ひごとぢやアございませんよ！』
『おれも實際冗談ぢやアない。』
『ほんとに、じれツたい！』また脊中ではからだをゆすつた。
『何だツて、また、はき物を――わざ〱ぅツちやつて來ないでもいいぢやアないか？』
『でも、よごれた物がはけますか？』
『鼻緒が切れちやつたのぢやアないのか？　そんなら、なほ更らうツちやらないでも――』
『そんなことアどうでもいいぢやアございませんか？　早く瀬尾さんのところを！』
かの女がその上品な顏に目と鼻とをしがめると、如何にも愛嬌を呈するその樣子を直ぐ後ろに想像して、島津は自分がかかる樣子を正面に見ない今の不自由を馬鹿々々しくなつた。ぱツたりと踏みとまつて、――
『分らなきやア仕かたがない。』もう、これツきり進まないと云ふ覺悟をきめた。たとへ進んで行つて瀬尾の家が分つたとて、自分の馬鹿を見るに過ぎないのは分り切つてゐた。ちんちくりんだとか、平べツたい鼻だとか、色ぐろ男だとか、何とか、かとか、こちらはおもちやにされて、調子づいた露子

が瀨尾と徹夜でもする時間つぶしの笑ひの種になるだけのことだらう。それよりはましだらう、早くもとのところへ戾つて、もう、炬燵があツたまつてる床にもぐり込む方が。
『どうして吳れるのよ、瀨尾さん！』
『………』返事もせず、動きもせずちよツと齒を明けて、いやになつた葉卷きをふツと吹き飛ばしてから、渠はかの女のもがくのをじツと負ひこたへた。
『ぢやア、歸りましよう――折角、ここまで來たのに。』
『………』全く興ざめてしまつて、その狹い通りを再び新町に出たが、おもい荷物を乘せる人力車もなかつた。矢ツ張り、風はひゆう〳〵吹いてゐて、女を頻りに寒い、寒いと云はせた。
女を初めて脊に受けたその場所らしいところには、雪を踏みたたくつたあとはなほ殘つてゐるが、どこを見てもはき物はあたりに無かつた。
『惜しいことをしたの、ね――あれでも三圓二十錢で買ひ立てだツたのに。』
『拾つたものは押し戴いて行つたらう、さ。こんな夜ふけにも。』
戾つて見ると、田毎の門は締つてゐた。その一方に垂れた柳の枯れ枝が風に烈しくゆれてるのが電燈の光りに見える。
二人の體を自分の溜らなく勞れた弱りにまかせて、どんと戶に押しつけて見たが、うちがはからか

かつたくわん貫きはしつかりと戸を喰ひとめてゐる。
渠は右の手を後ろから外して、どん／＼と二三度に戸を叩いた。
しんとして奥から何の返事もないので、今度は思ふさま叩いた。おほきな聲で『おかみさん――おい、おかみ！』
『姉さん！』ずツと聲を低くして、『おほさわぎ、ね。』
矢ツ張り、返事がない。
『畜生！　コートと外套を擔保に取つたつもりだ、な。このおかみは少し因業でちよツと借金を溜めると、直ぐ催促しやアがるんだ！』
『溜め池ですもの。』
『冗談ぢやアない！』
『しツかりお叩きなさいよ。』
『待て――ちよツとおりてゐな。』渠はかの女を平たいどぶ石の上におろして、兩手を上に延ばして門の戸に飛びかけた。そして、うんと力を入れて自分のからだを引き上げ、片足を戸の上にかけて馬乘りになつてから、他の片足をもうちがはへ外して、庭へ飛びおりた。靴のうらが石にすれて、じやりりと音がした。

それでもあたりに憚ることなしに、がたぴしとくわん貫きを外して、門をひらくと、寒さうにだが足袋はだしで、右の手を袖の中に縮めて、左りの手で褄を——どろ足にさわらないやうに——あげてゐた女は、こちらを見て、にツこりと笑つた。

——（大正四年十一月）——

藁人形

『貞ちやん、またみイちやんとこ行きました、な。あんなとこ行たらいきまへん………』姉はまた貞市に斯う云つて、叱つた。

『どうしてや？』いつも渠は姉の言葉をたわいもなく受け流した。

みイちやんとは日露戰爭に徵集されて滿洲へ行つて來た兵隊さんのおかみさんで、その亭主とは年がすこし違つてゐたので、貞市の上の姉とはおツつかツつの年輩であつた。

うへの姉がかた付くまで、みイちやんが度々うちへ遊びに來たのは、貞市にはうちの檀徒でもあるからだと思はれた。渠の母もかの女をよくもてなして、かの女が歸つたあとでは、また、よくこんなことを云つてゐた、――

『みイちやんは感心や、な。年から云へばさう違やへんのに、うちのお初などはまだ丸で子どもや、みイちやんほどの挨拶もでけへんで、な。』このお初とは貞市のうへの姉のことである。

渠が姉や母に伴はれて時々みイちやんのところへ行くと、必らず子どもの氣に叶ふやうな菓子を呉

れたり、面白い本を呉れたりした。そして貞ちやん〳〵と云つて可愛がつて呉れることがしみ〴〵と渠の身にしみて、渠にはかの女が段々と姉よりも母よりもなつかしい者になつた。
『あんた、世界で誰れが一番ええの？』斯う姉に聽かれた時、姉さんともお母はんとも云ひたくないので默つてると、『分つてるわ、みイちやんやろ』と云はれて、渠は顏を眞ツ赤にしたことがある。
ほそおもてで色が白く、姉が三月の節句に飾る內裏さんの奧さんのやうな顏に見えて、貧乏な家には何だか上品過ぎるやうだけれども、物を云ふと、その物ごしが優しくて、渠はかの女のからだに飛び付きたいのであつた。そして渠の氣になるのはかの女の手の指であつた。
『別嬪やが、氣の毒なことには右の手の小指がない。』斯う云ふことを母が他の人に語つてるのを、渠は聽いたことがあるので、みイちやんの家に行くたんびに、自分も氣の毒がつて注意するけれども、かの女はいつも右の手に白いハンケチを卷いて指を見せないやうにして、人に應接した。何でも、子供の時に火の中へ手を突ツ込んで、そこだけが燒け切れたのだと云ふ。
ちへの姉がかた付いてからのことだが、みイちやんのことを下の姉が俄かに嫌ひ出し、憎み出したりしたのも、かの女が手の指を見せないやうにしてゐるのを知つた爲めだらうと、最初には、貞市は思つてゐた。そして一層、姉よりもみイちやんの方が自分には親切な懷かしい人となつた。
『人間の手の指がしんこ細工ででもでけるものなら、いつでも僕が直してあげますのに――』斯う云

はないばかりにして、渠は殆ど毎日のやうに小學校の歸りには、かの女の煙草店へ立ち寄つた。無論、姉には隱れてだが――

『いま、お歸りだツか？』

『僕、けふ』と、無理に何げなく云はうとしても、顏がぽうツと赤くなつたやうだ、『書き方でねぢ丸を貰ひましたの。』客がひとり朝日を買つてゐたのだが、こんな奴はみイちやんのまさか關係者でもあるまいと氣にしないで、店のあがり口へづか〳〵と這入つて行つて、袴の片膝を疊の上にあげた。

『ありがたうおます。』かの女は左の手で客につり錢を出し、ハンケチを卷いた手は遊ばせてゐた。

『氣の毒や、なアと』云つてやりたかつたが、若しさう云つて却つて向ふの機嫌を惡くしてはいけないと遠慮された。そして向ふの優しい言葉を出して吳れるのを待ちつゝ、下を向いて、かばんの重みを肩に感ずる方の手を角火鉢のふちへかけた。秋ではあつたが、さう寒くもなかつたのに――

『あんたは、なア』と、かの女は裾さばきのかるい膝のさきへ赤いのを少しはみ出させながら坐わつて、貞市と火鉢を間にしてさし向つた、『よう勉强してえらい人におなりやしよ。』

『僕、勉强してる。』そツと渠はかの女の顏を見上げたが、かの女がにツこり笑つてこちらを見つめてゐるのに目が出くわした時には、からだにしみ渡るほどの權威ある優しみをおぼえ、また目を下に向けて、僅かの火が灰に埋まつてるのを見た。そして私かに考へた、自分の机の上や枕のあたりにいつ

もちら付いて離れぬやうになつたかの女の姿はこれであると、『僕、えらくなつたら、なアーー』訴へるやうな、また突き詰めたやうな心持ちになつて、ちツとかの女を見上げて、『あんたにもツと〱金を貸してあげる。』

自分もうす〱知つてたのだが、母と姉とがみイちやんの事で時々云ひ爭ひをしてゐるのによると、母は父に内證でみイちやんに煙草屋を開く資本を貸してあるのだ。

父が曾てどこかの法事に呼ばれて行つて留守の時、姉は母に向つて火の如くどなつてゐた。

『あんたは、な、あの人にだまされてるのや！　八十圓と云へば、お父はんに取つても大金だッせ。それをお父はんに隱して貸したと云ふのが、そも〱あんたの弱みですが、な。』

『さうか、なアーー』母は然しさう迫つてはゐないやうであつた。『でも、少し利子が取れるやうになつたら、ええやないか？』

『へん、利子どころか、元金かて向は返す氣がおまへん！』

『そんなわけはないが、な。』

『こツちやがなんぼさう云ふたかて、向に氣がなけりや、あきまへん。』

『みイちやんは、なんぼ何でも、そんな惡人ではないが、な。』

實際に母の云ふことが本統だとは貞市にも信じられた。

『利子を拂はうとおもたら、あんなに店がはやつてるのやさかい、三度に一度はわたいが取りに行けば渡せん筈がない。店を出してからやないか、あんなにぞべら〳〵といつもええ衣物を着るやうになつたのも？』

『そりや、お客を呼ぶのにや少しはええ衣物を着てをらんならん。』

『でも、みイちやんはみだらな人だツせ、いろ〳〵な人と關係する云ふ評判があつて。』

『…………』貞市はこれに最も聽き耳を立てた。

『かめへんやないか、利子さへ取つて來れば』と、母は少し姉の反對をうるさがつた。

『あきまへん。わたい、もう、あんたの秘密な使ひなんていやや！』

姉がこれまでのやうに度々みイちやんのところへ催促に行かねば、結局、自分が見付からないでいいと、貞市には思はれた。渠には、姉が行くな、行くなと云ふ忠告の外に、なほ一ついやな物があつた。それはみイちやんの亭主である。巖丈なからだで、顏にはひげなどはやし、戰爭に行つて來たのを自慢に、時々自分等のやつた戰爭の樣子などを話して聞かせたこともあるが、やがて勳章と下賜金とが貰へるからと云つてるのは、とう〳〵うそであつたらしい。

そのうそに母ものせられて金を貸したのであることは、姉がまた別な時に母に注意したので貞市にも分つた。然しそれはみイちやんの惡いのではないと、渠には見えた。

渠はみイちやんにはもツとでも金を貸してやりたかつた。
『貞ちやん、また來たか?』など云つて、みイちやんの亭主が外から歸つて來る時などは、貞市はいやな顏をして、こんな奴は戰爭で死んでたらよかつたとまで思はれた。
學校の歸りに立ち寄る時だツて、渠は先づ亭主が奥にゐるかゐないかを、一方の耳をすまして私かに注意するやうになつた。
『もツと〳〵金を貸してあげる』と云つた時には、亭主がゐさうでなかつたから、餘ほど貞市は心を許したのである。
『さうだツか』と、丸みを帶びた聲で微笑して、かの女はこの時答へた、『待つてまツせ。』
『貞ちやん、また來てるの?』生憎、姉がやつて來たので、渠は半ば恐れを懷いて直ぐにも立ち出でようとして、腰を上げた。
『まア、ようおますが、な、一緒にお歸りやし、な』と、みイちやんに云はれて、渠は突ツ立つたまゝ、おづ〳〵としてたが、ぢツと姉のこはい顏を見つめた。みイちやんは相變らず優しい聲で、『えらうなつたら、もツと〳〵わたいにお金を貸してやる云やはりまツせ。』
『阿呆!』姉はにらみ付けて、『お歸り!』
『まア、〳〵ようおますが、な。』

渠は飛び出したくもあつたが、またこの權幕の姉がみイちやんに何を云ふか聽いてゐたかつた。
『まア、おかけやす。』みイちやんは姉にも斯う優しく云つた。
『あんた、一體』と、姉は立つたまま出しぬけに、『いつ戻しておくれやすのや?』
『お母はんにも申して置きました通り』と、少しみイちやんも急にきつい調子で、『當分うちも苦しゆおますのんで――』
『お母はんはあんたにだまされてるのだツさ。』
『そんなこと云わはらんで、まア――』
お客さんが來たので、暫らく姉と貞市とが立つたままにらみ合つてゐた。が、客が去ると、姉は今一度と云つた風の思ひ切つた言葉ぶりで、
『お母はんも、もう、おこつてゐやはりますさかい、な――』
『然しお母はんは承知してくれはりまツせ。』
『もう、堪忍ならん云うてます。』
『でも、うちのことを荒立てては却つてお母はんの方がお困りだんが、な。』
貞市もそれは知つてるので、母のかげでやつたことを自分も父へは決して云ツつけなかつた。然し姉はみイちやんに答へた。

『困つてもかまひまへん――では、わたい、お父はんに云うて、お父はんから取つて貰ひまッさ。』
『いづれ返す云うてまんのに――』
『よろしゆおます！』姉はみイちやんが少し心配さうな顔をしたのにも頓着せず、店さきを出た。貞市も仕かたなしに一緒に出て、姉のすた〳〵歸るのについて行つた。そして心のうちでは、姉が父に云つてしまはなければいいのにと祈つてゐた。さし當り、母が父に叱られるばかりではない、その結果はみイちやんまでも父に叱られて、あの店が持てなくなれば、喰へなくなつてしまふだらう。喰へなくなれば、またどこへ行つてしまふかも分らなかつた。それが渠には一番つらかつた。
　家に歸つても、暫らくは姉のそばを離れないでゐたが、姉は父のもとへ行つて告げる樣子もなし、母の前でもただ、
『あんた勝手におしなはれ、わたい、もう、みイちやんとこ行くのはいやです』と云つて、母のみイちやんに對するいろんな申しわけや辯解を聽かうともしないだけであつた。
　それからと云ふもの、貞市は机に向つても、みイちやんの可愛さうなおもかげばかりを見るやうになつた。
　或晩の事、食事もとツくに濟んで、母と父と姉と貞市とは圍爐裏を圍んで世間話をしてゐると、話がどちらからも出なくなつて、暫らく何も聞えぬしんとした無言の時間が續いた。貞市には直ぐみイ

ちやんを思ひ出す餘地が出來たが、その時、誰れもゐる筈がない本堂の方で一つがんと大きな鐘が鳴つた。

すると、父は突然、

『あ、またあすは朝早く亡者が御座るぞ』と云つた。

『鼠か何かだんが、な。』姉は反對するやうすであつた。

『鼠でも、いたちでも、あれはどうも不思議だんな』と、母は信じてゐるやうだ。

貞市はそのどちらにせよ、おぢけ付いて母のそばへ寄り添つた。

その夜中のこと、何だか大きな聲がしてゐると思つて貞市が目をさますと、母は氣違ひのやうに聲をしぼり立てて苦しんでゐる。

「針がささる、針が――胸や――肩や――顔や――手や！』

「針などおまへんが、な。』姉は最も心配さうに母の苦しみころがるからだを追つて行つて、さすつてゐた。

『しツかりせい、この神經病み！』父は突ツ立つたままで母を叱つた。

『誰れかわたいを刺してるのや、苦しい！　苦しい！』

「阿呆云ふな、しツかりせい！』

『いや、苦しい云ふのに！』

『ここだツか――ここだツか？』姉は痛さうなところへ手を持つて行くのであゝ。

貞市も何かなしにおそろしくなつて、床の上へ半身を起してゐるのではからだが落ち着かないので、父のそばへ出て行つて、父のそでにつかまつた。それでもなほからだがぶる／＼してゐた。

暫らく經つと、母の樣子は納まつた。そしてすや／＼と寢入つた。

然しその翌晩も亦丁度同じ時刻に同じ苦しみが來た。時計を見ると、午前二時前後であつた。そしてあくる日になると、晝間はけろりとしたやうに正氣で、ただからだのふし／″＼が痛んで、けツたるいばかりだと云つてゐた。

第三夜にも亦同じ時刻に同じ苦しみが來た。

『午前二時と云へば、昔の丑滿どきやさかい、ひよツとすると、わたしは誰れかに呪はれてやせんやろか？』母は朝の食事をまづさうに喰べながら、皆の前で斯う云つた。

『阿呆云ふな！』父は叱りつけるやうに斷言して、『今どき、そんなことがあるもんか？』

『でも、一度、うらなひ師に見てもろたら』と、姉は心配さうに口を添へた。

『馬鹿！』父は姉をも叱つた。『うらなひ師とか陰陽師とか云ふものは他力佛教の邪魔や。「八卦半分、巫子みなうそ、」「當るも八卦、當らぬも八卦」や。寺のものがそんなとこへ行たと云はれては、わし

の體面にかかはる。』
『そやけど、なア――』姉はまだ父の承諾を得たいやうな言葉ぶりであつた。
『いや、ならん！　神經病やさかい、わしは今からお勤めに出た途中で村上さんに相談して來る。無理にも氣を休める爲めに、寢てをれ。』
『はい。』母はいつものやうな返事をして、別に違つた樣子もなかつた。そして父が出て行つてから、もとの座に歸つて、
『わたしは別に人に惡いことをしたおぼえもないが、若し呪はれてるとしたら、みイちやんにか、なア――？』
『さうだツさ。』姉はいま〳〵しさうにして、『あの人は初手から金を返す氣で借つたのやおまへん。』
『…………』貞市にはそんなみイちやんか知らんと疑はれた。
『兎も角、お父はんに內證で八卦見に行て來ておくれやす。』
『さうしまツさ。』姉は早速身じたくをして、貞市にも一緒に行けと命じた。かの女は、どこか行きにくいところへ行く時には、いつも小い弟を力にしてつれて行くのが習慣であつた。
『ここへ來たことはお父はんにしやべるのやおまへんぜ』と、姉は命令した。神易と云ふ看板がかけてある家に這入つてからのことだ。

『どうして』と、わざとにも云つて見たかつたが、貞市には姉と一緒に何か秘密を知ることが出來ると云ふ豫想が面白味を添へて、にツたり笑つて『うん』とうなづかれた。

六ケしさうな顔をした人が出て來た。貞市には何だかおそろしく見えたが、姉は別に違つたやうすもなくその人に語つた、實は、斯う〳〵云ふ次第で苦しむ者がありますが、どうしたわけか見て貰ひたいと。

『そのお方の年は？』

『五十三。』

『………』暫らく書いた物を見て、『虎の二黒です、なア。』

『はい。』

すると、長い箸のやうな物を澤山兩手に握つて、それをさら〳〵と云はせてさばいた。そして貞市がこは〴〵のぞいてゐると、變てこな黒い四角張つた字のやうな物を、ところ〴〵漢字の上に書いてある本を開らき、何か貞市には分らぬ六ケしい說明をしてから云ふには、誰れか本人を呪つてる者がある。その原因は借りた金のことで、それを返したくない。(貞市には、みイちやんはまだそんな人でないと思はれた。)それで、いツそのこと、呪ひ殺してしまへと云ふわけになつたのだが、――場所は鎭守の八幡の境内だ。(但し、若しそんなおそろしいことが出來るとすれば、この境内のやうなところ

しかいい場所はなかつた。)先づ、宮に一番近いおほ楠の木の根を掘つて見よ。(貞市には、それがどの木であるか分つてゐた。度々遊びに行つて知つてるから。)一尺ばかりのわら人形が出て來る。それも三尺は十分深くうめてあるし、もう、一ケ月にもなるから、あめ風にうたれて、土は固くなつてゐる、それを掘り出したら、身うちのもの以外には知らせないで宮の神に納める。すると、呪はれた方は氣ぶんがすツかりよくなつて、呪つた方がきツと病氣か何かになつて死んでしまふ。(貞市はみイちやんが死んだら可愛さうだと思つた。)いつまでも、これは人にしやべつたら祟りがある。掘りに行くものは本人の身うちのものでなければならぬ。行く時は、おほきな鍬と片手鍬またはじうのうとを持つて行く。埋めたのも丑滿どきだから、掘るのもその時でなければならぬ。後ろを向いたり、話しをしたりしたら、願がもどる。

『ありがたう』と云つて、姉はそこを出たが、貞市はそのうらなひ師なる者がおそろしくなつた。まさか、みイちやんがそんなことはすまい、あいつ、八卦とか云ふものを見るやうにして、自分の實際にやつたことを語つてるに相違ない。それでなければ、さう詳しく本統のことが云へる筈はないと。

『姉さん』と、途中で、下向きに急いでる姉を呼びかけて、横あひから云つた、『あいつがしたのや、なア。』

「そんなことが――」

『いよ〳〵神經病らしいぞ。』父は二人に途中で出くわして云つた。『今、なア、村上さんとこへ行て來たら、あの醫者が云ふには、直ぐ見舞ひに行くが、まア、精神を落ち着ける藥でも飮ませて、よく休ませて置くがええ。何か心配ごとでもあるのやさかい、落ち着いた時にそれをよう聞いてやれと、なア――何かわしに隱してお母はんがしてることはないか？』

『………』姉は心配さうな父の顏を歩きながら横から見あげたが、また下を向いて、返事がなかつた。そして貞市はみイちやんのことを云うてはいけないぞと云ふ風で、姉の方を見たとたん、姉はやツと途ぎれ〳〵に答へた、『別に――何も――お母はんが――お父はんに――隱してることツて――』

『さうか？　無ければないでええのやが』と、父は一層困つたと云はないばかりにして、『何かお前の心當りでもないか、なア？　毎晩あんなに苦しむのでは、本人も困るだろが、はたのものも皆手の付けやうがないで、な。』

『別に――なにも――』姉は矢ツ張り隱して置く口ぶりであつた。

母は父に云はれた通り、床を取つて寢てゐたが、村上さんが診察をして、まア、精神の落ち着く藥を飮ませて置くより仕方がないと云つて歸つたあとで、姉は父の目を盜んで母の枕もとに行つた。貞市もそれに從いて行つたが、聽いてゐると、姉は母にうらなひ師の云つた一部始終を語り、どうした

らいいと相談した。

『お初に相談して來なはれ』と、母は注意した。

うへの姉は紡績會社の事務員にかたづいてるのだが、そこへ行く時にも、貞市は姉に從つて行つた。

『こんでもええ』と、姉に叱られたけれども、斯うなつて來ては、どこまでも自分等の秘密にたづさはつてゐたかつたからなのだ。

『お母はんは、この頃わたい等がちよツと困つた時にも一文かて借してくれへんのに』と、うへの姉は不平を云つたが、『兎も角、親のことやさかい、力になりまツさ。』

そしてうへの姉は時刻を見計つて、寺の裏門へ來た。下の姉と貞市とは、また、父に知れないやうにして、これも裏門に出あつた。が、誰れもおそろしさうにして口を聽くものがない上に、海の鳴りも松風も聞えぬ、しんとした闇の夜であつた。貞市はその宵から、シヤツを着て用意してゐたが、假り寢をしたので、寒かつた。

彼の生れた寺と云ふのは、その町を四角な物と見れば、それが山と海とに迫つて行つた一番隅の場所を占領してゐた。これを外れれば、もう、人家はない。裏門の通りは長いお堀を隔てて一直線の城山に面し、隣家のない横手には、矢ツ張り長い馬場に添つて、一直線の松原があつて、その松原のそ

とはおほ濱とおほ海とだ。そんなあたりの景が皆しんとして、眞ッ暗だから見えぬ中に、渠は獨り抛り出されたやうな氣がした。

廣い家の中を便所にさへ獨りで行けぬ渠には、無論、初めての經驗であつた。

ふと仰ぎ見ると、自分のうちの寺の濃い影も四角であつた。その寺をめぐる周圍の庭も練り塀もさうだ。お隣りの土地も、遊びに行つて知つてるが、四角。お向ふのもさうだ。お隣りのそのまた隣りも、お向ふのそのまた向ふも、矢ツ張り、四角と思はれる。斯う四角の物が集まつてるから、町その物も四角になるのだらう。山や海も四角を圍む練り塀のやうな物だ。して見ると、世界も亦四角ではあるまいか？

本堂の鐘が人もゐないのにがんと鳴つた。すると、父はあす亡者が御座ると云つたが、果してその翌朝、葬式があつた。そして人々が擔いで來た死人の輿も四角であつた。

うらなひの字も亦四角であつた。

闇その物もさうであらう――と思ひ込むと、かの神易の人の顏が思ひ出されたが、それが、ぼうツと止めどなく廣がつて、黑い四すみのすみ〳〵から押し迫つて來て、自分も四角になつてしまふやうだ。

それが如何にもおそろしくなつたので、渠は門内へ驅け込んだ。

『貞ちやん』と、下の姉は直ぐ追ツかけて來た。そして『あんたが行かな、をなごばかりだんが、な』と云ふ、そのひそ〳〵と訴へるやうな、而も强い語調が、また、渠を四角に押しすくめる氣がした。

姉が渠の手を引ツつかんだその力は、あとから思つても、弱いをんなから出たものではなかつた。渠はこれに往生して、をののきながらだが、二人の姉と共に、堀ばたの道を進むことにした。八幡宮はその突き當りだ。

道の右手はすべて人の屋敷の練り塀がつづき、左り手は堀を隔てて、遠くずツと長い城山が眞ツ黑な影を引いてゐる。

高い空の星あかりをたよりにして進んだのだが、上の姉はおほ鍬を肩にかけて先きに立ち、下の姉は手ぐはを持つて後ろに従つた。貞市は眞ン中にはさまれて、泣かぬばかりであつた。

ただ母の爲めと云ふことばかりに、多少辛抱する餘地もあつたが、自分の小學校の後ろ手を過ぎて、宮の鳥居から一つ目の堀りに渡した橋のそばに來た時は、右へ這入つて一つ目の通りにみイちやんの店があるので、

『みイちやんは今頃どうしてるのやろ』と、その亭主の人が嫉ましくなつた。

然し後ろを見たらいけないと云ふのだから、自分の眼を成るべく前の方へ、前の方へと向けて行つ

た。

無論、三人とも物は云はないのである。堀の中でおほきな鮒か鯉かがばしやりとはねる音が一つした。

ふとい石の鳥居の上には、楠の木の繁つた枝が蔽ひかかつてゐた。俄かにまた一層暗くなつた氣がしてそれをおづ〳〵とくぐり、矢大臣左大臣の兩方にがん張ツてる門を這入ると、直ぐ左りへまがつたところに目當てのおほ楠があつた。

貞市には仲間七八名と共にそれの周圍を計つて見る爲め、手を列ねて取り卷いてもなほ不足であつた經驗がある。幹の所々や大きな枝から赤い血のやうなしぶが澤山吹き出てゐるのも知つてゐた。が、今、この木が目に這入るが早いか、ぶる〳〵とからだ中が顫へた。ことりと、どこかで一つ物おとでもすれば、忽ち逃げ出したに相違ない。

姉どもはなほ無言で木の周圍のでこぼこした根もとを手さぐりでまはつて行つたが、根のかげの、塀に近いところの土をうへの姉は根もとに跼いて掘り初めた。下の姉はそのそばに立つてるやうであつたが、貞市はその手前の根こぶにつかまつて、誰れか――と云ふよりも、何かお化けのやうなものでも――出て來はせぬかと、あたりをおづ〳〵、ぢツとすかして見ながら、ぶる〳〵顫へをつづけてゐた。

目の前に、闇の中に闇を刻んでそば立つお宮の影も四角の感じがして來ると、おそろしくツてその方を見てゐられなくなつた。そして二人の姉のけはひがする方にばかり眼を向けた。すると、不思議なことには、段々と兩眼がぱツちり明いたやうになつて、うへの姉の丸まげが見えた。その鍬を打ちおろす背中が見えた。下の姉がその横にしやがんでまた別な穴を掘つてるのが見えた。そして自分はいつのまにか木の多少平らに傾いた幹を少しのぼつたところの瘤につかまつてゐた。

宮を背なかにしたので　もう、ふり向いて見ることが出來ないのであつた。そして自分の今の足場をおりる時には、自分の視線と直角に横にすべり落ちねばならぬ。いよ〳〵自分その物も半ば四角を形ち造り出した。

その上、どしり、どしりと、鍬が土に喰ひ入る響きが――高が女の弱い力でとは云ひながら――渠の胸をその度每にびく〳〵させた。そしてその響きと、そのびく付きとの間を、自分の目さきで、暗いやうだが、また明るくもある直線の輝きが往來した。が、それが自分の横と後ろとに迫つて來たら自分も全く四角のわら人形と成つて、世界の奥から掘り出されるのではないかと、しツかりその瘤にかじり付いた。

どしり、どしり！――びく〳〵！

『早うわしの身代りになる人形を掘り出して吳れ』と叫びたかつたが、叫ばうとあせればあせるほど

聲が出なかつた。

同じところに踏みこたへて、同じところにつかまつてればこそ、まだしも確かであつたと云ふだけで——一歩でも動けば、きツと踏みどを失つたであらう。

うへの姉は一生懸命に掘つてゐたが、二ケ所までうらなひ師の云つた深さに達して見たけれども、目あての物が出て來なかつた。これに失望したらしく、がツかりと鍬の手を休め、置いた鍬の柄にゆるく片手をかけて、下の姉の方をふり向き、

『無いやないか?』斯う低い聲で云つたのが、貞市には、四角な物が投げ出されたやうに見えた。

『あらへん!』下の姉の聲も四角に飛んだ。かの女は手鍬でまた一つの穴をあけてゐたのであつたが、この時その鍬を持つたまま、つんと立ちあがつた。

貞市は俄かにいら〳〵し出して、

『無い筈はないやないか』と、これも四角であつたと自分ながら感づかれるやうな聲で云つた。あのうらなひ師が自分で埋めて、自分でその埋め場所を教へたのだもの、きツとある! とは、他の二人も既に承知してゐるのにといら立つたのだ。

皆は暫らくそのまま考へ込んでゐた。

高い楠の木の枝から、ぽとり——ぽとりと夜つゆの落ちるのが聞えた。

すると、何かぴかりと光つた物が貞市の横目に左り手の方に見えた。渠はその方を見ると、神門のそとから光りがさしてゐる。そしてそれが段々と廣がつて來る。やがてあたまに火のともつた蠟燭を立てた人が現はれた。

『あツ！』と云ふ聲も出ないほどびツくりして、貞市はその足場をすべり落ち、落ちた方に直ぐ建つてゐる小やしろのかげに逃げた。

姉どもには光りはまだ見える筈がなかつたけれども、渠等も渠の樣子を見て、急に同じやうに、逃げて來た。

『どうしたの？』うへの姉は渠の耳もとへ顏を近づけて尋ねた。その聲までがわく／＼とふるへてゐた。

『…………』渠は返事が出來なかつた。

『貞ちやん』と、下の姉も顏をよせたので、渠はかの女も自分のそばにゐてくれることが分つた。

渠はからだ中が全く冷え通つたほどに身ぶるひしながら、それでも、

『靜かにせい』と云ふことを目つきと手つきとで敎へた。そしてあれを見よと云ふ風に、息を殺して、自分の丈ほどの高さの、そして一間四方――これも四角であつた――の石垣の上へ背延びをして、その玉垣の中に建つ小いほこらのかげから、門の方をのぞくと、渠には最も意外であつた。

話に聞いてた丑の刻まゐりとはこれであらうが、この人が若しまた母を呪ふ者と同じ人であるとすれば、その人は必らずかの神易らなひの主人だと思つた。

ところが、をんなだ。白い裝束をつけて、解いた髮を眞ン中から分け、その上に三本の蠟燭をともした燭臺を戴いてゐる。風がないので火は眞ツ直ぐにともつてるが、一歩々々と進むにつれて、火がゆらいでその光りがちら〳〵する。

その右の手には撞木のやうな物を持ち、左りの手には長い釘を澤山つかんで――口にはかみ剃りを喰はへたのが光つてゐる。そのせゐでか、兩眼が兩方につり上つて見える。

よく見ると、眞正面に、鼻すぢの通つたところなど、みイちやんそツくりだ。

『畜生!　お母はんを呪つて!』この時ばかりはそれが憎たらしかつた。もう、おそろしくもないから飛び出して行つて、なぐつてやらうかとも考へられたけれども、煙草屋の店にゐるみイちやんを思ふと、また、斯うも變はるものか知らん?　若しみイちやんに似た人鬼ででもあつたら、飛び出すが早いか、取りつかれて――?

一緒になつて渠の兩わきからのぞいてゐる姉どもの、をののきが自分にも傳はつて來ると、自分も矢ツ張りその氣になつて、おそれが止まなかつた。

楠の木のそばへ行くので、どうするだらうと見てゐると、かの女は貞市が前につかまつてゐた瘤に

つかまつて、不思議なほどやす〳〵と幹をのぼつて行つた。そのあとにはあし場が付けてあるのが見えた。

二間ばかりあがつたところにある木のうろの中へ釘が幾本もうち込まれる。貞市は母の苦しむ姿を再び目の前に見るやうであつた。

呪ひが濟むと、その女は再び下りて來るので、若しこちらへでもまはつて來はせぬかとびく付かれたが、下りてしまふと、その素足は――なんにも穿いてなかつた――もとの如くゆツくり歩かないで、何だか物おぢしたやうに驅けて行つた。

見るうちに、火は一は消え、二つ消え、三つ消えて、白い衣物が黑くなつた。そしていつ門を出て行つたか、その時の姿は見えなかつた。

『見ておいで。』うへの姉は斯う貞市を突ツついて命令した。その聲は今の女の目のやうに少し釣り上つてゐた。

『…………』渠はこの突然の聲にも――低いには低かつたが――ぎよツとした。再び無言で突ツつかれたので、からだを振つて、いやだと云ふ意味を示した。

『では、あんた――』

『…………』下の姉も突ツつかれて、肩をゆすつた。

うへの姉が石垣をまはつて行くので、貞市と下の姉とはその後ろを離れないやうにくツ付いて行つた。
貞市には、姉が門のそばまで行つて見て來いと命じたと受け取れたのだが、さうではなかつた。かの女は前の女がした通りに楠の木を登つて行つたので、あとの二人はその下でおそろしさうにして待つてゐると、何か物を持つて下りて來た。そして獨り言のやうに、
『あんなとこにあつたのんや。』これを聽いた貞市はまた身の毛がよだつた。そして實物を見る勇氣はないが、四角い人形に相違ないと思つた――あのうらなひ師が作つた。
うへの姉は掘りをこしたところから鍬を取り上げるが早いか、すたくと急ぎ出した。貞市もそれに後れまいと急ぐと、下の姉は渠の手を捕へて自分も後れまいとした。
『こら、待て』と、あとから何ものかが追ツかけて來さうで――貞市には、前の女が驅けたのも、つまり、この心持ちであつたと思はれた。
ぽとり、ぽとりと、まだ夜つゆが垂れてゐるのが感じられる。
學校の裏手を歸る頃には、皆の足並みが少しゆるくなつてゐて、
『憎いやツちや、なア、ほんまに！』うへの姉が先づ憎々しさうに口を切つた。
『ほんまに、なア』と、下の姉も胸一杯の感情を漏らした。

貞市は姉の持つてる人形のそばへ行つてさはつて見た時、手が一面にちくりとしたので、直ぐその手を放した。然し、あれは本當にみイちやんであつたか、どうか――どうも疑はしかつた。

うちの裏門に達すると、母が出て待つてゐた。

『どうした？』

『あつた、あつた！』二人の姉は同時に二度も繰り返した。

『さうだろとおもてたのや、今夜は少しも痛みがなかつたさかい。』

『まア、うちへ這入つて』と云ふことになり、恰も長い間の暗やみの旅をして來て、久しぶりに明るみに出たやうな氣持ちで、ランプの光りを見ると、貞市は俄かに肩の張りが落ちて、四角な恐れや形ちが見えなくなつた。そしてそのわら人形も自分が想像した通りの眞ツ四角な物ではなかつた。渠には、あの黑い六ケしい漢字のやうな形ちに依つて物を判斷するうらなひ師の作つた人形なら、きツと眞ツ四角であるに相違ないとばかり豫期されたのであつたが。

して見ると、どこの誰れが作つたのであらう？　心のうちで、『…………まさか、みイちやんが――？』

『畜生！　へこたれ！』

『亭主持ちの、旦那取り！

『ほんまに、いま〳〵しい、なア！
うへの姉やトの姉やまた母が順番に斯んな惡口を云つて、而も一緒に、この疊の上に投げつけられた釘だらけの人形を見詰めてゐる間に、渠は自分も一緒に見つめながらだが、また別なおぞ毛立ちを心に感じた。』……世界はかうしたものである、どこにでも人を呪ふものがをる！　あれが確かにみイちやんであるかどうやもまだ分りやへんのに、こんな明るいとこでも、みイちやんを呪うてる！どこぞにわしをも呪うてるものがあるかも知れへん！　考へると、自分を離れたとこは皆暗い世界や！　皆が何をしてゐることか』と、そしてけふは學校で栗田を投ぐつてやつたこと、きのふは松原で大きな青大將を裂いたことなどを、それからそれへと思ひ出した。
『これはわたしが預つといて、あした、ようお父はんに白狀して、始末をして貰ひまツさ。わたしがお父はんに隱して金を貸したのがもと〳〵惡かつたのでおまツさかい。——もう、おそいさかい、あんた等はお休み』と、母は皆に云つた。それから皆が寢床へもぐり込んだが、貞市は床の中でどうも獨り心配で寢つかれなかつた。
　殺した蛇がうらなひ師の冠り物をつけて化けて來た。仲の惡い友達が撞木を以つて追ひかけて來た。うへの姉がその喰はへてゐるかみそりを落して口を明くと、般若のお面のやうであつた。
目をつぶつてゐるからいけないのだらうと、しぶ〳〵した目を無理にも明けて見れば、また、呪ひ

の女が消えて行つた時の樣子がありくと現はれた。

『……………あの時、火が消えたので行く姿が見えんやうになつたのか知らん、それとも、本性が何かのたましひで、段々ともとの無形に歸つたのか知らん？』兎に角、自分があんまりみイちやんを思つてる爲めに、ほかの物までがかの女の顏に見え、かの女の足に見えたのではないかと云ふ疑念は晴れなかつた。

誰れそれと誰れそれとは似てゐるとか、あの人とあの人とは同じ星だとか云ふやうなことが世界になければ、こんなまぎらはしいことは起るまいにと思はれた。

兎に角、生れて初めておそろしかつたその絕頂がみイちやんの姿であつたので、もう、それ以上のおそろしいことはないだらう。して見ると、矢ツ張り、みイちやんのところへ遊びに行つてやらう——姉に叱られるほどのことは何でもなくなつた。

それにしても、一番心配なのは、夜が明けて父がどう云ふ處置を取るかのことで、あの人形をみイちやんのせゐにするのは、自分には、不滿であつた。

渠はいつのまにか眠りに入つたと見える、目をさまして圍爐裏のはたへ行くと、父は出しぬけにこはい顏をして、

『貞市、これからあの煙草屋へ遊びに行たら承知ならんぞ！』

『…………』貞市は我知らず赤い顏をして見せた丈であつたが、母がもう話を濟ませた後だと分つた。
『うらなひ師なんてこれまで信じてをらなんだけれど』と、父は母に云つた、『なか〳〵馬鹿にならんものや、これだけは當つたさかい、なア。』
『ほんまだん、なア。』
『でも』と、貞市はあまへた調子で首をまげながら口をはさんだ、『あいつが人形を作つて、あいつが置いといたんや。』
『阿呆云ひなはれ!』うへの姉がまだ歸らないでゐたので、斯う叱つた、『そんなら、上にあるものを——下の土を掘れと云ふ筈がないやないか?』
『…………』渠はそれもさうだと心に思ひ直して見た。
その日、學校から歸つて來て、早速、人形はと下の姉に聽いて見ると、
『もう、納めました』とのことであつた。そしてかの女は付け加へた、『貸した金は、もう、取らんでもええことになつたさかい、その代り、あんたも二度と再びあそこへ行きなはんなよ。今度見つけたら、お父はんに十分叱つて貰ひまツせ。』
渠は如何にも世界に一番情けないやうな氣がした。然し父の嚴しい命令でもあるし、また姉の今度の思ひ切つた忠告でもあるので、煙草屋へ寄り道することは斷念した。

けれども二日たち、三日たち、四日五日となると、辛抱し切れなくなつて、――然し學校の歸りには時間を云はれるので足を向けないやうにして、――うちから遊びに出た時には、そこの店を反對のがはから通つて見ることが度かさなつた。そしてその度毎に自分の胸がどぎまぎするのをおそろしいやうな、嬉しいやうな感じで抑し隱した。

そのうち、みイちやんが店へ出てゐることがなくなつた。若し母や姉の云つてる通り呪ひ返されたのなら、可哀さうであつた。

また暫らくたつと、かの女の店が晝間でも締つてるやうになつた。人の話では、病人の爲めに商買の資本まで皆つかひ果したのだ。そしてとう〳〵夜逃げをしてしまつた。

それを聽き確かめた時、貞市の胸には『あ、今一度見て置きたかつた』と云ふ愛着心が一杯に漲つた。そして其當座は、どうしてもあの呪ひの女とみイちやんとは別物だらうにと云ふ考へが取れなかつた。

そして又、渠は年が行つてからは、みイちやんとうらなひ師とはをかしい關係であつたのだが、何か喧嘩をして男の方が燒けくそに、かの女のかかる計畫の一部だけを漏らしたのだらうと思はれた。

それにしても、そんなたわいの無いことが母の身體に影響したり、その呪ひ返しがまたみイちやんの病氣や夜逃げになつたりした理由は、いまだに渠には分らないのである。

――(大正五年六月)――

その一日

一

『もう、初夏だ！』亮作の獨り言は胃の腑の中にさうした氣ぶんの空氣をばかり吸ひ入れた。腹がへつてるのか、それとも、また、あたまが空虛なのか、どッちとも自分には分らなかつた。

氣の毒になつて山岡の家を出て、芝に床屋をしてゐるいとこの所へ厄介に來てから、もう、また一週間は空しく過ぎた。

『今仕事が見付かりかかつてるのですが、その間少し御厄介になりたい』と云ふ端書きを出した時から、他に行きどころのない悲しみと、野卑ないとこから受ける野卑な侮辱に對する隱した涙とが——その文面の裏には——潛んでゐたのだ。

何事も豫期して來たのだとは云ひながら、さてまた所を更へただけの同じ現實にぶつかつて見ると、新らしい嫌惡と後悔とが自分の胸へ込み上つて來ないではない　何ものに對しても或人々のやうな平氣を以つて受け流す餘裕と氣輕さとを持たぬ亮作は、知らず識らず——否、知り拔いてゐながら

――ますます頑固で因循な性質のからを拵らへて、その中へ這入つて、自分の不運やら不甲斐なさを自分でさいなみ罵ることとしか出來ないのである。

亮作には斯うして一日のたつのが非常におそろしかつた。一日は一日と狹いからを脊負つて狹いどぶの中へでも追ひ込まれて行くやうだ。そして自分でもいつまで續くか分らぬ生に對する不安と恐怖とが明らかにあたまの中を往來して、居さふらふ飯が少しも身にならないやうだ。

それで、けさも、朝飯を喰ふと直ぐいとこの家を飛び出したわけだ。もう、遲咲きの八重櫻も散つて、町々はなま〳〵しい若葉に蔽はれてゐる。インキ色の空からは目まぐるしい日光がみなぎつて、亞鉛屋根や煉瓦塀に反射してゐる。晚春に別れる悲哀はやがて來たるべき何ものかを迎へる喜悅のやうにも受け取れるが、何を望んでもそれに近づけぬ自分には、すべて花やかな然しうそばかりの世界だ。

渠には過去の初夏の印象が悲喜こもごもの形になつて、自分の意識にのぼつて來た。そしてその時その時の初夏を背景とした自分の姿を考へて見ることが出來たけれども、それは皆今の境遇や心持ちと大した違ひがなかつた。

『僕はどこまでも――どこまでも』と、太い吐息をつかないではゐられなかつた、『斯うした運命に生れついて來たのか知らん？いつもじめ〳〵した同じ一すぢ路を――何等の變化も進歩もなく――隣り

の塀越しの花や柳を羨みながら這つて行かねばならんのか？自分から運命の開拓もしないで？』自分にはこれが事實であつたにせよ、まだ自分でさうは決定させたくなかつた。あの耶蘇敎の云ひぶんは信じられぬにしても、若し神があつて、宇宙の萬物をその神の意志によつて造つたとすれば、少くともその一部たる自分――否、うまく行けばその全部にもなれようと思はれる自分――これが何等かの意味が無くてはならぬ。然らば、自分が持つて生れた豫定の生命を終るまでの間を、何か自分に向く仕事を與へて吳れないぢやア困る！

ところが、今まで何に當つて見ても、亮作には向きさうもない仕事ばかりだ。渠は確かに無意味に闇の中を――無茶苦茶に――歩き廻つたやうだ。そして矢鱈に物に突き當つてはね返されるばかりで、何ものも摑み得たことがない。徒らに年を取つて行くのがじれツたくなるばかりで、その結果、何事も出來ないで、いつも『斯うした運命なのか知らん――』と云ふやうな疑問に到着してしまう。

渠はそんな瞑想と共に足を進めながら、いつの間にか芝公園の、芝中學の横手なる林の中を歩いてゐた。木々の新綠は自分のあたまの上で層を成して、深く天空を覆ふてゐる。そして風が渡る度每にその葉ずゑ葉ずゑは意味ある謎でもささやき合ふか、輕い忍び音をもらして、その音が樹間にさし入る太陽の光線に白く輝くのだ。

渠はふと自分で强烈だと思はれる新綠の香をそこにかぎ付けて、全身に異樣な力を得た。この勢ひ

で行けば必らず……と身づから歩を急いで林間を交番の前へ拔け、切り通し道を後藤伯の銅像わきに出て、公園本通りの電車道を横切つて、渠はおもい鐵の門の前に立つた。

この時は、もう、ちよツと出た今の勢ひはなかつた。鐵の門は自分の力ではどうしても明きさうではない。よしんば、思ひ切つて明けて這入つたところで、また、ぶつかつただけで何ものも積極的には得られず、わづかに得るものは屈辱と後悔とであつたら、どうしよう？お前は惰け者だ、意久地なしだと云はぬばかりに取り扱はれたら？

渠の心はいぢけてゐた――今や香のぬけた陳皮であつた。

二

午前の十時近くだと思はれた。

『矢部新太郎』と書いた、もう、古ぼけた表札を鐵門のこなたから見上げて、亮作は暫らく躊躇した。それから、二三度は門の前を行つたり、來たりして見た。

やツとくぐりを這入つて行き、玄關の外の柱についた呼びリンを押すと、奧の方でリ、リ、リンと鳴つたのだが、それが、先づ、渠には自分の胸にひやりと響いた。

摺りがらすの戶を明けたのが十六七の眼の愛くろしい娘の子であつたので、それにまた胸がどぎま

ざした。

『どなたでいらツしやいますか？』聲もはき〳〵してゐる。

『…………』亮作は人の家をおとづれる時いつも經驗する淡い不安に襲はれて、暫らく口をもぐ〳〵させてから、『先生はいらツしやいますか――私は田口ですが――？』

娘のお太鼓に結んだ派手なメリンスの帶の模樣があひの襖に消えるまで、じツと見つめてゐたが、涙はその心のうちで、

『へん、先生などと云はれる仲ではなかつたのだが』とあざ笑つた。

この間の晩、友人の西川と共に音づれて來た時、お茶を出したのはあの娘か知らん――あの時のはもツと小さい娘ではなかつたか、などと思ひつづけてゐるうちに、例のうすあばたの本人が出て來た、

『や、さア、あがり給へ。』

『どうも暫らく』と、わざとにもこちらで尊敬を表するつもりの挨拶が、ちよツと勢ひづいた爲めにか、同等の調子であつた。

矢部の書齋に通されてからは、また心がめいつて――亮作は出された蒲團に半分にじり上つて、もぢもぢした。そして自分がいよ〳〵口に出すまでは、自分の持つて來た用件を少しだツて氣取られま

いと思つて、暫らくは言葉が出なかつた。

『もう、すツかり青葉になつてしまひました、な。』矢部は書齋をくの字形に取り卷いた二十坪ばかりの庭の若葉をわれから先づ眺めて、得意さうな微笑をその小鼻に見せた。

『さうです、な。』亮作も今更らしく庭の方を眺めた。いろ〳〵の樹がいろ〳〵の若葉に色取られてゐる。楓、柳、櫻、桃、その他自分には名も知れない樹がごち〳〵と植わつてる。

渠が初めてこの庭を見たのは、もう――ちよツとそらで數へて見ても――十何年か以前のことだ。その時分、矢部は小い××新聞の編輯長の職に就いてゐた。編輯長と云つても、無論、ひら記者や印刷職工と同樣だとは、謙遜の辭ではなく、實際の事實として本人が亮作等に語つたことがあつた。

矢部は編輯長としての物好きから、その新聞の和歌の選者をもしてゐた。恰もその頃は、正岡子規の歿後まもないかつたので、歌壇の或一面に於いては、根岸派が非常な勢力を占めてゐた。口ごろ子規の歌に心醉してゐた矢部は、その選をする新歌壇に於いても、根岸派の鼓吹を怠らなかつた。亮作もその頃何々『あらんゐも』と云ふやうな口調で頻りに投書をした。その緣故で歌の會がある度毎に招かれ、矢部を知り、西川を知り、友人の誰れ彼れを知り、また今でも一部の爲めには色彩と崇敬とのまとになつてる禮子さんをも知ることが出來た。

名を知つてゐても顏を知らなかつた十五六人の連中が初めてこの家に集つた時には、この書齋はま

だ建つてゐなかつた。丁度今頃の氣候で、奧の六疊二間をぶツ通した座敷から眺めたこの庭は、まだ初心の亮作には如何にも歌人の住むらしい庭のやうに見えた。そして集つた連中は自分より皆えらい一かどの歌人のやうに思はれた。『苺』と云ふのがその時の歌題で、また即詠に『早苗』と云ふのが課せられた。

亮作は庭の山吹の花の上から飛んで來た虻が座敷の障子のさんを廻つてぶん〳〵云つてるのを見詰めながら、雨後の苺ばたけの綠の葉かげに、露にうるほふたあか瑪瑙のやうな實を想像したり、五月雨に水の溢れようとする早苗田の案山子の恰好や、蛙の飛び歩く光景などをあたまの中に描いたりして、頻りに苦作に耽つた。

その頃の庭の木立と――但しどんな樹木があつたのか、はツきりとは記憶に殘つてゐないが、――今現におひ繁つてる樹木との間に、十年の歲月が流れてゐるとは、亮作にはどうしても思へて來ない。その枝ぶりのいい柳も、垣根に添ふた竹林も、山吹も、どうも昔のままのやうに考へられてならなかつた。否、うそにも斯う考へて置きたかつた。

あの禮子さんはその間に意地づくの結婚をして、その人に死なれて、今は未亡人であるが、それでもまとの禮子さんではないか？ましてこの庭には結婚もなかつた、死に別れもなかつた！

自分だツても――十年と云へば、一昔どころか、今では二昔とも云ふが、――その間には、無論、

目まぐるしい程の境遇變化や、思想の變遷やがあつた。けれども、自分はそれ等から何等の報酬も受けて來ない。相變らず自分の内部には暗愁の思ひが湧き出るばかりだ。そして十年前にこの家を尋ねた時よりも一層見すぼらしい風をして、この頃、一二度矢部の前に坐わるやうになつた自分を、實に情けなく思つた。

三

渠は急に矢部に顔を見られるのさへおもはゆいやうな氣がした。そして自分のやつて來たその用件をさへ云ひたくなかつた。この間の晩、西川に伴はれて來て、矢部のやつてる事業に使つて貰ふやうになつたのだが、まだ具體的にはきまつたのでなかつた。

『先生、もう、かきつばたが咲いたのですか?』渠はわざと驚いたやうな顔付きをして、脊を延ばし楓の下に咲いてる白い花に眼を移した。

『あれはかきつばたぢやない。一八ですよ。』矢部はおほやうに答へて、うすら笑ひをしながら、『いつも大分咲くのだが、今年どうも楓が蔭になつていけないのです。少し枝を切つてやらなくちやアいけない。』

終はりは獨り言のやうになつて、あかい日光が射してゐる楓の高い枝を見上げた。

『さうですか、一八と云ふのですか？』亮作も獨り言のやうに受けながら、何だか自分の無智を見すかされるやうないやな氣がした。

『本田君に逢ひますか？』本田とは矢張り新歌壇時代に矢部の家に出入りした亮作の友人だ。

『いえ、ちツとも逢ひません、この頃は、もう、昔の友人にも滅多に逢ひません。皆變はりましたから、な。』

『變はるのは當り前でしよう。』

『…………』成るほど、矢部自身も變はつたと亮作は氣が付いた。否、變はつたと云ふよりも、寧ろ感傷的な咏嘆が取れて、ます／＼功利の本色が出て來たのだ。

『もう、然し、子供があるんださうです、ね、本田君は？』

『え、さうですよ。』亮作は矢部の『然し』に少し共鳴を得て、皮肉な笑ひを見せながら、『金子なんて、もう、二人ですから、な。』

少數な友人どもではあるが、亮作の友人どもは、もう、大抵妻を迎へたり、人妻になつたりしてゐる。長らく肺病の爲めに苦しんでた禮子さんも、いつのまにか七つになる男の兒の母として、今は未亡人と云ふらくな身になつた。最近に妻を持つたのが西川で、久しく買ひ馴染んでゐた女の年期が明けるのを待つて、去年の暮れに、深川の場末で世帶を持つた。

どんな女でも細君と云ふ名の付くものを持つて、人間最大の務めが盡せるのなら、三十にしてまだ放浪してゐる自分の如きは何と云ふ意久地なし、不甲斐ない男であらう？然し自分は妻帶した友人の、平凡で無味で、姑息で因循で、自分等の現實の骨ばかりを犬のやうにしやぶつてる生活を思ふと、自分はいつまでも渠等の轍を踏まないで、斯う自由でありたいとは考へながら、その下からはまた渠等には知れまいと思はれるやうな悲哀が持ち上つて來て、渠等の犬のやうな生活が却つて羨ましくもなる。

自分等が物質的と卑しむ物にも實は精神的な努力がひそみ、自分等が精神的と高尙がる物にもまた單に物質的と見るもの以上の空疎があつて、つまり、物靈は二元でなく一元合致であると云ふ哲理も あることは、兼てから聽き知つてゐる。然し渠等の情態を見ると、物質以上の勝利者とは見えず、自分はまた精神以外に於ける敗北者としか思はれない。渠等と自分とには畜生と人間との差があるやうだ。さうかと云つて、人間は今の自分の如き寂しい、果敢ない、悲哀の敗北者でつづくものでもなからう。

して見ると、これはただ何にぶつかつても撃退される自分だけの運命だとも思はれた。そしてこの運命の渦卷きの中にもがいてる自分を自分で傍觀する時、亮作はいつも自分のからだの不具を呪ひ、自分の精神のひねくれを呪ひ、自分の境遇の不如意を呪ふのであつた。

渠は思ひ切つて、一度、勞働者の仲間に這入つて見たこともある。或簡單な發明品の製造工場で、出來た品物を澤山入れた箱を肩に運んで、倉へ入れたり、車に積んだりするだけのことだから、あまり力も入らず、骨も折れはしなかつたが、或時、から箱を向ふから運んで來るものとぶつかつて、荷を持つたまゝあふ向けに倒れた。そしてびツくりした爲めに心臟に故障が出來て、二週間ばかり褥に就いた。

それと云ふのも、渠は極度の近視眼だ。遺傳的に癇の强かつた渠は、三つばかりの時、自分の思ふ通りに成らないと云つてはわツと泣き入つた上げ句、いつも痙攣を起すのであつた。その結果、渠の眼球に焮衝を起して取り返しの付かぬ痼疾となつた。

小學校の三四年の頃になると、もう、黑板に書いた算術の問題なども明瞭には見えなかつた。その時分から渠は自分の運命を悲しんだ。そしてあらゆるものに對して一種の妬みと侮辱とを感じた。そして一種朦朧としてうす暗いやうな世界が自分のあたまの中にひろがつた。

小學以上の學校へ行く時、芝居を見に行く時、若しくはまた机に向つて讀書をする時、亮作は人一倍若しくは數倍の努力と疲勞とを感じた。薄い幕が絕えず渠の眼の前にかかつてゐた。そして視力の不正確から來る豫想外の過失は徒らに渠の爲めに衆人の嘲笑と憐愍とを買つた。

渠はひとりで机に向つてる時など、どんなに自分の眼疾を悲んだらう――どんなに自分の不幸を？

幾たびか天に向つて自分の机をうち叩き、「馬鹿野郎！」はすすり泣きにならうとする涙の聲であつた。賴朝の前で自分の眼を自分がえぐり拔いた景清のことや、自分の眼玉を樓門に掛けたと云ふ伍子胥のことなどを思ひ出すと、それでも、渠等と自分とを比較して見る餘裕が出來て、自分の眼球へ絕望的に持つて行かうとしたナイフの手を差しひかへたこともある。

こんな風にして渠の年と共に成長した沈鬱で、かたくなな性質、勝ち氣で、飽きツぽく、短氣な性質が、渠をいつも世の成功から遠ざからしめた。

矢部のおほやうで樂天的な樣子を見せつけられると、この時、亮作には今更らのやうに自分の心の姿が意久地なく傍觀されるのである。

四

亮作が矢部と果して有耶無耶の間に別れた。あとで考へて見ると、何の爲めに渠を訪問したのか無意味であつた。

けれども、さすがに臆病な亮作も持つて行つた用件だけは思ひ切つてよどみ〳〵云ひ出した。――「で、そんなやうなわけで――非常に困つてをりますので――先日のお話の仕事が願へれば――非常

に――結構なのです。』

『ところが、ね、君、あれはまだどうなるか分らないのだ。『矢部の無責任には呆れないではゐられなかつた。『尤も、その方へ奔走してゐる人もあるんだが、ね――ただ講演部だと云つても、基礎から固めて行かなくちやならないんだから、ね。から云ふ宗教的事業はなか〳〵六ケしいよ、君。』

なアんのこツた！先達ての話に據ると、もう、お膳立てがしてあつて、直ぐにも初められるやうなことを云つて置きながら！亮作は矢部のこの言葉にはむツとした。が、怒ることもできなかつた。

『私が喰べられる範圍に於いてでいいのです』とまで、報酬のことにも立ち入つて、この間の晩は話があつたのだ。

『それも程度問題だが、兎に角、考へて置きましよう』と、矢部はその時答へた。それを思ひ出すと、渠は宗教的と云ふいい看板につり込んで、こちらを初めから好意づくで働かせようとするつもりであつたのか知らん？それが暗に相違したので、けふのやうな曖昧なことを云つて逃げたのぢやアあるまいか？それとも、薄弱な根據のもとにある一種の事業熱に驅られて、安受け合ひをしたが、それが思ふやうに行かないので、こんな雲を掴むやうなことを云つたのだらうか？亮作は兎も角矢部の意志を確めようとして、わざと、

『先生、さうすると、もう、あれはおやめになつたのですか？』

『いや、いづれはやらなくちやならないのだが――』矢部は少し間を置いてから、相變らず樂天的に、
『實は、まだ具體的に規則書が出來てゐないので、ね。然し信仰と努力とできツと出來る。僕は初めから小さなところなどでやりたくはないのだから、ね。金持ちから大いに寄附をさせて、先づ第一に寄宿舍を建てなくちやならない。それに一般青年の高潔な娯樂場として、青年會館を建てる。なかなかする事が澤山あるのだ。今やつてる努力協會もつまりそれに對する機關事業なのです。』

亮作にはいよ／＼矢部の云ふことが分らなくなつた。霞を隔てて日輪を見るやうにはおぼろげにそれと渠の心持ちが讀めないでもなかつたが、それが果して――さう呑氣さうに――實行できることだらうか？

亮作には矢部が耶蘇教信者であることは知れてゐた。また努力主義と云ふ地方青年相手の（實は、矢部のドル箱になつてる古本依託販賣のカタログのやうな）貧弱な雜誌を出してゐることは知れてゐた。亮作が現に手傳はうと思ツて來たのは、この雜誌の編輯や記事をであつた。ところが、矢部はその話を、どうも、ただ茫漠たる傳道的事業の方へ持つて行くのであつた。

『努力主義の方の仕事はないのですか、先生？』

『いや、それがです、片一方の事業が盛んになれば、勢ひ、雜誌の方の仕事も多くなるのです。なに、やつて出來ないことはありませんよ。キリストや日蓮を見給へ、渠等はあらゆる迫害や辛苦に耐へて

渠等自身の事業を遂行したぢやないか？』

亮作はいよ〳〵驚き呆れた。本氣で物を云つてるのか、わざと惚けてゐるのか？それに對していらいらしてしまつたので、もう、口を聽くまいとした。

たとへ矢部がその云ふところの傳道的事業に實際にたづさはるとしても、渠にはそれに必要なだけの熱心な信仰と自信とがあり得ようか――大道に立つて辻說法をするだけの？泰然として十字架にかかるだけの？

亮作の見るところでは、矢部はごく冷靜な、打算的な人である。うす笑ひの中に利害の觀念ばかりを包んで、批評的話柄には富んでゐるが、情熱的な、犧牲的な精神の充實してゐる人とは思はれない。若し渠にして假りそめにも宗敎上の信仰に生きようとする熱が出たのだとすれば、それは三年前に細君を失つた悲愁がたま〳〵渠の日頃の事業心に結托した臨時の現象であらう。斯う結論するのが、最も妥當でないかと思はれた。

若し信仰上のことにもパンが伴ふと云ふのなら、亮作の氣まぐれは矢部の尻馬に乘つて、まだ餘裕のある野次馬どもが社會主義の演說をしてまはつた時代の如く、矢部のいつかやり出すと云ふ事業にたづさはり、演說の一つや二つはやつてもおもしろかつたらう。が、亮作には差し當り、無條件のパンが必要であつた。何か知ら與へられたままの勞働でもいいから、自由な腹を拵らへて若葉の香を味

はひたいのである。

それでも、渠は矢部の家を辭する時、

『どうかそれが具體的になつたら、何ぶん一つお願ひ申します』と、腹にもないことを――萬一實現される時があらばと賴みを殘して――口に出した。そしてそれだけ現在の空腹を增した氣がした。

五

然し一方には矢部の心のうちを見拔いてやつたやうな愉快も伴ふままに、元氣をふり起して芝公園を赤羽根橋に出て、橋を渡らないで電車を横切り、川添ひに麻布を十番に出で、やがて鳥居坂をのぼりつつあつた。日光はてかてかと片側の煉瓦塀に反射し、白く往來にぎらぎらと光つた。

渠は喘ぐやうにして坂を上りながら、ハンケチで幾たびか額の汗をふいた。帽子の中の皮はぐツしより濡れて、かぶるには氣持ちが惡かつた。

太陽はいつかあたまの上に來てゐたが、渠は空腹を感じても、別に晝飯にありつく當てもなかつた。ふところの小使ひ錢は分つてるので、實に心細かつた。

『なアに、晝飯ぐらゐ拔きにしたツて』と思ふ下から、また少しでも小使ひのある中は喰べずにはゐられないやうな氣がした。

渠は坂をのぼり詰めると、ふと立ちどまつた。そして右の手を左りの脇の下へ當てて見ると、心臓は早鐘のやうに打つてゐた。それがまだ平調にならぬうちに、肋骨のあたりに何となく痛みをおぼえるのである。

思ひ出すと、この冬、自分は肋膜をわづらつた。二日と云ふもの、朝ゆふ、しつこい熱に襲はれて苦しんだ。その頃、山岡の細君が盲腸炎を病んで病院に這入つてたので、毎日、自分は熱を押して見舞ひに行つた。そしてその歸りに富士見町の醫者へまわつて自分の注射をして貰つた。

山岡に無給で手傳つてた亮作は、それでも、自分で何とか無理算段をして一週間ばかり醫者に通つた。一日三十錢では高い方でもなかつたらうが、それが針二十本にもなつた後は、つづいて行くことが出來なかつた。患部の痛みは餘ほど取れてゐたが、熱の爲めに夜中、あたまの破れさうな頭痛のするのが非常におそろしかつた。その時、ふと思ひ出したのは禮子さんが食養療法で非常に効果を擧げてることをだ。

そしてあらましの容態を書いた末に、その療法や手當てのことに就いて詳しい質問の手紙をかの女に送つた。考へてもぞッとするほど感傷的な手紙であつた。

禮子さんからは折り返し長い／＼返事が來た。そしてこちらを勵ますやうな文句の末に、

『私も寢てないと、行つて見て上げてもいいのですけれど、ね』とあつた。

それがほんとの心情なら、それだけででも自分の病氣は直るやうに思はれた。誰れもたよりに思ふものもない弱い自分には、女の斯うした手紙の端々にも少からぬ感動があつた。

その後、亮作は禮子さんから敎へられた手當てを金科玉條として、自分の患部に芋ぐすりを塗つた。あたまの地肌には、胡麻油と生薑の汁とのまぜたものや、林檎の汁などを摺り込んだ。熱を取る爲めには大根おろしや椎茸の煎じたのも飲んだ。氣のせいでもあつたらうが、その晩から、破れるやうた頭痛も左ほどに感じなかつた。患部の痛みもだん〳〵忘れて行き、熱き潮の引くやうに去つた。

その後全く健康狀態に復したことは復したが、めツきり精力は消耗した。少し無理をしたり、遠みちでもしたりすると、大變な疲勞をおぼえるし、どうかすると、また、肋骨のあたりに痛みを感じ初めるのである。與へられた勞働と云つても、近視眼では出來ぬこととこの肋骨にさわることとは斷然引き受けまいと決心した。

自分をがらんどうのガラス玉と庇ひながら、右のたなごころでそツと脇の下を押さへてゐると、肋骨の痛みもやがて消えた。渠は俄かに禮子さんに逢ひたくなつた。あの美しい、なつかしい瞳――いつも微笑を湛へて――。

亮作には百の說法よりもただ一人のあたたかい情とまことの聲とに接したかつた。誰れでもいいから、自分のからだと精神とを取りまとめて吳れるやうな人が欲しかつた。

六

電車を清水谷町で下りると、そこから禮子さんの家は直ぐであつた。一ケ月ばかり前に雜司ケ谷の家を引き拂つて、かの女は一人で植物園の森が見おろされるやうな二階の一室を借りて住んだ。

『わたし、生れて初めて一人で住んで見るのですが、ね、長く續くか知ら?』を思ひ出すと、亮作はその時むしろあんな病弱なかの女がよく自炊をしてゐられるとあやぶまれた。そして〇〇〇女學校の教師として羽振りのいい姉が、あんなに妹思ひでありながら、よくもかの女を一人で放して置くと。途々、亮作は不安に襲はれて、若しや留守では――と思つたが、それは無駄であつた。

『あら、田口さん、よくいらしつたの、ね。』

例の美しい瞳は、亮作を見てにツこりした。何か原稿を書いてゐたのらしい。渠が部屋へ這入ると、かの女はデスクの上の原稿紙へペンを置き、かけてた椅子を離れた。

『御勉强ですか?』

『いえ、ね、この間から賴まれてた筆記がありますの。ところが、なまけてて今までちツとも書かなかつたの。それをけふからぽつ〱初めましたのですよ。』

亮作は、かの女が立つたまゝこちらを見つめて、少しもいや味のない微笑をして、物を云つてるその顔つきに見入りながら、自分も微笑をしてゐた。

『まア坐わりましようよ。』かの女は亮作に坐蒲團をすゝめ、自分も少し離れて坐わりながら。『この間、遲かつて?』

『え、また戸締りを喰つてしまつたのです。』

『惡かつた、わ、ね。』

『なアに。それよりも、あの日、ひる間からあなたのお墓詣りの出さきをお邪魔してすみませんでした。』

『………』かの女はそれには答へなかつた。『きのふ、ね、お墓詣りの歸りに、川田さんのところで、千代子さんにお逢ひしましたのですよ。さうして、歸りにまた、とう〳〵、わたしのところへ引ッ張つて來て、ね、それからまた夜の十時まで話し込んでしまつたの。』

『それは愉快でしたら――』

「愉快ッて――わたし、この頃は、わざとにも子供のやうになつてるのよ、くよ〳〵したツて詰らないから。』かの女は大理石でも刻んだやうな小鼻へにツと笑ひを見せて、それを暫らく默つてつづけた。その間亮作も默つてゐた。『まア、お茶を入れましよう、ね。わたし、獨りでゐると、一日だツて

入れたことがないの、無性、ね。』

かの女は初めて横に下を向いて火鉢の消えかかつた火をほじくり出した。ひたへは多少出てゐるが、寧ろ利口なしるしのやうで、鼻すぢが通つて、色の白く引き締つた横がほもよかつた。

『お茶よりも先づ僕は水を一杯欲しい。』亮作は心易く自分で立つて、椽がはの水のあるところへ行かうとした。

『そんなら、コツプ上げます、わ。』禮子も立ちあがつて、茶簞笥の引き出しからがらすのを出して來て、『これはよく洗つてあるのですから、大丈夫よ。』

『そんな御心配は――』亮作は無雜作にそれを受け取つたが、かの女がかうした言葉の端にまでも自分の病氣に關する不注意などのないことを示めして、人に嫌惡の情を起させまいとする心根を、限りなくいぢらしかつた。

七

『田口さん、もう、何時でしよう、ね？』

『さうです、ね、もう一時になるでしようか？』

亮作はこの時もとの火鉢のところへ坐わつてゐた。
『あなた』と、火を吹いてた禮子は突然のやうにあたまを上げて、『ご飯はまだ？――わたしもまだなの。あがらない――一緒に？』
『僕は、もう、たべて來たのです。』こんならうそをついてまでも、亮作はかの女のやさしく小首をかしげた姿をやアわり受けてゐようとした。この間から時々來てはその度毎に御馳走になつたのが氣の毒でもあつた。
『遠慮しないでもいい、わ。』かの女は亮作のにえ切れなかつた返事を見て取つたらしい。『別に御馳走なんてありやアしないんですよ。ですけれど、玄米のご飯ぢやアしやうがない、わ、ね。』
『僕、ほんとにいいのですよ。』
『でも、田口さん――』少し笑ひながら間を置いて、遠慮がちに、『何か買つて來て下さらない――いつもお氣の毒ですけれど？』
『え、買つて來るのは何でも買つて來てあげますが――』これまでにも度々かの女の使ひはしてやつた。
然し渠はどこまでも自分をかの女の前に上品に取り扱はうとしたのだが、先刻から感じてゐながらも、かの女の前では多少まぎれてゐた空腹が、ご飯と聽いて、俄かに承知しなくなつたのか、ひそか

にぐら〱と中から催促するやうな氣がして、目の落ち込むで行くかと思はれるほど、亮作自身の言葉や顏つきにたわいのない空虛が出來たやうだ。それをまぎらせようとすればする程、一層われながら顏がとぼけて行くやうだ。

渠は異性の感情から超越して眞の美と愛の極致とに禮子さんを置いて置きたかつた。そして純な聖教徒のやうな心でその前にひれ伏してゐたかつた。かの女の玉を刻んだやうな姿――盛り溢れるやうな純清な思想――崇高な花のやうな美とあしたの露のやうな淸さとを有する心情――それ等が少しも僞はらないで流露するその歌――つまり、かの女に對する殆ど絕對の如き戀か尊敬かを渠が懷くに至つたのは、きのふけふのことではなく、實に、かの女を知つたそも〱からで――。かの女が同病相憐れんで、肺病の所天を持つてからも變はらなかつた。また、かの女がその所天を數年間看護して、とう〱それに死に別れた今日でも變つてゐない。そして淸い美くしい十年の交際はそこに何等の汚點もとどめて來なかつた。

かの女には、然し、そこまで分つてるかどうか、亮作は確めようとする勇氣がなかつた。自分はかの女に比べてあまりに貧弱で、朝日に對する朝露でしか無かつた。

『田口さん、何にしましよう、ね。あなたのすきな物をおツしやい。』

拒み難い命令をでも受けたやうになつて、うそを云つた申しわけらしく禮子さんの顏をじツと見つ、

めると、今度は腹の蟲が相手にも聽えるほどの音を立ててぐうツと云つた。

『僕は何でもいいのですよ?、買つて來るのなら――また赤飯ならあなたにもあがれるでしよう。』

『それなら、嬉しい、わ。』食養家のかの女には最も賞美される食物であるのは分つてゐた。『でも、またあんな駄汁粉屋なんかへ行くのは、あなた、おいやぢやない?』

『僕はかまひません。』『何だか確かな力が出て來たやうだ。』『僕等はいつも平氣で這入つてるのですから。』

『お氣の毒、ね』と、多少いたづらじみた微笑を加へながら、『そんなら、ついでに、あなたの好きなおかしわも、ね、少し――』

亮作は自分のくちやくちやになつてる袴をぬいで、禮子さんから受け取つたメリンスの燃えるやうに赤い風呂敷を片手に摑んだ。

八

『わたし、この頃、ほんとに生きたいと思ひますの。』

かの女の食事がはりの物が濟んだ時の、かの女の出しぬけな言葉であつた。亮作はいくつ目かのかしわ餅を頰張つたところなので、暫らく物が云へず、じツとかの女の奇麗に輝く眼の顏を見つめてゐ

たが　無理に口の中の物を呑み込んでから、
『と云ふのは――?』
『でも』と、かの女はこちらの無作法を氣にかけてゐなかつたらしく、『この美くしい初夏の日光を見ると、つくづくさう思ふのよ。この頃はどうしたのか、死にたいなんて感じはちツとも起らないの。たまにはさうした心持ちも起つて見ればいいと思ふのですけれど、ね――つまり、執着が多くなつたのだ、わ、ね。それに、また、一ケ月前から初めた玄米がわたしのからだに大變よかつたの。』
　道理でこの頃禮子さんの健康狀態が長く續くやうである。いつもなら、一ケ月にきツと二三度は床に就いたのが、この一月と云ふものは、亡くなつた人の追悼會に自分から出て奔走したり、いろ／＼な意味で恩人である〇〇氏の兒が死んだ時にもよく働いたり、また姉さんの用で一週間ばかり田舍へ行つて來たり、いつもの禮子さんなら隨分からだの無理をしたのだが、それが別に疲勞や病臥の樣子もなく、不思議な程であつた。
『ほんとに玄米のせいでしようか?兎に角、大變この頃はお達者になられたやうですよ。』
『え、あんな無理を度々しても、ね。』かの女は如何にも嬉しさうに、『わたしは、きツと、なほつて見るつもりです、わ。』
『そりやア、きツとなほります、さ。あなたがなほらうとなさりやア、ね。さうなりやア、もう、一

つの信仰ですから。』何となく自分の信用する牧師の說教をでも聽いてる氣になつて、自分ながら自分の言葉にしみじみした感じをおぼえた。同時に、かの矢部の口調をでも眞似たやうに自分ながら思へた。

『あなた、赤飯がまだ殘つてます、わ。おあがんなさらない？』

『………』たべたいのはやま〳〵であつたが、自分には初めからの行きがかり上、それには手をつけないで、かしわ餠の方ばかりを澤山喰つた。その勸めにはどツちとも答へをしなかつた。北の窓の半ば明いた障子の間から外を眺めてゐた。

植物園の森の新綠は直ぐ眼の前に在つた。太陽の光線はそれにいろ〳〵の縞模樣を見せて、濃く淡く陰影を作つてゐる。谷あひには御殿町や氷川町一體の貧民窟の亞鉛家屋が、たとへば、潤の中へ追ひ込まれたいるかの群のやうに、並んでゐる。その上や瓦屋根の上やに反射する光りの中に、きたない襦袢や猿股が白く乾されて――それでも、天空は磨き上げた碧玉のやうに美くしい。そして生の緊張した賴母しさを傳へて來た。

『ああ、僕もほんとに生きたい、そしてほんとに死にたい。』斯う亮作の胸は躍つた。渠には、實際、この外界の現象に對して生きていいやうにも又死んでいいやうにも思はれるのだ。かかるてか〳〵光る日光の裏にも常に暗い夜が潛んでるではないか？哲學者のうちには、光りと闇とを區別して考へる

のはうそだと云ふものがある。また、闇は光りに無關係だとやうに考へさせるものもある。けれども、今の渠の狀態には、無論、消極的には過ぎなからうが、死ぬ方が幸福でなからうかと云ふ觀念が離れなかつた。少くとも、生きても死んでも本氣でありたかつた――殊に、禮子さんのやうな人の前にゐて。

『禮子さん、僕に自殺できるでしようか？』

『…………』かの女はちよツと驚いた目つきをしてこちらの眞面目腐つた顏を見たが、何を云つてるかと云ふやうな諍かた笑みを見せて、

『そりやア出來ないこともないでしようよ。』

『僕なんて死んだ方がましだとこの頃頻りに思つてくるのです。その癖、また滅茶苦茶に生きたいやうな――』

『おツしやい、そんた頓狂なことを――』かの女は叱るやうに云つたが、暫らく無言になつてから、全く別な沈んだ調子で、『それは誰れしもそんな氣持ちがする時があるのですよ。そりやアわたしなどもこの病氣になつてから、どんなに世間から侮辱を受けたか知れません、わ。世間は皆わたしに嫌惡と輕蔑とを以つて向つてるのでしよう。現に、ね、今でも、或人から「生きてるだけが圖々しい」と云はれた程ですもの。でも、そんなことを云はれると云はれるほど、わたしにだツても、どこまでも生き

てやりたいと云ふ反抗心が出ます、わ。』

九

この間の晩、禮子さんが仲のいい千代子さんと沈んだ調子でひそ〳〵話してゐたのは、どうもこの『生きてるだけが圖々しい』と云ふ問題であつたらしい。亮作もその時それをちよツと小耳に挾んだので、何だか氣になつて、一緒に途中まで歸りながら、千代子さんに聞いて見ようとしたが、『そんなこと、わたしからお話することできない、わ。そのうち自然とわかりますから』と云はれた。

『ね、禮子さん、生きてるだけ圖々しいツて誰れが云つたのです？あの晩、歸りに、千代子さんが「禮子さんはあんなに亢奮してらツしやつて、今晩、お休みになれるか知ら」と云ふもんですから、僕は氣になつてたのです。』

『ほ、ほ、ほ、何でもないことなの。わたしの弟がそんなことを云つたのが、千代子さんの耳に這入つたのでしよう――』

『弟さんがまたどうしてそんなことを？』

『そりやア、やんちや坊主ですから、時々そんなことを云つて見るのです、わ。その癖、あれはわた

しの事を思つて吳れて――少し熱でもあるなんて云つてやると、そりやア目の色を變へて飛んで來て、ね、「ねえやも婆アやも何をしてるんだ。早く氷を買つて來い」なんておこり散らし、自分で手當てをして吳れて、自分で滿足すると、さツさと歸つてしまうの。』

かの女の弟は帝大の醫科へ通つてゐる。

『そりやア、變な弟でして、ね、「僕は姉さんが大好きだけれど、病氣がいやなんだ」ッて、わたしがあれの部屋へでも這入つて行くと、口もきかないでぷイと出て行つてしまひます、わ。わたしはまたその弟が可愛くツてしやうがないの。ですけれど、また、さうした態度が憎らしくツて――それ、いつかあなたにお話ししましたあの人によく似てて、ね。』

かの女があこがれるやうな目つきになつて語るその『あの人』のことは、亮作もつい この間聽いた。かの女の初戀の人で、また最後の戀人と云ふやうな者だ。洋行して歸ると、間もなく醫學博士の稱號を得て、今は××病院の院長で、赤門出の秀才であつた。

まだ亮作などを知らない時のこと、――何でも新歌壇の集會があり出す二三年前のこと、――かの女は初めて喀血して、自分の鄕里に近い鹽原溫泉に病ひを養つてた。その隣室に醫科大學の學生が三四人勉强に來てゐた。碌な醫者とてもない山間僻地のことだから、からだに痛手のあるかの女はその學生等をどんなにか心賴みに思つたのだらう?學生等は學生等で、またまだうら若い而も美くしい處

女に對して、好奇心と同情とを以つて毎日かはるがはるに見舞つたらしい。

時も丁度五月の末、したたるやうな新綠は全山を覆ふて、ほととぎすの聲が絶えず聽えてゐたさうだ。みづ〳〵しい自然がお互ひの青春奔放の血を一層にそそり湧かせたことは、今から想像してもあまりがあらう。

禮子さんはやがてそのうちの一人を選んで、敬虔な感謝の手紙に切ない戀をも洩らした。すると、その男からも熱烈な返事が來たのであつた。そして二人は暫らく手紙の上で互ひの戀を取りかはしてゐた。

禮子さんはだん〳〵鹽原にはゐられないやうな切なさをおぼえて、東京の或病院へ這入つた。男の方はまたいよ〳〵やがて大學を卒業するばかりとなつた。然し亮作が二人の成り行きを推察したところでは、男は禮子さんの病氣を、――いよ〳〵結婚するとなると――傳染の恐れがあるから、おそろしくなつたのだ。かの女の容貌やその親の身ぶんから云へば、人の金で今日病院を建てさせて、その院長に成りすましてゐると云ふ男には、さう申しぶんがあるべきではなかつたらう。禮子さんが今日病氣の爲めに多少のひがみ根性があつたり、同病相憐れむの意地づくを發揮した時があつたりするのは、尤ものことだ。

いのちには少しも別條のない近眼の爲めにさへ、亮作の如き男はどれだけ世間をひがんで見るやう

になつたか？まして人間のうちで最も弱い女のことではないか？
かの卒業まぎわになつた男が餘ほど冷靜になつてからは、かの女から出す三度の手紙に對して僅かに一度しか返事が來なくなつた。そして僅かに來るその一度も至極簡單に『おからだを大切にして下さい。養生次第でなほりますから』などであつた。
愛憎の念に强い禮子さんとしては、先方の態度が憎くなればなるほど、自分の肉をちぎられるほどの戀しさがいや增しに增した。逃げ腰の男は危險が刻々に身に迫るのを覺えて、大學を出ると直ぐ、留學にかこつけて獨逸へ行つた。
『あの時のことはまだ忘れませんよ。出發の日が分つてましたので、橫濱まで行つて何とかひと言でも皮肉を云つてやらうとしたけれど、どうしてもわたしの入院してた院長が外出を許して吳れないのでーーもう、わたしは倒れて死んでもいいと思ひましたのに、看護婦がそばで離さなかつたのですもの。』
何でもひと晩中泣き明したその結果、翌朝、熱が四十一度にのぼつて、院長を驚かしたのが、まだしも江戶のかたきを長崎の腹いせであつたさうだ。
禮子さんはこの話を亮作にした時には、隨分亢奮してゐた。冷靜のやうで亢奮し易い、皮肉でゐて溫情に富んだ、理智的でありながら感情家の禮子さんは、孔雀のやうな誇りと鳩のやうな優しみとを

持つてゐる。

『なに、ね、わたしが恥ぢをかかせられたのですから、こんなお話も出來ますの。』

それまでをくびにも出したことの無い話を、すれからしの年増同樣に、平氣でするやうになつたのも、一たび人妻たる經驗を經て來た爲めだらうと思ふと、亮作はちよツとかの女をいやになつた。が、かの女の缺點は病氣ばかりだ。病氣の爲めに比較的に自由に獨身でとほせた時の禮子さんには、殆ど男の友人どもばかりであつた。渠等の間に在つて、かの女は實に一種の女王であつた。かの女を八方から取り卷いた澤山の男子のうちで、一人としてかの女に對して戀を思はなかつたものがあるであらうか？亮作の知つてる範圍に於いても、それを露骨に發表して失戀した男は五六人もある——かの矢部もその一人であつたので、今では、禮子さんのことはちツとも口に出さない。

『わたしは誰れにでも好意を持つて、神聖につき合ひたいの。』禮子さんが一方で斯う云つてる他の一方には、

『八方美人』、『妖婦』など云ふ惡口や怨言が聽えた。

かの女はとう〳〵結婚か自殺かと云ふ苦しいはめに落ち入つて、そんならいツそのことにと決心したのは今年で七ケ年の同棲で死に別れたかの青年詩人にであつた。

『決してわたしから戀したわけではないのですよ。でも、夫婦になつて見ますと、奇體に愛情が起つ

て來るものでして、ね。』

こんなのろ氣をかの女夫婦の前で亮作は眞面目に聽かせられたこともあつた。

一〇

自分ばかりが先き立つのはいやだと云ひながら、十分の未練を殘して永眠した所天よりも、殘酷に棄てて逃げた男の方が、今となつては、禮子さんにはもツと思ひ出されるのであらう。矢ツ張り、初戀は一番忘れられないものか？それとも、自分を棄てた男でも、いまだに生きてる方が切實に感じられるのか？

して見ると、生きられるだけ生きてゐる方が禮子さんにだツてもそれだけ接近してゐられるわけだ。と考へながら、亮作はゆふがたになつて、かの女の勸めた食事を受けた。そしてかの女が晝めしの時に殘した赤飯をも――もう、かの女は喰べぬと云ふので――自分の腹に入れた。少しは氣味が惡かつたが、かの女がそれを達てすすめるのを喰べないと、かの女の晝間からの機嫌を損じはしないかと思つたからである。

その晩も、十時近くまで話し込んで、やツとそこを出た。小石川から芝まで歩いて行かねばならなかつた。がま口の中から電車賃を片道買ふにしても、まだ一錢足らなかつた。渠は話をしてゐる間も

それが氣になつたので、今夜ばかりは早く歸らうと思つてたのに、かの女の愛相に引かされて、ついつい長ツ尻をした。その癖、かの女に電車賃の不足を貸してくれとは云ふ勇氣がなかつた。

渠は外に出ると、俄かに非常な寂しさに亢奮してゐた。あんな奴などと、たとへかの矢部にはあざ笑はれたとしても、もう二度と再び行くつもりはないから、かまはない。が、あの利口な禮子さんが、こちらのいつまでも長ツ尻をするのを見て、――おもてではよくもて爲して呉れるが、――矢ツ張り、こちらをあり振れた野心男と見て、人の亭主の明き巣ねらひとでも思つてはしなからうか？

そらには、十二三日頃の月がぼツとかさを着て現はれ、近く雨のあることを知らしてゐる。何となく落ち付いた、しんみりと物の考へられさうな、なつかしい夜である。どこからとなく、若葉の匂ひもかがれて、じツと耳を澄ませば、土の下を流れる泉の音が聽えさうな靜かさだ。

初めには、芝までの道程を考へてうんざりし、どこかそこいらの道ばたにでも倒れてやらうかとまで棄て鉢になつたが、街へ出るとまだ割り合ひに賑やかなので、勇氣も出たのである。

亢奮した頰のあたりを空氣がひや／＼と撫でる。だん／＼と氣持ちよく歩かれた。

すた／＼歩きながら、自分の横や後ろからさす光りが投げる自分のうすい二つ三つの影法師を見ると、それがもツと、もツと澤山に分れて行つた時が自分の死ではなからうかと思はれた。影法師は絕えず自分に伴つてるのだが、それもいつかは一度この地上から消える時があるのだ。

然しそれが消えたからとて、依然として笑ひ、興じ、飮み、喰ひしてゐるものはあるだらう。默つて死んで行く者の身が如何にも馬鹿〳〵しい。

『僕はどうしても生きて働く。死んでたまるものか？少くとも、まだ禮子さんよりは健康だ！』こんな奮發も、然し、ただ一瞬間のことであつた。亮作の眼の前にはこれから歸つて行くいとこの家のありさまがあり〳〵と見える。

むさ苦しい四疊半、垢でうすぎたなくなつた唐草模樣の煎餅蒲團、いとこの侮蔑の顏、不潔な床場——それが自分の身を休める世界かと思ふと、矢部や禮子さんの前で高尚な尤もらしいことを云つた自分を恥かしくなつた。

そしてけふ一日にしたことや云つたことがすべて餘計なことであつたやうな感じがする。

全體、自分はこんなことで——

『あツ！』思はず出た叫びは、外へは低かつたが、自分のどん底から天邊まで響き渡つた。穿き物の鼻緒が切れて、横ざまに倒れ、いやと云ふほど左りの胴ツぱらを地上にうち付けた。

『ふ、ふん』と笑つて、通り過ぎた男があつた。その男をうす暗がりの中からにらみ付けて見送りながら、そツと自分のつまづいたあとを見ると、道ばたに横たへた材木のはじであつた。自分は道の眞ン中を歩いてるつもりでそんなところへ片寄つてたのだ。

起きあがつて、ぬげた方の下駄を拾ふ時、くら〳〵と目まいを感じた。で、かたわらの材木に腰かけ、じツと暫らく目をつぶつてゐたが、脇ばらがしく〳〵痛み出したので、そこへ手を當てると、自分の心臓の激しい皷動がその手に傳はつた。

——(大正五年七月)——

二頭の馬

稻刈りと同時に、この山深い里では、夏に眞ッ白な花を咲いてた山ゆりや、じねんじよと云ふ山の芋やを掘る時節となつた。少し樹深いところへ行くと、木の子の盛りだ。根もとから直ぐいくつにも分れて、その一つびとつに薄墨色のシメジのやうな笠を着てゐる針千本――根は一つにあがつて白く、それからいてふの葉のやうに澤山分れて、その各々のさきのきざ〳〵が黑いマイタケ――ただ一本づつ出て、その開らいた笠がうす黃色のシメジ――珊瑚モタセはほんとうにその根が珊瑚のやうな形で赤く、ネヅミモタセはまたそれに似てゐるが、ねずみ色で、さきがすべて鼠の手のやうになつてゐる。

それ等になほあり振れた木の子類を取り加へて、餘ほどきつい鹽漬けにして置くと、このあたりでは、冬ぢうから春へかけての食物になるのである。つまり、そんな食物をつみ取りに這入つた村人の一人なる作藏が、お竹のゐどころを發見して、手がらがほに知らせて來たのであつた。

土藏の白壁に、屋敷を圍む杉の森の繁みを漏れる日光がうすあツたかく當つてゐた。主人の儀作

は、立ち並ぶ土藏の三つ目の後ろにある大きな柴ニヨのそばに立つて、村役場の會計かたに柴を賣り渡す協定をしてゐたところだ。

手織り縞の筒袖を着て、紺の手ツ甲、紺のもも引きをつけ、手ぬぐひ被り、わらじがけの女房お富が——今、稻たばを田のもから稻小屋に運び込みつつあると思へたのに、——少しあわただしさうに、そして又多少燒き餅じみた心を起したのか、顏に日やけではない赤みを帶びて、そそくさやつて來て、投げ出すやうに、

『お前さま、お竹がぼろ〱の胴服を着て、峠の奧にめツかつたと云ふが、のう。』

『とうげ——誰れがめツけた?』儀作は出しぬけのことに驚いたが、何げないやうに見せて自分の妻をふり向いた。そして自分では自分自身の隱れがをでも見付けられた氣がした。少し寒くなるからと云つて、古綿入れを一枚にいつもの通りの味噌や米を添へて與へたのも、もう、何十日か以前のことになつたが、まさか、それほどに破れ綻びてゐないのは、每晩會つてよく分つてることだ。

『旦那さまに逢ふ瀨がござんすさかい、のう、おいらは山もやみ夜もおツかならないが、な』と云つて、お竹は笑つたこともある。

『おやぢの旦那さま』と、作藏は——お富のあとについて來た者だが——おそる〱手をもみながら、村の庄屋のあと取り旦那なるこちらに答へた、『おいらがめツけたんだが、のう、ぼろ〱の胴服

を着て――』

『うん、分つた！』發見された以上は、この後どうしたらいいかと云ふことばかりが直ぐ儀作自身のあたまにのぼつた。お竹の姉の姙娠を處置しようとした時には、當の目的は達したがその他のことが失敗になつて。からだを痛めさせたので、『肺病』の名義をつけてその家に返し、姉の藥り代並びにそのめくらの母親の養育料として毎月一定の金を仕送り、その代りにまた妹のお竹を女中に入れた。その時は丁度十七になつたのであつたが、感心にも感のいい子で、

『おいらをまた肺病にしたら困りやんすが、のう』と云つた。

『誰れに聽いた？』その實際を姉から聽き知つたのなら、他へ漏らされでもすると、昔の庄屋で、今の郡會議員たる體面にも關すると思つた。が、そこまでは知つてたのでもなく、ただ深く思はれたら姉のやうな病氣になるからと云ふ意味であつた。

　そのうち、村の習慣通り、お竹のところへ若い衆どもが忍び込まうとした。それを儀作は三晩つづけて追ひ返した。すると、その四晩目の明け方になつて、かぶき門の前にどこかの肥え桶を持つて來て引ツくり返してあつたり、長い青へびを殺して横たへてあつたりしたのが發見された。

『おやぢの屋敷へ――けしからんぢやないか』と、儀作は獨りで怒つたが、女房のお富は渠が若い衆の邪魔をするのが悪いと諫めた。けれども、儀作は聽かなかつた。お富がその亭主を疑ひはじめたのは

それからであつた。
或晩、お富は實際の場を突きとめ、兩人を前にすゑて、
『お前さまもお前さまだが、お竹もお竹だ』と口説き立てた。
『なんだ、この婆々ア！』いきなり、儀作は自分よりも二つ年うへの女房をなぐり付けた。渠は今年取つて三十七歳の男だ。『三里も四里も出て行つて、栃尾で藝者を買うよりどツちが安い？』
下男下女と一緒になつて田作りをやる女房は、金のことに云ひ及ばれて涙を忍んだが、それをぢろりと見たお竹は却つて泣き伏してしまつた。そしてその翌日から、主人以外のもの等には姿を見せなかつた。
最も驚いたのはお富で、自分の爲めに若しやのことがあつてはと、人を諸方に遣はしたり、やま川を探がさせたり、井戸を浚はせて見たりした。さう云ふ世間の評判も、儀作から云へば、幸ひにも、殆ど忘れられたけふこの頃になつて、突然、たツた一人の木の子取りから再び世間に持ち出されねばならぬのか――
渠は役場の人と柴の値段を協定しながらも、どうして自分より二十歳も若いあの女ばかりが可愛くツて溜らないのか分らなかつた。自分が毎晩うちにゐないのは、總の若い衆や女房持ち等と同樣に、娘や人の女をほつき歩いてるのだと、お富には思はせて置いた。

『お前さま、ちよツこら行つてござらツしやい――おやげないことでござんすが、のう』と、お富はせつくやうに云つた。

女房のあまり百姓臭いのとは打ツて變はつて、髪を七分三分にわけ、うは髯を延ばし、だてに金ぶちの眼がねをかけた主人として、渠は栃尾つむぎの不斷着を尻ツぱしよると、長いめりやすの股引に包まれた足を馬屋に運んで、黒毛の馬にたツた一つある西洋鞍をつけ、それにひらりと飛び乘つた。そして作藏を、白い方の馬の和鞍をつけたのに乘らせて、從はせた。

自分の隱し女を探しに――？　これが儀作をして自分の肩身を狹くさせた。村の若い衆などと一緒に御馳走を頒ちに行くのなら、毎晩のことだツても、人は怪しみもせず、女房も知らぬふりで通すのが習慣で、――女どもの方でも、丁度この頃のやうに稻刈りが濟む家々から、順番に、一週間分のひまと食糧とを貰ひ、女中は女中仲間で、娘は娘仲間で、また好きな女房は好きな女房仲間で、それぞれ知合ひの家に出張り所を設けて、自由に人を歡迎する。渠等の一年中で最も樂しみにしてゐることだが――渠等のあたまにはめかけとか、隱し女とか云ふ觀念さへも知れてゐない間に在つて、自分だけは、殆どこの一年と云ふもの、たツた一人の女に心を奪はれてるのだ。それが如何にも人には云はれぬ恥辱のやうに思へた。

『旦那さま』おいらも一緒に行つてあげやすが、のう』と、役場の會計は云つた。
「ねらは』とは、お前達はと云ふことだが、『來んな』と、儀作は少し不興げに答へた。そして自分の女房がもとの事を何ケ月ぶりかで思ひ出してるやうなその恨み顔を見ぬ振りで、門へ出た。
目の前には、藥師堂の森まで二十丁の道がくの字がたに廣がつてゐる。その右手はすべて高い山で、猿でもよぢ登れさうもない切り岸だ。この斷崖の中腹に、儀作の三代前の先祖がお堂までの道を切り開らいたものだ。左り、鍵の手のうち側は、また、直下に絕壁であつて、その下が遠く見おろし見渡せる限り、自分の先祖代々からの畑や水田である。
渠は今更らながら馬をとどめて、山田家の所有地を一體に眺め、自分が村會議員から郡會議員になつた順序を一層重んずべきことであると感じた。
『大きなものでござんす、のう、旦那さま！』作藏の聲は頓狂であつたが、如何にも感服の樣子であつた。
『うん、――』振り向きもしないで微笑を漏らしながら、また馬の手綱をゆるめた。『ねら、ことしのとけはどうだ、の？』
『どう〳〵出たが、のう。』
『さうかえ？』

『針千本に、ねずみもたせ――そんげな物でも喰つてゐたかい、のう、お竹は？』

『默つてろ！』相手になればかの女のことを渠が云ひ續けると思つたので、儀作は口を噤んで急いだ。行くてには、毎夜かの女と逢つてゐるお堂の森が見える。

渠とかの女との關係を女房に見破られたその翌日、

『旦那さま、お前さまとこのおツかアに申しわけがござりやんせんさかいおいら死にやんすが、のう』と云つて、かの女は忍び泣きに泣きじやくりながら、『おいら――死んだ――あとで――おいら――とこの――おツかアを、のう――』

『よし／＼、泣くない！』こツそり渠はかの女の涙をふいてやつた。『今夜藥師堂へ行つてて呉れ、あツこで相談するさかい、のう。』

家族が床に這入る頃、渠は自分の家をぬけ出で、あの森へ行つて見ると、月のないやみの中を、蝙蝠が高い枝葉のあたりを飛ぶ聲と、峠をしぼり出る清水がかけ樋を傳つて手洗ひ盤に落ちる音とが、それと聽えた。

が、他はしんかんとして、藥師の堂が眞ツ黑に杉の森の中に見えたばかりだ。

夜中には、呪ひの者でもなければ、學校や役場のある、そして巡査一名の駐在所がある○○村からも、二十丁ばかり無人の道をのぼつて來ることはない。ここから上また二十丁は自分の家族の　の

でもなければ通るところでない。
堂の後ろから飛び出して來た者があつたが、渠が默つて近づくと、向ふでは若し逢つたら聲を擧げて逃げ出すと云ふやうな樺へであつた。こちらが近づくに從つて、向ふは横へそれて行かうとした。
『…………』低い聲で、『お竹か？』
『おう、旦那さま！』
いきなり、かの女は飛びついて、渠の頸ツたまへ兩手を固くかけて、おい泣きながら、暫らく離れなかつた。かの女の熱い涙が雨漏りのやうにこちらの頰から胸のあたりへ傳はつた。
かの女は一度自分の家を見舞ひに歸つた時、姉の氣を引いて見て、姉がいまだに旦那を思つてることをよく知つた。そしてそれだけ姉を恐れたので、儀作に勸められても、自分の家へは歸りたくないと云つてゐた。それでも、儀作は外に思ひ付きもないので、かの女に云つた、
『別に死んでしまふほどのこともないが、な。お前とこへ歸つてゐれば、お前のおツかアにはこれまでよりもツとどうど仕送りしてやるが、のう。』
『さうもしてゐられやんせんが、のう、おいら、姉におどされて――旦那さまには、また、逢ふ瀨がござりやんせんで――』
『死んだら逢ふ瀨があるかい――？！』

『死にたうはござんせん――忍び女になりやんしようか？』

晝は峠に這入つてると發議したのはお竹自身であつた。望み通りにさせて、その用意のかみ創りを一丁與へたのはこちらであつた。

男に逢はうと思ひ詰めた女の一念をかみ創りにして女が口に喰はへると、どんな手荒い若い衆でもその途中を恐れて逃げることになつてゐる。然しそれも、お竹の場合には、十日と續かなかつた。その姿が山田家の杉林で消えたと云ふことが同家の下男から先づ女主人の方へ傳はると、お富は多分あの子の神がかりだらうと推知して度々夢にうなされなどしたが、夜が明ける毎に勢ひづいて、亭主にくど〳〵やかましいいや味を云つた。

『また、ここで逢はんないさかい、のう、もう、は、來んな、おいらがお堂の森まで出て行くさかい。』

『ほんに、旦那さまにもお前さまのおツかアにも申しわけがござりやんせん、のう。』

『そんげに案じてなぢよにするだよ、この忍び女！』

その後は毎晩こちらからお堂まで出かけて行つたのだが、かの女のひるまぢう山奥に於ける食糧が絕えては困るだらうと思つて、絕えず味噌や米や鑵詰類などを行く度毎に少しづつ持ち運んだ。或時、

『何かまた欲しいものがないか』と云ふと、女は少し考へてたやうであつたが、なか〳〵遠慮の氣味で、

『ほかに何でも欲しいもんはござりやんせんども、ぽこりを一足――』

『死ぬと云ふたもんがかい？』

『さうだども、旦那さま――』冷かされても、一旦云つた以上はどうしてもせがむと云ふ風に、そのからだをこちらへゆすり付けた、『ござ付きの、黑塗りを、のう。』

その二三日後に、栃尾へ出たついでに、かの女の註文通りの下駄を一足、買つて來てやつた。かの女の喜びは思ひの外で――どこで買つたか、いくらしたかと云ふことなどを尋ねながら、頻りにその疊や塗りを手のさきでさはつて見たが、それではまだ滿足しないで、お堂の欄干の端に出で、僅かに漏れる月のうすあかりにそれをさし上げた。

『五貫もしたかい、のう』と云ひながら、暫く眼を無理に働らかせてゐるやうであつた。

杉の森の深さは、儀作自身の屋敷のよりは三層倍、四層倍である。それが爲めにお堂の上でも、年中日光が當らないで、いつもじめ〳〵してゐる。まして夜ぞらのあかりでは――。

『もツとしたが、のう、まア、早うこツちへ來いや。』渠には塗り下駄よりもすべ〳〵する感じがさきに立つた。

『この間、山一つ向ふの學校の美形の女教員へ遊びに來いと云つてやらうとしたのにさへ、うちの婆アは反對したんだすかい――』斯う思ひ返すと、お竹をけふつれて歸れば、またどんなむごいことを云はうか知れぬけれども、出しぬけにかの女の母の家へつれ込むわけにも行くまい。さりとて、どうしたらいいか、儀作にはそれを熟考する餘裕がなかつた、けふ切りで若しや存分にかの友と逢ふ機會がなくなるのではないかと思はれて。

『おいらは斯うしてゐれば不足はござりやんせんども、旦那さまの心がはりが案じられやんすが、のう』と、お竹が口說いたことを思ひ出せた。

『…………』こちらだツても、いつでも同じ心だが――見付けられないでゐて吳れたら、最も都合がよかつたのに。

無言の進みは二頭の馬のひづめの音に調子取られて藥師堂の門前に達した。門の手前二三丁からは地勢が左右に入れ變はつて、道の右手が絶壁の谷あひになり、左り手は謂はゆる峠の眞ツふもとである。このふもとの杉林の中にお堂は――一年一度の祭りの外――つくねんとして寂しく建つてゐる。藥師を祭るとは云ふものの、昔からの兩部神道の名殘りで、すべてが佛閣よりも神社の形だ。『玉垣改築費寄附人名』を大小の板に書いて、境内にかかげてあるのを見ると、『一金參拾圓　也山田儀

作殿』を筆頭にして、十圓、五圓、一圓または五十錢のが、三段にも四段にもずらりと並んだままに、その字も板も隨分雨かぜに打たれて古びてゐる。儀作はこれを仰ぎ見る度毎に、ここに名を列ねてゐる○○村、外十一ヶ村の人々がすべて自分には優らぬことを思ひ出して、獨りほほゑまれるのである。

『これも古くなつた、のう。』渠のいつも役場のもの等に注意を引かせるやうに云ふこの言葉が、今も亦、作藏に向つて思はず出た。その前を、馬を手に引いて通つてゐたのだ。

「どうせおいらには讀めやんせんが、のう――」作藏も自分の馬を引いて從つてゐた。

儀作は大きな長方形の手洗ひ盤の家根をささへる四つ柱の一つに、自分の馬をつなぎながら、何だか不斷とは違つた氣持ちであつた。それもその筈で――第一、お竹が來てゐない。第二に、夜ではなく、眞ツ晝間である。第三には、相引きをする爲めではなく、ひよツとすると、その反對に、これツ切りここでの密會もできなくなるか知れぬ。

深い森も、けふに限つては、自分には淺過ぎた。折角これまで包んで來たあまい秘密を、ゐんごふた作藏のために、あばき出された。

竹のかけ樋から流れ込む手洗ひ盤の水が溢れて、また外へ流れ出してゐるのを見ると、然し、また思ひ出は盡きなかつた。この水で二人はしたたかの疲れを癒やして、夜明け前毎に別れた。

との水で儀作は自分の脊中を女に洗はせたこともある。が、女の身は幾日たつても湯と云ふものには這入れぬ狀態に在るので、儀作がかの女の脊中をも三度に一度は洗つてやつた。

『もツたいない』と云つて、その初めはかの女は逃げまはつたが、渠はかの女の逃げまはるのが面白くて、わざと追ひかけて盤のまはりをまはつた。

『どうせお前のおツかアには見えやせんが、な。』渠が一度無理にかの女を取り抑さへて洗つてやると、かの女は、

『姉に知れたら、おどされるだらうが、のう』と云つた。

それからは、そんなことをして逃げまはり、逃げまはらせるのが二人に一つの樂しみとなつた。

或時、水のぶツかけ合ひをしてゐるところへ、滅多に來たこともない何かの願人――であつたらう――の提燈がやつて來た。お竹はびツくりして、そのまゝ山に這入らうとして逃げたが、儀作はふと頓智づいて、自分のぬいで置いた衣物をうらはらに自分の前に廣げ、兩手を兩方の袖に通して突ツ張ると、栃尾の宴會で見た或紳士のとんきよう踊り『紀伊の國』の姿となつた。

『ほツ、ほツ』と、ふくろふのやうな鳴き聲を出して、狐か何かのやうに兩足を揃へてぴよん〳〵跳んで行くと、近づいて來かけた願人は『きやア』と聲を立てて一目散に逃げて行つた。

『藥師堂に天狗が下りてゐたさうだが』と云ふ噂さが廣まつたのは、それが爲めであつた。そして結

局は二人の世界を一層親しく又樂しくした。

『お前は一體どんげなとこにゐるんだい？』

お竹とこんな仲になつてからも、儀作は峠を登つて見たことがなかつた。そしてただ自分の考へから見て、かの女がどこか完全な隱れ穴でも見付けたので、山をも毛だ物をも恐れなくなつたのだと合點してゐた。無論、熊が來ないところでありさへすれば、他におそろしいものとてはこの近邊の山にはゐなかつた。

『高うて、旦那樣の森や畑がよう見えやんすども、日の長いとこでござりやんして、のう――』

『毎日、早う逢ひたいのはおいらもだが、のう――』

『日が憎うて、やみが懷かしうござりやんして、のう。』

『いつまでもお前とおいらには夜が明けないもんだら、のう――』

『今夜もまたほんに、のう。』

『いいとも、いいとも。』

儀作が殆ど一夜も缺かさず、自分の黑い影を以つて迎へたのは、むツと髮にも衣物にも雨かぜがつき嗅つてるまた別な黑い影をだ。そしてあけがたに別れる時にも、このむツとしたにほひが、氣持ち

の惡くて又なつかしいわき香がでもあるやうにあとを引いた。
『今夜もまたほんに、のう』を繰り返して、立ち去りかねてる黑い姿を思ひ浮べると、儀作には何を置いてもこちらが終始忍びをとこであつた。
『どんげなとこにゐるんだか――?』馬を棄てていよ〳〵あるか無きかの峠みちを登る時になると、作藏を先きに立てゐたが、ます〳〵言葉をかはしたくなかつたほど、自分の胸は引き締つてゐた。
峠も、したの方は、大きな樹木の繁りでうす暗かつた。
『おう、どうど出てゐる、のう』と云つて、作藏は道ばたのネズミモタセの一群を一つづつ摘み取つて、ふところに突ツ込み初めた。
儀作はそれを追ひ越して木の株をよぢつつ登ると、作藏はあとから息をせツせと云はせて追ひ付いて來た。ちよツと注意してゐると、サンゴモタセもマイタケも澤山あつた。然しそれ等が段々薄らいで、初茸や千本シメジばかりが榮えてるほど、多少樹木がまばらで低くなつた上へ出ると、『旦那さま、もう、直ツきでござりやんすが、のう』と、作藏はひそめた聲で云つた。『左りの方を見てござらツしやい。』
『………』少しのぼりの樂なところへ來たが、かの女が自慢さうに告げた通り、如何にも山葡萄やアケビの熟したのがあちらこちらに見える。アケビは西洋のバナナを少し短くしたやうなもので、そ

の皮が今や熟しはぢけてその中からぬる〳〵したなか實が黑いたねと共にはみ出してゐる。
慣れない道をしたせいでもあらうが、からだ中が汗にしとつて、脊中に當る日光がまだ來ない小春日のそれのやうにあツたかい。無論、もう十月の末に近い。十一月に這入つてしまふと雪が降るので、さう〳〵女をこんなところに置いとけないのは、渠自身にも分つてゐた。
『旦那さま、あれを――』この時さきに立つてた作藏が右の手を山つつじの根にかけて首をすくめ、儀作の方を見て聲をひそめた。
『…………』儀作も下から脊を延ばして、灌木の上へ目だけ出して見ると、五間ばかりこの難路を外れたところに赤土の平地がある。そのうへには大きな椎の木が枝葉をはびこらせてゐる。そのあたりは大樹が少く、西向きにひらけて、午後二時頃の日光の直射を受けてゐる。その中に、儀作の見おぼえある綿入れを胸の下まではだぬぎにして、長い黑髮を前に垂れて、それをすいてたのがお竹だ。
「まるで山をんなのやうだ、のう!」作藏はおぢ氣づいたやうすだ。聲をふるはせてゐた。
『…………』儀作はなほ言葉を出さなかつた。數ケ月、何十日と云ふもの、かの女を太陽の光りに照らして見たことがなかつたが、相變らず鼻すぢのよく通つた女だ。その姉と云ひ、この妹と云ひ、あの目界の見えぬむさい母親から生れ出たものとは思へないほどだ。骨格だツてなか〳〵たくましく、然し多少瘦せて來たのは旣に儀作の手ざはりにも段々と傳はつてゐた。

『晝も、椎の木のかげで旦那さまの夢を見やんすが、のう。』その見晴らしは、成るほど、高い空を隔てて儀作の屋敷の森までをも吸ひ込むやうだ。渠はもちろんひるは間接に、夜は直接にかの女の方へ吸ひ込まれつつあつた。思へば、渠自身も多少は瘦せて來た。

渠がづか〳〵と灌木をかき分けて行くと、その音に女はすいてた髮を後ろにはね返したが、兩方の耳のあたりへ落ちるのを兩手で押さへ上げながら、きツとなつてこちらを見た。

『お竹！』

『おう、旦那さま！』女があわてて肌を入れてゐるうちに、男はそのそばへ達した。むツとした衣物のにほひがぷんと渠の鼻を突いた。

女は立つたまま、ぢツと驚きの目を渠に向けたが、そばに今一人ついて來たのがあるのを見て、近よりもせず、またあとの言葉も出さなかつた。

儀作も立つたままであたりを見まはすと、石を寄せ集めて釜土ができてゐる。そのそばには、自分の買つて與へたものだが、土鍋や茶碗がある。鑵詰めの明きが隨分多くころがつてゐる。一つの大きな明き鑵には山葡萄が盛つてある。木の子も澤山取れてゐる。

『…………』渠にはこれが、けさ早く別れた女の住まひとは思ひも寄らなかつた。そしてかの女の姿や住まひが如何にも見ツともないやうに、俄かに思へて來た。作藏の云つた通り、まるで山をんなの

やうな者を自分の色にしてゐたと云ひふらされたら、全く自分の體面に關するのであつた。『おいらは十二ケ村のおやぢさまだぞ。今に、また、郡會議員から縣會議員にもなれる。それをこんげにしてこいつがたぶらかしたんか？』斯うした憤りが自分の胸に溢れて來た。が、作藏の手前をつくらう氣になつて、『一體、お前はいつからこんげなとこへ來てゐたんだい？』

『…………』こちらの顏いろばかりを見てゐた女は涙ぐんだが、返事をしないで横を向いた。

『やつれて、餘ツぽど日やけしてゐやんすが、のう』と、作藏はそばからかの女をのぞくやうにした。それでも、儀作には、まだ〳〵色の白い女に見えた。

『おいらのうちでは、な』と、儀作はなほそらぞらしくなつて、『井戶へ身を投げたんか、川で死んだんかと、どうど案じて尋ねたんだども、長いことで忘れてゐた頃になつて、この人がけふお前のゐどころを知らせて來て吳れたんだが、のう。』

『…………』恨めしさうにこちらを見たが、直ぐまた橫を向いた。

『早う歸らツしやい』と、作藏は同情するやうに、『お前のおツかアが案じてゐるだらうが、のう。』

『…………』女が段々と首を垂れて行く樣子が如何にもこちらにやさしかつた。

儀作もかの女の橫がほを覗き込むやうにして、目をかの女の胸のあたりまでやつた。今、肌を入れる時に見えた兩の乳が、顏のやつれとは釣り合はぬほどふツくら張り出してゐたのを、また若し――

や？と思ひ付いた。――この姉と云ひ、妹と云ひ――渠は一度までも女を『肺病』にしなければならぬかと思ふと、恐ろしく危險の念が增して、もとのやうな平氣の決斷心が出ようとも見えなかつた。若しそれなら、なほ更らこんなところに置いとけないので、渠は今更らの如く我に返つて命令した、

『そら、歸るんだ！』

『…………』女はベツたり地上に坐わつたかと思ふと、わツと泣き崩れた。間を置いてから、すすり上げながら、『行ぎやんせん！　行ぎやんせん！　生涯――ここに――斯うして――ゐたう――ござんすが、のう！』

『そんげなことができるかい、のう』と、作藏は旦那の意を汲むだやうに云つた。

『馬鹿野郎！』この聲はほこ〱する日光の中に響いて、どこか遠くへ渡つて行つたやうに思へた。が、儀作には、いツそのこと、自分の森を初めとして、山々を隔てた十二ケ村全體にも達して吳れたらよかつた。そしてこれまでの關係がうそであつたことになつて、皆に傳はつて吳れたらよかつた。

無理に女を引き立てて引き上げようとした時、

『そんでは、ちよツこら待つて下さえんし』と云つて、かの女は椎の根もとなる岩へ行つたが、その小穴に突ツ込んである物を引き出した。儀作の見おぼえある紙に包んであるので分つたが、自分が買つてやつた駒ド駄だ。

その下駄を大事さうに小脇にかかへて、お竹は儀作等に從つて峠を下だつて來た。

儀作にはかの女を一先づ自分の家につれて行かうか、それとも直ちにかの女の母や姉のもとへ歸らせようか、どツちとも決心が藥師堂まで下りてもまだ付かなかつた。兎に角、一方の馬へかの女を乘せてやればいいとだけは考へてゐた。

三人とも喉がかわいたので、例の清水を皆で手に汲んで飲んだ。

『旦那さま、おいらの乘つて來た馬にお竹を乘せてやりやんし』と、作藏もそこまで氣が付いた。けれども、かの女は片手をかけ樋のそばの柱にかけて、ちツとも動かうとはしなかつた。そして屢々儀作の方を横目に見て、何か目に云はせてゐるやうであつた。渠もそれをやツと感づいて、

『作藏、お前は歸れ』と命じた時、かの女はその横顏に初めて微笑を見せた。

『…………』儀作も心では無しように嬉しかつた。

作藏が歩いて去るのを見送つてしまつてからも、お竹は同じところを動かず、つんと横を向いてゐた。

『どうしたい』と、儀作はその前から自分の馬をつづけて撫でてゐながら、からかひ氣味であつたが、既にやみの氣ぶんが全身にみなぎつてゐた。

夕ぐれには、然し、まだ時間があつた。

『…………』

『どうしたい、おい？』

『…………』

『おい――？』

『…………』うは目にこちらを見て、少しはゑみを含むで、『旦那さまはつれなうござらツしやるのう、おいらをおどしやんして――』

『どんげにだい』とは云つたが、峠のうへでの自分ながらもそら〲しかつた應對をさしてゐるのだと思へた。姙娠のことだけは獨りで分るまで云ひたくなかつた。かの女がしツかりかかへてゐる下駄に目をやりながら、『ぽこりだツて買うてやつたんだのに、のう？』

『そりや、ほんげにござらツしやるが、のう――もう、は、おいらを棄てる氣で――』

『そんげなことがあるかい？』つか〱と進んで、渠はかの女が柱から放した右の手を握つた。そして最後は何でも金錢づくだと決心した。

*　　　**　　　*

夜が來た。そして二頭の馬は手洗ひ盤のそばで夜あけ頃までかたみにいな鳴いてるのを、渠はお堂の中でかの女と共に聽いてゐた。

――（大正五年八月）――

畑の細君

蓮太郎が暑中休暇を利用して大阪に來たのには、一つの自分だけで秘してゐる考へがあつた。自分は東京で或小學校の女敎員と既に最近に關係をつけた。向ふも女一個の獨身生活だけはできてゐるし、こちらも或西洋人の日本語敎師として、譬へて云へば警部補ぐらゐの收入はある。休暇中でも、貰へる物は貰へるのだから、それを費用に當ててこつそりと、兩方の親戚にもまだ披露せぬ結婚、その結婚前の樂しい旅行をでもしようかと思はないでもなかつたのだが、それにも拘らず渠はかの女を棄て置いて獨りで東京を出發した。

渠には十二三の頃から相親しんで、十五六の頃別れる時にも、行く末は一緒になるやうなことを、向ふの母親とも話し合つて置いた女がある。その家は或る事情で音信不通になつたが、大阪に出てゐるに相違なからう。それを發見すれば、今約束の出來てるのとは手を切つてもいいと云ふ下ごころであつた。

と云ふのも、蓮太郎が十五六の時、國を出て大阪の或宣敎學校に半年ばかり這入つた時から、今日

に至るまで七ケ年も交際を絶たずに續いた友人から、手紙が來た――

『今度いよ〱正式の結婚手つづきを了し、まだ部屋住みの格ながら親とは別に家を持ち候へば、この夏休みを遊びにお出成されては如何。どうせ貧乏な君の事ゆゑ、御下阪の費用さへ拂つて來れば、歸りの旅費ぐらゐは出してあげてもよろしく候。畑武一、同じく菊子。』

『畜生、威張つてやがつて！　東京にゐた時はどうだ、さんざん友人を手こずらせて、貴さまのおやぢにこちらまでも貴さまと同じ穴のむじなのやうに思はせてしまつた癖に』と、蓮太郎は獨りで微笑をまじへた憤慨を懷きながらも、これをいいしほにして下阪したのであつた。

渠の周圍は、兩親と親戚とが東京關係であるを除いては、もとから殆どすべて大阪に關係ある友人どもであつた。人竝みよりも若くして或專門學校の政治科を出て直ぐ會社の一課長代理になつた片瀨、これは仲間中での才子であつたが、そのあと押しには下宿屋の後家さんが附いてゐて、おツ母さんほどの年輩ではあるが、女の方から夫婦氣取りであつた。この片瀨が學生のくせに吉原で三日ゐつづけをした時には、今一人中井と云ふ男と蓮太郎とが肩をいからして出かけて行つて、渠とその相手の女郎とをその場になぐり付けた。その中井は、また、一高で一度落第したのを養家の父とそのあと取り娘とに濟まぬと云つて、神經衰弱を起したほどの小心者だが、法律志願だけに頗る生まじめであつた。蓮太郎も渠等と共に神田に下宿を共にしてゐたこともある。渠の內は麻布にあつたのだが、英語

や經濟學を學ぶに遠くて都合が惡かつたからだ。すべて大阪に於いて一時學校を共にした爲めの友達であつた。

その間にまじつて、最も贅澤であり、最も不勉强であつたのは畑武一で、さう勉强などしなくても、おやぢのあとを繼ぎさへすれば立派な金滿家になれると云ふ自慢若しくは安心があつた。人數倍の學資を貰つてゐながら、季候のかはり目には質物の受け出しに窮したので、友人どもが連名で渠の爲めに渠のおやぢに詫び手紙を書き、以後は必らずこんな事はさせないから今回だけは特別にしてやつて呉れと云ふやうな事を云つてやつた。それも、一二度までのことで、それ以上にはおやぢの方で取り上げ無かつた。こつそりと友人どもに內證で度々女を買ひに行つたのも融通が利かなくなる一原因であつたが、多くは學生として無駄な化粧品や交際費につかつてゐたのだ。

渠はよく寢ごとを云つて、あひ手の人とさながら相ひ對してゐるかのやうに物を云つた。初めは仲間にもその人が一定してゐるのだとは思はれなかつたが、每晩のことに段々とそれがいつも一人であり、而もそれが女であるらしく分つて來た。

片瀨が或夜、畑をさきに寢かしてから、あとのもの等と一緒に待ら受けてゐて、畑が例の如くむツくと起きあがつてものを云ひ出した時、これに靜かに心當りを應對して見て全く分つたのだが、その戀人とは屢々渠を下宿に尋ねて來る首藤といふ女で、大阪居留地（が、まだその時にはあつた）のウ

イルミナ女學校からわざ／＼それが爲めに出京した女學生であつた。それが今回いよ／＼渠の籍に這入つた菊子さんだ。

『わたし、あの人きらひ』と、東京でかの女は蓮太郎のことを私かに畑にこぼして、渠との交際を絕たしめようとしたことがある。その頃、男女交際の必要を感ずる空氣がみなぎつてる耶蘇敎の社會に觸れた連中として、みな交際若しくは交際家と云ふことを口ぐせのやうに云つてただけ、直ぐ絕交とか交際しないとか云ふことも亦盛んに問題となつてゐた。が、かの女がちよツと見の好き嫌ひ心から畑に蓮太郎との交際を絕てと云つたには、尤もだと見える理由がないでもなかつた。

蓮太郎が神田の靑年會館に久し振りで上京の大阪牧師宮川氏の演說を聽きに行かうとして、畑と一緖に小川町の角を曲つた時、畑は一人の女學生と出くわし、少し行き過ぎさせてから、何か暫らくこそこそと話をしてゐた。その間、蓮太郎は遠慮して、初めに立ちどまつたところを動かないで、待つてゐた。づぬけて丈の高い畑のかげになつてるかの女の顏が、時々、畑の動く手の橫から見えるのを見ると、何か無理を云つて引ツ張るやうな目つきもあつた。

『ははア――演說などやめて宿へ歸れとせがんでるのだ。な』と思はれたので、こいつ、どうするか知らんと見てゐた。

かの女が一あしさきへ進んで行くと、畑は果して浮き足になつて、こちらを向き、

『僕はちよツと失敬する。』
『あれかい、例のは？』癪にさわらないではゐられなかつたので、斯うわざと高調子で叫んだ。女の步調は亂れて、何か物にでもつまづいたやうであつた。これをかの女が根に持つたらしいとは、畑自身が渠にうち明けた話であつた。往來の中で小ゆびを曲げて見せたことを、また向ふへ知らせたかどうだか、それは分らないが――
渠はかかる聯想のつなにも引かれながら、自分の最初の戀人を大阪に探すつもりで、畑の新家庭に客となつた。
菊子は渠の豫想とは反して、なか〳〵さツぱりとして開らけた女であつた。既に一面識も二面識もある人のやうに客を取り扱ふので、初めから少しも客に氣を置かせなかつた。殊に、主人が客の年齡のことまでも告げてあつたかして、
『周布さんはわていとおない年だツしやろ』と、細君は云つた。
『さうでせうか、畑君よりは二つ下で、何でも僕は酉の一白ださうです。』
『そやさかい、あんたは文學のやうなお金にもならんもんをしやはるんだツせ。』
『文學と云うても』と、畑は橫やりを入れて、『こいつは友人間での理屈屋だから、哲學向きの代ものや。』

『それでも好きな詩を書いてえらうなつたら、ようおまッしやろ。』
『何にせい、これから金がなければ――周布君のやうなことを云うても駄目や。』
『そりやそやけど、な――』細君は蓮太郎の方を見て、『あんたもちとこの人に仕込まれなはれ。』
『さア――』と、蓮太郎はどツち付かずのため息をついてから、無遠慮に『ぢやア、あなたはどうした風向きで畑君にくツ付いたのです――同じ酉の一白で二十五なら？』
『そりや財産の爲めだッさ。』微笑を十分に含みながら、『この人に財産の見込みが無うては、わていかて來ますもんか？』
『生憎、大山君は』と、畑はかの女の初戀を引き合ひに出した、『友だちに取られたさかい、なア。』
『取られたかて、あんたもどうせお金がないとしたら、あんたよりや大山はんの方が餘ツぽど人格が高い。』
『そないに人格が高いものが、約束を變へると云ふことがあるか？』
『別にどうしたと云ふわけやないし、ほんの、口約束だんが、な。』
『分るもんかい？』
夫婦のこの對話を直ぐ理解できるだけの材料は、蓮太郎も前から畑に聽いて知つてゐた。が、細君の方がいつのまにか斯う明けツ放しになつてるのには、最初の程は、案外であつた。女學生としても

可なりはき／＼と開らけてはゐたが、情事に關することを面と向つてひやかされる時は顏を赤くしてゐたのに。尤も畑が一度——東京にゐて、まだの關係のなかつた時、既に——かの女を棄てかけたことがあるが、その時、女が既にあばずれであることを友人等に證する爲め、渠はかの女がさし向ひの時平氣で種々の事を云つたと訴へた、たとへば、

『簞笥のカンがかた／＼云ふのは氣持ちがわるいなんてッ』と。

蓮太郎はここへ來てから、畑が自分等に訴へた時のこの言葉を實際に思ひ出させられることが每度であつたが、自分は主人とは違ひ、今旅行の爲めに禁慾してゐるだけのことだと觀念して見れば、さきに一たび感じて耶蘇教信者になつた時に自分で自分の獨善的行爲を禁じたその努力ほどにも苦しいものではなかつた。神だツても、若しあるとしたら、これ以上無邪氣に人間の私密を見てゐることは出來まいとやらに渠には思はれた。

そして朝起きるが早いか、食膳に向つて、みんなで一緒に大阪流の朝がゆをすすりながらも、渠は殆ど金のことをばかり聽かせられるのであつたが、それほど口では云つてる目的物を——聽いて見ると——まだ主人は少しも左右できないでゐるのだ。

畑の實父は、もう、とッくに銀行事業に失敗してからと云ふもの、おもて立つて本名を出せぬ身に

なつたので、そのまだ五六十萬はあらうと云はれる財産が皆畑の弟の名義になつて、がらす製造業をやつてゐる。畑が疎外されてゐるのは、一つには子供の時から繼母と折り合ひが付かぬ爲め、また一つには小僧からあがつて行く商人を嫌つて學問でもしようと云ふ氣のあつたのが實父と衝突した爲めだ。妹はたださへからだが弱かつたのに、繼母の虐待を苦にしてゐたのでとう〳〵病死したと云はれる。それに繼母のつれ子があつて、それが可なり役に立つので、その繼父に割り合ひに信用されてゐるのだ。

『僕は實父や弟に恨みはないが、繼母とつれ子とに對するあて付けに財産分配の訴訟を起すのだ』と云つて、畑は知り合ひの辯護士を賴んで實父を訴へたことがある。どうせ勝利を得られなかつたので、控訴をする運びになつた時、父から仲裁を入れて、息子の結婚を承認し、相當の生活費を供給し、この玉造なるしもた屋向きの家を持たせることになつた。が、畑は毎日雇ひ人の如く店へ通勤するだけで、東京、名古屋、九州はおろかのこと、京都や神戸の如き近國の取り引き先きへさへ集金に遣はされる信用もなかつた。

『なアんのことだい、そんなことぢやアまだ僕に威張れないぞ』と、蓮太郎は皮肉のつもりで夫婦を非難した。

『見てをれよ、僕も今度こそたましひを入れかへて商人になつたから、今に大けなことをしまツさ。』

言葉ぶりまでが、然し、東京の學生風を脫しかけてゐる。但し、今のところでは、まだ遠州生れの細君の方が――これもたまには地がねを出すが――却つて、大阪言葉に熟してゐる。

『わていがついてまツさかい、な。』

『こいつを先づうまくおやぢと繼母とに取り入らせてあるん、さ。』

『五十萬が十萬兩でも君に出來さへすりやア、僕も少しやアおすそ分けをして貰ふ權利がある、ね――これまで隨分僕等を手こずらせたから、ね。』

『なアに、その時になりやア、君を通辯にして世界漫遊でも試みるん、さ。』

『わていは腰ぎんちやくにでもなつてだツか？』

むね續きの右隣りの二階には、蓮太郎と同時代に東京の白金學院にゐた渡邊と云ふ傳道師夫婦がゐて、その細君の方が隨分花を引くことが好きである。

『これが三もん文士の贋布はんだツせ』と云ふやうな不眞面目な紹介をされても、別に怒りもしないで蓮太郎も花の仲間に加はるやうになつた。渠は東京に出て以來こんな遊びをうそツこででもやつたことはない。が、初めて國を離れた時、神戶の諏訪山のうへの休息所で老婆二人が一生懸命に戰つてるのを見て、自分もいたづら半分に仲間に這入り、何でも十四五錢を負けて取られたことがあるのを

語つて聽かせた。

『あんたのこツちやさかい、詩人らしく寛大に負けてあげたのでおまツしやろ。』渡邊夫人もなかなか畑の細君にも劣らぬ口わるであるし、年もおツつかツつの仲だが、蓮太郎が文學好きであると云ふことには、多少、畑夫人よりか理解を持つて呉れるやうに見えた。どツちかと云へば、この夫人の方に渠は多くの親しみを有したかつた——人並み以上の美人でもあつたし。

『…………』默つて、ただかの女の顏を正面からわざと見つめながらも、渠は少しも心を動かしてゐるやうな風をしなかつた時、かの女は氣が付いてどう思ひ取つたか、さツと顏を赤くして花札の取り違へをした。

『そりや藤だんが、な』と、畑夫人は注意した。

『そやそや。』『渡邊夫人は急いでそれを引ツ込めて、萩のかすにゐのししを合はせた。

『見たぞ——さア、お出しなさい』と、蓮太郎は二度目の藤のかすを示めして、畑夫人のほとときすを棄てさせた。

『あんた、いやや、カンニングして』と、かの女ががつかりした聲をあげたのは、また別な時、蓮太郎が口ぐるまにかの女を乘せて、もみぢの丹を棄てさせ、靑のよろしを斷念させたことが分つた時のことだ。

夜になると　兩方の夫人の亭主も入りまじることがあるが、そんな夜を十二時頃まで過ごした。その次ぎの午前などにも、畑が店へ出勤してから、蓮太郎が裏の庭に出て、細君と共に、垣根のしぼみかけた朝顏の花にひとつびとつ色わけをしるした紙札をつけてゐる時、隣りの二階から白い、ふツくらした、瓜ざねの顏が、やはらかに笑ひながら、その自分のよく鼻すぢの通つた鼻さきを人さし指でちよツとはぢいて見せると、こちらの痩せぎすの、淺黑い、化粧ぎらひの顏が直ぐ喜んで、――こちらも無言――承諾の返答をするのであつた。

『大阪の人は八々を好きなやうです、ね。』

『あの人は』と、細君は庭ぐちを家の方へ這入る時、にやりと笑つて蓮太郎を返り見ながら、『あんたが來てからお花も好きになり、お化粧も上手にならはつたんでおまツさ。』

『そんなことが――』渠は恥かしいほど打ち消しの態度を見せないでは濟まぬやうな氣がした。人の細君を思はうと思ふやうな不眞面目な氣はなかつたし、また思はれても誰れにでも應じるやうな輕ツぽしい男にも見られたくなかつた。

けれども、畑夫人は渠に恥かしがりの弱點があるのを見つけてから、

『周布はんの顏を赤うしやはんのが面白い』と云ひ出した。そしてかの女は蓮太郎の次ぎに坐わり合はせる時などは、いつも渡邊夫人に向つて『あんた、周布はん好ツきやさかい』と云つて席をゆづつ

た。

『さう好きた人ばかりゐられちやア』と云ふやうな冗談を渠は無理にも云はないではゐられなかつた。

『お花を皆好ツきやおまへんか？』渡邊夫人は斯う云ひくるめて、にこ付いた。

『周布の色をとこは今に初まつたこツちやない、昔から「金は無かりけり」で、なア。』

『さう畑君までおれを馬鹿にするなよ、おれだツて今勝つて見せるから。』

『あんた、少し勝つてもと手を返してお呉れやすよ――負けるばかりで。』

『はい〳〵』蓮太郎はいつも畑夫人に勝負のもとでを出して貰つてるのだが、それを返せたことがない。それに自分の次ぎに坐わることをかの女がうまいことを云つて逃げるのは、實は、既に渠には分つてた通り、自分が突拍子もないへまな手を打つので、そのあとを受ける方針にかの女がその度毎に困る爲めであつた。

或時、渠がわざと大切な札を棄てて渡邊夫人に坊主のピカを取らせ、遂に四光をさせた時などは、畑夫人は案のでう非常に怒つた。

『あんたのやうな無茶うちはいやや！　もう、せいへん！』

『でも、ピキは二枚持ちだツさ』と云つて、前者は落ち付き拂つて、今一枚のかすを見せた。

『それ、お覽なさい。僕はどうせ出來ると思つたんだ。』

『ほたら、仕かたがない。』後者も險しい目つきを鎭めて、微笑になり、『あんたはえらう目が利くさかい、な。』

『どう致しまして――今の、あなたの目つきの方が餘ツぽど――』

『………』かの女は無言で笑ひ出しながら、渠の肩を輕く打つた。

女どもは自分等が熱して大きな聲を出す時などは氣がつかないで、蓮太郎の持ち前の高聲を時々とがめた。そして少し隣りに氣がねせよと注意した。

隣りの下座敷は耶蘇敎の傳道所で、その擔任者は、然し、渡邊氏とはまた別な人であつた。蓮太郎が見ると、別に學力などはありさうでもないが、相當な資産ある老人で、俸給の爲めに渡邊傳道師の如く他へ働きに行くやうなのではなく、好きで餘生を神にさゝげると云つてる。蓮太郎は西洋人の機嫌取りに過ぎぬやうな傳道、並びに傳道師には、もう、同情を持たなくなつてるのだが、この老人に限つては正直で心のいい人であることを認めた。

『隣りのおぢイさんがけふもあんたに遊びに來い云ふてまツせ』と云ふ畑の細君の言づてがあると、渠は率直に出かけて行つた。そして段々親しみが出來るにつれて、下駄をはいておもてをまはるのが面

倒だと云つて、二階から二階へ渡つて、かよつて行くやうになつた。そして渡邊の細君が晝寢をしてゐるところを驚かせ、

『ちよツと失敬しますよ』とばかりで濟ませたこともある。

畑氏の裏庭に蛙が來てでもゐれば、直ぐ細君の依賴――と云ふよりも命令――によつて、隣りへ屆けに行つた。

『あなたのうちのですか、この蛙は？』

『さうです』とか、『違ひますが、もろて置きます』とか、老人にはどこか見分けのつく目じるしがあつた。形や色やその他の點で見分けるのだらうが、一々に人間のやうな名を付けて、椽の下には澤山飼つてある。それが皆老人の命令に從ふのだ。

渠がぽん〳〵ぽんと手を叩くと、ぞろ〳〵と椽の下から出て來て、ゑさ鉢の周圍を取り卷くほどよく馴らされてゐる。

『がま老人』と、蓮太郎は渠を名づけた。そして畑の細君も渡邊夫人もさう呼ぶやうになつた。そしてまた本人の老人もさう呼ばれて滿足であつた。

『太郎はけふは少し活氣がないやうやないか、寶丹でもやつて見い。』斯う云つて、老人がその老夫人に命令すると、かの女も亦その氣になつて、その蛙の世話をする。そして日曜の說敎などには、その

年まで一人も子のない傳道師は蛙を例に出して、こちらで愛がありさへすれば、あんた蟲でもよく親しんで來ると云ふやうな話が出るのださうだ。

大阪へ來ての最初の日曜日には、蓮太郎も畑の細君と共に義理づくで出席し、數年來絕えて歌つたこともない讃美歌をも聲を出して歌つた。

『周布はんはおもたより交際家だツせ、いや〳〵だツしやろが、讃美歌までうとて。』細君がうは帶を解くが早いか、ペツたり坐わつて、せんすを使ひながら、斯う畑に告げたのは、その日曜日の午前を畑が留守番がてら、下座敷へ小づくゑを出して、人竝み外れの大きなからだをはだぬぎで、何かそろばんをはじいてゐたところへ、他の二人が隣りから歸つて來た時のことだ。

『そりや、お互ひに昔取つたきねづか、さ。』畑は右の耳に筆をはさませたその方の手の肱を机に突いて、兩人の方にふり返つた。『ベースとソプラノとで梅花女學校の連中と競爭であつたから、なア――』

『さう〳〵!』蓮太郎もその時を思ひ出しながら、足を無遠慮に投げ出して、左の肱で半身をささへ、『あの時ぶんには、今の〇〇家の細君が最もお茶ツぴいで、舊約聖書にある割禮とは何のことだ、何の必要だと、わざ〳〵男子連に追窮したツけ。』

『………』『畑も笑ひながら、『男女合同の聖書研究會がその爲めに宮川牧師から禁止になつてしもた、なア、』

『然し』と、蓮太郎は相手の舊惡などを今一つ細君に聽かせるやうに、『君のあの女をも――あの女が東京に出て來た時――隨分たび〳〵訪問したやうであつたぞ。』

『そりや、いつもおごらせる爲めや。』これが何だか申しわけのやうに聽えたが、凜はさりげなく、『男なんて駄目や、のら犬のやうな人が多うてなど云うて、大氣焔であつた。』

『あんたに當てつけヤはツたんやろ。』この時、かの女は割り合ひにこまかい白のたて縞めいせんのはだをぬいで、襦袢の上を煽いでゐた。

『さうかも知れないよ。』蓮太郎は細君を子供あつかひにしたやうにかの女のあと押しをした。

『馬鹿云へ！』畑は少し向きになつて、ごまかしらしい微笑を含んで見せて、『獨身で通すなど云うて、直ぐ間もなく結婚したんや。』

『そりや、あんたとこよりええさかい、なア――まま母も無うて。今では、子供が二人も出けて、乙に澄ましてやはる。』

『君は全體』と、蓮太郎はなほ突ツ込んで、『あの女學校專門かと僕は思つてたら、とう〳〵また別な女學校から細君が飛び出して來たのであつた、ね。』

『…………』細君はただ笑つて蓮太郎と顏を見合はせたが、少し間を置いてから、『然し周布はん、あんたまでが割禮のことをいやらしさうに云やはるけれど、な――』

『僕はさうは云はなかつた。』辯解するつもりで起きあがつて、あぐらをかいた。
『あかん坊の時に、而も宗敎上の信仰から、おちんこの皮を切る眞似をする儀式だんが、な。』
『無論、さう、さ。――あいつは、然し、畑君もその時聽いてた通り、奧さんのやうに無邪氣にその事を云つたのではないのです。どうせ女には必要もなく、ただ男子にばかりそんな儀式が必要なのは何の爲めかと、少し挑發的に質問したから、大問題になつてしまつたのです。』
『そりや、さうや』と、畑も賛成した。そしてその場の話がこれで一段落ついたところには、細君が晝飯の支度に臺どころへ立つた。

蓮太郎は子供の時の――從つて、まだ肉の經驗には落ちなかつた――戀人のゆくゑが始終氣になつてゐるのだが、一つには、友人夫婦の新生活やその周圍の仲間入りをしてゐる面白さの爲め――また一つには大阪へ來て見ると、東京で遠く想像したほどのうつくしさが初戀の心持ちに現じて來ず、よしんば本人を探し當てても、既に持ち主のある身であつたら却つてこちらが馬鹿を見るだけだと云ふ引けみを感じた爲めに――もう、どうでもいいと云ふ考へにもなつてゐた。實は、畑氏が大阪にゐる自分の親友だと云ふことが――遠く離れて考へてた時は――何だか搜索の心丈夫な手がかりになりさうであつたが、この友人にうち明けて見るまでもなく、それは空想であつたことが分つた。それに、

また國を出る時自分の愛犬を一匹かの女にやつたが、それに出逢ひでもすれば、きツとかの女の住みかも分るだらうなどと考へてたのも、廣い市中をあてどなく歩きまはつてもいいと云ふ考へに過ぎなかつた。

『矢ツ張り。東京に殘して來た女にしようか知らん、どうせ一たび關係もした以上は』と云ふ決心の方へ傾いて來た時、その女から手紙が來た。

『御出發以來、既に一週間を過ぎ候へど、いまだに御音信なきはお心がはりかと思はれ候。若しまた實はいまだに御出發なく、この手紙も宛てさきに受け取り主なく、もとの差出し人の手もとへ歸つて來ることかとも思はれ候。』こんな疑ひを懷かしめるやうにしたのは、無論、こちらの仕うちが惡かつた。別れる少し前に、かの女の部屋借りをしてゐる婆アさんのもとへ遊びに來た男に――その男が最も無遠慮におほはだぬぎでゐた時――あなたのお乳が女のやうに大きいとかの女が云つたのを、あとで蓮太郎は無考へな女だと叱り付けた。かの女はただ、ほんの、無邪氣に云つたのだと辯解(べんかい)したが、渠は邪氣のあるなしを云ふのではない、女として愼みが足りぬと反駁した。そしてこの間の理解が出來合はぬうちに渠の出發となつた。勿論、渠がかの女にいや氣がさして、もとの事を思ひ出したのもそれが爲めであつたのは事實だ。

『どうせ私が年うへのこと故、諦(あきら)めても苦しくはこれ無く候へど、どちらともはツきりしたところ

を承りたく候』ともあつた。そこにかの女としてのしツかりした決心があるらしく受け取つて見れば見るほど、渠の目の前には、かの女の引き締つた顔の、上品な年増すがたが浮んで來た。

初めてかの女の室に一と夜を過ぎたその翌日であつた。

『さア、餘りぐづぐづしてゐちやア――』どうしても一度は歸つて來ねばならぬ蓮太郎を晝近くになつて送り出しかけながら、

『何だか歸したくないの』と云つた。

『…………』渠はかの女の思ひ切つて云つたやうな目つきと言葉とをその場で身にしみ込ませて、足が進みかねたが、かの女の方でそれ以上に引きとめなかつたので、自分も冷靜な風に見せて、一先づ歸宅した。その時の心持ちが今思ひ出せた。

『若しおれといよいよ別れれば、ふん、知らばツくれて直ぐ、あの〇〇博士のなかうどロの方へ行くつもりだらう。』それはこちらが不承知であつた。

畑がゐないのを幸ひ、渠が座敷に持ち出してあつた机に行き、蓮太郎は返事を書き、何事もなかつたやうにして、早くまた逢ひたいのだが、ついでだから、今少し夏中だけ大阪に遊んでゐたいからと云ふのであつた。

封書をこツそり自分で出しに行かうとして、玄關の土間に下りると、細君がにが笑ひをして飛び出

して來た。
『わたしが出して來てあげまッさ。』
『なに、ようございます。』渠はわれ知らず手にしてゐるのを押し隱さうとした。
『では』と、もう、手を出して、『ちよッとお見せやす。』
『………』止むを得ないので、にや／＼笑ひながらおもて書きを見せた。
「男の名にしてあつたけれど」と、かの女は手にまでは取つて見ないで、『多分さうだろとおもた。』郵便の來た時に、受け取つたのはかの女であつた。
『周布はんはがら／＼してばかり、あまり情愛のない人か思たら、さうでもないやうや』と、かの女はそれから云ふやうになつた。
蓮太郎等がゐた宣教學校とはまた別に、その後新らしく設置された桃山學院の一教師が畑の家を――これも隣りの傳道所の關係からの知り合ひとして――訪問して來た時、たツた一度引き合はされた蓮太郎のことを、あとで畑に『不眞面目な人物』だと評したとかで、細君は蓮太郎の爲めに大變憤慨して、
『〇〇はんのやうな人は生まじめ過ぎて不まじめな癖に、人のことを直ぐ惡う云ふのや。耶蘇教はあれやさかい、いやや。』

『その癖、お前も教會にゐたら、讃美歌をいつしよけんめに歌ふやないか』と、畑はひやかした。
『そりや、歌ふ以上は、人に負けたうない。』
『虚榮心や、な。』
『耶蘇は耶蘇でほうツて置く、さ』と、蓮太郎は二人にうツちやるやうに語つた。

殆ど毎日若しくは毎晩のやうに、隣り二階と畑の家との連中の花合戰が、人數は五人から三人の間で、大體に於いて、誰れにも大した損害もなく引き續いた。そのうちに、第二の日曜が來て、午前は蓮太郎もつき合つたが、その晩は御免を被むらうと云ふ細君の動議が成立した。そして蓮太郎が夫婦に千日前へ案内されることになつた。格子先きから車に乘る段となると、來てゐる二人乘りの車――當時、大阪には、まだそれが殘つてゐた――二臺の一つを畑に與へ、その細君は蓮太郎と一緒に乘つた。そしてかの女は平氣で自分の所天に向つて云つた、
『あんたは人一倍おもとおまんのやさかい、仕かたおまへん。』
『よし〳〵。』人のいい畑もそれに對して平氣であつたやうだが、さう云ふ風でゐられないのは蓮太郎であつた。
『…………』西か南か、兎に角目的地の方向にだらう、がた〳〵と畑よりさきに運ばれながら、度ぎ

もを抜かれたほど勝手が違つて、初めのうちは言葉一つも出し得なかつた。少し地盤の平らかでない道を通る時、車が左右にがた〳〵ゆれるたんびにも、細君のやはらかさうな衣物に觸れることに氣が引けて、自分のからだが私かに固くなつてゐた。『細君を信じ切つてる畑のことだから、まさか、あとで怒りもしないだらうが――』と思へた。

『…………』畑が後ろの車の上で獨り默つてるのが、然し、蓮太郎には氣が氣でならなかつた。そして細君が家に在る時と同じやうに、いろんな話をしかけるのに、ただおづ〳〵と受け答へをするそのあひ間を利用して、渠は後ろを返り見て、わざと、

『眠つてやしないかい』と叫ぶと、

『大丈夫』と答へる聲が薄ぐらい町中に聞えた。

その翌日が十五日で、店が休みだと云ふので、畑のおやぢはそのつれ合ひと共に初めてこの新家庭の樣子を見に來た。蓮太郎は、一度便所にとほつた畑のまゝ母の方には、茶の間で、止むを得ずちよツと挨拶をしなければならなかつたが、おやぢには會ひに出なかつた。と云ふのも、おやぢにはその息子の放蕩時代の相棒であつたやうに思はれてもゐるし、店の方へ畑宛の手紙でもやると、『まだあんな書生ツぽと交際してるか』と叱るさうでもあるし、これを前から聽いて知つてたからだ。

細君も、然し、ただ一度茶を運んだ切り、蓮太郎と共に茶の間に引ツ込んでゐるので、『あなたは出て行く方がいいでせう』と、渠が注意すると、

『わたし、いやですの』と、最もひそやかな聲で、『何を云うてるか分らへん。』『かの女は少しも動かないで、ただぢツと壁一重向ふの話し聲に耳を傾けて、顏の色も常のやうではなかつた。そしてかの女の身にぴツたり添つてる黑ツぽい銘仙が一層ぴツたりしてゐるやうに見える。

『あいつは口さきがうまいさかい、おやぢにもまま母にも僕よりや信用がある』と、畑が笑ひながら云つた言葉はどうしたのだらうと蓮太郎には思はれた。

『うちのは氣が弱いさかい、お父はんの機嫌を取ろおもたら、心にもないことを云ひまツさ。』

『そんなに夫婦の間に理解がないんでは――』蓮太郎は今更ら非常なことを女人の爲めに發見したやうであつた。

茶の間と障子一つで縱につづく三疊敷きは、細い格子でおもて通りに接する部屋で、蓮太郎が來てからは、夫婦の寢室になつてゐる。それと橫に竝んで玄關の土間と玄關の二疊とがあり、それの奧の六疊が蓮太郎のいつも寢るところに與へられたのだが、今、そこから茶を呼ぶ聲がした。

『呼んでますよ。』

『…………』細君は聽えたと云ふ返事を向ふへして置きもしないで出て行き、その用をしてしまふと

直ぐ、また、戻つて來て、もとの座にからだを投げ出すやうに坐わつた。

この家には、傳道所とは反對の左り隣りに、おもてから裏に直通する一間はばの通路があつて、二階のむね續き十軒長屋を兩方に五軒づつに仕切つてる代りに、大阪一般にある直通のうち土間がない。從つて、たださへうす暗いのを例とする茶の間が、ここのは一層にうす暗いのであつた。それを僅かに少し明るくしてゐるのは、臺どころの家根に明いてる天窓から、仕切りの障子に向つてさす光の爲めであつた。

細君はそのあかりを背にして、長火鉢の猫板のある方に坐わつてると、蓮太郎は主人のいつも坐わる席を自分の正反對の方に殘して、かの女の横にゐた。

『あなたは、ほんたうに、あなたの言葉通り、お金の爲めに結婚したやうなものです、ね。』

『そりや、さうですとも!』低い聲だけれども、きツぱりしてゐた。

蓮太郎は自分の關係してゐる女も隨分理知的なところがあるが、それがこの細君ほど打算的でないのが、まだしもの取り柄だと思つた。矢ツ張り、あれを妻にきめてやらうか? どうしてゐるだらう? 『歸したくないの』と、初めてできた翌日、もう、自分の所有物のやうに云つたツけが――?

夢のやうに――

『おれの女房になるか?』

『でも、あなたより年らへですもの――』
『ぢやア、どうして斯う――？』
『なる、なる！』…………………………
渠はふと自分のひたひにあぶら汗がにじみ出てゐるのに氣が付き、自分のハンケチが落ちてるのだと思つて、白い物を拾ひ上げようとしたら、意外にも細君の白い切れの端が裾から出過ぎてゐるのであつた。
『そりやア――あなた――それも』と、渠はあわてながら、一方には俄かにぽツとのぼせて、自分の東京で約束した女をここに引き寄せて來たやうなほとぼりを感じ、また一方には自分の粗忽を誤魔化してしまはうと云ふ氣になつて、つい、度の外れたおほ聲になつた。が、そツとかの女の顏を見ると相變らず注意を向ふの話に向けてたので、少しは心を落ち付けて、『尤もですが、ね――まさか、畑君は――あなたの心配するほど――さう弱くもないでせうよ。例の訴訟までした位ですもの、ね。』
『でも』と、かの女が冷靜に出た丈け蓮太郎の態度は亂された、『今度こそはお父はんの云ふ通りになつてをれば、財産が貰へまツさかい。』
『そりやアさうでせうが』と、われながら聲に顫へをおぼえながら、『まさか、ね、餘り弱いことは？』

分りやしまへん。』

『ぢやア、あなたが畑君の兩親に信用されてることもうそですか?』

『そりやあの人よりやちびツとましでしよけれど――』

『ぢやア、ただあなたのひがみでせう?』

『わてい、もう、逃げて往にまツさ、若しあんな氣づつない家庭に、同居せんならんやうにでもなつたら!』

『ああ、そのことですかい?』斯う分れば、その前から時々かの女が心配さうに云つてたことで、別に蓮太郎から見て何でもないのであるが、かの女が餘り考へ込んでたので、何か無理解で横暴な親の方から嫁を追ひ出せと云ふやうな問題をでも、畑に對して出してあるのかと思はれたのであつた。『それは安心なさい、僕が保證します。こないだも、畑君が僕に云つてゐましたよ、おやぢは都合によると、この家庭を疊んで同居せよと云ふ時があるかも知れないが、日本流におや子兩夫婦の同居生活なんか、苟も少しでも外國生活に觸れたものは、斷然しないつもりだと云つてゐました。それに、あなたの性質が殊にそんなことには向かないからツて。』

その場はそれで濟ませたが、蓮太郎が心配したことには、實際に、かの女が今のこちらの粗忽を――まさか、知らなかつたことはなからうから――所天の耳へどう入れるか分らない。別に他の意味が

なかつたのを知つてて呉れて、かの女が內證にしてゐれば何でもないことだが、一方ではまた、さう內證にして呉れると、そこに何だかかの女との秘密な共通點が出來さうにも思はれて、渠は氣まぐれな男性としてこれまで思ひたくなかつたことを――こんなはづみから――俄かにむら〳〵と思はせられるのが苦しくないこともなかつた。

それを空想にして氣を隣りの二階の人に轉じて見たが、その人にもその鼻すぢの通つた顏に浮ぶ笑ひを所有する者があるのだ。

如何に窮屈であつたとしても、また、ゆふべの車の上が懷かしかつた。こちらがあんな遠慮がちの氣持ちで通せたり、まだ〳〵綺麗で而も心が無事でゐられたのに、今となつては、あまりの心やす立てにあまへて、かの女がほんの金錢めあてに結婚したのだなどと、こちらからは云はないでもいいことを云ひ出して、その時は痛くもなかつた腹を、今になつて探られてはしないかと悔いられた。

で、渠は畑の兩親がここを引き上げるのを待つて、直ぐ細君のゐない別室に於いて、畑に自分の思はぬ粗忽の一件を白狀し、どうか自分に代つて畑から細君に詫びて貰ふことにした。

『粗忽と笑つてしまへば何でもないことだが、餘りの粗忽で、僕から直接には云ひにくいことだから、ね。』

『なアに、何でもないことだから、安心してゐ給へ』と、畑はわけもなく答へた。が、かげで渠がそ

の細君を餘ほどひどく叱り付けたらしいことは、あとで分つた。

その翌日の午前十時頃であつた、蓮太郎は二階の緣にある唐椅子に腰をかけて、旅かばんに入れて來たテニソンの詩を讀んでると、畑夫人はやツと臺どころの仕事をすませたと云ふ風で、晝寢に都合いい籐の枕を持つてあがつて來て、風とほしのいい座敷の眞ン中に仰向けになり、兩膝を立て合はせて、ぱた〳〵とうちはを使つた。

それを蓮太郎は見ぬふりをして、心に云つた。

『如何にさツぱりした氣象の女だツて、何てかまはないのだらう――亭主をも亭主の客をも男とは見てゐないで！』

『わてい、ちよツと休みまツさかい、あんた、格子が明いたら往て見ておくれやすよ。』

『はア――時に、お父さんはきのふ別に何も云はなかつた樣子です、ね。』

『その方はよかつたけれど――あんた、あないなこと云やはらんかてええのに、――えらう叱らはりました――正直過ぎるさかい、あんた困る！』

『いや、僕が全く粗忽でした』と云ふ聲が、われながらいつものあツさりとは出ないのをおぼえた。

『わていが不注意や云うて、よんべえらう叱らはりました。』

『そりやア』と、努めて何げないやうに、『なほ濟みません。』
『周布はん、またどうです？』隣りの渡邊夫人が顏を傾むけてこちらへ突き出した。
『さア、いらツしやい。やりませう。』この場合、二人の間へ人が這入つて呉れる方がいい感じがすると思つたのだが、早速花を引いてゐると、枕がそばに投げのけてあることが心配であつた。二名の婦人のうち――若し――萬一――男がその一名を左右する自由があるとしたら、その男はどツちを取るか？　多分、親しい友人のよりも、さうでない方をだらうが、それだけ、また、さうした自由の多い方の婦人が、無根據、無責任の評判を立て易い。渡邊夫人にして斯う親しさうに相遊びながら、若し何か間違つた推測をその所天に語り、所天がまた『がま老人』に告げ、老人がまた畑にそれを注意でもするやうになつたら――？

氣になる枕ではあるが、その持ち主に對して、それを方づけたらどうだと云ふ注意を與へることさへも、蓮太郎には憚られた。

畑は、然し、その日も機嫌よく歸つて來て、夫婦で蓮太郎を案內して、どこだか蓮太郎には分らなかつた、少し遠方の女義太夫席に行つた。その歸りに渠は畑に向つて、
『あの誰れ〳〵さんより誰れ〳〵に御祝儀いくらと云つて報告する習慣はいやだ、ね』と云つた。
『然し習慣やさかい、仕かたがない。』

その夜、蓮太郎はいつもの褥へ這入つてからも、どうしても眠られなかつた。

『あんた好ツきや、さツぱりしてて。』斯う云つた細君の方が、さツぱりし過ぎるほどさツぱりしてゐるのだから、別にこちらからわざ〳〵氣をまはすべきではない。が、思ひ違へのハンケチと枕とが、奚の心に度を外したた仙人のむら氣を引き起して、いろんな女のいたづらた聯想を重ねしめた。そしてそれが――どうしても――昔のよりは今の、そして遠い方のよりは手近なのへまとまつて行くのだ。

その時はまだ瓦斯も電氣もなかつたが、ランプをふき消してある室内に、段々と尖つて來る神經を落ち付ける爲めには、翌日大阪退去の決心を斷行するより外に道がなかつた。

大阪へ來た最初の目的のためには、思へば唯だ一回、心齋橋すぢに、國から出た煙草屋を尋ねて見た。蓮太郎が教はつた小學教師の娘がかたづいてる所で、七年前に一度尋ねて行つて話をしたことがあるが、今度はどこへ移つたかも分らなかつた。そしてその他には、もう、どうせ何の手がかりもなかつた。

――(大正五年九月)――

繼母と大村夫婦

一

六本木で電車を下りて、なほそのうす暗い通りを少し歩いてから左りへ曲ると、その突き當りにはどこへも曲れぬ○○子爵の本門の電燈が見えた。克衛(かつゑ)はわれ知らず足を早めると、自分を待つてるお燗のにほひがぷんとしたかの如く思はれて、腹の蟲がぐうツと云つた。

門の右手の控へ所(じよ)には請願巡査のゐねむりをしてゐるのが見える。

『御苦勞です。』挨拶はいつもの通りの言葉ではあつたが、いつもよりは景氣(けいき)のいい聲であつたのをわれと感じた。

巡査の控へ所の手前に、このお屋敷の小さい横門があつて、それを這入ると、左り手、巡査控へ所の後ろに當るところが克衛自身の住まひだ。玄關なしの小家は玄關兼うら椽へとほるに半間の木戸を入り口としてゐるが、渠はにこにこしながらそれを明けると、既に聲を聽きつけたのだらう、妻のお竹は椽はがに立ち迎へてゐた。出しぬけから、

『どうして？　取れて？』
『…………』渠はかの女の微笑に釣り込まれないやうにして、わざと返事をしなかつた。
ふと氣が付くと、ここ二間に三間（曲つてはなほ二間）の小さな箱庭には、――もう、萩の葉が段段によぢれ初め、低いもみぢの下葉から赤くならうと云ふのに、――今夜に限つて、稲荷のほこら（と云つても形ばかりのだが）にお燈明をあげてある。妻が前祝ひの心がけを見せてゐるのが渠にも嬉しかつた。
『駄目であつたの？』
『あア』とそらぞらしい返事をして少しばかりぢらしてやらうと思つたのだが、湧き出る微笑を後ろ向きに椽がはに腰かけて、仙臺平の袴をまくし上げ、踏み石の上で靴をぬいでゐた。
『つまらなかつたの、ね。』お竹の聲は失望を投げ出すやうであつた。
『…………』渠はかの女の方へは顔を向けないで、づか／＼と取ツ付きの六疊を通りぬけ、次ぎの茶の間三疊の片すみに寢てゐる病人の枕もとに立つて、ここに初めて嬉しさうな聲をきかせた、『おツ母さん、お喜びなさい、いよ／＼また百圓貰つてあげました。』
『矢ツ張り取れたの？』あとについて來たお竹の聲はまた頓狂に嬉しさうであつた。『人ぢらしに――わざと、とぼけて見たりして。』

『取れるに越したことはないでしようが、ね――』病人は物を云ふにもまだ元氣が見えなかつた。が、その元氣のない返事を病人がするには、今一つの理由があると、克衞にはよく分つてゐる。といふのは、自分が妻と相談して、今度の百圓は病人のたツての賴みで請求した體に仕組んであるのだ。そしてその通りに病人へも無理に納得させてある。

『いや、その「が、ねえ」どころか、きツとあなたの爲めに取つてあげますから。』

『ぢやア』と、お竹は後ろから口を出して、『まだ現金は取れないの？』

『どちらでも』と、病人は兩方に氣がねをしたやうに、『結構ですが、ねえ――』

『その「が、ねえ」が曖昧ですよ、人に賴んで置きながら、おツ母さんは。』斯う云つて、渠は舌を出してお竹と顏を見合はせると、お竹も病人に見えないところで頸をすくめて默笑した。それを見てから渠はそ知らぬ勢ひで、『さア、前祝ひだ、酒！』

六疊へ引ツ返すと直ぐ、渠は簞笥の上の方にかけてある澤山の瓢簞のうちから、その一つを取りはづして、子供をでも抱くやうに大事さうに兩手に持つて、坐敷の眞ン中にどツかりとあぐらをかき、右の手と左りの手とでかはるがはる二三度づつ瓢簞の尻を撫でてから、次にはそこへ自分の鼻のあぶらをせツせと塗りつけた。

贋せ物とは分つてる南洲の尺六の絹本を中央にして、その左右にも曖昧な美人畫の細長い軸物をか

けた床の間の前方には、棄らんと猫やなぎとを別々に二つの花いけに麗々しく自己流に活けてある。これは先日、殿さまの前でちよツと花を活けて見せたところ、何事にも物好きな殿さまから、

『大村もちよツと器用(きよう)にやるな』とのお賞めにあづかり、それから俄かに意得になつた主人の藝當だ。けれども、それは渠の道樂のおもな物ではなかつた。

『この瓢箪はたちが惡いぜ。』

『取れると云ふ見込みだけなら、まだ當てにはならないでしよう――』お竹は膳を運んで來て、べツたりと坐わつてから、『約束と何とかは前からはづれるツて?』

『あア、腹の蟲がぐうぐう云つてらア。』左りの手にいそがしく猪口をあげた。そして早速かの女に酌をさせながら、そツと膳のおもてを見ると、貧弱な一人前の刺し身のよこ手に、自分が晩食の時喰ひ殘した鹽しやけがけち臭くも附いてゐる。俄かに少し不平さうに、『もツと氣の利いたものがありさうなものだ、なア。』

『おかねをお出しなさい、な、お金を!』お竹が現金(げんきん)に突ツ込んで來たのには、渠も二の句がつげなかつた。

『かねは――あす』と、むツちりした聲を出し、心の奧では氣まぐれな不機嫌におそはれながら、右手にから瓢箪をかかへて、かの女の二度目の酌を受けようとした。

『まア、袴をお取りになつたらどうですの？』

『いいや』と、駄々をこねてやるつもりで、『先づ前祝ひだ。』そして立てつづけに二三杯。

『さうがふ〳〵召し上らないで』と、銚子をかの女は膝の上に引ッ込め、左りの手のひらに載せて握るやうにして、『前祝ひが無駄でないと云ふかけ合ひの樣子をでも、まア、お話しなさい、な、ね。』

『いよう、お召し物までも召しかへられて』と、渠はやツと氣が付いたので機嫌を取り直した。そして自分の喜びを共に嬉しがつてる妻の顏を見つめ、『お待ち兼でしたか、な？――然しこの二三杯でやツと少しは落ち付いた。飮むべき時に飮まぬと、酒と云ふ奴は人間に祟りをするから、な。』斯う云つて、微笑を口のとがりに現はし、猪口を突き出した。

『でも』と、かの女は酌をして、『あなたが大事のかけ合ひ事に不眞面目に見えていけないツて、御自分でお酒を召し上らないで行つたんぢやアございませんか？』

『それだから、酒の方が承知してゐなかつた。酒は早く飮んで吳れろと云ふのだが――』

『そんな勝手な理窟が――この高いお酒ですもの！』

『まア、お聽きよ。』渠は妻の吹き出しかけたのを眞面目さうな聲で押さへて、『如何なおれだツて、百兩の金には替へられまい。』

『そりやア、無論のことですが、ね。』

『そこでだ――おれは晩めしは喰つたが、いつもの晩酌をしないで行つた。どうせ質屋の拂ひや酒代にもなる金だが、酒手を貰ひに來たと向ふに思はれちやア不利益だから、な。ところで、おれはこんなに大切なことに思つて出かけたのに、おツ母さんは』と、その方を眼で知らせて、聞えよがしに、一段と聲を高めて、『まだ「さうでしようか、ねえ」なんて曖昧な返事ばかりしてゐる。お前の、な、兄さんに相談しないのが不平かも知れぬが、あの兄さんのことだから、相談すれば反對するにきまつてゐます。それから、また金を受け取つてからうち明ければ、なほ更ら反對するだらう。受け取つたのが間違ひだ、不名譽だから直ぐさま返して來いなんて來た日にやア、こちらの勞力が水の泡になる。またあとで返せと云つたツて、もう半分しか殘つてないとか、四半分しかないとかでは、返さうにも返しやうがないわけだ。それよりやア初めから相談しないで、――而も本人のおツ母さんが承知して賴んだのだから――取れるものは取り、取つて使へるものは使つた方が利口でないか?』

『そりやア、さうですとも! 兄さんだツて、向うから最初の見舞金として先づ持つて來た二十圓のうちから、わたしに呉れたのは、おツ母さんも御存じの通り、たツた五圓だし、そのあとでまた取つた百三十圓もわたし達の方へ渡したのは醫者の往診料や藥り代やおツ母さんの食費として三十圓ばかりで、あとはみんな持つて行つたのですもの。』

『さうだとも。――兄さんだツて、おもて向きはおツ母さんのまさかの時の用意に郵便局に預けて置

くとは云つても、自分の暮し向きがよくない時にやア、きツと、ちびりちびりと引き出すに相違ないのだ。して見りやア、こツちでも多少それと同樣のうまい汁にあり付いてもかまはないわけで――ましておツ母さんがこちらへころげ込んで來て動けなくなつたので、兄さんのところへ送り込んで兄さんに世話をさせる代りに、こちらで世話をしてゐるのだから、なア。』

『そりやア、よしんば、こツちで今度の百圓がいよいよ取れたのをみんな使つてしまつたとしても、兄さんよりもこツちの方が割りがよくない、わ。』

『さうだとも。まア、おツ母さんには氣の毒だが、云つて見れば、おツ母さんが幸ひにか不幸にか自動車に引かれたのがこちとらのもと手だ、取れるだけ取つてやるのが、云はば、まア、こツちの義務だ――責任だ。』

『えへへん』と云ふ、たわいの無い咳拂ひが隣室から聽こえた。

『…………』克衞は妻の耳もとへ口を持つて行つて、『不平を云つてるんだぜ。』

『…………』お竹はにツこりうなづいただけで、あまり氣にかける樣子はなかつた。

二

『義務や責任は』と、渠は尋常の聲になつて、『人間として盡さずにやア置けないから、なア。』

『そりやア無論ですとも、ね。但し、ほんとに取れさうですか、ね――こッちでばかり取れる氣でゐても、向ふでいい加減の挨拶をしてゐるんぢやア？』

『そんなことがあるもんか？』

『でも、向ふの奥さんと云ふのがかげにゐてなかなか喰へない人のやうですから、ね。兄さんをおこらせて、とうとう喧嘩腰のかけ合ひをする氣にさせたのも、あの人が電話口に出て、無禮な口をきいたからのことでしよう。人の親を自動車で引き倒して置きながら、たッた二十圓ばかりの見舞金を卽時に出したのを鼻にかけて、『もう、うちぢやア關係しません』なんて――だから『無禮なことを云ふな、負傷者の責任者が今出て來てゐるから主人にも卽刻出て來いと云へ――それでなけりやア、もう、公けの手續きをするばかりだから』と云つて、兄さんもその時御殿の電話を切つてしまひましたのです、わ。』

『兄さんをおこらせたので、前の百三十圓はうまく取れたの、さ――でないと、向ふが泣き付いて尋常にあやまつてでも來りやア、それッ切り兄さんは一文も取らずに妥協したのかも知れなかつた。』

『然し、今度はさう強みがありませんから、ね――それに、奥さんが前の自分の落ち度を取り返すのはこんな時だと思つてるでしようから。』

『そこは大丈夫だよ、おれさまのことだから、な。細君はゐたかどうかは知らないが、おれは主人を

おれの前に据ゑ付けて動かせず、一度云ひ出したことはその場で向ふもどうしても斷わり切れぬやうにしてやつた、さ。』

『そんなに――口でばかり、相變らずのうまいことを云つたツて――』

『どうして、どうして？　おれは。な、飽くまでも向ふを持ち上げてやつて、丁度この殿さまに對するやうな嚴格と謙遜を以ておがみ倒してやつた。「どうも先般來は」と、渠は時によると御殿の雜巾がけまでする巖丈な兩手の握りこぶしを下向けに左右につき出し、あぐらのまゝお辭儀をする眞似をして見せ、而も切り口上で「幸か不幸か」て、な、向ふの同情を十分に引くやうにして、「母が種々さまざまのお世話にあづかり、この兩三日の樣子では確かに恢復の見込みも付いてまゐりました。これ單へにあなたの御同情の結果と存じまするので、本人よりも吳れぐれもよろしく申しました」ツて、な、は、は、はア！』

『それぢやア、肝腎のあとが次げなかつたでしよう――前に受け取つたお金のお禮ばかりになつてしまつて？』

『なアに――』少し調子ぬけがしたが、またその時の心持ちになつて見て、『ところが、なほ本人の申しますには、これで兎に角負傷は直ることは直りましたが、何ぶんにも老體に重大な負傷をした上のことでございますので、いつ、またこれを原因として餘病が起らぬとも相計られません。そんな場合

には、どうも、――前に御同情にあづかつた分は大抵治療その他の件に使ひ果してしまひました し――』

『そんな、ありありと分るやうなうそを云つたツて！』

『うそだと云ふ證據がどこにある？』

『そりやア、ごまかせもしましようが――』

『だから、――『どうも淀橋の兄にすまない』となᵒ『實を申すと、この兄と申しましても、實は・――』

『さう實は、實はツて――』

『「實は」だから仕かたない、さᵒ『兄と申しましてもほんとに腹を痛めた子ではございません。あれはわたしくしの妻と共に母のまま子に當りますので、母はまま母としてそれが心配になりまして、近頃では、可哀さうにも、夜も殆ど一睡もできないさうでございます。』

『うまいことを云つたの、ね。』

『で、はなはだ申し兼ますが』と、渠は妻のおだてに調子づきながら、『貴下の御寛大な御慈悲心に訴へまして、再びおあまへ申すやうではございますが、本人の、もう、幾ばくもない餘生をこの事件の爲めに少しでも心配を重ねさせぬやう、またその心配から餘病でも起らぬやう、おんあはれみを以つてどうか今少しおぼし召しを願ひたいのでございます』と、どうだ、うまいだらう？』

『成るほど、ね』と、笑ひながら、『あなたの弟が活動の辯士になつてるのも尤もだ、わ。』
『馬鹿を云へ！　あいつは理想も何もないからだが、おれが金を欲しいのは向上して行きたいからだ。』
『さうしたら、どう云つたの向ふで？』
『いくらほど欲しいのかと來たから、もう、占めたもの、さ。曲つて出りやア、こツちが殿さまの威光を後ろ楯に頑張る覺悟があるのを向ふも知つてる筈だから、こツちは澄ましたもの、さ――『申し兼ますが、どうか百圓』！　そりやア、そりやア、いやな顔をしたぞ。』
『でも、承知して？』
『然し、あとから相談してなど云ふすきを與へてやらなかつた。』
『さうして承知して？』
『だから、前祝だと云ふのだ――お銚子、お銚子！』
『意張つてるの、ね。』
『意張るだけの仕事をして來たぢやアないか？』渠はお竹が次の間へ立つて行くすらりとした後ろ姿を見上げ、相變らず惡くはないと云ふ氣ぶんに動きながら、持ち前の太い聲をひとり手に和らかに顫えさせて、『あすの十時に社の方へ受け取りに來て呉れツて。』

『お母さん、起きてらッしやるの？』
『へい』と、わざとらしくぼんやりさせた返事が聞えた。
『お金がほんとに取れますと――安心してらッしやいよ。』
『結構ですよ。』
『さうはッきりおッしやれば、おッ母さん』と、克衞も聲をかけてこの時だと云はぬばかりに母の言葉を引き取つた、『わたくしも張り合ひが出ます。おッ母さんのお口から確かにちやんとお頼みになつたから、斯う躍起となつて二度目の奔走もしたのです。』
『おかげで、ね。』
『…………』渠はこちらで獨りぺろりと舌を出したが、お竹が銚子を持つて來るのを見て、『この瓢箪はどうもおれの手に終へねいぞ。』
『どうして――小西さんが立つてのお頼みだのに？』
『いくら禮を貰ふにしても、償うちのある代物になりさうもない。』
『ほかのともさう違はないやうぢやアございませんか？』
『なアに』と、にやり笑つて、『お前のからだと同樣、きめが荒い。』
『でも、あなたは、いつか、御自分の手をかけた女どものうちでわたしのが一番いいとおッしやいま

したよ。』
『そりやア、喜ばせ、さ。』
『ありがたくもない！』
『まア、また百圓は取れるし、さ、丹精した瓢箪が三つ四つもうまく賣れて吳れると、ことしはいい暮れを送れるだらうが、な。』
『暮れのことどころか、今月、今日の暮しが六ケしいのぢやアございませんか？』
『さう馬鹿にするなよ。あすは、お前の衣物も質屋から出してやる。おれも少し、好きな盆栽をこないだぢうから見當をつけて置いたから、それを買はふ。』
『そんなことにまたお金を使へば、また兄さんからお叱りの忠告を受けますよ——たださへ貧乏で困つてるところを、まだそんな贅澤に耽る場合ぢやアないツて。』
『あれは馬鹿律義で駄目だ。世にも結構な酒も飮まず、また種々さまざまな趣味も持たないで、ただ學問ばかりしたツて人間として何が面白い？』
『あなたとは違つた趣味があるのです、わ。』
『ぢやア、何か、はいからの女房の尻に敷かれてるばかりがそれか？』
『まさか、姉さんだツて、兄さんを尻に敷くほど氣ままをしてはゐません、わ、ね。』

『でも、どこへでも一緒にくツ付いて行つて、勘定と云やア自分が出すやうな顔をして。さツぱり、亭主に財布の口をあけさせたことがない。』
『そりやア、兄さんが利口なので――兄さんは、いつも、女には金をまかせツ切りの方が責任を持つて呉れて、安全だと云つてらツしやるぢやアございませんか？』
『それもさうだが、おれにやアできん。』
『あなたはお金に寛大でないから、却つてそれだけ不經濟をしてイるんです、わ。』
『そんなことがあるもんか――兎に角、世渡りの術にかけちやア、兄さんよりもずツとおれの方だ、な。』
『でも、あなただツて兄さんの崇拜家ぢやアございませんか？』
『そりやア學問のことにかけちやア――』
『時に』と、お竹は話題を轉じて、なほ心配らしく、『向ふはさう云つて置いて、あすの朝になれば兄さんの方へ行きはしないでしようか、ね――反對に泣き付きに？』
『大丈夫、さ。』下を向いて渠は瓢簞をばかりいぢくつてる。
『若しそんなことでもあると、兄さんがきツとおこつて中止させますよ。相談もしないで、不都合だツて。最初の時だツて、お金の取りかたが少し卑劣過ぎてよくなかつたツて、一度返却して來いとま

で云ひ出したのですから、ね。』

『だから、馬鹿律義だと云ふのだ。少しぐらゐ馬鹿にされたッて、また少しぐらゐ卑劣であつたッて、現なまを取つた方が利口ぢやアないか？』

『そりやアさうですけれど――』

『兎に角、兄さんと本人とは意見が違つてゐるから、今回の要求は本人を助けると思つて、斷じて淀橋の方へは內證にして吳れと云つて置いたのだ。』

『それで向ふが承知でしようか？』

『承知でなけりやアどうすると云ふんだ？　○○子爵の三太夫が十分向ふへ威しが利いてらア、な。多少の無理は通るよ。』

『向ふは、もツとも、取り締りだと意張つてても、芝居の會社なんか人氣商賣ですから、ね。』

『若し約束にそむきでもすりやア、またずツと大きく出てやらア、な。』

『でも、今度は二度目ですから、ねえ――こツちにこそ弱みがあれ。』

『二度目が三度目にならうが、人のいのちを取りそこなつたのぢやアないか？』

『でも、是迄、こんな事件はみんなたツた十圓や二十圓の涙錢で濟んで來たさうですから。』

『そりやア濟ませる奴らが馬鹿なのだ。一方では泣き付き、また一方では威し文句を利かせて置かな

けりやア——實際、淀橋の兄さんがあの場合電話口でおこらなかつたら、多分一文だツて取らずにすませただらうよ、道を歩いてるものが自働車の來るのをも避けないのが惡いのだと云ふやうな、ふん、呑氣でそれこそ卑屈な理由で。』

『まさか、そんな兄さんでも——』

『いや、分らない。』あごをつんと突き出して、ほほゑみながらとぼけた顏つき。

『でも、最初、見舞ひ金を二十圓受け取つて置いた時、兄さんは來てからこれツぱかしどうするツておこりました、わ。』

『そりやア、こツちでつよく出てゐることを知つたから、乘り氣になつて、さ。』

『まさか——』

『おい、今少し。』思ひ出したやうに、そツと三本目の銚子の催促をしても、今夜は妻もいやな顏を見せなかつた。

『約束とは違ひますが、ね。』かの女は素直に立ち上つた。

『………』少し醉ひごこちでそのあとを見送つたが、今夜こそもツと何か妻の喜ぶやうなことを云つて機嫌を取り、久し振りでうんと飲んでやれと云ふ腹をきめた。

三

圓いのをあぐら膝の上でつるつる撫でながら、私かにゑみを漏らして、何か十分にかの女の氣に入りさうなことをと考へた――けふ、電車の中で頻りにこちらの顏を意味ありさうに見い見いする女があつたが、それがよからうか？　今夜訪問した家の女中が品川で初會のおいらんによく似てゐたツけが――それをこないだ買ひに行つた時は、當直だとうそを云つて家を明けたのだが、御殿から生憎その夜中にお召しがあつたのでばれてしまつた。然しそのおいらんはおれのめツきの指輪を純金だと思ひ込んで、頻りに欲しがつたが――

さうだ――あの頑固な兄はいつも『そんな安ツぽい見えを張るな』と云ふが、その爲めにも持てる時にやア持てるから面白い――誰れが一々、人の指輪や時計をめツきであるかどうか調べて見ようぞ？　あまり正直過ぎるから、おのれの女房の手を他人に握られたりしても知らないので――。『うん、このことに限る！　おれは姉さんの手をぐツと握つたことがある』と思ひ付いた。あれは本年の正月の、何でも二日か三日のことであつた。おれの仕上げた瓢簞の賣り捌き掛り淸水をつれて、妻と一緒に淀橋へ年始まわりに行き、醉つたあげくに姉さんの手料理の何とか云ふ、豚とキヤベツ煮の西洋料理を喰つて、腹一杯のところで歌を唄つたり、詩吟をやつたり、謠ひを試みたりして聽かせ

たので、とうとうやられたツけ。げろげろと二三度椽がはへ出て吐いてから、みんなのそばで寢かされ、少しばかりとろとろしたら、それでもずツと氣ぶんはよくなつた。

然し自分はどこまでも醉ツ拂つてる振りをして駄々をこねてゐると、姉さんはあのハイカラな女優卷きに釣りがねマントを引ツかけて來て、

『どうです、少し散步でもしたら』と云ひ出した。

『こんな醉ツ拂ひをつれてちやア仕やうがありません、わ』と、お竹は答へた。

「でも、少しいい空氣を吸へば直ぐさめるでしようから』

『そりやア、結構です。さア、みんな行かう、行かう。』直ぐ勢ひよく立ち上つて、二三步よろけて見せると、姉さんはおれのからだを横から押さへて呉れた。すると、おれには如何にも異樣な優しみの感じが感じられたツけ——それから、こちらは三人、向ふは夫婦、都合五人で十二社に出かけた。さうだ、その時のことを語つて一つ、じらしてやらねば——

『もう、これでおしまひですよ』と云ひながら、お竹は熱さうなお燗を持つて來た。

『うん。』輕くあしらつて置いて、あふれるばかりの微笑を口さきに湛へた、『おい、これまでおれはお前に隱して置いたが、な——』

『何を?』

『實は』と、酌を受けながら、『いいことがあるんだ。』

『へえ――』

『………』ぐびりぐびりと喉が鳴つてゐた。

『なんですの、いいことツて？』

『さア、云つては惡し、云はないで置いてもよくなし、さ。』

『ぢやア、云つておしまひなさい、な。』少しこちらの手に乘つて來たやうな口調であつた。

『實は――』と云ひながら、酒をつがせた。

『實は、なんですの？』

『實は、その――淀橋の姉さんと、どうだい、手を握り合つたことがあるぜ。』

『そんな馬鹿なことが！』

『いや、男と女の間だもの、他人にやア知れないことが澤山あるものだ。』おもおもしく云つてから、

『さう一概におれと云ふ色をとこを馬鹿にしたものでもなからう。』

『おかどが違ふでしよう――？』

『おかどツて、何のおかどだい？　そのどをまに換へれば、おかまだ。』

『そんな駄洒落！』

『…………』渠はかの女がただにやにや笑つてるのを惚けた振りで見た。

『づうづうしいあなたの方からなら、そりやアわたしも請け合はれませんが、ね、あの理想の高い姉さんにそんなことがありますものか？』

『いや、理想の高い低いは男女間の情事には關係がない。』

『その情事とかでも、ね、あなたと兄さんとは女から見て比べ物にやアなりませんよ。』

『そりやア――』ほんとうだと云ひかけたが、矢ツ張りこの場の仕組みを破らないで、惚けがほで、

『と申しますと――？』

『人物の値うちがでさア、ね。』

『さうおれを見くびるなら、いツそのこと、お前も兄さんのおかみさんに成つたらどうだ？』

『馬鹿をおツしやい！』

『さうむきにならないでも、さ。』渠にはかの女が熱心な兄思ひであることが却つて可愛かつた。『亭主としては、矢ツ張り、おれの方がいいのか？ ぢやア云つてやるが、な、――さうれ、ことしの正月に、お前も淸水と一緒に兄さんのところへ行つたらう――？』

『あア、なアんのこツたと思つたら、あの時ですか？』

『いや、さう直ぐにはお前も安心できねいぞ。』勿體を付けてから、兩手を宙に浮かせて、『おれが――

それ――十二社へ行く道であツちへひよろり、こツちへひよろり、さ。』その時のことを説明するよりも、今の醉ひごこちがからだの搖れにつれてふらふらとよくなつたのを、それとは感づかれたくなかつた。まだ飮むのだからと心で醉ひを胡麻化しながら、『なま醉ひ本性たがはずと云つて、な、みんなあれは手だ――うそだ。』

『それほどのことア、兄さんだツてよく知つてらツしやつた、わ。『うツちやつとけ。うツちやつとけば獨りで歩いて來るから』ツておツしやつて、御自分はずんずんさきへ行つておしまひになつた、わ――あの時。』

『さア、さうさせて置いて、さ――そのあとでだ――そこが手だぜ――おれがちよツと姉さんに乙をやつて見たのは、なア、』といつて、渠は酒のかをりと共に自分にぼうツとみなぎつて來たからだの力を自分の妻にも傳へようとしたのが、その目つきに顯はれたらしい。

『あの八の字まゆげ！』妻は寧ろこちらを卑しむやうに眉をひそめこそしたが、一向こちらの考へ通りに落ちて來ない。相變らず生まじめに、『そりやア、あなたがわたしの手を取つて小うるさくひよろ付きなすつたから、姉さんも早くあなたを歩かせようと思つて、あなたの手をまた右の方から引ツ張つてくだすつたのだ、わ。』

『そりやアそれに相違なからう、さ。』あまりに調子ぬけがして、氣の利かないかかアだと思つた。が、

何か云つてゐなければあとの銚子を請求する手がかりが無くなるので、同じ話題を進めて、口のさきばかりに微笑を無理に集め、『けれども、そのウ――おれがその時姉さんの手をぐツと握ると、姉さんも赤ぐツとおれの手を握り返した、ね。』

『さうでしようか――?』妻はかたかたの肩を引いて、その方の手を後ろに突いた。そして俄かに赤くなつた。その顔には手持ち無沙汰のやうな筋肉が動いた。

『………』さんしよの實ほどの利き目はあつたと見て取つて滿足したので、ぐうツと云ひかける腹の蟲を抑さへながら暫らく渠はかの女の輕い嫉妬の動く顏をにこにこ見つめてゐてから、突然、『と、まア、おれには思はれたのだ――へ、へ!』太い聲の笑ひになつた。

『どうせそんなことだらうと思つた』と、かの女はもとの調子に返つた。『あなたが例の日カ一ちよんちよんの十だから、ね。』

『然し、苟くも自分の亭主の妹のそのまた亭主の手を握る以上は、姉さんだツて多少はうは氣ツぽいところがあるので――そこが、えへん!おれにやアこれ、さ。』兩の握りこぶしをつないで、自分のひらべツたい鼻の上に重ねた。

『めツきの指輪がよく光つてますよ――うぬぼれと云ふのは、まア、そんなことでしよう、ね。』

『さう素ツ破拔くなよ――これでも電氣めツきにかけて二十五錢取られたんだ』と云ひながら、左り

の藥ゆびにはめた僞造寶石入りの太い三本すぢを右の手で大事さうにさすつた。それから、『兎に角、それでもおれはお前よりやア、姉さんの方がいい、な――學問があつて美人で。』
『あの人を美人と云ふのア、いつも、あなたぐらゐの者でしよう、ね――そりやア、學問はあるでしようが。』
『それでも、學問があると、婦人は高尙に見える。』
『でも、學問と器量とは別です、わ。』
『すると、また――器量と、それ、何とは――それ――』そら惚けた顏つきをして、別な意味で發音の通ずる『床』の間の方を見てから、意味ありげに、『とは、別か、な？』
『下らないことを？　それだからですよ、兄さんがあなたにお酒を愼め、愼めと忠告し出したのは。やツと今、その原因が分りました、ね。あなたのお酒好きなことは、わたし達の結婚式の時に、兄さん夫婦がわたしと一緒に貸し馬車に乘つて來た時から直ぐ分つてたでしよう。兄さんはその後、わたしが初めて里歸りをした時にも云ひました、わ、『どうせ大した男でないのは分つてたが、あんなに酒を飮んで下らないことを云ふ男とは知らなかつた』ツて。だのに、その當時は少しも忠告がましいことはなく、ことしの正月過ぎになつて突然あなたに酒を愼めと云ひ出し、わたしにはまたあなたの晩酌をお銚子二本にきめて置いて、それ以上は斷じて飮ませるなツて。

『だから、いつもさう、兄さんの忠告通りにしてゐるぢやアないか——但し、今夜は別だが、ね。』

『そりやア分つてますが、ね、きツと姉さんはその事を兄さんにあとで直ぐ云ツつけたのです、わ。だから、兄さんはわたし達にそれと無く當つて、あなたの不都合な仕うちをおこつてらツしやるのだ、わ。それでなけりやア、さう俄かにひどい忠告を——あの時——おかみの命令のやうに云ひ出すわけがない。』

『さうか、な、それぢやア困つた、な』と、心でもなく片手をあたまへ上げて見せた。

『まア そのことはそれとして置いて、さ』と、妻もぞんざいになつて、『若し姉さんがほんとにうは氣からあなたの手を握つたとして見たら、それを知つたわたしは默つてませんよ。』

『そりやアさうだらう。』

『何も燒き持ちからではないんですが、そんな姉さんなら、兄さんの爲めにならないから、直ぐ兄さんに云つて離婚させます、わ。』

『無論、お前は兄思ひだから、な。——ところで、おい』と、聲をあごの先きと共に下げて、うは目で隣室の病人を意味し、腕で枕のかたちをして、眠つてるかどうかと聽いた。

『どうですか？』返事はこちらの默談と釣り合ひの取れぬ聲であつた。

『…………』片手で制止してから、見て來いと云ふ命令をあごと目つきとで與へた。

『…………』妻がひツと笑つて頸をすくめてから、拔き足に立つて行くその後ろ腰のあたりへちよツと、また、長い舌をぺろりと投げて『ついでに、今一本、な。』

四

渠がじツと耳を傾けてゐると、母の寢息がすやすやと聽こえる、
『あれをさへうまくだまして置けば』と、心では決心してゐた。ところで、ふと思ひ出したのは自分の事へてゐる殿さまのことをで、――もう、今ごろはお休みかも知れぬが、あのお方に『大村』と呼ばれる時は、いつも叱り付けられるやうな氣がするのだ。
『へ、御用でございますか』と、けさ、おづおづおまへへ出たら、然し、樣がはの唐椅子に寄られてつくづく思ひ入つたやうなお聲で、
『いよいよ秋らしうなつた、のう』と云はれた。
『左樣でございます。』
『ところで、どうぢやの、あの松のこちらの枝を切り拂ふたら――こないだから、わしにはあれが氣になつてをつたが？』
『ご尤もでございます。乃ち、あのあたりから月が出る心持ちに見立ててこそ松の姿が初めて整ふ理

痛ですから。』
『お前にそんなことが云へる素養もあるのか？』
『どう致しまして――へ、へ、へ』と笑ひに胡麻化しながら、こちらはその場に平つくばつた。
割り合ひに風流な殿さまにはこちらも風流を以て取り入るに如くはないと思へた。どうせ、いつまでもあのよぼよぼぢぢイの家令が意張つてるものでもあるまい。
松の枝を切る爲めに自分がはしごをかけた幹のもとには古い稻荷のやしろがあつて、毎年一度はお祭りまでもする。新参の自分はまだその祭りに會はないが、そのやしろを形取つて、自分も自分の庭に小さなのを建てたのだ。それに今夜は――妻の思ひ付きで――お燈明があがつてるのが、何だか無しように愉快だ。
そのあかりを、後ろ向きに首を延ばして、がらす障子のうちからのぞいて見た。
『よく眠つてらツしやる、わ』と云つて、お竹が茶の間から戻つて來た時は、さう惡い顔もせずに熱燗を出した。『召しあがるなら、しツかりおあがんなさい、な――瓢簞なんか初ツ中抱いてないで。』
『よしよし。』左りで熱いのを受けたが、矢ツ張り、右の手を遊ばせないで、『これが瓢簞だからお前も仕合せなんだぜ――若し女郎か、どこかの娘ツ子であつたら、どうする？』

『またそんな――下らない！』
『それがお前の淀橋姉さん氣取りだ、な、惡いことを段々とをそはつたものだ。』
『でも、人の手を握るやうな男をはね付けるから、いいでしよう。』
『あれはうそだ。』渠はそんなことに失敗や後悔を感ずるほど神經を使はないのであつた。『ところで、な』と、聲を低めて熱心な氣持ちで、『いよいよ、あす、金が取れるとしてだ、な、こりやア早く使つてしまうやうにしないと、馬鹿を見るぞ。』
『なぜ？』
『なぜツて――あのおツ母さんの曖昧な樣子を見ろ。おツ母さんもなかなか喰へない人間だから、な、きツと、いつか、兄さんに云ふに違ひない。』
『云つたところで、今度は兄さんがどうすることもできない筈ぢやアございませんか？　わたしから本人を說き伏せて、この病氣が直つても、どうせ、引きつづいてうちの人になつてるやうにしてあるんですもの。』
『それもさうだが――』渠はかの女の今までの兄びいき、姉さんびいきとはうつて變つた熱心な言葉つきを賴母しく思つた。
『うちの人になつてるとすりやア』と、かの女は口から泡を飛ばしてゐる、『今度のお金のことはうち

の勝手にしてもいゝ筈ですし、またお父さんの生きてた時からかけてゐたおツ母さんの保險金だツてまさかの時はうちで取れるやうにして貰はないぢやア困ります、わ。』
『無論、さうだ。が、然し、若し兄さんがおツ母さんを無理にもつれて行くと云ふことになつて、而も今度取れた金がまだ殘つてた日にやア――たとへ使ひ果したぶんは仕かたがないと云ふ理由が立つとしても、――殘つてるだけはまた取りあげて行くに違ひない。』
『なアに、おツ母さんさへしツかり決心さへしてゐさへすりやア――』
『さうは行かん。』渠も知らず知らず釣り込まれて、『あの婆さんは、もう、いつも、から埒が明かず、ぐらぐらして決心などある女ぢやアない。』
『でも、ね』と、聲が低くなつて、『成りたけうちで親切を見せて、兄さんのところへ行くよりやアうちの方がこころ置きがないと思はせたら――それに、姉さんが全く他人で、その上に少し氣六ケしい人だと云つてあるから。』
『それも無論一策だが、な』と、こちらも亦低い調子を合はせて、『こないだなんか、さう云ふ風に話しかけたら、それにはしツかりした返事をしないで、『わたしが突然信州の娘のところから逃げ出して來たのが惡かつたのです、わ』なんて、な、もう、濟んでしまつたことばかりくよくよ云つて。』
『それはおツ母さんの癖ですよ。だから、わたしがよく云つて聽かせて置いた、わ、どうせ初めて會

つた姉さんぢやア――とても――おツ母さんのやうな遠慮深い人とは十分の親しみは持てないからツて。さうしてうちの方がいいやうに分らせたんですもの。』
『兎に角』と云ふのに、渠は餘ほどの重みを持たせて、『兄さんの方でもおツ母さんの貯金としてはたツた五十圓しか入れなかつたんだから、おれの方でもそれだけを先づおツ母さんに渡して、あとの金では先づ質屋の物を出さう――酒屋のとどこほりをも拂つて、な。』
『それツぱかりで足りるものですか？』
『ぢやア、どうする？』驚いたやうに目を見張つて見せたが、これも手であつた。
『…………』
『みんな使つてしまうか』と、わざと大袈裟に出て、妻の決心を試すのであつた。夫婦で繼母を無理に納得させたやうに渠はまた妻を納得させなければ繼母の金を自由にできないと考へてた。
『質屋に四十五六圓あるでしよう』と、かの女は考へ込みながら、『それに、酒屋でも少くとも半分は拂つて呉れろとやきやき云つて來てゐますし――』
『おれだツて、この奔走料に盆栽の二つや三つは買ひたいし、な。』
『盆栽と云つても、あなたのは馬鹿にならない價段ですから――取れて見りやア、まるで足りさうもない、わ。』

『だから、おれにまかせて置けと云ふのだ。』思ふ壺へ這入つて來たと思ひながら、指を以つて數へ示めすやうにして『先づ酒屋にやア十圓もやつて、ちよツと氣休めをさせて置いて、さ、お前の心配する質物を出してしまう、さ。さうして四十圓だけをおツ母さんの貯金に一先づ加へてやるがいい。』
『そんなに？』かの女は目を見張つた。そして不平さうに、『どうせ、うちの人になつてしまやア、うちで喰べさせもするし、保險の月がけもしなけりやアならないんですもの！』
『そりやア無論だが、――分らない、なア。』
『分らないツて――？』
『…………』知慧者らしく得意の鼻を暫らく動めかして見せてゐたが、『女と小人は養ひ難しとお釋迦さまは』と、渠は孔子と取り違へながら澄まし込み、『よく云つたものだよ――おツ母さんがたとへどうにでも承知するとしたところで、一度は喜ばせてやらねば可哀さうぢやアないか？』
『それも、ね』と、なほ解しかねてゐる。
『ところで、さて、喜ばせて置いた上でだ、安心させて置いた上でだ、どうだ、ちびり、ちびりと暮しの困難なのを口實にして引き出させることは、お前がおツ母さんとの寢もの語りにでもできることぢやアないか？』
『なアるほど、ね！』妻は悟つたらしくその膝の上を打つた。笑ひながら、『あなたは餘ツぽど知者で

す、わ。』

『そりやア知者であり、また聖人であるからして』と、尤もらしい口調になつて、『そのまこと神に通じて、えへん！』床の間の方を見て、『殿さまにも賞美されたほどの活け花ができる！』

『なんだか、どこかの宗匠さんか、なんかのやう、ね』と云つたが、それから思ひ出したかして、かの女は『さうさう――それはさうと、ね、さツき、助平ツたらしいおぢイさんが訊ねて來ましたよ、眞ツ白なしらがの、さうして「初めて伺つた者ですが、こちらでは瓢簞のお手入れをなさつて下さるさうで」ツて。あんまりじろじろと家の中を見まわしたりして、變てこだツたから、『はい、致しますが、今本人が留守ですから」ツて歸してしまつたの。』

『なぜもツとよく云つてやらないのだ――お客さんを逃がしてしまうやうなものだ。』

『でも、何だか氣味が惡かつたんですもの――わたしでは分りませんから、また來て下さいツて云つては置きましたが、ね。』

『どうせ、おれのところにやア碌な奴は來ない――酒好きか、さうでなけりやア、その浦島のやうな變り物の外は、な。』

『そりやアさうです、ね。兄さん夫婦のやうな人が來ると、うちにやア木に竹をついだやうで釣り合はないツて、あの面白い方の請願巡査がこないだ云つてましたツけ。』

『何でもいい、さ。兎に角、百圓が取れた上に瓢箪が賣れて吳れりやア、それこそ瓢箪から駒だア、な。』

『でも、大村はいつもなまづを摑まへるやうなことばかり云つてるので、瓢箪道樂がよく似合つてるツて、いつか兄さんが機嫌のいい時に笑つてましたよ。』

『そりやア、馬鹿正直な兄さんには摑めないだらうが、おれにやアそれができる。また、それができないぢやア、この冬向きになつて、お前にせよ、おれにせよ、碌な衣物一つ着られないだらうぢやアないか？』

『ほんとに、ね――けさも酒屋が來た時、面倒くさいことを云ふので、もう、どうでもしろと云つてやりたかつた程だツたんですが、ね、若しあすのが取れなかつたりしようものなら――？』

『大丈夫、さ。』

『あなたばかりさうきめてゐたツて――』妻は今更らの如くその問題にばかり心配を向けたかして、ふところ手の兩手を以つて襟の合つた胸のあたりをふくらませて、その上へかの女の下げたあごを押しつけるやうにして、暫らく下を向いて考へ込んだ。

『…………』克衞はかの女の樣子を見て、私かに自分の身うちに俄かの血が湧くのを感じたが、一方ではまだもツと酒が飮みたかつた。女なんてあたたかに丸めてやりさへすりやアと思ひながら、殘り

の酒を手酌でつづけた。そしてあす取れる金を自分の思ひ通りに處分した曉、この繼母や淀橋の兄へどう云ふ風に理窟を附ければいいかを考へた。そしてどうせそれをみんな使つても、實は、まだ不足すると云ふ渠の勘定のおもてには、繼母の今持つてる貯金帳の數字が浮んでた。心の奥では決心ある忠告が聞えた、『親を素ツぱだかにしたツて養つてやつてれば申しわけは立つ！』

『もう、お休みなさい、な。』これは妻が夜、思案に餘つたとき、いつも發する言葉であつた。

『ところで、おい』と、渠は一しほ聲をひそめて、『お前は百圓そツくりなら足りると思つてるのか？』

『…………』云ふまでもないと云ふやうな目つきをこちらに向けて、『そりやア、ちやんと勘定して見れば、百圓が百五十圓でも足りよう筈はないぢやアありませんか？』

『だから、覺悟しろよ。』

『覺悟ツて？』

『…………』ナイフを持つて喉ぶえを横から切るやうな眞似をして見せた。

『えツ！』後ろへ少しからだをそらせた。

『しイ！』渠はひら手で低く制止して、ありツたけの意氣込みを最も低い聲に籠めて、『馬鹿！』

『さう――すると――』かの女は今度は不審の顏を寄せて來た。

『おツ母さんの、な、今持つてる貯金をも一緒に引き出してしまうのだ！』

『…………』にやりと笑つてうなづきつつ、その顏を引いたかと思ふと、もう秘密は呑み込んだと云ふ樣子で、當り前の聲で、『それもできないことはない、わ。』

『二三日たつてから、な』と、顏でかの女を追つて行つた、その耳もとで、『ゆツくりと、おれの當直の晩に寢もの語りで――無理に――また承知させて。』から云つたが、この當直をうそに拵らへて一と晩を品川へ遊びに行くやうなことは、またとできないか知らんと考へてた。

『…………』機嫌よく首を動かしたのが、かの女の同意のしるしであつた。

『奥さん、濟みませんが、どうか今一本。』開らき直つて、斯うから德利をつき出すと、かの女は笑ひながらそれを受け取つたが、立ち上る時に云つた、

『買つて置くからいけないんです、わ。』

『ぢやア、この時刻にでもその都度買ひに行つてくれるか？』斯う云つたあとから、相變らず撫でてた瓢簞をためすかしながら雷燈の方につき出すと、その丸い尻が可なりてかてかと光つた。

五

そこへ妻が、もう、燗をして來たと思つたので、渠はその方を見向きもせずに、叱るやうに、

『さう生ぬるいのを持つて來ちやア――』

『わたしですが、ね』と、案外はツきりした聲を出してそツと足を運んで來たのは繼母であつた。くたくたした綿入れの、それでも絹物の寢卷きを着たままで、足もともふらふらと半明きのふすまのふちに掴まつた手を放し、二三歩よろめくやうにして、克衞のらツきよと香の物とが少したべ殘されてゐる膳の向ふにぺたりと坐つた。その不斷でもただでさへ意久地なくいぢけてゐる瘦せ顏が何だか一層いぢけていやな心の生地のまた生地が見えるやうな上に、またこちらの妻が二人切りのところでは『おツ母さんの猫かぶり』と稱してゐるそらほほゑみの影だにも口もとへ浮んでゐなかつた。本來は顏立ちのいいところへ持つて來て、うそにもそのお箱の微笑を見せると、內情を知らぬ他人は皆如何にも優しい上品な御隱居さんだと云つた。が、そのおもかげは今どの筋肉にもにほひさへしないで、ただ恨めしさうな目つきで何か云ひたさうにこちらを見つめたので、克衞は直ぐその意を測り知つた。

『…………』は、はア――今の話を寢たふりで、また狸寢に聽いてゐたんだな、と思つたが、さうは見せないで優しく『おツ母さんでしたか？』

『え、ちよツと、ね、云つて置きたいことが――』餘りと思はれるほど生まじめであつた。そしてさう生まじめに出られては――きツと、今ふたりで相談した計畫をぶち毀わしにかかるのだらうから――面倒でもあり、不利益でもあると考へ、渠は親切づくにまぎらし、

『まア、おツ母さんは』と、優しみをつづけて、心配しないで安心して寢ていらツしやい。わたしが

お竹と相談して、萬事あなたの不爲めにはならないやうにしますから。』
『それも結構とは思ひますが、ね――』
『また「が、ねえ」が初まりましたよ――それに、おツ母さんは病人でしよう。その病人を種にわたし達は金を受け取らねばならぬのですから、肝腎の病人が直つて起きてゐられることが向ふに知れちやア、わたし達の計畫はおじやんになつてしまひますよ。』
『なるかも知れませんが、ねえ――』
『そんなことを云つちやア、おツ母さん、大村の骨折りに對してわたしが申しわけがないぢやアございませんか？』お竹は飛び出して來て、繼母の後ろにつツ立つた。
『…………』繼母は當惑してまた恨めしさうにその方をうは目にふり返り見て、訴へ聲で、『さう云はれては、わたしばかり迷つてしまひます、わ。』
『迷ふからいけないんぢやアございませんか？　あなたの癖ですよ、元からの！』お竹は隨分つけつけ云ふのであつた。
『…………』繼母の目は克衞の方に轉じたが、それが――丁度かの女自身の落ちつきどころがこれまでにもなかつたその通りに――直ぐまた克衞からかの女の膝もとなる疊の上に移つた。
『…………』克衞は三界に家がないと云つてもいい婆アさんを本心では全く馬鹿にしてゐるのだが、

利益上繼母の機嫌を取つて置く爲めと思つて妻の方をたしなめた、『お前がまたさうつけつけ云ふのも決していいことぢやアない、さ。』
『それは、いつもふつつかな』と、繼母は自分のことを謙遜して、『わたしですから——子供の方から叱られても止むを得ませんのですが、ね。』
『でも、おツ母さんは悉え切らないから——何か云ふことがあれば早くおツしやいまし、な。』お竹はそれでも茶の間の方から病人のどてらを持つて來た。そして母の後ろから着せてやりながら、矢ツ張り、つんけんした口調で、『風でも引いたらまたおくすり代がそれだけ損になるぢやアございませんか？　たださへ自動車の爲めに手を燒かせられたり、面倒が重なつたりしてイるのに——』
『……………』克衞はお竹がどてらを母に着せかたが少しあらあらし過ぎると見ながら、實はこの事件の爲めにどれだけ得をしただらうかと考へた。さきにお竹とも一緒に勘定して見たことだが、醫者の往診料、藥り代・病人の食費、看護婦料とその食費などを大體に見つもつて計算した金額を、お竹の兄が向ふの相手から受け取つてあづかつたその金のうちからまた受け取つた。が、すべてそと輪そと輪にゆツたりと見つもつて置いたので、十分に餘裕が出た筈だ。それに、また、看護婦は初手のかけ合ひの時に怪我を大きく見せる爲め、假りに——而も第三等のを——雇つたのであつたが、かけ合ひが首尾よく濟んで第一回の金を取ると直ぐ解雇したから、それだけまた別に浮いて來た。

病氣の本人も老體の而も氣の小さい女であるから、ただ自分から驚きを大きくして、精神的には隨分よわつたやうだ。が、實際は自動車に敷かれたのではなく、餘ほど進みがゆるんだところで押し倒されただけであるから、石で打つたと云ふあたまの怪我その物も大したものではなかつた。いツそのこと、葬式を出さねばならぬ程の怪我であつたら、もツともツと金になつて、而もこちらの費用は――簡單に、こツそりと葬儀を濟ませればよかつたのだから――もツと少くて濟んだだらうに。惜しいことには、こちらが本人によく云ひ含めて、精神的にも肉體的にも餘ほど重大な負傷のやうに見せかけてゐただけだから、こちらでわざわざ選んで頼んだ醫者も――本職だけによく知つてゐて――さう熱心に見舞ひにも來ず、藥だツて特別な物は吳れない。それだけまたこちらは金の上ではらくだ。

然しそれらの利得はみんな、もう、どこかへ飛んで行つてしまつて、相變らず今日を窮々してゐることは同じなので、やツとまた二度目のかけ合ひの手だてを思ひ付いたのだ。だのに、それを繼母に邪魔されては溜るものかと思ふと、渠にはその繼母と當の怪我人とが同一人ではなく、別なもののやうであつた。

『さア、お云ひなさい、な。』お竹が繼母の横手に坐わつて、ちよツと膝を進めるのが渠に見えた。

『さう云はれると、ね――』一方はまた他の一方を見て、無理に愛相笑ひをした。

『さう刑事が泥棒を拷問するやうにおツ母さんを責め立てないでも』と、渠は斯う云つたのを繼母の

方への同情と見せたつもりで、實は斯うなつては仕かたがない、さ、と云ふ意味をお竹に司くばせし ながら、『おツ母さんの云つて置きたいと云ふことを聽いて見る、さ。』

『だから、聽からとしてイるんぢやアございませんか？』妻の斯うふくれツつらが渠には如何にもを かしくなつたほど、渠の心の奥には然し餘裕が生じて來た。何と云はせたツて高が氣のよわい婆アさ んのことぢやアないかと。

『別に――わたしは――改まつて出るわけもないのですが――』

『ぢやア、いツそのことお休みになつてたらいいぢやアありませんか？』

『まア、さうつんけん云はないで』と、渠はまた妻の言葉を制したが、酒が待ち遠しかつた。

『おう、お燗ができ過ぎるぞ。』

『………』お竹はつんとして立つて行つたが、それは無論その所天に當つてるのではなく、母の何か云ひ出さうとして例の如く云ひ切れなくなつたに對するぢれツたさを表する仕うちだとは、渠に分つてゐた。で、渠もこの婆アさんがどうして斯う貴え切れない性質だらうと思つて、殆ど相手にせず、その方を見ないで、瓢簞をまた醉ひにまかせていぢくつてゐた。

『わたしの怪我も、もう』と、繼母はおづおづ、と云ふよりも寧ろ最もいやアに遠慮勝ちに、――そして渠がちよツとその方にふり向いて見ると、わざとらしく微笑を口に浮べて――語り出した、『直つ

たも同前ですから、ねえ、あす、ちよツと淀橋へ行つて來たいのですが――』

『…………』人を馬鹿にしたことをと思つたので、渠は見向きもしないで、『おツ母さんが褥からわざわざ出て來てまで云つて置きたいと云ふのはそのことですか？』

『さうでもありませんが、ね。』

『ぢやア、別に何か御不平がありますか、こんなにわたし達があなたの爲めに奔走してゐますのに？』

『不平なんて、そんなことは――』

『ぢやア、淀橋へ行つてどうします？』ここで渠は相手を押さへるやうな目つきをして見向いた。

『…………』繼母は丸でおのれのからだの中へ消え入るほどをどをどした風を見せて、もぢもぢしてゐたが、渠のをどかし顏がかの女を默つてはゐさせなかつた。『ただ――あちらでも心配してイるだらうと、ねえ――さう思ひますから。』

『病氣のやうすは、然し、あちらへたびたび知らせてゐますよ。』

『また自動車に敷かれるつもりですか？』わめきが聽えたかと思ふと、『まだそんなによぼよぼしてイて』と云ひながら、お竹は座に立ち戻り、所天がからの猪口を持つて待ちかまへてゐたのに酌をした。

それから、別に用意して持つて來たのを母に與へて、打つて變つたほど優しく『まア、一つ熱いとこ

ろを召し上れ、この上にお風でも召したら困りますから、ね。』
『ぢやア、すこウし、ね。』繼母は嬉しさうなゑみを含んで、右の手に左りを添へて手もとも器用にお竹の酌を受けた。
『…………』克衞は自分の妻の如才なさをも私かに感嘆したが、また、繼母の器用を見て、は、はア、この手で死んだお父さんをうまく手だまに取つてゐたのだ、な、と思つた。
あの唐變木のやうに頑固な淀橋でさへ、二度目の母が來て種々ごたごたが生じ出した間に、寒中のこと或日、大道で突然、お高祖頭巾を被つてやつて來る女に行き合つたところ、向ふからにこにこ笑つたのをいい女だと思つたら、それがこの母であつたと云ふ。故人の得意であつたことが想像されるが——
克衞がお竹と結婚する數年前に既にこの世になかつた故人は、その總領息子に氣質も姿もそツくりであつたと聽いてるので、渠には故人をどんな人であつたと考へて見る每に、淀橋のが思ひ出された。するとまた、繼母がその淀橋を敬遠して、かの女が九歲の時から手しほにかけて育てた淀橋の弟の方におやぢのあとを繼がせようとたくらんで、最後に失敗の結果、かの女の亭主の四十九日が濟むか濟まぬうちに、かの女の腹を痛めた信州の娘へ逃げて行つたその話が、お竹から聽いたままに、渠の心に浮んで來るのであつた。

ところが、かの女はその信州の娘にも氣が置けて、さんざんこき使はれたあげくに、また東京へ逃げて來た。そして母の姉の片づいてるところにも永くは氣がねでゐられないで、再びまた本籍のある淀橋へ舞ひ戻ることに詫びが濟んでたところで、當分こちらを手傳つて貰つてるうちに、今度の災難に逢つた。

『あの女は自分に誠實が無いところから、人をも疑りツぽい爲めに、死ぬまで落ち付く場所がないのだ』と、淀橋が云ふのは尤もだらう。それが兄の方へ行くところをこちらで横取りしてゐる以上は、可哀さうでもあるからいぢめないで養つてやらうとは、渠も淀橋の內意を受けて妻と共に相談づくで承知してゐることだが、渠には、然し、今回のやうな手段をめぐらしてゐるのがかの女をいぢめてゐることになるとは思へなかつた。

渠が醉つてる上にもまた二三杯を重ねるまでは、みな無言であつた。それから先づ口を切つたのはお竹で、前のやうながさつさは無くなつて、調子だけは物靜かに、

『おツ母さんが淀橋へ行くとおツしやるのは、こちらのことを裏切るおつもりでしよう?』

『いいえ、飛んでもない!』聲がからだと共に顫えて、克衞とお竹とを等分に見た顏が眞ツさをになつた。

『…………』お竹がそれを見て、暫らく卑しめるやうな目つき、口つきをしたのが克衞にも見えたが、

直ぐかの女は落ち付き切つた振りで、『さう何もびツくりしないでもいいでしよう――兄さんなんぞよりやア、わたしの方が子供の時からおツ母さんによく育てて戴いて來たんですから、ね。』

『そりやア、ね――』少しゆツくりした微笑を浮べて、『お前さんが十三で、幹雄が九つの時からですもの、ね。』

『それだのに、おツ母さんは少し水くさいぢやアありませんか、今ぢやア兄さん、兄さんツて云つて、わたしのことなんかちツとも思つて下さいませんよ！』

『さう云ふわけぢやア――』

『でも、あんなにこないだ中から相談して、すツかりうちの人になつて一緒に暮すことにするから、どうか大村にもわたしから氣を惡くしないやうに賴んでくれろとおツしやつてながら、俄かに――まだ病氣も直らないのに――淀橋へ行きたいなんて――？』

『さう、わたしは、何も、惡い氣で云つたんぢやアありません、わ。』

『ぢやア、こツちへ惡く取れるやうなことは云はないやうにしたらいいぢやアございませんか？』

『では、わたし、やめます、わ。』

『それが當り前ですとも！』　お竹のよわいものを押し伏せるやうな聲は尖り氣味に動く口のさきから投げ出された。が、それから少し口をゆるめて、『おツ母さんは兄さんの云ふ通り氣がよわくツて、

人を疑りツぽいから、何でも御自分から約束したり、依賴したりして置くことを――自分から氣をまわして――ぶち毀わしてしまうんですよ。若しおツ母さんが今度またこツちの親切を無にして、淀橋へ行つてしまうとしたら、わたしは兄さんにこれまであなたがわたしにおツしやつたり、賴んだりしたことをすツかりうちあけますよ。初めから兄さんのことは嫌ひであつたから、行きたくないとおツしやつてたツて。』

『そんなことは云ひません、わ。』繼母は不平さうに險呑がつた目をそツとお竹に向けた。

『云つたぢやアございませんか、こないだ』と、また押し付けるやう。

『…………』繼母はただやり込められて、言葉がなかつた。

克衞はその間を獨酌しながら、二人の問答を傍聽してゐたが、繼母の態度を如何にもぢれツたく思つた――斯う煑え切れないのがこちらの爲めには却つて都合はいいのだが――なぜかの女はしツかり答へないのだらう、そりやア云つたことは云つたが、お竹の押し付けるやうにさう絕對的に云つたのぢやアないとでも、と。これだから、どこへ行つてもかの女が嫌はれるのであつて、それをまたこと更らに嫌はれまいとして、人から云はれた通りにこツちへべたり、あツちへべたり、ただ人の機嫌取りに心にもないことを云ひ出し、それを責められると、直ぐまた反對に『そんなことは云はない』と云ふのだ。その云ふことに少しも道理の道すぢが付いてゐない！

『お父さんのふた股膏藥は、もう、これからおよしなさいよ。』お竹は間を置いてから云ひ出したが、『若しまたうちにゐられなくなると、兄さんのとこにだツて信用を失つてゐられないのです。さうすれば、お父さんはどこへ行きます？』
『…………』まるで子供に云つて聽かせるやうであつた。
『わたしは、もう、こちらにお世話になるときまつてるのですから、ねえ――』
『まだ幹雄がゐるとお父さんはお思ひになるかも知れませんが、ね、あれはまだ獨り身の癖に、まだ自分の暮しだけをやツと立てて行けるばかりですから、ね。』
『さうさう！　お父さんは淀橋を廢嫡して幹雄さんに家を繼がせるつもりであつたさうです、な。』
克衞は今思ひ出した振りで微笑しながら口を出したが、これは繼母をお竹と一緒になつて責めるつもりではなかつた。ただ話題を全く他へ轉じて、自分等に不利益な話をやめさせようと思つた。
『そんなことは――』
『ないでも無かつたでしようよ』と、お竹が受けて、『兄さんがお父さんの死に目に逢はなかつたのも、お父さんが兄さんの來ないうちに早くお父さんに幹雄をあと取りにすると云はせよう、云はせようとして、それを待つて二三日も通知を後れさせた爲めです、わ。』
『わたしはそんなことを――』

『でも、兄さんはさう云つて今でもおこつてます、わ。』
『なアに、兄さんは馬鹿だ――おほ馬鹿律義だ。女優まげのおかみさんのお尻に敷かれて！』克衛は母や妻の顏がぼうツと見えるほど醉つてゐたので、目をつぶつて、ごろりと床の間の方向へ横さまに倒れた。すると、その勢ひで、ふと、忘れてゐた瓢箪をばりりと云はせた。
『や、しまつた！』
『毀われたでしよう？』直ぐお竹はふり向いたが、その所天が半身をはね起したところへ膝を進めた。
『大變なことをしてしまつたぞ。』息苦しいので、右の手を疊に突いたまま、腰を少しあとへ引き、大きくふくれた方のを左りの手に取り上げると、小さいふくれは滅茶々々になつてゐて、細い口と共に散らばつてる。『畜生』と獨り言のやうに低く叫んで、手のをほうり投げると、そのはづみがころがつて行つて、生憎に母の膝に當つた。
『あぶないぢやアありませんか！』お竹は相變らずロやかましかつた。
『惜しいことを』と云つて、繼母はそのそばのを拾ひ上げて見た。
『だから、醉ツ拂ひはいやだ！』
『…………』渠はこの損害賠償も、ふん、あす金が取れさへすりやアと考へながら、膝を折つてばた

りとあふ向けになつた。
『どうするのですよ、この、川西さんに頼まれたのを?』お竹は散らばつてるかけらを拾ひ集めてるやうすであつた。
『先づ二十圓の見舞ひ金を出して置いて』と、渠の天井に向つて吹く息にはちよツとまた洒落を云つて見る餘地ができた、『向ふの樣子をためして見る、さ。』
『なアんだ、二十圓が二十錢にも困つてる癖に!』
『若し向ふの相手が兄さんのやうにお人よしなら』と、渠は妻の冷かし笑ひなどには頓着せず、目にはぼうツと締りのない――それでゐて、自分の私かに覺めた部分にばかり血も力も集つて行くやうな――うす暗い世界を自分の閉ぢたまぶたの中に浮べながら、自分の聲で自分が妻のにほひのする方へ引ツ張られて行くやうだ、『それツ切りで御免を被つてしまうし、――若しまたア』と、そこへ徒らに調子長い演說口調の强聲をつけてから、その聲を今度はどうでもいいと云ふ風に惚けさせて、『相手がおれのやうに利口に出て來たら、おれも亦例の通り人氣と名譽を重んじて百圓なり、二百圓なり、自腹を切らねばなるまい、な――みがき瓢簞製造株式會社取締り大村なにがしの體面上、な?』終りになるに從つて手足もぐたりと延びてゐた。
『まア、そんな夢でも見て、さ――』

『さうだ、さうだ。』

『もう、お休みになつたらどうです？』

『ああ、休まう。』だらけた目ぶたをちよツと明けて見ると、妻が膳をかたづけてゐた。口をあくのも臆劫になつて、『君、僕――失敬。さア、お前と――一緒に――休まう。――おツ母さん、もう、休みましたか？――さう頑張らないで――ね、休んだ方がよう――ござい――ますよ、――安心して、ね瓢箪が――あなたの――身がはりになり――ましたよ。』

いつのまにかとろとろしたものと見え、渠が氣が付くと、自分を妻がその取つた褥のそばで呼び起してゐた。そして繼母はゐなかつた。

戸じまりを忘れたがと思つて、半身を起しながら障子の方を見ると、切りがらすのそとは暗かつた。

『お稲荷さんのあかしが無用心だぞ。』

『戸を締める時、とツくに消しました、わ、ね――ぐうぐうお鼾で、何も知らないで、さ。』

『おい』と、聲を幽めた、『おツ母さんは何を云ふつもりであつたのだらう？』

『きまつてまさア、ね。』これも最も低い聲であつた、『寢たふりで聽いてたんだ、わ――こツちの話を。』

『でも、淀橋へ行くツて――』

『そりやア、あの人の本意が云へなくなつた爲めの、中途からの出たら目です、わ――あのざまで行けますものか？おまけに兄さんのとこでは姉さんが氣六ケしいからツて、十分わたしがをどかしてあるんですもの。』

六

その翌日、いよいよ金は繼母の印形を持つて行つて要求通りに取れたが、大村夫婦が好きなやうにそれを處分して行くと、その全部が少しも殘らなかつた。

それでまた夫婦が私かに相談した上でだが　繼母へは當てにした百圓が取れなかつたと告げ、僅かにその半額を受け取つたが、それツぱかりではどうしても現在の急場に間に合はないと稱した。そして克衛はその晩、御殿の當直をわざと他の人と入れ替はることにして、家を明けた。その夜、妻をして繼母に寢物語りで貯金をすツかりこちらへ渡すやうに說かしめる爲めであつた。

そしてその翌朝、めしを喰ひに歸つて來て見ると、繼母は逃亡してゐなかつた。

『ほかに何も持つて行つたものはないやうですが、肝腎の貯金帳と保險の證書とがございませんよ。』

『ゆふべ話したのか？』

『ええ、受け取つた五十圓ではとても拂ひがやり切れないから、ついでに貯金の方も貸して下さいツて。すると、なかなか承知しなかつたけれども、最後に、では、まア、あすのことにして、ね、とおツ母さんは云つて置きながら。』

『大事の玉を逃がした、なア――氣が利かない！』

『でも、逃げたものア仕やうがない、わ。』

夜になつて、燒けの爲めに酒をまた規定以外にすごしてゐる時、淀橋から『大至急親展』の郵便を受け取つた。そして渠はうす氣味わるくお竹と共に開らいて見て、酒の興はその場にさめてしまつたけさ、繼母が車で來たが、熱が出て寢てゐるとある。

『そりやア當り前でさア、ね。』お竹は憎憎しげに、『まだからだが本統でないのに、朝早くわたしの寢てゐるうちに逃げ出したんですもの。』

『然しよく行けた、なア。』

『電車のない時刻でしたから、車に乘つたのでしようが、――考へれば考へるほど憎らしいおツ母さん、ね、矢ツ張り兄さんの方へ行つてしまつて！』

『なんだかやかましいことを書いてあるぞ。』克衞がそのあとを讀んで見た。既に、こちらが金をどう云ふ風に取つたかと云ふことは、兄が向ふへ電話をかけて聽いたので、よく兄にも分つてゐた。汝等

の如き恩妄な强慾非道者の顏を見たくないから手紙で云ひ送るのだとあつて、わざと鹿爪らしく簡短に書いてあるから、二人には隨分その意を解しにくかつたが、箇條書きになつてゐる。

第一、けふから母は引き受けたから、母に屬するものを悉皆送り屆ける事。

第二、母を二ヶ月たらずも女中がはりに使つて千文の小使ひ錢だに出さなかつたのに、そのうちに怪我をしたのだが、病氣の間の費用一切は前以つて渡してあるから、金錢上では貸し越しこそあれ、汝等に勿體ぶらせるやうな恩義は受けてをらぬ事。

第三、今回二度目として受け取つた百圓（但し五十圓とはうそだ）は、兎に角一應耳をそろへて母の手もとまで屆けて來い。その上で汝等が取るべき理由ある分があらば取らせるし、向ふへ返却すべきものなら返却する。

『百圓を取つて置きながら、五十圓と稱し、その上に母の樂しみな、いのちともさせてある貯金までも寢もの語りに事寄せて卷き上げようとしたお竹は、汝と同穴の狸である。母はそれを聽かせられた時ぞツと身の毛がよだつたと云つてゐる！』と附言してあつた。

『何もかも云つてしまやアがつたんだ、わ。』お竹の言葉はきたなかつた。『どツちが狸だか、考へて見るがいい！』

『兎に角、返事は出して置かないぢやア』と、克衞はその熟しくさい額にまじめ腐つた立て皺を寄せ

た。

『箇條書きの通り番號を打つてはツきりと返答せよツて、兄さんも小六ケしいことを云ふ、なア。』

『なアに、その方がこツちも簡單にごまかせていい、わ。』

『無論、ごまかしが這入らないぢやア、こツちの申し開らきにすぢ道が立たんから、な。』

相談の結果、できあがつた文面には左の如き意味を出した、――

第一、こちらの誠意誠心を無にするやうな婆アさんは、以後お世話もできないから、無論、のしを附けても、その荷物は返します。

第二、こちらには婆アさんを三ケ月ばかり世話したと云ふ恩義こそあれ、借りた金はありませんから、そのおつもりでゐて下さい。

第三、百圓を五十圓と云つたおぼえはこちらにはありません。尤も恩義も知らぬうそ付きの婆アさんのことだから、出たら目に何と申し上げてゐるかはこちらでは分りません。但し、その現金は病人がこちらへ來てゐた爲めに被つた、いろいろ云ひ知れぬ損害を償ふ爲めにすツかり使用し盡しましたから、もう手もとに殘つてるのはありません。これは兎に角こちらが奔走して取つたものですから、奔走料として貰つたことにして置きます。

『どうだ、うまい考へが出たらう』と、渠は手紙を書き上げてから自慢した。『兄さんはおれのことを

愚妄とか何とか書いてあるけれど、その愚妄なら何で斯う云ふことが云へよう？』

『まア、これでいいでしようよ。』かの女は手紙を飛び讀みしながら、『若しまさかの事になつても、どうせ兄弟ですもの、兄さんだツて、さう分らないことは云はないでしようから。』

『それにしても、お前が寢もの語りにおツ母さんの貯金をしぼり取らうとしたことだけには、答へないで知らんふりをして置く、さ。』

『それがいい、わ。』かの女の言葉にも、もう、心配らしいところはなかつた。

『入れ智慧をしたおれまでが』と、にこにこしながら、『惡人になつてしまうから、なア。』

『ぢやア、わたしばかりを惡人にして置くの？』かの女の聲が突然調子高くなつた。

『しいツ』と制しながら、克衞はふと三疊の間の方へ目を向けた。こないだぢうからの度度のこそこそばなしが習慣になつて、何となくまだ病人が隣室に寢てゐるつもりであつたのだ。が、氣が付いて見ると、その病人の着てゐた蒲團やどてらをも、今書いた手紙と共に、明日は早速淀橋へ送り届けるのにまた費用がかかるのであつた。

――（大正五年十二月）――

お園の家出

一

お園は往來へ飛び出したのだが、孫の文ちゃんのことだけは忘れられなかつた。そのおも影を寶物でも抱いてるやうな思ひで西の久保通りを飯倉の方へ歩いてゐた。

まだ秋の初めのあツたかい太陽が午後二時頃の光りをかの女の年の割りには綺麗だと云はれる横顔に照らしてゐる。足は段々櫻川町の家を離れて行くのだが、心はまだ娘との間にふとした云ひ合ひが起らなかつた時の場所にゐて、娘が海上さんに生んだ兒を膝のうへに抱き上げてあやしてゐる。

『おう〳〵、文ちやんかい！』と、獨りでうちほほゑみながら、それでも低い聲に調子をつけて、でたらめに文句の飛び〳〵な歌を歌つた——

『ずゐ〳〵ずツころばし、ごま味噌ずゐ、
茶つぼに追はれてとツぴんしやん！
ぬけたアらどんどこしよ——

* * *

かいるの目だまに灸せいて、ソラ、
それでも飛ぶなら飛んで見よ。』

孫のゑがほまでもそツくりと浮かんで來たので、足踏みにもおのづから力づよい調子がついて來た。

『向ふ通るは清十郎ぢやないか――

* * *

てん、てん、天竺お釋迦さま！』

『氣ちがひだ、氣ちがひだ』と云ふ聲にかの女はふと踏みとまつて見ると、二三名の子供がこちらを見て馬鹿にしようとしてゐるのであつた。

『あたしは氣ちがひぢやアないよ。』

『…………』子供はおそれてあとへ引いたが、

『馬鹿にしてイる、ね』と、お園は少し怒りを含んだ棄てぜりふでまた歩き出した。

『やアい、やアい！』子供は少しの間また後ろをついて來たが、お園がよく孫の藥を買ひに行く藥屋の主人に途中で挨拶したので、渠等はこちらを近所の人と分つたのか散らばつて行つた。

二

かの女が今さして行かうとするところは、もと同藩のよしみある人の娘なるお須磨さんが方づいてる山本家だ。ひと手のない時にこれまでにも一度自分の雇はれ仕事として手傳ひに行つたことがある。この頃でもまた來てくれろとの頼みは來てゐたのだけれども、孫が段々に可愛くなつて來たので、何とか彼とか申しわけをして斷わつてゐた。尤も本山家をばかりではなく、他のお得意さきをもすべてさうだ。それに、もう、自分の職業としての人手傳ひにも――もう、數年間のことだから――

自分ながら飽きが來てゐた。

『世が世ならば、これでも〇〇藩の舊家老の娘だし、また立派な士族の奥さまであつたし、どうして、どうして、人さまにゆびさし一つさせはしないのだが、ね。』家にゐて不平がある度毎に、きツと斯うした言葉が出た。そして自分の若い時の不しだらや、今の成りさがつた性根などは少しも考へて見ることはなかつた。『ほんとに、世が世ならば――。』

『また、おツ母さん、もう愚痴はおよしなさいツてば！當世は何と云つても、お金がなけりやア駄目ですから、ね。』一とき大阪の商家へ奉公に行つてた娘のお爲は、また、こんな時にはいつもこんなことを云つた。これが母親としての耳にはいや味に取れる時もあり、また仲直りの言葉になる時もあつ

た。
お園にはこの娘の外に今一人、重孝と云ふ男の子があつて、海軍の軍人志願で、その川意の爲めに攻玉舍中學へ通つてゐるが、不勉强の爲めに既に三度も落第をして、本年十八歳でありながら、まだ三年生にとどまつてる。それが氣になつて、母親としては一つのおほ心配で、かの女は渠の學校のことゝなれば、いつも、昔の四書五經をでも習つてるものゝ如く想像して、何かと云へば、そんな書物にある文句を口に呼び起して、やさ〳〵と教訓めいたことを云つて聽かせる。そして子供から品行點などはどうでもいい、代數や幾何で六ケしいのだと云はれても、
『何でも人は品行と勉强が大切だから、ね。』
『その勉强ぢやアないか、數學も?』
『ぢやア、しツかり勵めばいい。』
『なアに、おれができそくなつて生れたんだい！』
『馬鹿をお云ひでない！』こんなことがもとになつて、家ぢうがもめの渦卷きになつたのは度々のことだ。で、お園は家ぢうの渦卷きをすべて重孝のせいにして、『この子はあたしの子でありながら、あたしの子のやうでない』と、渠のゐる前で訴へたこともある。すると、渠はわざと大きな聲で、
『おれは死んだお父さんの子ぢやアない！』

『ちやア』と、かの女は宥めるやうにして、『誰れの子だと云ふのかえ？』

『無論、海上さんのさ。』

『馬鹿をお云ひでない！』俄かにむきになつて怒りを見せたが、それは渠とお爲との手まへをつくろふのであるに過ぎなかつた。

と云ふのは、お爲が三つの時に重孝が生れたのだが、故人の種でないことには、如何に故人の死にぎはをその宿り時と見つもつても、月が二ケ月合はぬのであつた。そこを、とう／＼、うはべだけ體裁よく工夫して、てあつた。

『この子は不思議な子で、十二ケ月おなかに宿つてゐたんでございますよ。』などと云ひ通して來た。けれども、自分はまだその人と實際の關係がなかつた時からも、長屋ぢうでは既にあるかのやうな評判が立つてゐた。

『海上の奥さま』などと小い聲でかげから冷かされるのが何となく嬉しかつた。そして自分も何かと云へば、

『海上さんが――海上さんが』を殆ど習慣の如く口にした。下宿人として二階に置いてあつた人のことで、雇ひではあるが、〇〇省に出勤し、本人が九州の有力な或藩に生れた關係から、お役所ではなかなか大切に持て做されてゐた。

或時など、無遠慮な話し友達があつて、こんなことを面と向つて云つた、

『そんなに海上さんがいいのなら、いツそのこと、あの人の奥さまになつたらどうです、の――お年だツて丁度釣り合つてゐます、わ、ね。』

『どうかお取り持ちを、ね――おほ、ほ、ほ！』

まだほんとうの時でなかつたから、冗談も云へたのだ。然し親戚の或女が、

『お園さんの顔や聲には誰れでも惚れぼれするが、少しうは氣なのがきずで、ね』と、かげ口を云つたとかで、かの女はまたその女に對するかげ口を倍にして返した。これもをかしな評判から起つたことであつた。

未亡人になつてからは、一層おほびらにその下宿人と共にこの同じうへした三間の借家住まひをつづけ、重孝が生れてからは、おしめの洗濯までも時によると男の方がやつて呉れた。

『ほんとに、海上さんは親切で、ね、あたしの子供兄弟を自分の子のやうに可愛がつて下さいますよ。』

斯うして十二三年を過ぎたうちに、海上さんは本省で、もう、老朽者のうちに數へられるやうになり、若手の局長の爲めに體よくほふり出されるところであつた。それを僅かに喰ひとめて、求め得たのは支那は長江の上流、〇〇の日本〇〇館勤めであつた。

その出發前に渠は重孝を自分の養子にし、この子とお園との生活費をあちらから送つて來る約束をした。そして姉むすめだけは大阪につてのある商人のもとへ小間使ひにやらねばならなかつた。ところが、六七歳の時から亂暴であつた弟の方が、あまい母親のほかにあたまを押さへるものが無くなつたのを幸ひにして、一層亂暴になり、不勉強になり、金づかひがひどくなつた。それがもとで、お園は人の手傳ひに雇はれて出歩かねばならぬことになつた。

雇はれると云つても、大抵知り合ひのところだから、そこの子供には『をばさん』と呼ばれ、同年輩の女どもにも『さん』づけにされるのを、せめてもの滿足にした。そして、少し氣の利いた家の奧さんなどは、忙がしくない夜のつれ〴〵には、お園の食膳に酒の一杯も出して、

『どうです、今夜は一つお園さんの喉でも久し振りでうかがひましようか、ね？』

『もう、斯う年を取つてしまつては、ねえ』と云ひながらも、二三猪口を引ツかけると、年に似合はず常でも若々しいほがらかな聲が一しほ又ほがらかになつた。そして常磐津の一二段と端唄の數曲とをやつた。そしてそのあとは愚痴になつて、自分の不運のことや自分の息子の不出來などを泣かねばかりに口說いた。

『おツ母さんの三味はうまいが、そのあとがどうも泣き言になるので、ね』と云ふことを或ところで娘のお爲が聽いて來て、これを忠告のつもりで告げたところ、お園は非常に怒つて再びあんな家へは

雇はれて行かぬと云ひ出した。
『あの奧さんがそんなに人の惡い人とは思はなかつた。ありがたくもないお酒を飮ませたり、面倒くさい常磐津を彈かせたり、――『あなたでなけりやア、とても、今どき、さう云ふものを知つてる人はない』なんて、嬉しがらせを云つたり、――さんざ、人をおもちやにして、さ！』
『それがおもちやなもんですか？』
『おもちやでなくツて、さ！』
『なんかと云やア、それがあなたの惡い癖ですよ。』娘は斯う少しきつく答へた。このおもちやと云ふことは、お園がその娘と海上さんとの關係を不平がり出す時には、いつも、よくいや味として引き合ひに出す言葉であつたので、娘の耳には今も亦ぴんと響いたのらしい。『奧さんばかりが云つてらツしやるんぢやアありません、旦那さんも、ね！』
『あの旦那さんだツて、さう、さ。あたしのやうな年寄りをつかまへても、下らない世間ばなしをして、そのあげくはをばさんがお爲さんならうちの女房と取り替へるんだがなんて――お前を少し人並み以上の器量に生んだのがこツちの不仕合せで、こツちがあの旦那さんに馬鹿にされたり、海上さんにはいぢめられたり、さ。』
『何とおツしやつても、ね』と、お爲の尖つた聲はなほ障子のかげからしたが、臺どころのしちりん

を煽いでるままでこちらへ顏を出したらしい。ぱた／＼とうちわの音がしながら、かの女の少し長いあごが突き出て、『おツ母さんは少し愚痴が過ぎますよ。』

『何も愚痴ぢやアない、わ、ね。』お園は娘の視線の達したところを見ると、自分の膝の上に抱かれて孫がすや／＼と眠つてるのであつた。煮物のにほひが客間にもにほつてる。こんなやりくり算段の暮しでかれこれ云つても駄目だと口をつぐまうとは思つたが、あまり殘念なのでまた盛り返すやうに

『ぢやア、あたしの頼るところがないぢやアないか――海上さんは薄情だし？』

『そんな昔の事ア昔の事です！』聲だけで姿は見えなかつた。

『昔の事だツて、ね』と、こちらは半ば口の中で云つたのであつたが、自分の若い時の不始末を娘に云はれてゐるのだと思へば、またいつものやうに辯解して置かねばならなかつた。沈んで穩やかな調子だが、持ち前のほがらかさを失はないで、『昔はお前、人間が皆正直で、君臣義あり、男女に別ありツて、ね、そんなみだらの事や親不孝はなかつたよ。』

『ふん！』鼻であしらふ聲が聽えてから、『そりやア、ずツと昔は、ね――おツ母さんなんかのまだ生れなかつた時は、ね。』

『…………』お園には娘の云ひ返しがひし／＼と胸にこたへて來たので、それだけ娘に對する憎しみが生じた。人の男を寢取つた癖に、よくもよくもさうづう／＼しく口がきけたものだと。『何だとえ、

お前までが重孝同様親不孝になつて！』

『それも、みんなお母さんが悪かつたからですよ！』

『何でもこツちのせいにして！』いよ〳〵娘にも劣らず聲をとんがらせて『お前のだらしなさから御らん、親が許しもしないのに！』

『親の爲めとは知らないで！』お爲は斯う叫ぶと、立ち上つて來て、『その子もお許しのない子ですよ――こツちイ頂戴致します！』

『……………』お園は娘がその子を突然引ツたくつて、また臺どころへ隠れたのを、あツけに取られて見てゐたが、何も云へないほど悲しくなつた。毎日のやうに夫婦が膳に向つて云つてることを思ひ出すと、この高いのにお米があんまり入り過ぎるとか、重孝が馬鹿喰ひするんぢやアないかとか、――可哀さうに、あの育ち盛りを喰べたいだけ喰べさせてやらないぢやア軍人にもなれやアしない。

『ぢやア、おれはめしを喰はないで、頸をくくつて死んでやらア』と、あの子があくたいを云つた時も、海上さんは何も云はずにあの子を握りこぶしでなぐり付けた。そしてこちらへ對しては、

『お母さんがあまいから、仕やうがない』と、いかにも憎々しい顔をして、その額に深い八の字の皺を寄せた。もう、丸で昔のやうな優しみは思ひ出したくも思ひ出せやアしない！そしてそんな時には娘までがあちらの味方になつて、こちらと重孝とに他人か何かのやうな白々しい物の云ひやうを

する。夫婦でぐるになつて、こちと等をいぢめ出す氣だらう――？

『今だツて、親を親とも思はないで――重孝の喰べる分ぐらゐ、あたしがそとでかせぎますから。』私かに斯う思ふと、全く氣が取りのぼせて、立ち上るが早いか家を飛び出し、左右に長屋が二軒づつ並ぶ狹い露地をぬけて來たのであつたが、今一度文ちやんの顏をよく見て置いたらよかつたと思へた。

三

傾いた太陽の光を大道に浴びた櫛卷きのあたまの中では、海上さんが支那から歸つて來た時のことまでにもさか登つて考へてゐた。

あの人のあちらからの送金が半年以上も絶え、音信さへ來なくなつたので、どうしたのだらうと思つてると、突然歸つて來た。

その口ぶりでは、官職をやめたか、やめられたかしたのだから、再び東京へ歸つて來たのは止むを得ないこととしても、別にそれとは無く待ちこがれてゐた者やその子供に對する親切のしるしに、おかねなり、又はその他のいいおみやげなりを多少でも持つて來て吳れたのなら云ひぶんは無かつた。が、思へば滑稽でもあり、物好きでもあることには、何とか石と云ふ物でできた、西藏とやらの佛像を一つ、ただ大事さうに見せて自慢した。それがまた穢いほどくすぶつて、すすだらけなのにはなほ

驚かないでゐられなかつた。

雜巾でこすると、靑ぐろい、いいつやが出たことは出たが、それぱかりに一生懸命奔走しても、誰れ一人本人の望み通りさう高價に買ひ取つて吳れるものはなく、今ぢやア、たツた百圓ばかりの抵當になつて、或人の手に這入つてゐる。丁度いいから、もう、そのままに打ツちやつて置いて、何かちやんとした仕事を見つけて、家の暮しになり、子供の學費になりして吳れればいいのに、いまだにそれを思ひ切れないで――その癖、人のことなどは全く思ひ切つてしまつて――その佛像の吹聽ばかりしてまはつてゐる。

それを初めて自慢さうに見せられた時、お園は呆れて斯う云ふ不平をこぼした――無論、女房並みのつもりでだ、

『あなたは、まア、何と云ふ物好きでしよう、ね、こんな物を持つて來なさつたツて、うちのやうなところにやア飾つて置くところもないぢやアございませんか?』

『家に置くのではない』と、出しぬけから打つて變つた慳貪に、『かねにするのだ!』

『こんなきたない物がおかねになりますか、ね?』

『なるから、持つて來たのだ!』海上さんは斯う云ひ返して並み大抵でない不興げに見えた。

この不興がとう／＼人をあの人のそばへ立ち寄らせないで通したが、つまり、それがあの人のここ

ろ變はりの證據であつたのだ。こちらは折角ぢツと辛抱して丸三年間も待つてゐたのに、――そして歸つた者はもと〳〵通りこちらの家へ這入り込んで來ながら、――もとの關係を忘れてしまつたのか、憎いほど取り澄まして鼻もひツかけようとはしなかつた。こちらも亦、さうなれば、もとの事情が事情で、世間への憚りから正式の夫婦にはなつてゐなかつたのだから、遠慮がちにそツと即かず離れずでゐるより仕かたがなかつた。そして、

『どう云ふ風にうちの暮しを立てましようか、ね』と相談した時、あの人が云つたには、

『あなたは人手傳ひをやつて來たのだから、矢ツ張り、さうしたらいいでしよう――たまには、骨休めに子供のところへ歸つて來たりもして。その代りにですが、ね――その代り、そのウ――あのウ――』

『…………』その口よどみがそも〳〵その下ごころとは氣が付かなかつた。『お爲さんを――奉公させて置いても可哀さうだから――呼び返して、わたしが世話をしてあげます。佛像が賣れさへすれば、もう、どうして、寢てイてらくに暮せますから』ツて――正直に、つい、こちらがその手に乘つてしまつたのだが――呼び返した娘には、いつのまにか子供ができた。が、佛像の方はいまだに賣れる樣子がない。

自分の娘のおなかが大きくなつたのに氣が付いて驚いた時には、早速お須磨さんのところへかけ付

けて行つて、どうしたらいいか相談がてらこぼしても見たことだが、もう、取り返しの付くべきものでもなかつた。自分の娘をやがてはどこか別にいいところへ方づけて、一方では、それに自分の行く末を安心させようと思つたことも空しくなつて、殘念やら絶望やらで自分の身を切りさいなまれたやうであつた。

最初に、娘を茶の間の方へ引きつけて、こツそりと、

『全體、誰れの子だえ』と尋ねると、

『おツ母さんにはまだうち明けてございませんでしたが、——海上さんので——。』

『へえ——』と、實は、思ひがけないやら、ねたましいやらで、あいた口がふさがらなかつた。親と子ほど年は違つてるにせよ、こちらは親として人にも自慢してゐたほどの器量がある娘の年ごろであり、向うは、云つて見れば、まア、獨り身で、いい人だとは云ふものの、昔のことを思へば、隨分その道にかけては口上手の、手くだのうまい男だ。これを一緒に置いて置いたのは、こちらの迂濶、手ぬかりであつた。『お前は、まア、——お前は、まア、——何と云ふ親不孝だらう、大抵は海上さんとあたしとのわけを知つてるだらうに!』

泣き出さないまでに聲を顫はせて、われ知らずふと昔からのことをほのめかしては見たが、仕かたがなかつた。

『すみません！』娘も手をついて、涙をこぼしてゐた。それを見ると、然し、こちらも溜らなくなつてもらひ泣きをした。

『…………』暫らく黙つて、ぢツと娘のおなかのあたりを見つめてゐたが、『一體』と、なみだ聲で『誰れが云ひ出したのだえ——親の許しも得ないで？』

『…………』娘もすすり泣きになつて、『わ、わたしは幾度も——斷わつてゐたん——ですが、——う海上さんが——で、では、——おツ、お　母さんの世話をもやめてしまふツて！』その泣き落ちたのも男を思ふ爲めかと思へば、お園のからだ中が娘の可愛さよりも憎しみの爲めに顫えた。

『どうしたらいいでしよう、ね、全體？』かの女は本山家でお須磨さんに云ふと、お須磨さんの旦那さんもそばに聽いてゐて、

『お爲さんに今度はゆづつておあげなさいよ、昔のことは昔のことにして。』

『昔のことツて、別に』と、笑ひにまぎらせて答へた、『あたしは、何も、どうと云ふわけぢやアなかつたのですが、ね。』

『そんなら、なほ更らのこと！』

『お爲さんだツて、どうせ誰れかに方づけないぢやア置けないんですから』と、お須磨さんもあんまり親切氣が無さ過ぎた、『海上さんだツて、人の惡いかただぢやアないんですもの。』

『そりやア、さうですが、ね。』實は、然し、薄情でもあり、人が惡くもある男をここでもさう讃めるのかと考へると、自分だけが矢ツ張りのけ物にされてるやうな心細さと猜疑とをおぼえた。

それにしても、亦、若し海上さんに澤山おかねでもあつて、こちらをしろとめとして樂に崇め奉つて置くだけのことができれば、まだしものこと。支那から歸つて來てからと云ふもの、あツちにもこツちにも借金だらけで、――初めのうちは人さまに奔走させて、澁澤なら貰ふだらうと云つては持つて行つても駄目。大阪の藤田ならツて、わざ〳〵高い旅費を使つて行つて見ても駄目。博物館の何とかさんに鑑定させなけりやアツての何十圓か取られても、『多分それらしい』位の鑑定しか與へて呉れなかつた。そのあげくがあの抵當になつたが、それでも本人はただ〳〵、

『賣れさへすりやア――賣れさへすりやア』で、いまだに他の事をしようともしてゐない。

『あいつは、もう、一種の氣違ひだ』と、時々お園が訪ねて行く病院の院長さんが云つたさうだ。『海上さんも耄碌しました、ねえ、あんなことぢやア重孝や文子の行く末が案じられます、わ』と、かの女はこなひだ、海上の留守に、お須磨さんが尋ねて來た時に語つた。『然し、その重孝もあの親不孝ぢやア――。』

押しつめて見れば、天地に可愛いのはただあの孫のお文ばかりだ。

『拔けたアら――てん、てん、天竺――』と云ふやうなことを繰り返してゐる氣ぶんが一番自分には

親しかつた。

四

『まア、まア、飛んだご無沙汰を致しまして、ね——どうも——つい、近いのですが、ね——』玉のやうにころげ出る自分の言葉に、われから、つい、引ツ込まれて、お世辭のありツたけを盡し、お園は木山家に來て多少心の落ち付きをおぼえた。そして挨拶が濟むと直ぐ、娘との喧嘩を娘の親に對する虐待の如く吹聽して、自分への同情を求めた。『どうして、まア、あんなに親不孝でしよう、ね、揃ひも揃つて兄弟同士が?』

『そりやア、ね、お爲さんもいけないところがあるんですよ。』お須磨さんは斯う云つて慰めて呉れた。

『然し、また、あなたもお年に免じて默つてた方が得ぢやアございませんか?』

『でも、若いものがあると心配ですから、ね。』

『さうあなたのやうに心配性ぢやア——お爲さんだツて、もう、一人前の考へが出てゐる筈ですし、重孝さんだツても立派にお父さんとして海上さんがついてるんですものを——?』

『その海上さんが煮え切れないで、ね。』

『どうせ、そりやア、あの佛像なんか大したものぢやアないでしようから、早くあの百五十圓かで買

はうと云ふ人に賣り渡すやうにさせて、海上さんはどこかの會社の書記かなんかに成り、あなたがたはあなたがたでそのお金で何か店でも出したらいいでしように、ね。』

『それが、ね、百圓や二百圓どころぢやアない、海上さんの考へぢやア矢ツ張り二萬圓にも三萬圓にもなるつもりでゐなさるんですから。』

『そんなに賣れたら結構でしようが――さうして重孝さんは近頃どうです、ね？』

『あれにも相變らず困りますが、ね、――まだ女遊びをおぼえないだけが取り柄のやうなもので――あんなに、こなひだも、末雄さんに』と、お園は須磨子の所天をいつもさう呼んでゐるのであるが、『ぴしぴし云はれながら、矢ツ張りその日ばかりで、明る日からはそとをうちに遊びまはつてばかり少しも勉强をしないんですよ、たまにうちにゐるかと思へば、お爲と云ひ合ひばかりして――海上さんはまたあたまからがみ〳〵叱るばかりで、ね。』

『然しそんな時にあなたが口を出して、助けてやらうとするから、なほいけないんですよ。』

『でも、やたらに棒やなんぞで打てば、どこを怪我をさせるか知れませんから、ね。』

『何しろ芝ぢうでの有名な亂暴青年ださうですから――それはさうと、うちでこなひだあがつて、海上さんのお留守に御馳走になつたさうです、ね。』

『いいえ、あれは旦那さんの方からのおごりでしたの。』

『へえ、さうでしたか？』

『それに付いても、ね、少し心配です、わ。』

『………』お須磨さんは何がと云ふ風であつた。

『實は』と、相手の顏いろを伺ひながら、『うちのお爲も少しうは氣の性分でないとは申せませんし、末雄さんも學校の先生で、大切なからだですから、ね。』

『さうすると――？』

『こなひだも、末雄さんがおツしやつてるのを聽くと、冗談でもあつたでしようが、「僕には年寄りの女房、あなたには年寄りの亭主、いつかまた若いもの同士の時節も來まさア、ね」なんて、ね。』お園は口にまでちよツと微笑を浮べたが、笑ふことはできなかつた。

『そんなことを！無論、冗談でしようよ。』お須磨さんの方はわけも知らずに吹き出して、『餘ツぽど、うちのは若いつもりでゐるんです、ね、三人も四人も子供がある癖に！』

『いえ、若い氣の男は子供のことなんか構ひもしないやうですから、ね。その點から云つても、海上さんは老いぼれてますよ、重孝の生れた時には、おしめを洗つて下さるのが澁い顏をしながらでしたが、ね、今度の文子が生れてからは、嬉しさうに洗濯もするし、ほい〳〵云つて抱いてやつたり、ね。』いつのまにか、自分の直接に腹を痛めた子の方に肩を持つて貰ひたいやうな氣になつてゐた。

『でも、その方がお爲さんには仕合せでしようよ――うちのやうに、また、子供をかまはないお父さんも少いです、わ、ね。』
『それが、ね』と、お園は相手の返事が自分の思ふつぼに當つて來ないので、おのづから娘の平生のことを素ツ破ぬくことになつて、『お爲はまたあなたのおツしやる通りいけないところがあるんですよ。海上さんよりも若い男達と話をしたがつて、ね、海上さんがあの子を一緒につれてたまに銀座へでも散歩に行かうとすると、あの子は何だか恥かしいからツて、ついてくことはついてツても、九間も十間もあとからださうですもの。』
『ぷツ！』お須磨さんは笑ひを吹き出してから、なほにこ〳〵しながら、『海上さんがさうあなたにおツしやつて？』
『ええ――あんまりぢやアございませんか？』
『なアに、そりやア、夫婦づれで出たことが滅多にないからでしよう。』
『いいえ』と、念を押すやうに、『あれが機嫌のいい時に一度なぜそんなことをするのかと聽いて見ましたら、海上さんがあんまり年寄りに見えるからツて、ね。』
『若いから、それも尤もです、ね。』
『それにしても――。』

『そりやア、ね、ほんとに夫婦の仲が分つて來れば、さうしたものでもないでしようが――。』

『…………』もちろん、自分ならそんなことはしないのにと、お園は皺の出た男の間拔けさ加減を可哀さうにも思つたが、『だから、若いもの同士を一緒に置けません、わ。』斯う云つて置けば分るだらうとかの女は安心した。そしてあんな親不孝な薄情者のゐる家にゐたくないから、當分自分を使つて呉れいと云ひたかつたのだが、まア、お須磨さんの方から云ひ出すのを待つてゐた。

ここにも君ちやんと云ふ、文子と同じやうな赤ん坊がゐるので、その話などをしてゐるうち、この家の手傳ひに雇はれることに話がきまつた。

ここへは二度目の奉公で、割り合ひに勝手がよく分つてゐた。その日は末雄さんが歸つてから、一緒に晩食を戴き、久し振りでこの主人の注文に從ひ『丹波與作』の一曲をやつた。

『ふびんや　三吉　しく〳〵　なアみだ、
ほうかぶり　して　目を　かくウし、
くつ　見まアつめて　腰に　つけ、
見すぼら　しイげエな　うしイろかアげ。』

と歌つて行くうちに、自分の一部に流れ殘る半ば若い血がほそい糸の響きに引き立つて來て、海上なんか、娘なんか、孫なんか、どうでもいいと云ふやうな氣ぶんにしんみりして來て、われ知らず意味

の知れぬ涙がほろ〳〵とこぼれた。『あひの土山……ふる雨よりも親子の涙』のあたりも立派に自分の糸に乘つて立派に歌ひ結べた。

『ああ、生き返つたやうです、わ』と、三味を置いてから主人の手づから酌いでくれた酒をぐツと飮み乾した。

『それ位彈けりやア、實際、雇はれ人などにならないで、師匠になつた方が――。』

『でも、斯うわれながら思ひ通りに彈けることは珍らしい。』

『そりやア、ね。』お須磨さんも二度や三度はこの三吉を聽いてる筈だ。

『病院の方では、ね、時々來て敎へて呉れろと賴まれたこともあるんですが、ね、どうも貧乏ひまなしとはこのことで――若しあたしが音樂で喰べようと決心すりやア、まづ、かど付けになります、ね。下手な子供に敎へたりしてイたんぢやア、とても、手はあがりませんよ。』

斯う云ふ氣焰も吐いて、いい心持ちでその夜は眠りに就いたが、その翌朝、自分の替へ肴や川田を櫻川町へ取りに行く時、君ちやんの犬の張り子を一つ盜んで、文子へのみやげに袖に入れて行つた。

五

本山家では、年うへの子供を初めとして、お園のことを、

『をばちやん、をばちやん』と云つて歡迎して呉れた。お園もその氣になつてよく立ち働らき、臺どころ向きの用の外にも、君ちやんのおしめを洗つたり、冬向きの衣物を縫つたりした。

ところが、丁度一週間目の夜、遲く、お須磨さんがどこからか歸つて來たと思ふと、

『今、ね、をばさん、海上さんのところへ行つて來ましたんですが、ね、海上さんのお話では、をばさんもいつまで人の厄介になつてゐたツて仕かたがないし、また文ちやんの爲めの手も入ることだから、どうか返して呉れろツて、ね。』

『へえ――今更らそんなことを、ね！』お園は最初反抗的な目つきをして相手の方を見たが、相手も既に承知し切つてる樣子があつたので、張り合ひ拔けがした。今までせツせと君ちやんのおしめを疊んでゐた手をとどめた。そして考へて見ると、斯うして他人の子の世話をしてゐるよりは、自分の孫のそばにゐてやりたいのであつた。笑ひ顏になつて、『そんなことを云ひましたか、ね？』

『うちでも、どうせ一人は手が入るんですが、ね、海上さんが立つてのお賴みでさうおツしやるものですから――』

『ぢやア、仕かたがありません、ね。』斯うは云つたが、おひまが出るのは却つて嬉しかつた。向うからどうか歸つて來て呉れろと賴むんだから、今度はおほ威張りで歸つて行けると思つた。

その翌朝、それとなくいそ〳〵して本山家にいとまを告げ、自分の大きな行李一つを自分と共に車

に乘せて櫻川町へ歸つて來た。

　すると、朝ツぱらからの兄弟喧嘩であつた。

『何の理由であなたはいつもそんなことを云ふのですよ？』

『理由なんか自分で分つてゐよう――淫亂をんなだから、淫亂をんなと云ふんだい！』

『何が淫亂です？』

『おれの親とくツ付いてらア！』

『そんなことがありますか？　おツ母さんに聽いて御覽なさい！』

『また喧嘩かい、歸つて來ましたよ。』お園は自分のことをよくおぼえてゐてくれるわいと思つて、十分に母らしい穩かさを聽かせ、庭から椽がはをあがつて行くと、お爲は子を抱いて立ち迎へた。

『おや――お歸んなさい。』

『朝ツぱらからさう云ひ合つてて、格子の明いたのも氣がつかないやうぢやアあんまり無用心ぢやアないか、ね？』

『重孝が下だらないことを云ふんですもの。』

『なアに、このあまツちよが失敬なことをぬかしたんだ。』

『…………』お園は重孝が制服を着て、あぐらを組んでがん張つてるのを見て、『また學校を後れさせ

たんだらう――？』

『どうせ後れたもんだ』と獨り言のやうに云つて、渠はしぶ〳〵立ちあがつた。そしてはしご段の下から靴を出して來て、椽がはに腰かけて穿いてるそばで、お園はお須磨さんから貰つたかねのうちから車屋に賃錢を拂つた。

『お前も姉さんとしていけないぢやアないか、ね、弟を早く學校に出してやればいいのに？』

『自分で後れておこつてるんですから。』

『うそ云へ！　待つてやがれ、歸つて來てから、また、うんとやツ付けてやるから。』

『もう、いいぢやアないか、ね――いつも〳〵？』お園は弟の方が格子戸を明けて出て行くのを見送つてから、『海上さんがいらツしやらないのだらう？』

『ええ、けさ、早く、また例のことで或人に會ひに行くとおツしやつて――』

『ほんとに、あの人も佛像に祟られてゐなさるんだ、ねえ――さうしてあの人がゐないと、兄弟喧嘩ばかりして！』

『まア、お坐わんなさい、な。』お爲は子を抱いてるまま先づ座敷へペツたりと坐わつた。

『おう、文ちやん！』中腰になつて駈けつけて行つて、『お眠りかと思つたら、目がおさめかい？　おう、達者でゐた、ねえ――いいおみやがあるんだよ。』ちよこ〳〵椽に出て行つて、行李を引きずつて

來ながら『あツちのをばちやんに戴いた、ねえ。』

『お須磨さんが何か下すつて？』

『あア、いい物を、ねえ――』やツと引きずつては來たが、坐わり込んで一と息つきながら、『お前も知つてる、あの、てがらをいくつも縫ひ合はせた君ちやんのかけ蒲團を、ね、もツといいのができたので滅多に使はないと云ふし、羽根まくらをまた君ちやんのあたまが禿げるからツてうツちやつてあるから――』

『でも、這入つてやしないでしよう？』

『いいえ、ちやんと入れて來たよ。』『取り澄まして行李のふたを取つて見ると、自分のこツそり盜んでその底に押し込んで置いた物がない。びツくりして『どうしたんだらう、ね、確かに入れたおぼえはあるのに？』

『そんな物は、もう、とツくにお須磨さんが取り出しなさいました。』

『どうしてお前はそんなことを知つてるえ？』

『ゆふべ來なすつて、すツかり聽きましたよ。』

『へえ――』暫らくは呆れてゐないではゐられなかつた。

『…………』お爲も暫らく默つてはゐたが、歎息を漏らすやうに、『おツ母さんは、まア、何てあさま

しい人でしよう、ね！お歸り匆々小言をいふのもお氣の毒ですが、大屠海上さんもおこつてらツしやいますよ。「如何におれが貧乏してゐるツても、女房の親に當るものが泥棒して來た物を喜んで受ける男ぢやアない」ツて、ね。』

『あたしやア何もどろ棒なんかしやアしたない、わ、ね。』うち消す言葉は口に出たが、調子ががらりと變つて、力も親しみもなかつた。ひやりと全身に秋のつべたさが滲み渡つて、そとの風に自分ばかりが吹かれてゐるやうであつた。ぢやア、きツと、お須磨さんがわたしのお使ひにでも出て行つてる留守に――人が惡い、ね――わたしの行李の中を明けて見たに相違ない。そしてあの蒲團と枕とをこツそり出してしまつたのだ、な。早くこちらがひまを取つて來ればよかつたのに、ぐづ〳〵してゐたものだから、向ふから先づ手をまはされて、體よくおツ拂はれた！　これでは全く自分の心に樂しくきめて來た勘定が合はなくなつた。半ば獨り言のやうに『お須磨さんの云ふことなんか當てになるもんか、ね、人に一旦呉れた物を、またこツそり、取り返すなんて？』

『お須磨さんがそんなうそをわざ〳〵おツしやるものですか？』

『ぢやア、あたしが直ぐかけ合つて來るから』と、行きがかり上思はぬ誓ひをした。

『行つてらツしやい、な、恥ぢのうは塗りをしないやうに、ね。』

『…………』お園は一言もなかつた。そして自分の誓ひを實行する振舞ひにも出なかつた。

―

娘のむツつりして赤ん坊の寢顏を見つめてゐるのをそツと横目で見たが、お園はそのそばにはゐたたまらなくなつた。つツと立ち上つて、そとの格子戸の方に向つた椽から曲つてつゞく椽がはに出ると、丁度、行き當りの便所の入り口に、文子のよごしたおしめが丸めてあつた。それを取つて庭に下り、たツた一本のいちじくの木の枝葉が多くの實を包んでおほひかぶさつてる裏木戸を明けて、長屋共同の井戸端へ出た。

その洗濯物をしぼり上げてから、また這入つて來て、

『もう、少しひや／＼する、ねえ。』椽の上から軒のさを竹におしめを一つづつに分けてかけながら、後ろの室内に優しい聲で云つた、『人の子供のおしめを洗つてると、如何にもきたない氣がするが、ね、文ちやんのだと思ふと何ともないのが不思議だよ。』

六

矢ツ張り、客間に坐わつたまゝでゐる娘とは直接に顏を合はせたくないので、お園は自分の行李をふたを明けたまゝでうツちやつて置き、茶の間の長火鉢の中を掃除したり、ふちに雜巾をかけたりしてゐるうちに、格子が明いて締るひどい音がした。娘が立つて行つて、

『お歸んなさいましたか』と云つたので、海上さんのお歸りだと分つた。荒々しい樣子は、またいつ

も通り、佛像の話がうまく行かぬやつ當りだと見たが、二人の間に這入れば自分の位地もさう苦しくなからうかと思つて、自分も迎へに出かけた。すると、海上さんは客間で、いきなり、
『この中にかい』と云つて行李を蹴飛ばした。
『ひどいことをなさるんです、ね？』
『どッちがひどいです？　わたしの女房の母が泥棒をして、今ぢやア、わたしが本山の家にあたまが上らないぢやアありませんか？　如何にわたしに收入がないからツて、今少しの辛抱です、あれが實れさへすりやア、あなただッても何もあくせく人仕事などしないでもいいのです。それを――實に、あさましい！――人の物を盜んだり！』
『あたしやアそんなことは――』
『いや、どんな申しわけをしたツて――』
あとのものも立つてゐたが、お園は立つてる上に身も心もわく〳〵してゐた。
『もう、わたしから十分申して置きましたから』と、娘は宥めるやうにしたので、海上さんは――まだこはい目をしながらも――つか〳〵と茶の間の方に行つて、火鉢の向ふに坐わつた。
お園も娘と共に火鉢のこちらに坐わつたが、そツと向ふを見ると、そのこはい目が火の出るやうに燃えてゐる。然しこちらのことをばかりおこつてるのではなかつた。

『おはんも矢ツ張り分らない野郎だ！』今訪問して來た同藩人になほ相對してゐるやうに、『抵當に這入つてるから、それを受け出すだけの金を先づ渡せば取り出して來ると云ふのに、兎に角、實物を持つて來たら拜見して見ようとは何だ？』

『そんなことぢやア、どうせ買ふ氣はないんです、わ、ね。』娘もただ物の賣れる賣れないと云ふことばかり考へてるやうだが、お園自身にはその時初めて渠の精神が、人の云ふ通り、變になつてゐるのぢやアないかと疑はれた。

『あいつも、もう、一種の氣違ひだと――若しそんなことであつたら？』私かにかの女はおぞ氣づいて身ぶるひをした。昔からのことを思ひめぐらすと、あの目はもとは如何にも優しく寛大であつたが、支那から歸つて來てからのことだ、あんなに段々とけはしくなつたのは。いや、佛像が賣れる見込みのあつた初めはまださうでもなかつたが、いよ〳〵こぢれて斯うまご付くやうになつてからのことだ、あの八の字じわの下に、あの目があんな風にけたたましく、きよろ付くやうに光り出したのは。

『誰れかほかにいい買ひ手がないか、なア』と、息苦しいやうに出た聲が生まじめに血の氣のなくなつた顏と共に娘の方に向いた。

『さうです、ね、あるとようございますが、ね。』

『女房がそんな生ぬるい返事をしてゐるやうぢやア駄目だ。』聲にまた角が立つて、『人が死ぬか生きる

かと云ふ場合にやア、みんなで揃つて神なり佛なりに願をかけるものだ。それで病人の樣子も段々よくなると云ふものだのに、——あの像の賣れる賣れないも、もう、斯うなると一つの信仰に依らないでは——。みんなで賣れるやうに力を盡さないぢやア駄目だ。』

『そりやア、さうです、わ、ね。』

『………』お園はその話のあひだにその場を外して客間の方に來て、茶の間とのあひのふすまを締め、念の爲めに盜んだ物のあるかないかを確かめてから、がツかりと自分の行李のふたをした。それから、娘をちよツとこちらへ呼んだ。そして海上の樣子に注意しなければならぬぞと私かに小い聲で敎へた。そして一つには、これで娘の機嫌を取り直さうと思つた。

『まさか——』娘は笑ひ聲であつた。

『おい、お爲——何を云つてるのだ？』

『別に、何でもないのですよ。』

『いいや、聽えた！』

『………』お園はどうしようと云ふ風に娘の顏をぢツと見ながら、あんなに神經の過敏な人ではなかつたのにと思つた。

「こツちへ來い！」

『はい』と、娘は素直に戻つて行つた。
『おれをおツ母さんは氣違ひだと云つた、な――無學で信仰と云ふものの意味も分らない癖に！』
『いえ――はア、さう云ふわけで申したのでもないでしようが――』
『いいや、もう、泥棒や不信神なもの等はみんなおれのうちから出て行け！』
『どうかそんなことはおツしやらないで。』
『いいや、像の賣れないのは、全く貴さま等の爲めだと分つた！』
『そんなことは――』
『いいや！』
『わツ』と、娘が泣き出した。
『まア、俄かにどうしたのです、ね。』お園は止むを得ずまた火鉢のそばへ行つて、『あたしがみんな悪かつたのですよ、實は、あなたの御樣子が少し變だと思ひまして――』
『少し變だツ！』
『それも間違つてたんですが、ね――』
『馬鹿！　手前が人の物を盗んだと云ふのが氣になつて、けさのかけ合ひもうまく行かなかつたんだぞ。』

『ぢやア、お氣の毒ですから、あたしが出て行きますから――』斯うでも云はないぢやア、その場が納まらないやうに見えた。すると、然し、向ふはいい氣になつて、

『うん、出て行け、早く出て行け！』

『…………』お須磨さんのところへなど雇はれて行かなかつたら、こんなことも起らなかつたのだらうにと恨みながら、海上さんのにらみのあんまり恐ろしさに、つい、その命令に應じて、逃げるやうに椽がはまで來た。

『おツ母さん、まア、お待ちなさいよ』と、お爲は引きとめに出たが、どんな爭ひも一と晩過ぎればけろりと直るのは今では娘とその男との間ばかりだと思ふと、まだ穿き棄てたままにしてある自分の下駄を穿きながら、憎まれ口の一つも聽いて見たくなつた。奥へ聽こえよがしに、

『子鳥が育つて、ね、親鳥のあとにゐ坐わつたんだよ。』

『…………』娘は何も云はないで、立つてるからだを少しあとへ引いた。

『口さきばかりで引きとめる眞似をして――それほど親よりも男の方に就きたいのか』と心で怒鳴りながら、椽を離れて格子に行き、獨り言のやうにして、『もう、人仕事も飽き〳〵したから、かど付けにでも出ようよ。』

然しそれほどしツかりした決心もなくお園は再び外へ出た。そして娘よりも海上さんが引きとめに

飛び出して來さうなものだと心待ちに待ちながら、足を運んだが、そのけはひは見えなかつた。自分がゐなくなればまた文ちやんと重孝とが可哀さうだが、自分は最早やどうすることもできずただしほしほとして大道に出た。

身うちにも秋の風を感じたが、外にも亦それが吹いてゐた。

お園は喧嘩づくで家出をしたことがこれまでにも二三度あるが、今度と云ふ今度に限り、自分の目の前に自分の喰へなくなつた見すぼらしい姿がまざまざと浮んだ。そして自分の知つてる婦人科病院の家族をでもたよつて行くより外に道はなかつた――そこへ行つたら直ぐ、海上のあの樣子をこれこれだと知らせて、院長さんの前以つて云はれたお言葉がよく當つてゐたことを讃めて、喜ばせようと。

――(大正五年十一月)――

離婚まで

この作は『征服被征服』の名によつて單行されたもので、材料の性質よりすれば『征服被征服』の四の卷さなるべきものである。

一

『兎に角、現場へ行つて當つて見なけりやア』と、友人の畑は云つた。
『…………』耕次も無論さうする氣ではあるが、自分ひとりでは手賴りがないと思つてたのだ。友人は或地方の一興信所に勤めたことがあつて、密偵若しくは祕密調査にはいろ〳〵の經驗を持つてゐたのでそれをその持ち主に利用して貰ひたかつた。『一緒に府中まで行つてくれるか？』
『行くとも！』但しその成功報酬は、歸途立川へ立ち寄つて、あゆ料理を馳走することであつた。
七月の三日、早晝をすませてから宅を出で、渠は畑に伴はれて山の手電車で新宿へ行き、そこから調布行きの電車に乘り換へた。
この暑いのに、何の爲めに友人をまでも煩はすのかと思へば、自分ながら餘り感心したことではなかつた。
『これも――君の尻ぬぐひの一つだぜ。』畑が額のあせをハンケチで拭きながら云ふのを聽いて、『お互

ひだア、ね、その時その時の』とはおもてで笑つたが、耕次の心は頻りに電車のとまるのが氣になつた。『……畜生！證據を突きとめさへすれば！』その證據とは妻の勝手な行動に對してだ。考へれば考へるほど、癪にさはつて溜らないのである。『おれが妻の澄子と離れて、前年の八月から別居したのは』と、電車にゆられながら、不滿の胸が一杯になつてゐた、『おれの心にいよいよ別な婦人ができたのが近因だが――』さうだ、耕次は他日正式の妻にしてやると云ふ約束を以つて自分の筆記者と同棲した。澄子には初めのうち與へなかつたほどの思ひ切つた約束を以つてだ。然しそれがなくとも、澄子には早晩離れなければならぬ形勢にはなつてゐた。かの女に對する結婚前の世評を全く信じなかつたのは、もう、ずツと前のことになつてゐた。かの女が結婚前から既に處女でなかつたことが段々とその行動に於いて分つてゐた。いや、男が變る度毎に今度はつづくかどうかを伺ひに行つたと云ふかの女の占ひ師のことまでも分つて來た。斯うなつては、處女を得た（と信じたの）を條件として、この六七年來を他の女に手出ししなかつた自分の馬鹿正直が承知しなくなつてゐた。それを具體的にかの女に發表する機會を長い間待つてゐた。その間をかの女は、然し、かの女の淺墓から、信じられてると信じて段々と圖に乘つて來たので、子が生れてからは一層その弊にこちらが堪へられなくなつてゐた。

『あたしが、ね、斯うして一つの坐蒲團を取り合つたりしたのですが、ね』と、かの女はそのくだら

ない眞似まで擧動にして見せる爲めに或若い女のそばへ押し寄つて行き、『それでも一緒に寢てゐて關係がなかつたのですよ。』こんな虛言を云ひながら、醉ツ拂つた勢ひでもとの戀人の惚けを若い女の群れの中で聽かせたさうだ。また、こちらの仕事に多忙なのを冷淡と見て、『あたしだツて、あなたがさう冷淡なら、別に話し相手を見つけますよ』と云つて、その前から心できめてゐた出入りの吳服屋の息子なる若い色じろ男を――かのなにがし女史がその今の弱年の所天をペットにしてゐたやうに――ペットにしようとして失敗した。また、或哲學の敎師――これを今の耕次の家では『田中十無イ』と仇名してゐる――とかの女が交際したさうなので許してやると、かの女はそれを自慢して、あたまのつるりと禿げた女の友などから冷かされると、それでも却つておほ喜びに喜ぶさうだ。馬鹿な！その新らしい女氣取りも、まるで成つてはゐない。

けれども、第一の妻を離婚するまでは大變手を燒いたこちらは、この第二の妻に對しては、向ふから去りたくなるか、それともこちらで法律的に去るべき實際の理由を發見するか、この二つの一つを待つてゐた。それでも、離婚ばなしがこちらから二度までも出て、その二度目には獨りで修善寺溫泉へ逃げて行くつもりであつたところ、かの女が子と女中までづれて從つて來たには、困つた。そしていよ〱別居するやうになつたのは、無論、こちらに別な婦人が出來た爲めではあるが、もう、それ以上待ち切れなくなつた爲めでもある。

それでもなほ扶養上の責任を重んじて、收入の三分の二を向ふへ與へる約束をした。友人どものうちで計算に明るいものは、

『そんなにやつて、實際、こちらが立つて行けるか』と心配した。

『長くッても一年か二年間だらうから、何とか辛抱する、さ』と、こちらはその時はまだ寛大であつた。と云ふのは、かの女をまだ相當に理窟の分つた婦人だと思へたからで、——かの女は不斷から、「愛のない人の世話にはなるべきものでない』とか、『女も經濟上の獨立をしなければならぬ』とか唱へてゐた。だから、こちらにはかの女の別居はやがて經濟上の獨立となり、經濟上の獨立は遂に協議の離別となると思へた。然らざれば、そのうちに公けに結婚の相手を見つけて、向ふから離婚の請求をするだらうと思へた。

ところが、あのざまを見ろ！別居前にこちらが紹介して出版のできるやうにしてやつたかの女の『日記』を、かの女はわざ〳〵都合よく別居の理由にでもなるかのやうに書き直して、公けにした。そしてかの女とこちらが同居を初めて、こちらの第一の妻との離婚手續きが濟むまでの數年間は、精神的ばかりであつて、肉體上の關係が働くまでなかつたかのやうに僞はつた。問ふにも落ちず、語るに落ちるとはこの事で——して見ると、かの女の昔の精神的戀人と稱する者にも、こちらとの關係だけはあつたものと分つて來たではないか？『精神的』とは一種の『制限的』にしか取つてはならぬわけ

だ。

それに、第一の妻に生ませた子を一人預かるからと云ふので預けて置くと、つまらぬことに角を立てていぢめ拔き、學用上與へるべき物も與へなかつた。子供がそれを訴へて來たので直ぐこちらへ引き取ると、あとから追ッかけて來て、子供の云ひもしないことを云つたと云つて怒り立て、氣ちがひのどく、わめき、こちらの第三の同棲者を目かけと云つたり、女中と呼んだりして（然しこちらはそのどちらにも第三のを取り扱つたことはないのに）、亂暴を働くので、とう〳〵蹴飛ばされた。こちらがかの女に暴力を加へたのはそれが初めてであつた。

二度目に來た時は――それがかの女の來た最後だが、――かの女とこちらとは收入の解釋に於いて衝突を大きくした。こちらは筆記者に拂ふ十五圓は收入のうちではないと云つた。かの女は、然し、筆記者が同居するのだから、それに對する給料は仕拂ひのうちに數へるべきものでないと主張した。そんなに取られて、喰つて行けると思ふのか？　但し、この時かの女はあと押しに熊本と云ふ男をつれて來たのだから、蹴飛ばされることだけはなかつた。この男はもと某男爵の子分で、某鐵道會社の御用新聞社長であつたが、今は引ッ籠んで、自分達のさきの住所であつたところの近くに果樹園を經營してゐる。大してあたまも無いくせにあるかのやうな態度で、柔術の三段が自慢だ。こちらの財產の一部なる蜜蜂四群を――澄子の賴みがあつたを口實にして――經驗もないくせに、而もこちらには

一言の挨拶もなく預つて、遂に殺してしまつたのもこの男だ。半可通の法律思想をふりまはして、今回の事件をとう〳〵訴訟にさせたのも、また辯護士をかの女に紹介したのも、この男だ。

『あたしは何でもあなたの御意見に從ひます』と、澄子は渠に云つたのだらうだ。馬鹿！嫉妬と無智との爲めに、自分達の間で靜かに決定できることを人の爲めにかきまぜられた！いや、蜜蜂を一群なり、二群なりただで分けて貰ひたがつた人の『弱者を助ける』など云ふ卑劣な屁理窟に乘つてしまつた！別居の當月とその翌月とは、こちらには實際收入が殆どなかつた。それでも、五圓五十錢と八圓なにがしとを二度に渡したのは、約束に從つてだ、おまけに、地方の一新聞から屆いた爲替入りの手紙を中味を拔いてかの女はこちらへ屆けて來た。そしてなほ約束を履行しないと云つて、その約束を破棄し、同居請求の訴訟を起した。

その訴訟は表面ではかの女の勝利に歸した。が、こちらは何等の痛痒も感じなかつた。蓋し同居せよと云ふ判決を下だしてくれろと云ふ請求だから、判決の文意ではその請求だけは正當と認めてあるが、裁判所から同居をこちらに强制する權利はないと云ふのであつた。だから、ただかの女に扶養料請求の下地ができただけのことだ。果してかの女は第二の訴訟を起した。そしてその理由には獨立の生活ができないからと云ふ、平生の云ひぶんとは全く違つたことを出したのに、こちらは少しあツけに取られた。

こちらの一友人なるＫ氏が兩方に對する好意上、進んで仲裁をしたのはその時で、渠は、或日、大雪の降つてた日に、――例の田中十無イと二人で――かの女を說き伏せに訪問した。すると、かの女はこちらがはの友人には會ふ必要もないが、などと云つたさうだ。そして兩の肩をいからかして、兩手を固めて膝の上にがん張らせ、丸でをんな壯士のやうな態度であつたと云ふ。この報告を聽いた時は、はア、いよ〳〵初めたんだ、な、と思つた。

『獨りになれば、危險だから、熊本さんに柔術を習ひます』と、かの女は云つたことがあつた。それにしても、そんなに早くあの粗笨な志士氣取りの熊本に感化されたのかと思ふと、或は矢ツ張り變な方にまでも、世間の評判通り、その術が應用されてしまつた結果ではないかと疑はれもした。但し、かの女はこちらと一緒になるまでは矢ツ張り粗笨なをんな新聞記者的であつて、こちらが同棲當時引き受けた文藝雜誌の一部に短い批評を書かせて見ると、かの女は『いや、はや、驚き入つて』などと云ふ舊式で輕薄な口調を使つて滿足してゐるやうであつた。それを十分訓戒したので、それから筆や發想を餘ほど愼むやうにはなつて來たが――

けれども、こちらがかの女と熊本との間を疑ふ程なら、なほもツと前から疑はねばならぬ者があつた。それは飯山と云つて、かの女の『日記』を出版した書店の若い主人だ。渠はその賣れなかつたかの女の著物の印稅の外にも、大正四年十月から五年の三月頃までは毎月三十圓か四十圓をかの女に貢

いでゐたと云つた。そして一緒に度々諸方の料理屋へ飲み喰ひに行つたことがこちらの耳に這入つたのは、第一に、こちらの第一の妻であつた者からだ。かの女が澄子を尋ねて行つた時、(夜の九時頃であつた)、澄子がまた留守で、女中ばかりのところへあがり込んでゐると、そこへ澄子のおやぢが歸つて來て、女中に聽いた、

『またどこへ行つたか、な?』

『また飯山さんが迎へにいらしつて』と、女中は答へたさうだ。その後、おやぢが澄子の家を出てしまつたのは、かの女の夜の外出があまりひどいのを忠告した爲めの衝突からであつた。

次ぎに、またこちらの耳に傳はつたのは、こちらの一友人からで――この友人が甲書店から聽いて來たのだが、――甲書店の主人は

『あんな女の書物など預かるのさへ御免だ』と憤慨した。その故は、乙書店のこれも若い主人が來て告げた、先夜、十一時過ぎに飯山と澄子とが酒に醉ッ拂つて自分の宅へやつて來て、これからまた二次會をするから一緒に出ろと云つたと。こちらは乙書店の告げ口は岡燒きの結果だらうと思つた。さう思はれる理由がある。と云ふのは、飯山は、ちよツと病氣であつた間を、諸方の著者等に對するかけ合ひ事を乙書店に頼んでゐたことがある。その時、乙書店がこちらへも初めてやつて來て、これから澄子のところへ行くと云つて歸つた。こちらは渠が殘して行つた名刺の裏を何げなく見ると、

『散歩しましよう』と書いてあつた。きやつ、澄子へ出さうとして豫かじめ用意してゐた名刺を誤つてこちらに出したのだと分つた。あんな見ツともない女でも、餘地ができるといろんな引ツ張り手が出て來るものだ、わいと、をかしくもなつた。但し、かの女が鎌倉で入水のやりそこねから引ツ込んでゐたのを、然し、こちらが拾ひ出したのも物好きであつたが——

第三には、こちら自身が突きとめた。丁度、大正四年の大晦日の晩のことだ。この晩は澄子とこちらと市中を午前一二時までぶらつくのを毎年の例としてゐたので、今夜もきツと先づ銀座を誰れかとぶらつくだらうと豫想して、こちらも第三の婦人を伴つて出た。そして多分澄子がいい氣になつて日本橋の木原店へやつて來るだらうとこちらは鑑定を附けたので、自分達のよく行く西洋料理店へ行つてると、果してかの女は酒に醉つてやつて來た。そしてその相手の男は豫想通り飯山であつた。この事實をも必要上法廷に持ち出して、かの女が妻たる權利を主張する者としては最も釣り合はぬ不謹愼だと說明させた。それが爲めにはその料理屋の主人をも證人に立たせた——控訴に進んでからだ。

二

飯山はそれが法廷の問題になる前に心配してこちらへやつて來て、そんな事を出してもどうせ無駄だらう、そして別に人があらうと云ふやうなことを述べた。その頃には、飯山も亦岡燒きをしなければ

ばならぬ事情があつた。渠が澄子にしてゐる貢ぎもさう〳〵續かなくなつて來たところへ、伊藤と云ふ某工場の書記が現はれて來て、その妹と飯山とを澄子の仲立ちで結婚させようと云ふ話を——尤も、これは途切れてしまつたのだが——縁にして、澄子にしげ〳〵と近づくやうになつた。そしてかの女は渠ともまた飲み歩いて、その費用は飯山との場合に於ける如く渠に出させた樣子だ。かの女は人のふところを當てに飲み歩くばかりでなく、吳服屋の息子の結婚式——それがあつた爲めにかの女のペツトは失敗したのだが——の祝ひ物までも飯山を紹介しがてら渠に出させたさうだ。で、飯山が澄子から催促されて最後の貢ぎを自分で屆けに行つた時は、もう、むか〳〵してゐたのだらう、澄子が顏も洗はないで寢室から——正午頃——どてらを引ツかけて出たのを見て、金を渡したばかりで引ツ返した。すると、その翌朝、かの女の手紙が追ツかけて來て、

『あなたはいやな顏をして玄關でお歸りになりましたが、何かお氣にさはる事があるなら、もう、手を切りましようか？　お金も返しましようか？』とあつた。

『どうせ返せることはないでしよう——伊藤だツて、さう有福でもなささうですから』と、飯山はこちらに向つて語つた。『わたしは斯う人に馬鹿にされると、矢ツ張り、棄てかけた救世軍の眞理にかじり付いてゐたくなります。電報で直ぐ「カネイラヌキリストニアリ」と云つてやりました。』

『へえ、淺草で君が淫賣かひの歸りらしいのをおれは一度見つけたが、それでも君は耶蘇かい。』

『それでも、信仰ですから』と、渠が正直さうに答へた時だ、渠はこちらが澄子を『おい、淫婦よ』と歌つた詩の誤つてゐないと云ふことを告白した。『その證據には、わたしのやうな者をでも料理屋で段段醉はせて置いて、澄子さんは誘惑しようとしたことがあります。今から思へば、先生があの人を棄てたのは、先生の氣性として尤もだと分つて來ました――わたしは澄子さんを買ひかぶつてゐました。』

『君がそこまで白狀するには、恐らく實際では誘惑以上のことがあつたと僕は認定する。そして君は金がなくなつたので伊藤と云ふ工場書記に乘り換へられたのだ。』こちらは法廷に持ち出してある程度を祕密にしてゐる以上、こんな皮肉しか渠に云へなかつた。

『伊藤はわたし程も金がありません。』

『兎に角、君が澄子のところへ以後もたまにでも行くと云ふなら、おれのところの出入りは禁止する――出版上のことは手紙の上で分るから』と、飯山に最後を告げた。そしてなほ附け加へて、『〇〇君(と、田中十無イのことをさして)にも先夜、或會で、おれは云ひ渡して置いたのだ、君は近頃澄子のところへよく行くと云ふ評判だが、向ふの訴訟とおれの反訴とが控訴院で方づかないうちは、問題が複雜になるから行つては困ると。』

『然し〇〇さんはわたしと相談してゐたのです』と、飯山は云つたツけ、『澄子さんにはさうお友達が

ないやうだから、あの人の位置が決定するまで、女のことだから、成るべく二人が親切に慰めてあげようツて。』

『また出し抜かれないやうにし給へ』と、こちらは云つてやつた。『僕が君に〇〇君の物を何か出版させるやうにしてやつたのだが、隨分狸おやぢだから、ね。』

尤も、十無イはこちらの最初の宣告に對して例のとぼけたやうな鼻ぼくろのつらをしてだが、『君がさう云ふなら、僕も』——とまでは云つたので、以後行かぬと誓つたものと思つてた。

で、そのうちに澄子のところへ何でもでツぷり肥えた男の人がよく出入りすると云ふ評判が立つて、それが渠らしいと云ふことを某新聞記者から傳へられた時には、こちらの宣言前のことが今やツと世間に傳はつてるのだらうと答へた。そして自分の耳に這入つてた別な風評を云ひ添へた。それは專ら文壇の狹い或一部に云はれると聽いたのだが、その肥えた男とは文壇で有名な惡物喰ひで、甞てなにがし女史とかけ落ちしたその人だと云ふのだ。

『あいつも物好きだから、なアー——』その記者は渠と友人なので斯うちよくに應じた。

『僕は然しまさかと思ふ』と、こちらは云つた。『澄子と渠とは知り合ひでない筈だから。』

『著作者協會の發會式で本年の初めには會つたらう。』

『それにしても、さ。』

この對話がそツくりその惡物喰ひ文士に傳へられた時、渠はこちらがその風說の火もとであるかの如く憤慨したと云ふ。

無論、それが伊藤と云ふ奴でもない。伊藤はきやしやな青年だと云ふから。若しその男と云ふのが今でもなほつづいて行つてるものとすれば、かの熊本を見たのでなければ、藤田と云つて鑛山師と自稱する人であつたらうか？それを突きとめたかつた。何でも巖丈な體格の、太い聲でおほ法螺を吹いたとは、渠を澄子に紹介した友人なる山田が云つてた。澄子も一度その紹介者のところへどう云ふ人なのかと確かめに來たさうだが、山田は責任ある紹介をしたのでもないから分らなかつた。何でも、突然飛び込んで來て、新聞を出すに十萬圓入るなら出してやつてもいいなど云ふので、氣違ひぢやアないかと疑つていい加減にもて爲してゐたら、最後に澄子に紹介してくれろ、何か新らしい女のする事業に資本を出して見たいからと云つたのださうだ。で、山田は藤田をどこの、どう云ふ人かと突きとめた上のことではなかつたと云つた。

耕次にはその人が氣違ひには受け取れなかつた。恐らく、澄子が淺草の女優になるとか、果物屋――これは熊本がかの女を利用して自分のうちの物を賣らせようとしたのだらう――を開らくとか云ふ評判を知つてて、ちよツと出來心で小あたりに當つて見る手づるを得に來たものと見えた。それがどう云ふところまで進んだか知らないが、澄子が藤田の故鄕に於ける身分を調べる爲め、東京を明け

て、渠と共に行つて見たところ、可なり田地もあり、家屋敷も大きかつたと、歸つて來て女中に語つたことが、女中の口から——間接にだが——こちらへ聽えた。そしてこちらは、この時、飯山から澄子の誘惑を聽かせられた時よりも、ずツと沈痛な感じに打たれた。これには嫉妬心が全く這入つてゐなかつたとは強辯する必要がないが、たとへ少しは嫉妬があつたとしてもこちらの意識した範圍內では無かつた。實に沈痛の感に顫えをのゝく程であつたのは、殆ど待ち設けてゐた通り、法廷に持ち出す新證據がうまく擧がりさうになつた爲めだ。

なほこれを確かめて行く爲め、こちらは自分の妹——澄子の近處にゐて、初めは却つて澄子の方に籠絡されてゐた——に命じて、一種の探偵の役目をさせることにした。

『さう聽くと、少しをかしいこともあるぜ。妹の亭主は云つたツけ。或時、朝早く澄子がやつて來て、ゆふべからまだ寢ないので、ちよツと散步に出たところだが、『二日醉ひですか』と渠がからかひ半分に云ふと、

『さう飮みもしないんですが、ね。』何だか疲れ切つてるやうで、兩方の目の周圍が全體にどす黑くなつてた。

『ただぢやアない』と、渠もこの時初めて思つたさうである。

耕次の知り合ひの婦人にひとり、時々目のふちを黑くしてゐるものがあるが、それを月の物のせい

だと考へてゐた。が、澄子にはこちらの知つてる範圍ではこれまでそんなことはなかつた。直ぐ書物に就いて研究して見ると、そんなことはただに月經の結果ばかりではなく、また他の場合にもあるのだ。

『油斷はできませんよ』と、妹も云つた。こちらはかの女に朝、晝、晩に成るべく度々澄子の宅へ行つて、どう云ふ人がどう云ふ風に出入りするかを見させた。その度々の注進によると、こちらが生ませた一人の子民雄を毎日毎晩のやうに酒を飲んでる母のそばに置いとくのが可哀さうにもなつた。こちらが一緒であつた時は、晩酌などせぬ自分はかの女にもあまり酒を飲ませなかつた。それがかの女の不平若しくは不愉快の一つであつたことは、かの女の『日記』の文意を推察しても分る。嘗て自分の留守に友人がかの女に酒をすごさせたところへ自分が歸つて來たが、かの女の顏は赤いよりも靑かつた。そしてその筋肉のたるみが一層目に立つた。それからと云ふものは、自分はかの女の若い時から惡く生活づかれのしたその姿をまたと思ひ出したくなかつた。『あの十無イさんに民雄がだかれてゐたこともありましたよ』と、妹の云つたこともある。こちらの家以外のものにまでもきやつが十無イさんで通るやうになつたのはをかしなものだ。渠の物の云ひぶりがあの顏よりも一層間が拔けてるので、きやつを見れば直ぐ先づ人が口を思ひ出す。そして田の中に十が無ければいいのだと云ふ洒落が通用した。それが矢ツ張りこちらの宣告に對する誓ひを實行しないで行つてるのは、どうせこちらと

の友人關係を棄てる氣だらうから――道理で、あんなにしげ〳〵來たのが來なくなつてた――こちらはうツちやつて置くだけで、別にどうすることもできないと思つた。それに渠は大して金錢上の融通が利くでもなく、また飮めないことはこちらと同樣だ。碌に原稿かせぎが獨立してできてるでもないらしい澄子が、そんなに酒屋の拂ひを嵩め、またそんなに自由にずん〳〵拂ひのできる樣子を傳へ聽くと、どうしてもかの女の――少くとも手段的に迎へる――相手が別にあるに相違なかつた。

ところが、或夜、澄子が耕次の妹の家へ遊びに來て自慢さうに語つたと云ふのでは、或おぢイさんが熊本の紹介でよく酒を飮みにやつて來るが、その人と共に瓢簞を以つてかの女は郊外を散歩した。一方は長い口ひげも白くなつた上品な老人で、他の一方はまだ若い（とさう自稱したと云ふ）女優まげの婦人だから『釣り合ひが面白いと思つてでしよう』が、或畫家が寫生したと。よくも、畜生！さう圖々しくやつてゐられるものだ。確かにやとひめかけか茶飮み友だちにしか見えなかつただらうに！

そんなことを澄子がこちらの妹に語つてるうちに、午後の九時過ぎになつた。すると、澄子の女中が迎へに來て、

『奥さん、浦島さんが――。』

澄子はこれを聽くと、ふるひ付くやうに立ちあがつて、いそ〳〵と歸つたさうだ。浦島とはその老

人の符牒らしい。こちらにはかの女のその樣子と心持ちとが直ぐ想像された。隨分ヒステリ性の女で、喜ぶにも手さきをふるはせるから。

三

『おい、しツかりしろよ。』隣席にゐる畑は耕次の肩をびツくりさせたほど叩いた。『さう考へ込まないでもさきへ行つて調べて見れば分ることだ。』

『そりやアさうだが、ね』と、耕次は答へて、むしやくしやしてゐた。『如何にも癪にさわるぢやアないか――おのれが法律上から妻の權利を主張してゐながら、おのれ自身はその權利に相當するだけの責任や謹愼を守つてゐないで、さ！』

『あんな女に關係したそも〳〵から、友人は皆かげで反對してゐたのだ。ただ君の氣象を知つてるから誰れも忠告しなかつた。』

『無論、僕はあいつの處女性だけは確かだと信じたから、あらゆる世評には頓着しなかつたのだが――』

『君のあまかつた報いが、今、最後に祟つて來たのだ。』

『それにしても、最も圖々しいぢやアないか――人と徹夜して酒を飲んだなどと――無論、浦島とだ

らうだ――自慢さうに吹聽して、さ？　女中が私かに云つたと云ふを聽くと、そんな時はいつもさきへ民雄と一緒に寢てしまうから、あとは夜が明けるまで知らないツて。』
『その相手がいつも一人であるか、その度毎に變つてるか、さ。』
『あいつのことだから、且那取り專門にならうと決心すりやア、何人變つても平氣だらうが――まア、今のところ、藤田鑛山師かあのぢぢイだらう、ね。いつも瓢簞を持つて來るからツて、女中の浦島さんはいい符牒ぢやアないか。まさか、本名も云はせて置けないだらうから、ね、いつ見つけられるかも知れないので？』
『それ位の用意は朝めし前の女、さ。』
同乘者は一方のはじの方にたツた一人しかゐなかつたので、耕次はあたりかまはずしやべつてるうちに、調布の終點に着した。
それから馬車の出發を待つまでにも、氷り水を飮みながら、休憩所のかみさんや女中を捉へて、畑はその仕事を初めた。先月の中頃に、女優まげの、ちよツと見れば直ぐ記憶に殘る婦人が立ち寄らなかつたかと。然し皆心當りもないやうであつた。
『美人？』女中は斯う何だか別な意味の方へ持つて行つた。
『お前さんよりも美人でないが――』畑も話を冗談にしてしまつたが、これは實際のことだと耕次に

は思へた。澄子のやうな御面相で、派手な若づくりが實は泣いてしまうのだ。

高い生け垣の民家が兩側にきてろ面に竝んでる一直線の道を通りぬけて、渠等の馬車が四十分かで府中に入ると、渠らは警察署の前でおろして貰つた。それから、なほ一應相談してよく手筈を定める爲めに、直ぐ隣りの神社の森へ這入つた。が、澄子の出あるき好きはきツとここへも――二三日間滯在した以上は――度々足を入れたに相違ない。耕次の聽き知つてるところでは、自分と初めて一緖になるその前の戀人中野と共に、かの女はかの稻毛の海岸に遊び、そこの淺間神社へ――肉の關係はなかつたと稱したが――一心に戀の願をかけたことがある。そんなことにもよく遊戲をまじへる女だから、ここではまた今回の男とどんなことをもて遊んだか分らない。

渠等は先づ警察に就いて府中のは勿論、立川その他の方面の各宿屋の宿泊屆を繰つて貰つた。六月の中旬を目あてとして、本名は關根若しくは近藤澄子だが、どうせ變名だらう、そして年も若く云ふに違ひないから、まア、二十七八歲から三十二三歲までの婦人で、男子と宿泊した者がないか、どうかと。然しそれらしいのは見當らないと云ふのであつた。

『ぢやア、中屋を突擊するより仕かたがない』と、畑は云つた。中屋とは警察のすぢ向ふだが、舊い商人宿で、とてもつれ込み遊びなどをしようと云ふ程の紳士の行けさうなところではない。これには、こちらの張り詰めた心が第一にがツかりしてしまつた。けれども、

『中屋より外に府中ではいい宿屋はない』と、澄子が耕次の妹に告げたのを當てにして來たのだから、他にもツといい宿もあるに拘らず、渠は畑に從つて這入つて見た。

畑が中土間を大分奥へ這入つて、そこにゐた女中におとなしく聽き糺してゐると、

『そりやア、あの關根さんのことでしよう』と云つて、おかみさんが書寢の室から起きて來た。

「あの人なら、先月の七八日頃に二三日、うちにおとまりになりました。』

『男の人と一緒でしよう――?』畑は斯う出しぬけに云つた。

『いいえ、おひとりでしたが、とまつておいでのうちに一度男さんが來られましたが――』

『どう云ふ人でした――白髯がありましたか?』

『いいえ。』

『では、巖丈で聲の太い――?』

『さうでもありません。』あがりがまちにしやがんで、こちらを不思議さうに見てゐるおかみさんは、あの山師か浦島かに買はれて事を祕密にしようとしてゐるのではないか知らんと、こちらには思はれた。が、さうでもない樣子でかの女は正直さうに、『年よりのやうに見えても若いやうな人が、關根さんのお立ちになる前の日に「事件はかたづきましたか」と、女のやうにやさしい聲で云つて尋ねて來られました。』

『…………』畑はちよツと耕次の方を向いたが、耕次にも見當がつかなくなつた。若いと云つても、まさか、呉服屋の息子や伊藤でもなからうし――。十無イにしてもまさかと思つたが、念の爲めに自分は口を出した、

『ぢやア、あごひげも頰ひげもなかつたですか？』

『あごには少しあつたやうです。』

『…………』耕次は少し失望の顏を畑の方に向けた。

『實は、あれから本人は歸つて來ないのです。』畑は眞面目くさつて云つた。耕次はそんな入らないことをとは思つたが、默つて聽いてゐた。

『そんなことはどうだか、うちぢやア分りませんが、ね、關根さんの御用件は熊本さんの奧さんの叔母さんかに當る人の離婚ばなしを方づけに熊本さんから賴まれていらツしやつたので――その人の旦那さんは、つい、この横通りの馬車屋さんで、丁度東京へ出て留守であつたので、その歸りを關根さんはうちで二三日お待ちになりました。』

こちらにはこれが初耳であつたが、畑はさう見せないで。

『そこまではこちらでも分つてますが、――それツ切り本人が歸らないので心配してゐるんです。その男の人と云ふのは、尋ねて來てどうしました？』

『何でも午前の十時頃にいらしつて、直ぐ關根さんは一緒に川原の方へ行つて來るとおツしやつて出られました。さうして二時頃におひとりでお戻りになつたので、おつれさんはと申しましたら、もうお歸りになつたとのことでした。そのあくる日の朝十時頃でした、事件の話がすんで關根さんがうちをお立ちになつたのは。』

『川原は近いですか？』耕次はそこが氣になつた。

『いえ、隨分ありますが――』

『それでも、料理屋とか休みどころとか云つたものはありませう？』

『府中の川原は立川などと違ひまして、そんなものもありません。なんしろ關根さんのやうなお物好きの方でなけりやア行く人もないところですから。』

して見ると、澄子が川の水が綺麗であつたとか、若鮎のあぢもうまかつたとか云つて、この旅行に見たり喰つたりしたかの如く耕次の妹に語つたのは、全くのうそ法螺で、前年に葉などと一緒に或會の有志として行つた時の記憶を辿つたのか知らん？

『…………』これ以上聽き糺しやうもないと云ふ風で、畑は耕次と共にそこを引き上げた。耕次には宿屋のおかみさんがこちらの姓を度々口にしたのがひどく不愉快であつた。

立川へも馬車があると知つて見ると、澄子らもそれで來たのだらう。こちらも今度はそれで行つて

立川から汽車にすることにした。

『お疑ひがあれば、その馬車屋さんからぢかに聽いて御覽なさい』と中屋で云はれたそこの手前まで、神社のさきの角を曲つて行つたのは、耕次らの切符を買ふその爲めだ。行く手は、もう、府中の一本通りと丁字形になつた並み樹道であつた。が、これで歸るのかと思ふと、何だかまだ聽き糺して置くべきことがあるやうな氣がしたので、耕次は松並み樹のはづれに立ちどまつて、太い松の根をかうもり傘のさきでつツつきながら、畑に相談した。そしてとう〳〵自分獨りで今一度中屋へ立ち戻つて見た。

主人も出てゐて、今のことをうわさし合つてたやうであつた。

『實は、先刻は先づ警察で宿泊届を調べたのでしたが、あなたの方のにもなかつたので、ちよツとまご付いたのです。』

『うちでは何も規則に反くやうなことはしません。』主人は少し意味を取り違へたのか、あわただしく帳面を出して來て、『この通り宿帳にはつけてありますが、熊本さんからの手紙があつて、このお方からは決して宿賃を取つてくれるな、あとで熊本さんのうちから仕拂ふからと云ふので、うちでは關根さんをお客さんとせず、親類同樣に見て宿泊届は出さなかつたのです。』

『で』と、耕次は考へを田中十無イに持つて行つて『來た男と云ふのは色が白かつたのですか？』

『さう白い方でもありませんでした、ね。』かみさんはもとの寢臺であちら向きに横たわつたまゝこちらの注文通りに答へた。

「然しあごひげがあつたとはあなたがたの思ひ違ひではないでしようか?」

「確かにありました。』今度は主人がそツけなく返事した。

『………』耕次はあまりよく思はれてゐないとも感づいたので、あとはかの女の出發時間が午前十時であつたのを確かめただけで質問をやめた。そして直接に宿帳に就いて見ると、六月八日に着して、その日から三晩とまつて、矢ツ張り、十一日に出發したことになつてゐる。(人に拂はせるので遠慮したのか、酒は飲んでゐないやうだが、煙草が毎日一つ宛宿料の外についてゐた。)して見ると、十一日の午後には東京にゐなければならぬ筈だが、澄子は耕次の妹にも十三日の朝、『ゆふべ遲く歸つたのでまだねむい』と云つたさうだし。また、六月二十六日の扶養料公判の時、澄子に證人として呼び出されたK氏(第一回の仲裁を仕そこねた人だ)が、迷惑さうにしながら、控へ室で耕次に語つたところでも、十三日の午後に渠の家を訪問して澄子は旅行から『きのふ遲く歸つて來ましたものですから』と云つたさうだ。これはかの女がおのれのまだ獨立生活ができないことを證人として十分に云つてくれろと賴みに行つたのだが、證人は法廷に出てかの女の註文通りには述べなかつた。いや、寧ろかの女から見れば却つて多少の不利益であつた。

兎に角、耕次らの府中調査には成功と云ふ程のこともなかつたが、澄子の六月十一日の府中出發から翌十二日の夜までは、餘ほどあやしいものであることだけが發見だと思へた。そして耕次は友人に對してもあツけなく歸つて來たのだが、直ちに家のまづい晩食に就きながら、この始末を報告すると、渠の今の同棲者は最初の疑問であつた肥えた人と云ふも同一人物と云つて、

『そりやア田中でしよう』と、直ぐ判斷した。『きツと十無イさんぢやアございませんか？鼻にほくろがあつたかどうか聽いて見れば、一番早わかりでしたらうに。』

『成るほど、ね！』渠もこの時膝を打つて今更らの如く十無イの物云ひのはツきりしないのが女のやうに聽えることに思ひ及んだ。そしていつも若くなつてゐようとして年齡を隱したり、うそ云つたりしながらも、あの額のおほ皺には五十を越えたことがおほはれないことを！『おれもあいつのことは多少あたまにあつたが、ね、まさかあいつがと馬鹿にしてうツかり考へてたし、またあごひけがあると云ふから――』

『あるぢやアありませんか――しよぼしよぼと喉の方へ曲つて、羊のやうな？』

『さうだ――さうだ、ね！』渠は膝で飛びあがつた。どうしてそんなことを忘れてゐたか自分で分らなかつた。然しそれよりも先づ鼻におほきなほくろがあつたか、どうかを聽き糺して見るべきであつたのだが、それもあとの祭りになつた。

四

『だから、あの人が××さんや××子さんのところで『澄子さんはさう亂暴な人ではありません、なかなか女らしく優しい人で』と云つたと云ふのを聽いた時、隨分あやしくなつてるんだツてわたしが云つたでしよう――？』

『如何におれだツて、然し、あいつをさうあまい者にやア見てゐない。女を見る目はあまりないかも知れないが、女にはあれでも經驗が幾たびもあるんだ。』十無イが、その姪に生ませた子がもう十七八歳の娘になつてる。今は故人の某文士の若い時を暫らく戀に飜弄した延子と云ふしたたか者に須も亦二三年間はもて遊ばれて、その生活費をつぎ込んでゐた。渠が恩給までやがて附くのであつた前職をやめなければならぬやうになつたのも、どこかの女の爲めの借金さわぎからであつた。そして最近には、かのペットをとう〳〵所天にまで持ち上げた、かのなにがし女史のもとを度々訪問し、嫌はれてるのをも知らないで（但し、これは耕次が同女史から直接に聽いたところだ。）夜の十一時や十二時までも話し込み、尊敬を受けてゐるものと自信したのがうまく行かないので、今度は澄子の方に當りをつけて行つたものらしい。で、耕次が『鼻ぼくろのしわくちや哲學者よ』で初まる『兎の憤激』と云ふ諷刺的散文詩をあたまへ作り込んだのはこの時だ。

『……』けれども、こちらの同棲者はまだこちらが渠に對してお人よしの處置をつづけるつもりだと思つたやうだ。わざとらしい冷靜を以つて、『まア、人のことは云はないで、自分の足もとをしツかりさせてゐないやうにおしなさい。』

『……』但し、こちらには、若し渠が眞に民雄の第二の父となる氣があるのなら、いツそのこと、早く澄子をこちらと離婚させて、公けにさうなつて呉れる方がいいと云ふ考へもあつた。かの女が田地もあると見て來たのも渠の故鄕であつて、鑛山師のではなかつたかも知れぬ。

その翌日の七月四日は會であるので、そこへ出席してから、こちらは渠を別室に呼び寄せ、

『貴さまはおれに誓つて置きながら、また澄子を府中までも追ツかけて行つた、な！』

『……』渠は暫らくその羊ひげを顫はせて、口をもぐ〳〵させてゐたが、途切れ途切れに、『僕はあの女の家へは――行きたくないから、――』

『うそを云へ！――それに、そとで會ふ必要はなほ更らないぢやアないか？』

『……』渠はこちらの權幕におぢけたのか、こちらを少しうは目にじツと見つめながら、返事をしなかつた。

『不都合な奴だ！　貴さまがおれの宣告後も澄子のところへ行くことアちやんと知つてるのだ。ゆふべもあすこでおれの妹に出くわしただらう。けふ、妹の話によると、貴さまはゆふべ九時半頃にのこ

のこ出かけて行つて、而も女の腐つたやうな聲で『澄子さんはゐますかッ』——どうだ、ゐなかつたらう？』

『僕は——然し』と、渠はなほ間を置いてから少し聲をも顫はせながら、『あんな女に——執着は——ない。』

『馬鹿！ 貴さまが執着のあるなしなど云つてるんぢやアないぞ。友人甲斐があらば、おれの訴訟と密偵との邪魔にならないやうにどいてろと云ふんだ。貴さまはそれが分らないのだから、以後いよいよ絶交と思へ！ 澄子の惡辣に對しては、おれは貴さままでもやがておれの復讐に捲き込んでやるから、さう思へ！』

渠に對して耕次がこの第二の宣告をしたその翌日、こちらの爲めに畑はまた渠の宿所なる東京近在の△△園と云ふ貸し席を訪問して呉れた。本人がいつもの學校へ講義に出た時間も見計つてだ。果して本人はゐなかつたので、畑はゆツくりとそこのかみさんや女中を捉へて探りを入れた。その結果分つたところでは、渠は先月中に夜、家を明けたことが三四度もあつたが、そのうちで十一日は翌日の夜まで引きつづいて留守であつた。これが澄子のあやしい留守と符合した。そこでこちらは一層嫉ましい好奇心が出たので、また畑に伴はれて、きやつの住所から澄子の宮下の宅に至る間の王子竝びに千住電車線に横たはる某鑛泉場を調べた。兩方からこツそり人に隱れて出會ひに行くには最も便利ら

じいと思つたからだ。が、先月末から代が變つて、女中もすべて新米なので、何等の手がかりも得なかつた。寧ろ立川の川岸にある唯一の料理屋を調べた方が、――耕次も澄子もきやつもその前年の鮎時期に、他の二三名と共に行つたこともあるから、――その方がいい手がかりになつたかも知れぬ。

然しこちらには渠等の罪惡と見えるその現場的證據をまで突きとめる必要はない。こちらは三つの訴訟に對して受け身になつてるのだ。第一のは同居請求、第二のは扶養料請求、第三のは立替金請求。第一のは初審に於いてこちらの反訴なる離婚請求が成立せず、今控訴中である。第二、第三のは、金錢上の問題で――然しこちらは澄子と別居することになつて持ち出したのは、殆ど書物ばかりで、第一の妻と別れた時のことを知つてる友人どもは

『また裸かでか』と笑つたほどだ。

『…………』書物は自分の衣物にならぬ、そして自分だけの衣物と云つては、揃へて一組か二組しかなかつた。勸業債券十五枚や毎月の貯金帳は澄子の名にさせてあつた。そして十五圓かで光琳の畫を書かせた屛風や、七圓で買つた瀨戶のおほ火鉢や、いい桐の丸火鉢や、その他大小の道具は――死んだ繼母の遺物をも合はせて――すべて殘して來た。それに、一群に付き少くとも二十五圓はする蜜蜂四群と、冬マントと、冬衣物二三枚もこちらへは渡されなかつた。かう云ふもののうち、おもな物はすべてこちらに取られないやうに熊本が預つたらしい。で、蜜蜂もまだ生きてるものとして、金に見

つもれば、澄子の衣物類を除いても、少くとも七百圓以上がものはあるから、それを自由にした澄子から僅かの立替金や一ケ年分の扶養料を公けに請求されても、自分としては心に耻ぢてゐない。要するに、自分は、無智のくせに意張りたがる女、近頃ではまた一つ不貞腐れの條件が加はつた女と離婚ができさへすれば、それでいいのだ。たださへ貧乏な自分から、法律の表面を楯に一千圓も二千圓もしぼり取つてからとかの女に思ひ込まれてゐるのが一番困る。そこまでかの女がぐずつて行つたには熊本か十無イかの爲めに調子づけられてるとしか信じられなかつた。

七月八日から三日間は、報告によると、十無イが、澄子の宅へつづいて行つた。八日は午後の九時半頃。九日は渠が澄子と共に酒に醉つて來たのが夜中の十二時だ。十日にまた午後の二時半にゐた。をかしいには、渠は見られたらよくないと思つてだらう、電車の終點からいつもの當り前の道を取らないで、ちよツとわざと遠まわりをしてゐる。八月三日にも、午後九時から來てゐると云ふ注進があつたので自分は早速出かけて行つた。近所の車屋の若い衆を一人張り番させ、何でも男が出たらあとをつけて行けと命じて置いた。そしてその翌朝、首尾を聽きに行つて見ると、何のことだ、午前の一時まで横丁の角に立つてゐたが、誰れも出て來ないのでやめてしまつたと云ふのだ。若い衆が張り番に立つ少し前までは確かにゐたのだが――あとで思へば、自分が直ぐ飛び込めばよかつたのだ。

斯う十無イさんが全盛では、あとの男どもはどうしたのだらう？　浦島は、たツた三ケ月で歸つて

來るのだから、それまで辛抱してゐなければならんぞと澄子の女中に命令して、支那へ出發したさうだ。して見ると、澄子が新聞記者になつて大連へ行くと云ふ話があつたそれと何かの關係がある人かも知れなかつた。今一人の藤田の方はあれツ切りこちらへは音沙汰も聽えて來ない。その身分を澄子が調べに行つたと云ふのを矢張り藤田とすれば、田中の故郷なる府中附近ではなく、或は別な時、別な方面へ家を明けたことがあるのかも知れぬ。そしてさきは澄子の御面相にあきれて、一度か二度のなぐさみでうツちやつたのか？

中途半端な女にして、人を妾だとか、戀は神聖だとか、靈が大切だとか云つてるものに限り、その者自身の缺點や弱點をそこに隱してゐるものだ。自分には澄子の昔のぼろだらけ――それを成るべく取りつくろはせてゐたのは自分だ――に思ひ至ると、今こツそりかの女が何をしてゐても怪しいを通りぬけて、當り前だらうと考へられて來た。

人は自分にはまだ未練があるから騷ぐのだと云ふが、自分を馬鹿にするも程がある！　自分がさきに内容證明にはしなかつたが、『ぢやア、同居しろ』と云ふ意味を云つてやつたのも、どうせ所天の命令に從はないにきまつてるから、そこを一つの問題にして扶養料請求の訴訟に當る爲だ。これは決して二重生活者の所謂『手段』ではない。自分としては、受け味の爲めに迫られた本氣の純全行爲である。若しまた圖々しく同居して來れば、

『この不貞腐れめ』『この無責任をんなめ』と云つて、毎日あし蹴にしてやるだけのことだ。これを虐待と云へば、虐待されるだけの缺點が向ふにあるからだ。

自分の方で府中の件を持ち出さうとした時、先づ澄子の女中を證人に引き出して、辯護士が十無イさんのことを遠まはしに云はせようとすると、裁判長にはまだどう云ふ件か分らなかつたので、長は、

『要するに、飯山のことさへ分ればいいのでしよう』と云つた。そしてできることなら裁判長が仲裁すると云つて、離婚は止むを得ないとして、金をいくらならとあつた時、こちらでは五百圓と云ふに對して澄子がはは二千圓と云つたのでまとまらなかつた。それで、その次ぎの公判日には畑が證人に立つて、田中十無イに關する實際調査をすべて證言とした。

耕次自身の性質として、自分の勢力範圍、利害關係を犯したもの等には飽くまで復讐する。その代り、一たび公けに復讐した以上は、向ふのもの等も一生その弱點はおほひ切れぬことになつたのだから、それで自分は滿足だ。渠等にして、その上こちらへ詫びて來れば、もう、五分々々で許してやつてもよかつた。

然し、十無イさんの如きは、まだ世間をごまかせると云ふつもりで、わざ〳〵兎を飼ひ、世間の交際がうるさくなつたから、可愛い畜生をでも見てゐる方がましだなどと、取り澄ましたことを新聞

記者に公言した。こちらはまだあのとぼけづらを痛いほどこッぴどく精神的にでも投ぐり付けてやらねばならぬのであつた。が、――

さうかうしてゐるうちに九月も過ぎ、十月も終はつた。向ふの提出した立替金請求は雙方の辯護士から中止になつてゐるが、そして控訴の方は十一月に這入つてもまだ方づかないのに、扶養料の問題が先づ解決した。何でも向ふの請求は半分に減じられたとこちらは聽いた。さうして見ると、假り差し押へができるから、自分はその覺悟をした。が、その判決書は――こちらからは勿論、向ふでも請求しないので――いつまでも下りて來なかつた。

『いい加減に示談にしたらどうだ』と云つて、耕次の一友人なるW氏がわざ〱來て呉れて、『ついでに、世間一般に對してもちよツとあやまつたらどうだ？』

『どうして？』こちらは目を見張つた。あまりに思ひも寄らぬことであつた。

『世間を騷がしてすまなかつたと。』

『そんなことはしない――苟も僕は最初から思想的戰鬪の宣言を發して置いたも同樣だから、ね。』

『ぢやア、どうしたら示談にする？』

『どうせ金は子供の爲めには出す氣だが――』

『まとめて出せないのは向ふでも分つてるだらうから。』

そしてW氏は第二回の仲裁に這入つたが、また澄子がはが仲裁人を怒らせるやうな仕うちをした。そして十一月廿八日になつて、突然、耕次がさきに『蜜蜂の靈よ』と云ふ諷刺詩を以つて交際を謝絶してあつた熊本がやつて來た。

『遊びに來た』とか、『また蒙古へ行つて來たが、な』とか云つて、世間ばなしをした。ひよツとすると差し押さへの下見ぶんに來たらしいので、上げるのではなかつたとも思つたが、耕次にも好奇心があつた。そして蜂の一件を責めて、

『僕の大事な財產と知りつつ、君があれを僕に一應の挨拶もなく澄子から預つたのは、不都合きはまる——若しあれが金であつたらどうだ?』

『金なら預らない』と、洒々してゐた。

『金だツて、蜂だツて、財產たるには同じ理窟だ!』東京の郊外では蜜源が乏しいので、どうせ蜂の商賣には失敗の經驗をしたものの、大阪以來四五年間の研究の名殘りはまだ貴かつた。

『死物と生き物とは違ふ。生き物は世話せにやならんから。』

『ぢやア、なぜ僕に渡さなかつた?』これが一番こちらの癪にさわつてたのだが——。

渠の話では浦島は姓を花村と云ひ、支那浪人の一人である。そして澄子の宅で朝までゐたこともあるのがこの紹介者の口から證明された。そして最後に示談のことも出たが、こちらはさう重んじて取

り合はなかつた。

五

ところが、もう年の暮れになつて、耕次の家に子が生れた。その三日目、各官衙も御用じまひになつたと云ふ廿八日の翌日、乃ち、廿九日と云ふのに、執達吏が突然澄子の代表者をつれてやつて來た。そして渠等の手から判決書を初めてこちらに渡した、こちらの辯護士の手をも經ないで、直接に。この惡辣なやり方にはいかな自分も驚きもしたし、また憤慨もした。が、何とも仕やうがなかつた。文面を手に取つて見ると、毎月、民雄（三歲）に拾圓、澄子に貳拾圓を與ふべきものとして、凡そ五百圓の金額があつて、そのうちの三百圓ばかりに對して、假執行を爲し得ることになつてゐる。澄子にして若し尋常にしてゐたら、自分もこの判決には少しも不服はない。別居の當時には收入の三分の二までもやると約束して友人等に笑はれたほど寛大であつたのだもの。然しかの女はこちらのことを誤解したり、曲解したり、無理にうそついたりして、世間へ公けにした。こちらはそれを第一に怒つた。そして所天たるの權利を以つて、母子二人は毎月參拾圓だけの生活ができるやうに、下女を廢し、家も小さいところへ轉居せよと命じた。かの女はこの命令に從はないで訴訟をつゞけたのだが、結局、金錢上で歸着したところはこちらの二度目の意志を出でなかつた。

では、こちらも工面してやればいいやうなものだが、殊に子供に對する分だけは異存がないやうだ。が、子供に扶養料として拂ふ金が、その拂はれない時から、既に、少しなりとも、その母親の淫亂な飲み料や密會費に費されてゐたと云ふことになるのを好まない。そして澄子その者に對する分の如きは、今となつては、亭主が女房の密會費を拵らへてやるやうなものだ。そこでこちらは寧ろ法律の行なはせる通りになつたわけだが、差し押へられたのは——最も大切なものはすべて他へ運んであつたから、ここにないが——大きな机と、安ツぽい掛け軸と、衣類四五點と、和洋書籍千二百三十三冊とだ。尤も、この部數は、こちらが立會人としての捺印をも拒んだ位だから、向ふで勝手に數へたままだ。別に、また小形の六法全書（これを耕次の嫡子はこの事件がどうなるかと心配して時々頻りに讀んでゐた）と、康熙字典の端物が一帙と、印度の青年學者から送つて來た洋書が二三冊とあつた。

　これに對してどうしても納まり切れぬ憤慨が、耕次をして翌三十日に澄子の宅へ踏み込ませたのだ。

　渠は第一の妻に生ませた十三歳の男の子（これが六法全書をいぢくつてゐた）を引きつれて行つて、先づ渠自身の妹の家で人夫の勢ぞろひをした。自分として子供を伴つた理由は、渠が自分達の別居の初期一ケ月間ばかりを澄子と共にゐた間に、かの女からいろ／＼神經質的な惡感化を受けてて、

今にそれが先入見となつてるやうなところがあるので、澄子をさんざんな目に會はすのを見せて成るほどとそのわけを悟らしめるに在つた。

『君も一緒に來い』と、耕次は妹の亭主にも命じた。澄子の方でかの柔術三段の熊本を呼んで來るかも知れぬから、若し腕沙汰になれば、それにそれとなく當らしめるつもりであつた。

『僕は職掌上、なア』と、渠はいやさうな顏つきをしてその女房を返り見た。

『さうです、ね』と、かの女も少し躊躇の樣子であつた。

『よし、それなら貴さまなどには賴まない――おれが獨りでやるから!』この時耕次は既に自分の決心をその顏いろにも見せてゐたと見える。あとで聽いたところでは、渠の妹は渠が澄子のところであまりひどいことをしはしないかと心配して、その亭主をあとからこちらに關係なくよこしたので、こちらが荷物を車につませてた時に、そのそばに來てゐた。

『…………』然し挨拶もしてやらなかつた。

こちらは先づ自分の子供と共に案內もなく玄關をあがり、座敷のふすまを兩手で兩方にがらりと明けると、座敷とそれにつづく三疊の書齋とのあひだの敷居ぎはに据ゑた桐のまる火鉢に向つて、澄子は後ろ向きに長ぎせるの煙をふかしてゐた。こちらがかの女に初めて會つた時から見おぼえのある、そしてかの池田山でこちらのいたづらを受けた時にも着てゐたところの、なすび紺の色に雨のかすり

が這入つた綿お召しも既に古ぼけたその羽織りを着たのが、ふり向くが早いか、立ちあがつた。

『あなたがどうしてあたしの――？』

『引ツ越しだい！』可哀さうに、矢ツ張りぼろをつくろつて着てゐるのだとは思ひながらも、右のこぶしがいきなりかの女の横ツつらに當つた。すると、左のこぶしがまたその一方へ行つた。

『…………』かの女が倒れて、無言で起きあがるところを、また正面から蹴飛ばした。

『この不貞腐れめ！――この野郎！――この女郎！』何でもこちらの足は右も左りも三度によく働いたと思つた。

『…………』かの女はまた横に倒れたまま、蹴飛ばされるままにまかせてゐた。

濱はそれで少し氣が落ち付いたので、先づ、第一に目ざして來たきんからかんの箱を探した。その間にかの女は外へ逃げて行つた。

こちらは何でも手早くしなければ熊本が呼んで來られると思つたので、、

『これもだ――あれもだ』と、頻りに人夫と子供とを驅つて、簞笥やら、小簞笥やら、支那カバン、行李、蓄音器やらを、手あたり次第に運び出させた。

門前には近處のものが集まつて來たやうすだ。

『なアに、裁判所がありますから、あとでどうともなります、』澄子が門内の格子そとに立つて、斯う

半ばこちらに向いて語つたその顔つきを、渠は玄關の踏み段から見おろすと、あらゆる小皺がぴくぴくと痙攣を起してゐるのであつた。そして女優まげにもこちらの手がひどく當つたのかして、髪が後ろへ散らばつて、天邊の赤いおほはげが半分以上も向き出しだ。別居前から最も氣になつた事の一つはあれでないか？　あの段々大きくなつたはげが昔、いや、たツた六七年前まで、一升酒を飲んだ結果かと思ふと、またそれにも懲りずこの何ケ月かをおほ酒もやつてると思ふと、今更らのやうにぞツとした。夜中におはぎをあたまの天邊で喰ふ女も思ひ出せた。

『なんだ、畜生！』渠は犬でも追ふ氣になつて、飛び出して行き、『法律を楯にするなら、それだけの責任を感じてしろ——不貞腐れをしやアがつて！』

『…………』突き飛ばされて、地べたの上へ横ざまに倒れたかの女のたびはだしに氣がつくと、こちらも亦同じはだしでゐるのであつた。

『全體、これはどうしたわけなのです、出しぬけにさう亂暴をして？』商人風のぢイさんが門の明いた戸につかまつて、斯う渠に問ふた。

『…………』こちらは民雄がよく遊びに行つて可愛がられるとかけながら聽いてるおほ屋さんの主人だと見たが、なアに、くそツと云ふ勢ひが先きに立つてたので、吐き出すやうに叫んで答へた、『引ツ越しをするんです！』

『引ッ越しなら引ッ越しでかまひませんが――わたしはあなたに家をお貸ししてあるのではございません。』

『僕は今こいつに』と、澄子をあごで示めして、『さう命令してゐるんです。』

『命令できるやうにもしてゐないで!』かの女はまた投ぐられはしないかと少し逃げがまへをする風であつた。

『なんだと!手めへの方にこそ落ち度があるんだぞ――馬鹿!』ひと睨みしてから、渠はまたうちへ這入つて見た。

澄子が初め火鉢に向つてすぱ〳〵やつてたのは、暮れの拂ひをここへいくら、かしこへいくらと考へてたものらしい。書齋の小い机の上には、新らしい一圓札が十五枚か二十枚出てゐた。その一枚をでも浚つて行つたと思はれてはこちらの行爲も卑劣になるから、明けて見たい机の引き出しではあつたが、それにさへ手を觸れなかつた。書物のつまつた一つの書棚やこちらが高く買つてやつた花活けニつにも手をかけなかつた。こざ〳〵した切れの這入つてるらしい行李二個をも殘すことにした。

一度こちらが證人に呼び出した女中は、どうしたのか、姿が初めから見えなかつた。泣き付かれては困るところちらが前以つて心配してた民雄は、然し、茶の間にすや〳〵寢てゐた。そこの戸棚を明けて見ても、蒲團ばかりだからそのままにした。そして子供のそばへ行つて、立ちながら、そツとその

寢がほをのぞいて見た。二度目の仲裁をしようとしたW氏のよく語る通り、

「君にそツくりだ』と云ふ顏はどんな顏かと。

『………』こちらはさきに蜜蜂を取りに行つて、――この時はまだもとの家であつたが――から箱ばかりを渡されて歸つた時に、渠を見たのが終りであつた。その時はまだよち／＼歩きで、言葉もきけず、おもちやの上におもちやを重ねて、それが倒れるのを見て、その度毎に喜んで、ただ、『あツ』と云へてたばかりだ。それから丸一ケ年見なかつた。

『………』無言でだが、斯う渠に云つた、『無辜の捕り子よ、お前の父は今にお前を、お前の扶養訴訟に於ける入らざらん代理人なるてんがうな蜜蜂殺しと、お前の强慾で淫奔な母とから、解放してやる。父が正當だと思ふ離婚の理由が今に法廷を通過すれば、お前の母はから傘一本で追ひ出され、お前は父の手に歸るのだ。』

　うか／＼してゐると、然し、折角運び出したものも取り返される恐れがあるので、下駄をはいてそとに出で、人夫に出發を命じた。が、おほ屋がそばで荷車の輪をしツかり握つて、なか／＼放さない。

『おれの權利を妨げるなら、投ぐりつけるぞ！』斯う叫んで、渠は持つてた櫻のステキをふり上げかけたが、自分に無關係な他人にはうツかりと無茶なこともできないと云ふことに氣づいた。

『あぶないから、手を放しておしまひなさいな。』これはおほ屋のかみさんらしかつた。どこの氣丈な娘か知らないが、二人でその近くへ出て來てゐたのが、一方は掃木を持ち、他の一方は十能をふり上げて、ただあツけに取られてゐた。

『行かせたら困ります、ね。』門のそとへ來てゐた澄子は、瘤走つてる聲でだが、おほ屋に尤もらしくまた同時に訴へるやうに云つた。『直ぐ熊本さんが來ますから。』

『もう、巡査もやつて來さうなものだに』と、おほ屋は半ば獨り言のやう。

『巡査が來ようが、誰れが來ようが、おれはあいつの亭主として命令するんだ！放せ！』耕次は向ふが車を握つて泥だらけになつてる手をその親ゆびから初めて無理にはづさせようとしたとたん、その力が入り過ぎて却つてこちの方の手をすべらした。そしてその餘勢がこちらのからだを——小脇にステキをかかへたまま、——門のはすに出た板塀へどんとぶつけた。自分ながら、自分の顏も血がとまつて、眞ツさをになつてるのだらうと思はれた。

『ほんとに、亂暴な』と云つて、おほ屋は手を放したので、

『行け！』耕次は人夫に再び命令した。そして澄子の肩を正面から一つステキでぶんのめしてから、

『畜生！　扶養料が欲しけりやア、巣鴨町〇〇〇番地へ引ツ越せ！』

『おほきにお世話です！』その聲には無念と一層の反抗心とが聽えた。

『なんだと！』再び投ぐりかけたが、わきに見てゐた妹の亭主がそれをとめた。
耕次は誰れにも挨拶せず、そこを引き上げたが、やツと自由な呼吸ができるやうな氣がした。そのあとへ熊本が飛んで來たさうで、妹の亭主がそれにつかまつて大いに油を取られた。熊本は渠に飛びかかりさうな權幕で、腕ぐみした肩を一方だけつき出して、ぶつかつたさうだが、こちらには他人がその澄子の亭主の如くこちらのことを意氣込む理由が分らない。二度までも巡査を呼びに行つた者がうちに歸つて來ての報告には、巡査が
『夫婦喧嘩なんかに誰れが行くものか』と云つたさうだ。

六

渠は自分が行く時まではよくおぼへてゐた大きな屛風を、——座敷の隅に飾つてあるのださうだが、——うツかり忘れて、目にも入れなかつた。桐の火鉢には氣が付いたので、最後に火を出してしまうつもりで、わざ〳〵玄關まで持ち出して置いたのだが、それも忘れて來た。持ち歸つた簞笥にはすべて自分の買つてやつたいい物は一つもなかつた。恐らくそれ等は、瀨戸のおほ火鉢などと共に、熊本か、おほ屋か、若しくは質屋かへ行つてしまつたのだらう。向ふだツて、自分の來るかも知れぬほどのことはいまだに覺悟してゐただらうから。自分は、品物のうちで、子供の衣物と貯金帳とは直

ぐ使ひを以つて返した。澄子の實印をもだ――但し、澄子の方では、さきにこちらの實印を奪つて置いて、返さなかつたので、別に拵らへて改印届けをしたやうな目に會はせたけれども。

自分の何よりも樂しみで、また何よりも多く目あてにしたのは、かのきんからかんであつた。かの女がおもな手紙や繪ハガキをもとから入れて置く箱だ。それを、瘦せ犬が大きな骨を喰はへ込んで來た時の如き、がつ／＼さを以つて明けて見た。嘗て自分が旅さきから送つた名所の繪ハガキが出た。――御大禮記念のもあつた。――かの呉服屋の息子が、澄子同居請求訴訟の方づいたのを、實際の勝利でもないのに勝利らしく祝して來たハガキも出た。――某女史が、こちらのところで實際に語つたのとは丸でうらはらなことを書いてある手紙もあつた。――二三地方のなまくら青年が澄子を純潔で正當だと見爲して、その態度を讃美して來たのもあつた。――熊本が自分の細君の名で書いたのも三四通出たが、それによると、同家では澄子から金を一圓借りたり、米を一升借りたりしたことがあるかして、その延期斷わりやら返却の言葉などが讀めた。これで見ると、澄子に墮落を紹介しながら機嫌を取つて置いて、苦しい時の足しにしてゐたらしい。――大連行きの話も、話のあつたことは事實かして、また別な某支那浪人（これが新聞社長であつたらしい）との間に二三回の手紙を交換してゐるが、その文意では日刊新聞ではなく、而も碌な性質のではないらしい。澄子自身で百圓も百二十圓も取れると人々に吹聽してゐたのは、だまされてゐたのか、それとも法螺を吹いてゐたのかだ。――

青年らしい見ず知らずの者の通り一遍の戀文も二三通あつた。が、そんなものをすべて別にして、最もあやしいと思はれるのだけを人の名に從つてより分けて見た。――かの藤田鑛山師のらしいのが一つも見つからないのだが――。

出版屋飯山のが九通。そのうちで三通は、澄子の『日記』發表に於いて若しこちらのことに關して曲解や侮辱のことがあればそれをまた法律問題にしなければならぬから、前以つて十分注意しろと耕次から云つてやつたことに關するのだから、飯山が澄子に近づくまだ初めの時のことである。それから、大正五年二月に至つてのは二つともハガキで、貢ぎを請求されたに對する渡し期日の知らせだ。それが飛んで七月十七日の手紙には、貸し金明細書として百二十四圓を請求してゐる。渠は一度やると云つた筈だが、また欲しくなつたと見える。同じく九月になつて、またそれを請求してゐる。十一月のになると、もう、いや味が加はつて、

『お互ひに貧乏であるけれども、奥樣の方が富んでるやうに思はれます』などとある。――

次ぎには伊藤――倉之介と云ふのだ――のだが、十九通あるうち、飯山へ自分の妹をめあはすかどうかの問題から初まつて、それが駄目になると共に、段々おのれのばかりの爲めに訪問し、三月十日のハガキには、

『明晩八時頃月を踏んでお訪ね申上度候』とあり、六月十九日には『ややさむき初夏の日をしみじみ

と君を思へり我れひとりかな』と云ふやうなヘツぽこ歌になつてゐる。但し、渠の文面だけで絶頂に達してゐると思はれるのは四月四日の手紙で、――夜十二時過ぎまで飲んだり、淺草をぶらついたりして、澄子を口說いたらしい。かの女がただ眞實に姉と思つてくれるだけならと云つたのは、まだ徹底しないとある。その後どこまで關係が進んだか分らないが、今一つのには、シエキスピアもその細君が年うへであつたのを知つて、心丈夫に思ふなどと洒落てある。この男、なかなか才物らしい。――

第三に、滑稽なのは、澄子の十九歲前後の時に同棲して、相共に鐵道局に勤めてゐた者のが九通あつた。こちらの別居が新聞でやかましくなると、間もなく手紙をよこし初めたらしい。安田信藏と云つて、大正四年十一月十二日から五年の三月十日までのがある。文面で見るもいまだに意久地のない奴だが、如何に親が職務の義理合ひ上許して呉れてあつても、亭主とするには張り合ひのなかつたとはこちらも兼て聽いてゐた。澄子に逃げられてからこの方、ひとり寂しい日を送つてるなどと書いて久し振りの面會を爲し、それから金を十圓借りたことを感謝してゐる。間もなくまた、○○省の仕人に周旋してくれるものがあつて、身なりを少し整へなければと云つて、六圓ばかり工面してくれとある。その結果の分る手紙がないのは勿論、それツ切り通信は絕えたらしい。恐らく澄子がまた蹴飛ばしてしまつたのだらう。以前の渠は、最後に血で書いた手紙をよこしたのだが――。然し『二月二十九日夜十一時半』としてある手紙によると、

『そら、三十七年の十二月の頃、月の清き夕、新川堀端を二人で散步したとき、僕がキスを許して下さいと云つたら、一と聲「いや」と云つたことがありましたね、あのときの聲はいまでも耳に殘つてゐますわ。それから、三十八年の一月半頃のある夜、下千葉堤みで今夜はキスを許してやるわと云はれしときの嬉しさ』などとある。――

今度のは最後だが、耕次が最初に四五通見て、からだ中が煮えくり返るのをおぼえたので、わざとあとまはしにした田中十無イのハガキ竝びに手紙だ。總計三十通。それをこちらは日附け順に竝べて見た。

（一）、大正四年二月三日（手紙）。これは、こちらも承知の上、澄子が渠と交際する爲め、在宅の時間を問ひ合せたに對する叮嚀な答へだ。思ひ出すと、渠は、この手紙で澄子が渠に會ひに行つたのをこちらが知らないと見たので、その後こちらが渠に聽いた時、そらとぼけてゐた。この時から、渠を馬鹿な奴だと思つた。但し、澄子は今の亭主に棄てられたら、さし當り誰れを選ぶかと云へば、渠をであつた。この事はこちらと共にかの女が同じ月に修善寺へ來た時からよく分つてた。その時の渠から來た手紙は、どうしたのか、ここにはすべて殘つてゐない。

（二）、大正五年一月八日（ハガキ）。第一とこの第二との間にはこんなに時の隔りがある。どこかで會つたあとのことをだらう、『無事にお歸りになりましたか』と云ふやうな文句だ。無論、これからは

すべてこちらと別居後のことだ。

(三)、同年一月十一日(ハガキ)。『明晩行きます』ともある。

(四)・同年一月廿七日(手紙)。澄子がこちらの攻撃文を書いたらしい。その論文に渠の云つた言葉を引用してあるのを削つてくれと云ふやうなことがある。その文を豫じめかの女は渠に見せて相談したらしい。最初の仲裁をこちらの二友人――その一人は渠――がかの女に以つて行つた時、渠は何も云はず、ただ今一方の友人にばかりしやべらせたその所以が、これで分つた。

(五)・同年四月三十日(手紙)。これは澄子から借りた金を催促されて、今ないから待つて呉れと云ふ云ひわけだ。

(六)、同年五月十六日(手紙)。『今晩八時、池袋停車場へ來て下さい』とある。いよ〳〵密會の文句ではないか?

(七)、同年五月廿日(手紙)。『昨夜は失禮――明廿一日、日曜、午後六時迄に中野停車場でお目にかかります』とある。東京にゐるものがわざ〳〵汽車か電車で中野まで行つて會つたのだ。

(八)、同年五月三十一日(ハガキ)。府下への轉居通知。

(九)・同年六月八日(ハガキ)。『今晩伺ひます』云々。これを出した時澄子が同日府中へ行つたことを渠はまだ知らなかつたらしい。出したあとへかの女の呼び出し狀でも屆いたのか?

（十）、同年六月十三日（ハガキ）。『今晩伺ひます。』十二日に夜おそく別れたことは、こちらの府中調査で分つてるではないか？して見ると、直ぐまた會ひたくなつたのだ。
（十一）、同年六月十六日（手紙）。『〇〇（差し出し人自身の雅號）に會ひたくありませんか』ともある。これ位が渠の實行的戀文に於ける表現の絶頂であらうか、餘ほど煮え切れない男であるから？もう實行に移つてたのは分つてたのだが――。
（十二）、同年六月廿六日（手紙）。『明廿七日午後七時半までに中野ステーションへ是非』ともある。わざわざ遠い中野などへ都合のいい密會所をきめてしまつたものと見える。
（十三）、同年八月二日（手紙）。七月は八日、九日、十日とつづけざまに訪問した事實はあがつてるが、書信はここにない。八月になつて、これには『いろ〱のお心づかひありがたく存じます』云云。
（十四）、同年八月三日（ハガキ）。『今夕伺ひます』云々。これはこちらが張り番をつけた時のことだ。
（十五）、同年八月七日（ハガキ）。『他人の空似と云ふこともありますが、餘り安心も出來ません』とだけ書いてある。おのれ等で、斯うこツそりと會つてゐながら、空似どころか、――そらとぼけだ！
（十六）、同年八月八日（手紙）。『其後はいかがおくらしですか』と。前々夜には多分會つて置きながら、

この遠まはしの奸譎な發想を見よ。そして今書いてる著書には別に他の目的はない、ただ『〇〇(差し出し人の雅號)の天才の卓越を世間に示めしたいのです』云々。こちらは吹き出してしまつた。渠の書く物にはいかめしいお膳立てはあるが、なか味はからツぽだ。何が卓越だらう? 馬鹿々々しい! 無邪氣のやうだが。戀文には愚劣だ。また『十日の晩上ります』とある。

(十七)。同年八月九日(ハガキ)。『折角ですが、今日は上れません』とあるのを見ると、渠の前日の手紙と行き違ひに、澄子の呼び出しが來たらしい。

(十八)。同年八月十日(手紙)。斷わりのハガキを出して置きながら、またきのふも行く氣になつてゐたものと見えるが、それが矢ツ張り行けなかつたのに對する詫びであり、その終りに『昨日の御用とは何です』とある。

(十九)。同年八月十七日(ハガキ)。『明晩あがります、お待ち受け下さい。』

(二十)。同年八月廿日(手紙)『仕事の方づき次第直ぐにも上りたい——此頃はいかがお暮しですか、それが知りたい』云々。その前々夜、乃ち、十八日には會つてるではないか? その上、いかに暮さうともこちらから見れば入らざらんお世話だ。但し、こんなことを云ふと、直ぐまた未練だと云ふものがあらうが、こちらは澄子から法律上のおもて向きをふりかざされてゐる以上は、受け身のままそのうらの事實をあばいてやらねばならぬのだ。

(廿一)、同年九月二日(ハガキ)。『明晩あがります』云々。

(廿二)、同年九月廿一日(ハガキ)。『一兩日中に』云々。

(廿三)、同年十月十一日(手紙)。『昨日は失禮云々』とあつて、また金拾五圓を貸して呉れろとある。渠にさう二度も金のことを見込まれるやうでは、澄子は融通が利いたに相違ない。安田にも融通してやつた。飯山が『奥さんの方が富んでるやうに思はれます』と云つてあるのは、多少その實際を知つてたのか？但し、十無イは人に金を借りてもその人にさへ借りたふりを見せぬ男だ。そして催促されても大抵はすツぽかすので、さきは怒つてしまふ。で、渠とうわべだけでも交際をつづけようとする人は、渠に金を貸さないのを秘訣としてゐる。そして若し貸せば、やつたものと見てしまうのだ。『君とまだ／＼交際はつづけたいから、金は貸せない』と皮肉に出た友人もあるのを、こちらは知つてる。

(廿四)、同年十月十四日(ハガキ)。信州へ行く道で新宿から出したのだ。この旅行はこちらも知つてたので、こちらは澄子が途中までついて行きはせぬかと、私かに探偵してゐた。『十六日にはお目にかかれませう』ともある。

(廿五)、同年十月廿二日(ハガキ)。一論文を書いてると云ふ知らせ。

(廿六)、同年十一月一日(ハガキ)。早文を送るから『〇〇（差し出し人の雅號）の大文章』を讀んで

くれとある。
(廿七)、同年十二月二日(ハガキ)。『四日午後お訪ねします』とある。
以上の外、なほ渠のが三通あるけれども、不必要だから省いた。兎に角、この順序が終りに近づくと、日の隔りができてると共に、感情も氣まづく遠々しくなつた趣きが看取される。その癖、こちらの手に讀入つた書信としては最後のハガキを見ても、なほいつ〳〵伺ひますなど云つてるのを見ると、時々思ひ出してはおもちやにしてゐるのではなからうか!
然し一番鋭くこちらの神經にさはつたのは、こちらの最も證據にできる十無イ自身の文句だと云ふよりも、寧ろ澄子がそれを待ち受けて開らき見た時の喜びかただ。現場を見ないでなぜそれが分るかと云ふ反對者もあるだらうが、七八年も兎に角――好いたり嫌つたり――一緒にゐたものには、そんなことは手紙の封の明けかたで分る。見よ。金を貸してくれろとか、夜何時に何停車場へ來いとか云ふのになると、十無イはすべて注意深くも封筒ハガキにしてある。ところで、それが――どの封も、どの封も――ゆツくり氣を落ちつけて開らいたのはなく、何はさて置いてもと云ふやうにふるひ付いて明けられてるので、皆、上か下かの字竝みまで破り取られてゐるのだ。それをつぎ合はせて讀んだ時の澄子の顔つき、手のふるえがこちらにはあり〳〵と見えるやうだ。かの女が女中の『浦島さん』でふるひ立つたのよりも一層有力な心證ではないか? 渠等のいよいよいまはしい情交の證據は、こ

ちらには、これ以上具體化したのがない。これがこちらの離婚の理由を正當と證明しないなら、法律があまりに淺薄なものにならう。

七

その上、こちらにこの希望を一層燃え立たしめたことは、澄子その者の艶書が一通發見された。これはさきへ出した下書きか、それとも出さうとして書いたが、自分でもあまり不見識と氣がついて別に文句を書き改めたので殘つたのか、いづれにしてもまた有用な材料だ。

大正五年十二月一日の日附けだから、十無イの最後のハガキの前日に書いたものだ。

『近頃は隨分御無沙汰でございますね』と云ふやうないや味ツたらしいことがあるのを見ると、こちらの想像通り、密會熱がずゐぶんさめてゐたのだ。『內容はまことに貧弱な戀愛でしたね』ともある。これはかの女の得意な口癖だ。少しでも寂しく感じたり、不愉快になつたりすると、直ぐこちらへもかの女はさう云ふ風な發想を以つて訴へた。そして靈的とか、精神的とか云ふ空疎な高尙がりを以つて自分の慾を飾らうとするので、時々わざとその文字通りの追行をさせるやうにしてやると、今度は往生して、また靈が足りないから肉を燒かないのだなどと云ひ出した。戀に、いや、人生に、靈や肉の區別はない。肉靈の合致狀態が何ごとでもの充實その物だ。それをおもちやの上に現じて貰はうとし

てゐるのだから、貧弱なのは前以つて當前のことぢやアないか?而もそれが、もう、『でした、ね』の過去時法になつてる。

『『かひなく立たん名こそをしけれ』のその人よりも、もツと淋しい詰らないものです』には、現在時法がつかつてある。而も引用の下の句に對する上の句を以つて云へば、『春の夜の夢ばかりなる手枕』は公けにならぬ密會のことではないか?

こちらも貧弱とか、淋しいとか、詰らないとか云ふかの女の情慾的感傷癖には幾たびもなやまされた經驗がある。

かの女は渠を引き寄せようとしてだらう、その手紙の末に今月の某雜誌を貸してくれろ、渠の論文を見たいからと云ふことを云ひ添へてある。だから、渠が渠のハガキ通り四日に訪問したとすれば、自分の論文の載つた雜誌をのこ〳〵と持つて行つて、例の女のやうな口調で、

『まア、讀んで見て下さい。△△君(こちらのことだ)のなどとは全く比べ物になりませんから』と云ふ位の自慢はしただらう。渠の書くものには、お膳ばかり竝べ立てて、御馳走が少しも乘つてない癖に。さうだ、思ひ出すと、こちらの事件に關する公けの書類中に、裁判書記の思ひ違ひでだらうが、渠の雅號の讀みかたに全く別な漢字を當てはめて、滑稽にも、『横道』としてあつたツけが――渠には、よこ道どころか、實に、大塚の電車終點からわざ〳〵のまはり道もあつた。恐らくまたぬけ道

もあらう。

それに今一つ、かの女がこちらに與へる書と云ふ、表面は尤もらしい公開狀の下書きと淸書とがあつて、——淸書の方はいろんな雜誌へ送つて見たが、突ッ返されたので止むを得ずしまつて置いたものらしいが、——これを讀んで見ると、かの女はおそろしい程白ばつくれて、おのれが今では、もう處女も同樣になつてるとか、法律を楯にして頑張るのはこちらの方だとか、丸で事實とは正反對のことを書いてある。そしてこちらの平常のことを相變らずわざとらしい程誤解やら曲解やらにして扱ひ、おのればかりがえらいもののやうになつてゐる。また、なにがしが斯う云つたの、くれがしがどうだのと、それからそれへと人の口を幾重にも傳つて幾重にも間違つたことを、そのままに信じて、喰つてかかつてる。最もをかしいことには、或會で同席の一婦人を別室に引き込んで酒の醉ひを介抱させたなどと、その時別人のやつたことをこちらのことにして攻擊してある。然しかの女が感情の上から淺はかにも、人の話を取り違へたり、人の事實を想像しそこねたりして、人に迷惑をかけたことは別居前にも二三度あつたことなのがこちらにまた思ひ出された。

耕次は十二月の三十日と云ふ急がしい日に、燒け半分でだが、產婦の枕もとで以上のことを調べ上げた。それが爲めに午後の九時半まで自分の晚めしを取る時間がなかつた。

『早くこの書類を押取さへすれば、さう騷ぐこともなく方づいたのだ——前々から注意しないことで

もなかつたのに』と、畑は耕次の食事中のところへやつて來て、多少こちらの成功を祝した。そして内容證明の手紙を書いて呉れた。その意味は、こちらが澄子にも云ひ殘して來た通り、巣鴨町〇〇番地（これは今の家へ引き移るまでにちよツとゐた番地だ）に借家を定めたから、そこへかの女と民雄とは移轉同居すべし、期日は一月三日までにと云ふのであつた。これに反けば以後の扶養料を請求する權利がかの女になくなるわけだとして。

耕次の妹の亭主がその翌日澄子のことづてを以つて來ての話によると、取つて來たもののうちに人からの預かり物があるさうだ。それでよく調べて見たが、さうらしいのはない。闘球盤は自分達の大久保に同居を初めた當時、自分達の紹介者たる房子さんから貰つて來たものだ。三十代の婦人にはまだふさはしくない櫛やかうがいがあるが、これらはこちらの繼母が殘して行つたものだ。千九百十五年度の『東洋フースフー』は、こちらの名も澄子の名も出てゐるものとして買はせられた物で、預り物ぢやアない。その外には、もう、男の羽織りしかない。それも、その碁盤縞の甲斐絹うらはこちらがかの女に買つてやつたのを記憶してゐるが、ただそのおもて地なる鐵無地の奉書つむぎにはおぼえがない。殆ど空しかつた簞笥の中にはこれだけが殘つてたのを見ると、或はかの女が渠の爲めに渠のに裏をつけてやつたのではなからうか？いや、思ひ出すと、十無イさんはそのつむぎのよごれ腐つてた時に、一度こちらのところへ實際に着て來たことがあつた。産婦の見たところでは、確かにさうで

あつた。

斯うなると、然し、こちらは渠をこそ憎め、浮氣で馬鹿なかの女を一方ではあはれみたくもなる。いかなかの女でもいよ〳〵渠と結婚ができるとなれば、いつだツてこちらに對する訴訟なんか抛棄もしよう。さうしないで、けちな手切金――取れても結局は五百圓をのぼるまい――をねらつてるのは、渠が密會をかさねたり、金錢を借りたり、羽織りの裏をつけさせたりしながら、かの女との結婚を斷行する決心がないのだらう。いや、おもちやにしてゐられるだけゐようと云ふ意地ぎたなさを示めしてゐるのではなからうか？

こちらのあたまの中では、渠の謂はゆる『あんな女に執着がない』と、かの女の手紙なる『貧弱な懸でしたね』とが渦を卷いて、疑問と憎しみと哀れみとの三すぢ繩を綯つて來たのだ。

『向ふでは家宅侵入罪、强奪罪に問ふと云つてますよ。』

『なアに――あのなまれ半ぢやくた柔道顧問なんか』と、耕次は自分の妹の亭主に答へた。そして自分の腕にできた筋肉の固いこりは二三日直らなかつた。

八

年が明けて、三日間を待つたが、澄子等はこちらの命令に從はなかつた。そして二日の時事新報に

は、特だねとして、こちらがかの女の家に踏み込んだ記事が出た。が、事實の相違と誇張とがある。『あたしはあなたの御意見通りになります』と、矢ツ張り、かの女は熊本にこの件に就いても云つたさうだから、渠等二人が相談した上で、こちらを惡く〳〵世間に思はせようとする計略とは、ちやんと分つてる。自分の所有權ある物を自分が自分の女房のところへ取りに行つたのが家宅侵入罪や强奪罪の訴へに價へするのなら、それは覺悟の前だ。また、自分が自分の不貞くされ女房をぶんのめしたのが虐待ならそれも止むを得ない。それがいやなら、いつまでも度々へたにおだてられての法律いぢくりなど、もう、いい加減にやめてしまへ！

ところで、澄子の談話と云ふのを新聞に出たので讀んで見たところでは、第一、耕次がおほ屋さんを投ぐつたことになつてる。これはこちらだけに關する惡誇張だとしても、第二に、渠の妹の亭主が渠と共に人夫や子供を指揮して、その職掌なる劍道師範の腕前を發揮したかの如くなつてる。これらは全く、かの女が別居以來こちらを落し入れようとして應用した、例の多くの曲解の最後である。これをかの女は今回こちらにばかりでなく、耕次の妹の亭主にも押し廣げたのだ。警察に關係ある弱い職業の渠は、可哀さうにも、かの女の計略通りに落ちて、それが爲めに上官からの怒りを買つて、市中から遠い郡部へ轉任を命ぜられることになつた。そして全く僅かの俸給ばかりになつて、別に內職をしてゐた分は郡部へ行けば全然取れなくなるわけだ。それが直接にこちらの損害になつたことには、

畑が仲へ這入つて、こちらは自分の妹の亭主の爲めに毎月一定の補助を與へるやうに約束を强ひられた。

耕次は目下のところ二重にも三重にも怒つてるのだ。そして正當の理由ある離婚の控訴を飽くまでつづける爲め、新らしい證據書類を取りまとめて自分の辯護士に渡した。そして自分は必勝を期してゐた。ところが、

『もう、この邊で示談にしたらどうだ――向ふも今度こそは痛い弱點を握られたのだから、强くも出られまい。』斯う云つて、再び親切にも仲裁に這入つて呉れたのは、さきに一たび仲裁を澄子がはに無にされたW氏だ。この人は田中十無イさんにも友人であるので、その田中をも、公け沙汰に出させたくなかつたのだ。で、その條件は、

一、澄子は離婚を承諾し、耕次は民雄を澄子の養子にすること。

二、百五十圓を直ちに渡し、あとは月々十圓づつ總計五百圓に達せしめること。

三、雙方の裁判事件を取り下げること。

四、昨年末に耕次が澄子宅から持ち歸つた品物を返すこと。

斯う書き現はされて見れば、耕次としても實に何でもないことであつた。向ふが少くとも二千圓は取りたいなどと法廷で陳述したのが滑稽になつてしまうし。自分も金さへあればこれしきのことであ

たまを惱ますよりも、早くこのことを忘れてしまう方がいい。然し何だか子供をやりたくない氣もする。さきに自分は子供をすべてきらひであつたが、第一の妻に生ませたのを、三年前から一人、二年前からまた一人引き取つてそばへ置いて見ると、親しみができたので、時々第一の妻であつたのがやつて來て渠等をわが物がほに持て爲すのが癪にさはるほどになつた。それに、また新らしい同棲者にも今回一名、こちらのうちでは唯一の女兒ができて、ますく興味と可愛味とが生じて來た。そこへまた民雄が這入ると、同棲者のつれ兒と共に五名の賑やかさになつて、十四歳から一歳までのが丁度三四歳置きに竝ぶ一種の幼稚園で、渠等の行動をさう干渉しないで傍觀するのが面白からうと思はれる。いくら叱られても、はだし同樣の足で座敷へ上つて來る。それが然し苦にもならない――このおやぢだツて、澄子をかの女の立鬪でうちのめした時ははだしになつてゐたのだ。

然しそれはどちらでもいいとして、一つ仲裁者を怒らせたことには、耕次は自分のやつてる雜誌で自分が澄子の相手に對してその本名を出して、廿七通の密會その他のことを書いた手紙その物の件に關する公けの質問を發表した。(それを飯山も聽き知つたかして、註文の手紙をよこした。)それで、仲裁者から、

『以後もそんなことをするなら、もう手を引きます』と云はれた。然しこれはこちらの身になつても考へて貰ひたいのであつた。向ふが事件の納まつたのを幸ひにして、あの慣用手段なる不誠實な白を

切つてゐられては、こちらが斯くまで騷がせられたことは無駄どころか、うそにも見えてしまうかも知れぬ。これはこちらに取つて一生の不利益ではないか？　飽くまで事實を事實として指摘する自由は與へて置いて貰ひたい。但し、以後は渠の本名は公表しないことにするから。それから、また、變名にすることは許されたとしても、向ふが正直に一度公然と詫びたら、それでこちらも滿足して何も云はないことにしよう。と云ふやうなことを以つて仲裁者に答へた。

今一つ困つたことには、澄子宅から取つて來たものを――また差し押さへられるよりも、無い方がいいと思つて――殆ど賣り拂つてしまつた。尤もをんな衣物――不斷着ばかりだ――はすべて請け出さぬつもりで質屋へ三十圓でぶち込んだのだ。で、それと簞笥のやうな物は容易に買ひもどせるが、その他のこま〳〵した物は今は回收することができない。然し向ふはそれも返せ、そして返せなければ新らしく買ふだけの金に見つもれと云ふ。さうけち臭くなつては、自分もさきに自分の物を澤山無くされたことを勘定に入れねばならぬ。

それだけのことを向ふも承知の上なら、最初に渡すべき金の工面中なのができ次第、――子供の爲めでもあるから、――綺麗に示談にしてもいい。が、こちらにその工面中の金ができず、向ふでも亦他のことが承知できぬと云ふ圖ぶといから意張りをするならば、もう、もと〳〵からの覺悟通り、自分の女房が自分の敵二三名に煽てられつつ執行する公賣處分――向ふにも不利益だらうに――をあま

んじて受けようと決心した。
その代り、公賣をされる以上、耕次は自分の子よりも可愛い書物と書齋とをめちや／＼にされるのだから、自分も離婚の控訴が當前の見込み通り勝ちになつても、決してそれだけでは納得しないつもりで――。
『おれは空疎な人道主義者やその場のがれの平和論者ではない。おれの精神的立ち場を不利益に落し入れようとする行爲並びに事件に對する控訴だ！』いや、渠自身の斯う云つた考へでは、この七八年を熱烈に征服でもありまた被征服でもあつた戀愛が、最後にさめてしまつて、兩方から別々におのれをおのれで處分しようと云ふ夫婦喧嘩だ。金などには換へられなかつた。世間體が惡いと云ふほどのことは、前以つて承知のことだから、何でもなかつた。
公賣の期日は金の工面の都合で二三度延期されて、いよ／＼明後日となつた。が、たださへ不如意に生活してゐた者が、この事件の爲めに一般世間の信用を失つてる時だから、一しほ困つて、まだ工面を総らないのである。けふからたツた二晩のうちに何とかするには、大切に所藏して來た、そしていろ／＼な時期にいろ／＼な思ひ出が添つてる書籍一千餘冊が差し押へられてるそのうちから、止むを得ないだけでも賣り拂ふより外に道がないと思ひ付いたのは、丁度大正六年二月三日のことだ。
――（大正六年二月）――

大正十年十一月十五日印刷
大正十年十一月二十日發行

泡鳴全集四卷

（非賣品）

著作者　岩野美衛

發行者　國民圖書株式會社代表者　中塚榮次郎
東京市麹町區内幸町一丁目六番地

印刷者　井波修次郎
東京市神田區三崎町二丁目三番地

發行所　國民圖書株式會社
東京市麹町區内幸町一丁目六番地
電話銀座七八三番
振替東京五二二九八番

印刷所　國民圖書株式會社印刷所

（製本　細本製本所）